
波の向こうの赤い砂

中根 愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波の向こうの赤い砂

【Nコード】

N4423S

【作者名】

中根 愛

【あらすじ】

明治初期。地方の下級武士の娘、凜の家に山賊が押し入った。家人は殺されたが、凜は弟の千代丸と共に売り飛ばされる。英国から来た鉄道会社の技術者ロバートソン家の使用人となった凜と千代丸は、やがて海を越える。

抗えない大きな波に吞まれながら生きる少女の十年に渡る軌跡。

一（前書き）

時代考証には、あまり自信がありません・・・。

「姉上、姉上起きてよう」

千代丸に揺すられて凜は目を覚ました。細く目を開けて隣を見ると、敷布団に手をつけて上体を起こした千代丸が掛布を纏ったまま困った顔をしている。

「漏れそうだよ・・・一緒に来て」

辺りは暗く、まだ真夜中だ。それに加えて凍てつくように寒い。

「もう七つでしょ？一人で行っておいで」

「い、嫌だよ・・・後生だからさあ」

千代丸の向こうには母が口を半開きにしたままぐっすりと眠っている。いつも疲れている母を起こすのは忍びない。凜はため息をついた。

母を起こさないように二人で半纏を着込み、便所へ急ぐ。三人の兄の寝所の前を通り過ぎる。降り積もった雪のせいで灯りはなくとも辺りが見渡せた。

渡り廊下の突き当たりにある便所の前で、凜はかじかむ素足を擦り合わせながら千代丸が用を足し終わるのを待っていた。

前の年までは千代丸はこんな事を凜に頼ったりはしなかった。いつも母に甘えてばかりいたのだ。きつと父がいないせいだろう。

父は前の年の戦に駆り出され、そこで死んだ。それ以来十五歳の兄を筆頭に何とか生活しているが、母の負担は増すばかりだ。千代丸も幼いながらに母に迷惑を掛けてはいけないと思っているのだろう。

兄達もいつ戦に出向く事になるか分からない。今日は屋根の雪下ろしなど、力仕事をしてくれていたが、それもそのうち自分達でやらなければならなくなるだろう。

その時、突然母屋の方からドタドタ、バタバタという大きな音が響いた。

「何・・・？」

「ギヤアアア！」

「うわあああ！」

叫び声と怒声が響いている。訳が分からず怯えている凜の腕に何か触れた。

「ハッ！」

息を飲み振り向くと、いつの間にか便所から出た千代丸が恐怖に目を見開いて震えていた。

「あ・・・姉上・・・あれは・・・？」

「シッ！」

人差し指を口にあて、千代丸に黙るように促した。千代丸を背中に隠し、壁の影から様子を窺う。押し込み強盗だろうか・・・。凜の背中に冷たい汗が伝った。

「あああー！」

障子と共に母が廊下に転がり出てきたのが見えた。怪我をしているのだろうか、這って廊下を進もうとしているが思うように動けないらしい。

飛び出して行って母を助きたい衝動に駆られたが、背後には千代丸がしがみ付いている。それに何よりも、脚が震えて動けない。

部屋からゆっくりと刀を持った大男が出てきた。獣の毛皮を纏った姿は、きつと山賊だろう。いやらしい笑い声を上げているのが聞こえる。刀を逆手に持つと、這い蹲る母の背中に突き立てた。

母の断末魔の叫びが途切れると、ガチガチと鳴っているのが自分の歯なのだ気付いた。

「くそっ！ロクなもんがねえ！」

「こんな田舎侍の屋敷じゃ・・・押し入るだけ無駄だったか」

悪態をつく男達の声が聞こえる。

「家人はこれで全部か？」

「いや・・・この女の寝所に空の布団があった。もしかしたら若い娘つこでも居るのかも知んねえな」

「売り飛ばせるな・・・捜せ！」

凧は反射的に千代丸を連れて庭へ出た。しかし降り積もった雪は千代丸の膝ほどもある。見つかつて追いかけられたら逃げられないだろう。

辺りを見回したが、庭木はすっかり葉が落ちていてとても隠れられそうにない。家の壁の前に今日の日中に兄が下ろした雪がこんもりとした塊になっている。壁と雪の間に入り込んだ。その間も母屋からはドタドタという音や、男達の声が聞こえている。

「冷たいよう・・・」

千代丸も凧も冷たく固まった雪の上で素足のままだ。

「辛抱するんだよ」

千代丸の泣き言を諫めたが、それも無駄な努力だという事がすぐに分かった。

「こつちだ！雪に足跡がある！」

兄達の声ももう聞こえてはこない。おそらく、もう・・・。脚ももはや感覚が無く、動く事も出来ない。

「どうしよう・・・」

「ふふ・・・。見つけた！こつちだ！」

ぬうっと出てきた岩のような大男が満月を遮り影を作った。すえた匂いが漂ってくる。こつこつとした顔に髪を結わいた頭からはボサボサの後れ毛が、背に受けた月の光にピンピンと突っ立っているのが分かる。肩から掛けた毛皮は所々毛がゴワゴワと固まっている。

この男自身が獰猛な獣のようだ。

凧はごくりと唾を飲み、何とか千代丸だけでも助けたいと考えた。家から数人の男達が出てくる中、千代丸を庇うように震えが止まらない自分の身体をやっとの思いで動かした。

「女だ！」

四人の男が顔を突き出し、凧をまじまじと見つめた。

「何だ、まだ子供じゃねえか！」

すると年長者と思える小柄な男が後ろから顔を出した。右の目尻か

ら顎にかけて大きな刀傷がある。皮膚が引きつれているせいなのか、それとも実際に凜を見てそういう表情になったのか、気味の悪い薄笑いを浮かべている。

「今はな……。だが、すぐに女になる。幾らかの金にはなるだろう。ん？」

男は凜の後ろで縮こまっている千代丸を見つけた。凜は千代丸を隠すために後退った。

「もう一人、小僧がいる」

年長者の男が呟くと、その後ろにいる大男が声を張り上げた。

「男か！面倒くせえ！殺つちまうか？」

凜は慌てて首を振った。さらに身体を背後に居る千代丸に押し付ける。千代丸が殺されるくらいなら、自分がその身代わりになるという決意に満ちた顔を年長者の男に向けた。

男は凜の前にしゃがむと千代丸の顔を覗き込んだ。

「ちよつと待て。ほほう〜これはこれは……」

顎に手をあて感心したように頷いた。

千代丸の顔は女の子のように可愛らしく、つぶらな瞳はいつも大人を魅了する。この山賊も例外ではないらしい。

「この坊主も使えるだろう。お梅に頼めばいい。裏にも表にも顔が利くからな」

一（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。感想、ご指摘等お待ちしております。

凜と千代丸は猿ぐつわをかまされ、むしろにくるまれて他の略奪品と一緒に大八車に放り込まれた。ザツザツという雪道を難儀しながら歩く音、時折男達の悪態をつく声が聞こえる。むしろにくるまれているとはいえ、凍てつく寒さは変わらない。凜は眠りそうになる千代丸に身体をぶつけながら、自分の眠気とも戦っていた。

雪の残る山の中に入ると猿ぐつわは外された。いくら叫んだところで誰にも聞こえないし、こんな山の中で逃げ出そうとすればまさに自殺行為だ。

陽が出てきて少し暖かくなると目を閉じて眠った。暫くすると揺り起こされ、朽ちかけた山小屋に入れられた。そこで少しばかりの沢庵を与えられた。口に馴染んだ味だ。それもそのはず、山賊たちが凜の家から略奪してきた物なのだから。

口の中の沢庵を噛みしめながら、連れ去られて以来初めて家族の事を思い出した。

涙が滲み、鼻をすすった。隣の千代丸はそんな凜を気遣うように見上げた。

幼い千代丸には家族が惨殺された事を理解しているのかどうか凜には分かりかねた。千代丸の前で泣き言は言えまい。自分がこの子を守らなければ、そう決意して凜はグツと涙を飲んだ。

男達は火を入れた囲炉裏の周りで酒を酌み交わしている。凜と千代丸には目もくれずに、ここ最近の戦果について盛り上がっていたが、凜は恐怖で落ち着くことが出来なかった。いつ男達の気まぐれで殺されるか分かったものではない。

酔った男達が横になり大きないびきをかきながら寝てしまつまで、凜は千代丸の手を握つたまま、まんじりともせずにごろごした。

それから山小屋を出てどの位の時間が経ったかは分からない。山を降りる手前で大八車から下ろされ、年長者の男に連れられて人で

賑わう宿場町までやって来た。川沿いに柳の木が立ち並ぶ裏道を黙って年長の山賊の後に続き、千代丸と手を繋いで歩いていく。

何の店なのだから凜には分からないが、同じような造りの建物が軒を連ねていた。通りには浮き足立ったように歩く男達、綺麗な着物を着た女達とすれ違い、ここが子供の来る場所でないという事は理解できた。川の対岸にある通りも同じような状況だ。そのうちの細い路地に入り、一つの裏木戸を開けて中に促された。

「汚い子供だねえ……。どこで拾ってきたんだい？」

「まあ……。色々あつてな……。みなしごなんだよ」

痩せて尖った顔に尖った鼻、細く鋭い目で値踏みされ、凜はたじろいで下を向いた。千代丸の肩までの髪は乱れ、顔には黒い汚れが付いている。自分の顔がどうなっているのかは分からないが、繋いだお互いの手足にも何だか分からない汚れがこびりついて真っ黒だ。「フン、おおかたこの子らの親はあんたらが殺しちまったんだろ？ あんた幾つだい？」

キセルの灰を落とすカン！という音にビクツとした凜は震える声で答えた。

「こ・・九つ」

「こつちはせいぜい六つか七つだろうね……。こんな子供をどうすりゃいいんだい？」

上がりかまちに腰を掛けた年長者の山賊が、お梅の機嫌を取るよう自分の戦利品を売り込んだ。

「しかしこの坊主、類稀な顔をしてると思わんか？ やり手のお前さんの事だ。新しい客を呼び込めるぞ。男色の客なんかは来ないのか？」

お梅はジロツと横目で千代丸を見た。

「仕事が出来るようになる頃には、女でも作って逃げてるだろうさ・・。まあでも、鼻屑にしてもらつてる役人からの紹介でね、女中を探してるって言われてるんだ。何でも、英国から来た鉄道会社のお

偉いさんらしい」

「ちえっ！当てがあるんじゃないか、もったいぶりやがって……。まあ、こっちの坊主も簡単な庭仕事ぐらいは出来るだろう。所詮みなしごだ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

お梅の女郎小屋に預けられた凧と千代丸は風呂に入らされ、その後は食事も貰う事が出来た。野菜が少しばかり入ったおじやだが、久しぶりのまともな食事だった。

ここでも千代丸は一緒になった女達から可愛がられていた。

「千代丸っていうのかい？可愛いねえ」

「幾つ？七つなの？あと十年ぐらいしたら、またおいで。色々教えてあげるからさあ」

女達からドツと笑いが起きる。しかし今まで見た事もないような派手な着物を着た妖艶な女達に囲まれた千代丸は、気恥ずかしそうに黙って俯いているだけだった。

「ここから先へは入るんじゃないよ」

あてがわれた部屋の廊下の先を指差してお梅が言った。凧と千代丸は素直に頷いた。鼻の下を伸ばした男と、さつき一緒に食事をしてきた女が入って行くのを見て、子供が居てはいけない場所だというのは何となく分かる。それに何と言っても疲労困憊の二人は、布団に入ると寄り添いながら瞬く間に眠りに落ちた。

次の日、朝食を摂った後すぐにお梅に連れられて一晩泊まった女郎小屋を後にした。途中で役人の制服を着た男と合流し、洋館が立ち並ぶ界隈へ来た。ほんのりと潮の香りがする。

凜と千代丸はその家を口をあんぐりと開けたまま見上げた。凝った装飾の鉄の門、綺麗に手入れされた庭の向こうに二階建ての白亜の洋館があつた。こんな建物を見るのは初めてだ。

家の中へ促され、ふかふかと柔らかい椅子に座らされると、この家の住人が出てきた。黄金色に輝く髪、雪のように白い肌。そして千代丸の顔を見るなり、大きな青い瞳が輝いた。

昨日の会話で、女中を探しているのは異国の人だとは聞いていたが、こんな姿の人は見た事が無い。凜も千代丸も目を見開き、この家を見た時よりも驚いていた。

「この子達は家族が山賊に襲われてみなしごになってねえ」

お梅が哀れを誘うような口調で説明を始めた。それを役人が異国の言葉で異国から来た婦人に話す。

「オオ・・・」

異国の婦人は大きく開けた口元に手を当て、悲しそうな顔をして首を振った。

少々大げさとも思えるその仕草に、凜と千代丸は言葉も無く啞然としてお互いの顔を見合わせた。その睦まじい二人の様子が余計に婦人の心を捉えたのか、歩み寄った婦人は千代丸を愛おしそうに抱き締め、それから凜の肩を抱いた。

それから凜と千代丸はロバートソン一家のこの洋館に住み込みで働く事となった。

その家の主はトビーという名前で、出来たばかりの日本の鉄道の技術者として英国からやって来たのだそうだ。茶色の髪にやはり茶

色い髭が鼻の下で綺麗に整えられていた。大きな身体に優しそうな目の穏やかな人物だ。

一番最初に会った婦人は彼の妻で名前をクリステイーナという。感情表現が豊かな彼女の話を、夫のトビーはいつも微笑みを浮かべて聞いている。

彼らには男女一人ずつの子供がいた。アンデイーは十三歳、その妹のリサは十歳だ。二人とも母親と同じ金色の髪と青い目をしていた。白い肌の両頬に二人揃って無数のそばかすが散っている。しかし情の厚い母親とは違って、二人は意地の悪そうな冷めた視線で凜と千代丸を眺めていた。

最初はあまりにも違う生活様式や、通じない言葉に戸惑っていたが、この家の料理担当をしているサミュエルという初老の男性が日本語に通じていた。彼と言葉を交わすうちに段々と生活にも溶け込めてきていた。

白いブラウスにひだの付いた紺のスカート、千代丸も白いシャツに紺の半ズボンを着き、今までのことも無い格好にお互いを見てクスクスと笑い合った。

言葉も段々分かるようになってきた。「ウォーター」と言えば水、「ティー」と言えばお茶というように。

ロバートソン一家は毎日午後にお茶を飲む。同じ英国人の子供が通う学校に行っているアンデイーとリサも一緒に。そして近所に住む奥様が来て、賑やかなお茶会が開かれる事もある。

それは凜と千代丸にとつて、とても楽しみな事だった。テーブルを囲むご婦人にお茶のお替りを持って行くと、二段になったお皿の上のお菓子がご褒美に貰えるのだ。そのお菓子はそれまで食べた事が無い物で、とても甘くて美味しかった。

お菓子を受け取って嬉しそうに笑う千代丸を、ご婦人達も目を細めて楽しそうに見ている。お替りの声が掛かると、「お菓子が貰えるよ」と言っただけで凜は千代丸を促していた。

サミュエルから言いつけられた買い物の帰り、歩きながら凧は海を見ていた。ここに連れて来られるまで海を見た事は無かった。家族で海を見た事があったのは父だけだ。父は自分が見た海について教えてくれた。青く、どこまでも果てしなく続くと・・・。

何隻もの船が空と海が一つになる所を目指して行くのが見える。

その先には広い広い世界があるのだと・・・。

藩からの命を受けて新政府軍と戦った父だったが、こんな事を言っていたのを憶えている。「もうすぐこの国は変わる」と。海のように新しい波が幾つもやって来るのだと。その波の中をしなやかに泳いで行かなければいけない。

「しかし、きちんと己というものを持っていなければならぬ」

父はそうとも言った。そうでなければ波に飲まれ、いいように弄ばれるだけだ、と。

凧には父が何を言おうとしていたのかはよく分からない。「新しい波」というのは今のこの状況を示しているのだろうか。

凧は先ほど買い物をしてきた賑わっている界隈を振り返った。ロバートソン一家のように異国から来た人々を多く見掛ける。凧が生まれ育った場所では考えられない景色だ。自分は今、この波の中を泳いでいるのだろうか。それとも弄ばれているだけなのだろうか。

凧はふと故郷の事を思った。春が過ぎ、こうして荷物を持って歩いていると汗ばむほどだ。きつと今頃は雪溶けの豊かな流れを湛えた小川におたまじゃくしやタニシが姿を見せる頃だろう。父が死んでからはそんな余裕も無くなったが、それまでは三人の兄や千代丸とよく小川で遊んだものだった。あちらこちらに紫陽花や雪ノ下が咲く凧の大好きな季節。

「みんな、どうしてるんだろう・・・」

急に郷愁に駆られた。帰りたくて堪らなくなったが、もう母も兄達も居ないのは分かっている。それに使用人といつても今の暮らしは以前とは比べ物にならないほど豊かだった。食事も着る物も。九歳の自分と七歳の千代丸二人だけで生きていけるほど、この世の中は

甘くない事も分かっている。それに自分達は幸運だったのだ。普通に考えれば山賊が家に押し入ってきた時に殺されていただろう。

そして自分には千代丸がいる。独りではない。何があっても千代丸と二人で生きていかなければならない。凜は海を見ながら頷くと、ロバートソン邸に戻るため高台への道を歩き始めた。

邸に戻ると庭では千代丸が柄杓で植木に水を撒いていた。その隣ではクリステイーナが薔薇を摘んでいる。二人とも笑顔でとても楽しそうだ。クリステイーナは千代丸を可愛がっている。千代丸も素直にその愛情に応えていた。殺された母が不憫にも感じたが、千代丸が幸せである、その事が一番大事だと凜は思った。

四

夏が終わる頃には、凜もだいぶ英語が話せるようになっていた。千代丸は凜よりも早く上達していた。結婚前は教師だったというクリステイーナが、暇な時はきまつて千代丸の遊び相手になっていた。ので当然と言えば当然だった。

凜が掃除をしている時など、時折部屋から二人の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。家に居る時も仕事で度々書斎に籠る忙しいトビーは、その二人の様子を微笑ましく見ている。アンディーとリサは自分達の母親が、血の繋がらない幼い日本人の使用人に愛情を注いでいるのを全く気にしていない。家族の事に関心が無いように凜には見えた。

夕食時以外は殆どバラバラに過ごしているこの家族が、一つになる時がやってきた。

それは晩秋の木枯らしが吹きすさぶ寒い日の夕食時だった。帰宅した時、トビーは「ニュースがある」と興奮した様子で、出迎えたクリステイーナを抱き締めてキスをした。

煮込んだ牛肉の食欲をそそる匂いがする料理を前に、お祈りを済ませた妻と二人の子供はトビーがどんな報せを持って来たのか気が気でない様子で食事を始めた。凜は給仕の為にテーブルの傍に立っていた。

トビーはパンをちぎる手を急に止め、ソワソワしている家族を見渡してから、もったいぶった口調で話し出した。

「あー・・聞いてくれるかな？私の愛する妻と子供達。実は・・ロンドンに帰る事になったんだ」

それを聞いた途端、家族全員が歓声を上げた。リサがテーブルに身を乗り出し、興奮した声で尋ねた。

「いつ？いつ帰るの？」

「三週間後に出発する！クリスマスは船の上で過ごす事になるだろ

う」

リサはアンディーの方を振り返り、笑顔を交わした。

「我が家へ帰れるんだわ！」

クリステイーナが胸の前で手を組み合わせて天井を仰いだ。

そしてその日の夕食の間中、四人ともがお互いの顔を見ながらニコニコと笑い合っていた。その楽しい夕食の様子を見て、凜もつられて微笑んだ。

「ロンドンって、どんな所？」

ロバートソン一家の食事が終わった後、台所で食事をしていた時に千代丸がサミュエルに訊いた。サミュエルは目尻に皺をいっぱい作って頷くと、遠い目をして話し出した。

「とても大きな街だよ。人がいっぱい居て、石で作られた高い建物がいっぱい建ってる。鉄道も走っているし……。郊外に行けば緑も多くてきれいだ。懐かしいなあ」

「へえ〜」

千代丸が目を輝かせた。

「一緒に行くのかな？」

千代丸の弾んだ声を聞いて凜は少し不安になった。何といてもそこは異国の地だ。行ってしまったら、もう二度とこの国には戻れないのではないかと。

それでもここに残ったとしても自分達はまだ子供だ。千代丸と二人路頭に迷う事は目に見えている。

ロバートソン一家は帰る日をとて楽しみにしているようだ。アンディーとリサは帰ったらどこへ遊びに行こうか、という話に毎日花を咲かせている。クリステイーナは扇子やかんざし等、お土産選びに余念が無い。凜は上機嫌の家人達の荷造りを手伝った。

結局、凜と千代丸も付いて行く事になった。最初からクリステイーナはそのつもりだったらしい。可愛い千代丸と離れる事は出来な

い、と。もはやクリスティーナにとって千代丸は無くってはならない存在になっていた。

しかしサミュエルはここに留まる事になった。彼はせつかく身に付けた日本語を生かして、ここ横浜で店を出す事を目標にしているのだ。

出発の日にはサミュエルも見送りに来て、船に大量の荷物を積み込むのを手伝った。これから乗り込む蒸気船を見て、凧はその大きさに圧倒された。千代丸は嬉しくてはしゃぎ回っている。

出港する直前にサミュエルは船を降りた。船の甲板に居るたくさんの人が、さらにたくさん居る見送りの人たちと手を振り合っている。ロバートソン一家にもたくさんの見送りが居た。アンディーとリサも学校の友達を見付けては声を上げて手を振っている。

「サムー！サムー！」

千代丸は声を張り上げてサミュエルを呼んだ。柵を？み、精一杯の背伸びをして。凧も腕が千切れそうになるくらいサミュエルに向かって手を振った。サミュエルも笑顔で手を振る。

岸が見えなくなり、客室へ向かう人波の中で千代丸が凧の袖を引っ張った。

「またサムに会えるよね？」

凧は俯いた。そんなこと分からない。でも自分の期待する答えを待って輝く千代丸の瞳を曇らせる事は出来ない。

「うん。きつとね」

凧の言葉に千代丸は大きく頷いた。

冬の初めの乾いた晴天の下、船は白い煙を吐き出しながら波を切って進んでいく。しかし海は広すぎて、この船がどのくらい速いのかは分からない。空と海がくっついていて場所には、いつまで経っても近付かない。

遮る物の無い大海原で、自分達がこれからどうなるのか、まだ十歳の凧には全く分からない。

五

長い長い船旅を終えてロンドン港に着いた時には季節は夏になっていた。爽やかな気候だったが、陸に降りた凜の足元はフラフラしていた。波に漂っているような感覚が抜けないのだ。千代丸も似たような状態だったが、それを楽しんでいるようにおどけてみせる。

出港してしばらくは気分が悪くなって仕方が無かった。それが次第に慣れて治まってくると、今度は皆が噂する海賊というものに怯えていた。彼らは船を乗っ取り、人を殺し、物を奪うと聞いて、家に押し入ってきた山賊のことを嫌でも思い出していた。夜、隣にいる千代丸の寝顔を見ながら、他人の足音や話し声、あらゆる物音に耳を澄ましていた。

無事に到着して安堵したのも束の間、馬車から見える町並みに圧倒された。通りを行き交う様々な人種のたくさんの人々。石で出来た高い建物が壁のように連なっている。まるで別世界へ来てしまったようだ。千代丸も隣で珍しい物を見つければに歓声を上げていた。

やがて街の喧騒が遠のき、馬車は郊外へ入った。どの家にも庭園があり、夏のこの季節は青々とした芝生とたくさんの葉を付けた大きな木が立っている。凜が見た事も無い綺麗な花を付けている木もある。

美しい町並みの中、一軒の邸宅の前で馬車は止まった。門の向こうには整えられた芝、正面の入り口に続く石畳を蹄と車輪の音を響かせて馬車は進む。庭園にはアーチの付いた薔薇の植え込みがあり、女性の彫刻が中央に付いている池まである。

馬車が止まると、玄関の前に背の高い男と灰色のワンピースに白いエプロンを着けた女が立っていた。男の方はロバートソン一家と同じ白い肌だが、髪と目の色は黒かった。そして女の方は真っ黒い肌をしていた。港からここまで馬車で送ってくれた初老の男も彼女

と同じ肌をしている。アーサーという名前の彼は庭師だと言っていた。

「お帰りなさいませ」

黒人の女が恭しく重そうな扉を開けると、馬車を降りたロバートソン一家の四人がはしやぎながら家に入っていく。鉄道会社の社員でトビーの部下だという背の高い男は一家と一緒に入って行った。

アーサーと凜と千代丸が馬車から荷物を下ろしていると、黒人の女が近付いてきた。黙ったままジツと凜を見ている。重い鞆を持ち上げようとしていた凜は、その視線に怯んで一歩後退った。

「彼女はマト。この家のメイドだ。マト、日本から来たリンとチヨだ」

アーサーが凜の手から重い鞆を取りながら紹介した。

マトは黙って頷くと馬車から荷物を取って家に向かった。凜は手を休めることなくマトの後姿を見送った。歳は幾つ位なのか分からないが、背が高くほっそりとした長い手足で軽やかな身のこなし。頭のとっぺんでまとめたチリチリとした髪の毛、大きな目とぼつとりとした唇。何もかもが自分とは違う。

荷物を家に運び込みながら凜は美しいマトを羨望の眼差しで見つめた。

邸に入ると広い玄関ホールがあり、正面には二階に続く階段が緩やかなカーブを描いていた。階段の凝った装飾が施された手摺も床も、どこもかしこもピカピカに磨かれている。赤い絨毯の上も塵一つ落ちていない。

縁に金の付いたやはり凝った装飾が施された白い壁の一つには大きな肖像画が掛けられていた。トビーに似ているが、その温和な顔を少し厳格にし、十歳ほど老けたような男性が描かれている。勲章がたくさん付いた赤い軍服を着ている。

「トビーの父親だ。十年ほど前に亡くなったがね」
肖像画を見上げている凜にアーサーが言った。

「留守の間この邸を任されていたんだが、異国の地で暮らすトビーを心配していたんだ。無事にお戻りになって・・・本当に良かった」
アーサーは肖像画を見上げながら、トビーの父親に語りかけるように呟いた。

誰からも愛されて、こんなに大きなお屋敷に住めるトビーを羨ましく思った。そして日本には、遠い異国に来た自分と千代丸の事を気に掛けている者はいるのだろうか、きつといないだろう。そう思った凧は少し寂しくなった。

その日の夕食を終えたロバートソン一家が長い船旅の疲れを取るため早めに床に着くと、凧と千代丸はマトに案内されて一階の奥にある部屋に入った。部屋の中央に二つのベッド、壁際には箆笥と机と鏡がある。ここがマトと凧と千代丸の部屋だ。

大きなお屋敷に興奮してはしゃぎ回った千代丸がベッドに入った途端に寝てしまうと、凧は二人の数少ない荷物を箆笥にしまった。

「あなた・・・幾つ？」

ベッドに腰掛けてマトが凧に尋ねた。

「あ・・・十歳。あの、マトは？」

マトは首を振って肩をすくめた。

「さあ、よく分からないけど、十五にはなってると思う」

凧は困惑した。

「えっ？分からないって？自分の歳が分からないの？」

「親はいないの。だからいつ生まれたのか知らないの」

荷物を入れた箆笥を閉めて、凧は千代丸が寝ているベッドの端にマトの方を向いて腰掛けた。

「それじゃ・・・どこから来たの？故郷はどこ？」

「アフリカのどこかかって聞いた」

凧は初めて聞く名前に首を傾げた。

「アフリカ・・・？それはどこにあるの？」

「ここからずーっと南にあるの。私は赤ん坊の時に連れて来られた

から全然憶えてないけど。内戦があつたらしいの。私は小さな村の中で泣いてるところをイギリス軍に保護されたいわ。すぐ傍で母親らしき女の人が死んでたって。それしか聞かされてないの。国の名前も聞いたけど、今はもう無いんだって。だから・・忘れちゃった」

聞いてはいけないことだったかと思つたが、マトはまるで他人事のように平然と話していた。小さすぎて全く記憶の無いマトにとつては、他人事も同然なのだろう。

「それからは孤児の施設にいて、三年前からこの家で働いてるのよ」ランプが投げ掛ける仄かな灯りの中で自分達の境遇を話し合い、お互いに欠伸をしたところでベッドに潜り込んだ。

ウトウトとした意識の中で千代丸の頭を撫でながら考えていた。自分がどれくらい遠くに来てしまったのかはよく分からないが、この立派で大きなお屋敷に千代丸と住めることが夢のようだった。

いつか大人になったら、千代丸と日本に帰れる日も来るだろう・・・それまでここが自分達の家になるのだ・・。

六

次の日からは忙しく活気のある毎日がやって来た。帰国した事のお披露目としてトビー主催のパーティーが開かれると、見た事も無いような豪華な食事が並び、シルクハットを被った紳士と綺麗なドレスを着たご婦人がやって来る。その優雅な宴には目を見張った。広い屋敷の中を隅々まで掃除するのは大変だったが、仲良くなつたマトと一緒に仕事をするのは楽しかった。千代丸はアーサーについて庭仕事の手伝いをしていた。手伝いといいながらも、広い庭を楽しそうに走り回っている姿をよく見掛けた。

花が好きなクリスティーナの為に、千代丸が摘んだ庭の花を屋敷の中に飾る。そうしてクリスティーナの喜ぶ顔を見るのが千代丸にとって何よりの楽しみだった。

あつという間にロンドンの短い夏が終わり秋がやってくると、緑だった街路樹が赤と黄色に色付き石畳に枯葉の絨毯を敷く。爽やかに輝く夏とは違った穏やかな美しさだ。

アンディーとリサは寄宿学校に通うため屋敷を出て行く。

「このお屋敷を出るなんて、寂しくなりますね」

荷造りを手伝いながら凧はリサに言った。リサはにこりともせず、ベッドに腰掛けた脚をブラブラさせた。

「別に、週末には帰るし。学校に居ても家に居ても、退屈なのは変わらないわ」

確かに毎日やる事がたくさんある自分達使用人に比べ、アンディーとリサは何をしてもつまらなそうで退屈そうだった。

武士の家に生まれた凧だったが暮らしは貧しく、幼い自分にも仕事は山のようにあった。お金があるというのは、こういう事なのだろうと凧は思った。

トビーは日本に居た時と同様に、とても仕事が忙しいようだった。ロンドン市内には地上を走る列車だけでなく、地下にも鉄道がある

という事を聞いて凜も千代丸も驚いた。これからもどんどん鉄道網は大きくなっていくのだそうだ。

クリステイーナはトビーの同僚の妻達と毎日のようにお茶会を開き、他愛も無いお喋りを楽しんでいる。使用人の管理と噂話の情報交換。それがクリステイーナの生活の全てだ。

アーサーも千代丸の事を可愛がっているようだった。芝の上に降り積もった落ち葉を千代丸と一緒に掃き集めながら、普段あまり表情の無いアーサーの顔に笑みが浮かんでいる事がしばしばあった。

「ねえアーサー、この花は何？」

「これはセージだ。いい匂いだろう？」

千代丸は顔をくっつけんばかりに花に寄せた。

「うん、本当だ！いい匂い」

千代丸は嬉しそうに紫色のセージを摘み始めた。

それから屋敷の広い玄関ホールも居間も芳しい花の香りに包まれた。クリステイーナは満足そうに頷くと千代丸の頭を撫で、お茶会に集まってきたご婦人達を誇らしげに居間に通した。

誰もが綺麗に咲き誇る花々を愛でていたが、凜は窓から見える曇天の下の色付く木々の葉を見ていた。その紅葉が故郷を思い出させるのだ。

青い空に広がる鱗雲、ナラヤブナの木の下で拾うドングリ。小川には丸々と太った岩魚が泳ぎ、剣の稽古をする父と兄達の姿が見える。

「凜、凜」

千代丸と一緒に稽古を眺めていると、母の声がする。

「あなたはおなごなのですから、そのような物に興味を持つものではありません」

母に窘められ、凜は家に入り食事の用意を手伝う。

「リン、リン」

母に呼ばれた気がして振り向く。そこには不思議そうな顔をしたマトがいた。

「どうしたの？早く持って行かなくちゃ」

ポットやカップの茶器が載った金属の大きな盆を少しだけ持ち上げて凧を促した。

凧は自分が白い砂糖がふんだんにまぶしてあるケーキが載った盆を持っているのに気付いた。

「ああ、そうだね・・・」

凧は照れ臭そうに笑うと、マトに続いてご婦人達が待っているテーブルに向かった。

もう二度と、あの日々に戻れない事は分かっている。それを思うと胸が締め付けられ、涙がこぼれそうになる。

一日の仕事が終わり部屋に戻ると、芳しいセージの薫りが満ちていた。縁の欠けたグラスに生けられたセージが机の上に乗っていたのだ。千代丸がニコニコと誇らしそうな笑顔で凧とマトを交互に見た。

「いい匂いだわ。ありがとう」

マトが千代丸の頭を撫でた。

「姉上は？嬉しい？」

可愛らしい千代丸の顔を見て凧はありったけの笑顔で応えた。

「うん。もちろん」

どんなに過去が懐かしくても、過ぎてしまった事。今はこうして千代丸と一緒に平和に暮らしている。

“もうどこにも私達を傷付けようとする人達はいない”

はしゃぎながら一緒にベッドに入り、セージの香りの中で眠りについた。

この屋敷で初めてのクリスマスがやって来た。去年は船の中だった。凧と千代丸がクリスマスというものを知ったのもその時だ。

皆でモミの木を飾りつけた。しかし十四歳のアンディーだけはそれに加わらず、長椅子に脚を投げ出して本を読み、時折冷めた目をして家族を見ているだけだった。クリスマスツリーの下にはたくさんの贈り物。焼いた七面鳥やケーキ。ロバートソン一家が教会へミサに行っている間、クリスマススの準備に使用人は皆大忙しだ。

この日常とは違う賑やかで明るい雰囲気には凧は高揚していた。しかもロバートソン一家を楽しませるための準備だけではなく、使用人たちにもいい事があったのだ。

クリステイナは使用人にもプレゼントを用意していた。凧とマトには同じステンドグラスで出来た蝶のモチーフが付いた髪飾りが。千代丸には開くと絵が立体的に飛び出してくる仕掛けの付いた植物の図鑑が送られた。千代丸は本を抱え、部屋中を飛び回りながら大喜びしている。

「姉上！クリスマススって楽しいね！」

凧は頷いた。マトもニコニコしながら千代丸に頷いた。マトは物心つく前にこの国に来て、修道女に育てられた敬虔なクリスチャンだった。

もちろんキリスト教徒ではない凧と千代丸だが、この日は夢のようでも大事な思い出となった。この日の事は大人になって日本に帰っても忘れない。そう思った。

家族を奪われた凧と千代丸であったが、ここでの暮らしは余りあるものがあった。

休暇が終わりアンディーもリサも学校へ戻ると、クリステイナは千代丸に読み書きを教え始めた。クリスマスに貰った本を読めるようになりたいと千代丸が言い出したのだ。トビーと結婚する前は教師だったというクリステイナはとても喜んだ。

そして部屋に戻った後、凧とマトも千代丸からその日に覚えた言葉を教えてもらうのだ。マトも今まで読み書きはほとんど出来なかった。

ロンドンの長い冬が終わり、春が来る頃にはクリスティーナが詩集を貸してくれた。

ランプの灯りの中、三人でそのワーズワースの詩集を読むのが日課になった。

「ねえ、カツコウてどんな鳥？」

マトに訊かれ、凧は指を顎にあてて考えた。

「え〜と・・・確か白くて、春に鳴くの」

「本当に？」

自信が無さそうな凧に千代丸が訊いた。凧は「う〜ん」と唸り声を上げて考える。

「そうそう、豆まき鳥っていうんだよ」

「鳥が豆を撒くの？」

凧は尋ねてきたマトに首を振った。

「う〜ん。その鳥が鳴くと豆を撒く季節が来たって事。里のお百姓さんが言ってた。あとね、その鳥はお姫様なんだって」

「そんなに綺麗なの？」

「そうじゃなくて、自分で子供を育てられないんだって。他の鳥に育てさせるみたい。乳母が居るのよ」

思い出した凧が自信満々で言った。

「ふ〜ん・・・」

マトはそのふつくらとした唇を尖らせた。

「私は嫌だなあ、いくらお姫様でも自分の子供を自分で育てないなんて・・・。将来子供が産まれたら、私は片時もその子から離れないだって寂しい思いはさせたくないもん」

キラキラと輝く大きな瞳、小さな卵形の頭を支える細くて長い首。熱っぽく語ったマトはとても綺麗だった。

その後もクリスティーナはたくさんの蔵書の中から、三人の気に入るような本を選んで貸してくれた。仕事の後に読むので、一冊読み終わるのに時間が掛かったが、それでも読み書きが出来るようになった三人にとってはこの上ない喜びだった。

充実した日々は瞬く間に過ぎ、その年のクリスマス休暇も賑やかに終わった。凍てつくような寒さのある日の午後、アーサーの引く馬車で屋敷に戻ったクリステイナはとても機嫌が良かった。トビーが勤める鉄道会社の社長の奥さんが開いたお茶会に行っていたのだ。

「今度パリに旅行することにしたの」

夕食の席でクリステイナがトビーに切り出した。

「社長の奥様がね、誘ってくださったのよ。私も一度でいいからパリに行ってみたいと思ってたの」

社長と言う言葉を聞いてトビーの眉がピクつと上がった。

「そうかい。そういう事なら、楽しんでおいで」

トビーの承諾を得てクリステイナは少女のように喜んでいた。

それからクリステイナはウキウキと、持って行くドレスを選んだりして旅行に出発するまでの日々を指折り数えて過ごしていた。

「奥様、楽しみですね」

凜はクリステイナが選んだドレスを畳んでスーツケースに入れながら声を掛けた。箆笥の前で振り向いたクリステイナはキョトンとした顔をしている。

「何を言ってるのリン？あなたも行くのよ」

「えっ？」

驚いたリンにクリステイナは楽しそうに言う。

「だって！一緒にいる奥様達は、皆自分のメイドを連れてくるのよ。私だって連れて行かなきゃ、おかしいでしょ？」

啞然としているリンをよそに今度は靴や帽子を選び始めた。

クリステイナのパリ旅行に凜も同行すると伝えると、マトと千代丸はとても羨ましかった。

「でも、奥様が旅行に行ったら、旦那様は寂しくなるだろうね・・・」

最近周りの人間に対して気配りを見せるようになった千代丸が言った。

アンディーとリサは寄宿学校に通っていて週末にならないと帰ってこないため、クリステイナがいないということは使用人以外でこの家にいるのはトビーだけとなってしまふのだ。

それでもクリステイナは旅行をとて楽しんでいて、そんな事は気にも留めていないようだ。

「奥様もきつと、たまには羽を伸ばしたいのよ。それに、一緒に行くのは旦那様の会社の方達だし、これもきつと奥様のお勤めなのね」凜がそう言つと皆納得したように頷き、それぞれの仕事を頑張るよつに励ましあつた。

それから程なくして凜はクリステイナと共にパリへ旅立つた。

ドーバー海峡をフェリーで渡り、フランスへ入ると鉄道でパリを目指した。社長の妻はでっぷりと太つた女で、強いウェーブの掛かつた赤い髪に真っ赤な口紅を付けている。

大きな声で以前に来た時のパリの様子を自慢げに話していた。

クリステイナの他には、やはり鉄道会社の社員の妻が二人。時折「なんて素晴らしいんでしょ！」とか、「羨ましいわ！」といった賞賛の相槌を入れながら熱心に社長の妻の話聞いていた。

皆それぞれに一人ずつメイドを連れてきていたが、凜以外は皆黒人で、物珍しそつに凜をジロジロと見ていた。

敗戦後のパリの街には軍人がたくさんいて混乱しているようにも見たが、ホテルの中までは影響していないようだった。凜はホテルのロビーや部屋の内装の豪華さに目を見張つた。

朝起きるとメイド同士で社長の妻が何色のドレスを着るのかの情報交換をする。他の三人は社長の妻よりもほつそりしていて容姿が良い。社長の妻が不機嫌にならないように、同じ色合いのドレスを避けるためだ。

そして街に出た時は、買い物した荷物を持ってホテルへ運ぶ。パ

り市内にどことなく漂う不穏な空気も四人の奥様方にはどこ吹く風だ。

無邪気に女同士の旅行を楽しんでいるクリスティーナを見て凜も嬉しく思っていた。いつも家族のために明るく振舞っているが、トビーは仕事が忙しく、子供達もクリスティーナに対して無反応な事が多い。きつと寂しい思いをしている事もあるんだろうと凜はいつも気になっていたからだ。

夢のような時間をパリで過ごし、上機嫌のままクリスティーナと凜は三週間の旅を終えて帰って来た。

「パリにはもつと居たかったけれど、やっぱり家族と会えないのは寂しいものね」

「今度はご家族でパリにいらっしやれば、よろしいんじゃないですか？」

「それはいいわね。今度トビーに提案してみましよう」

家族に再会するのを楽しみにしていたクリスティーナだったが、家には使用人以外はいなかった。それでもクリスティーナは嬉しそうに買ってきたお土産をテーブルに広げ、興味津々でそれを見ている千代丸に一つ一つ説明していた。マトはその様子を遠巻きに見ているだけだった。

馬車が着いた時、玄関に出てきたマトは凜の顔を見るなり安堵したような表情をしていた。きつとマトは忙しかったのだろうと凜は思った。もしかしたら、千代丸がマトに迷惑を掛けたのかも知れない、と。

しかしクリスティーナに話し掛けられた時も、トビーが仕事から帰って来た時も強張った顔をしていたマトを凜は不思議に思った。

「・・・それで、ルーブル美術館には入れなかったのが残念だったのよ。でも・・・トビー？聞いている？」

パリでの出来事を語るクリスティーナの顔を見てトビーはにつこ

りと笑った。

「ああ。もちろん聞いてるよ。楽しかったようだね」

そう言っているトビーだが、クリスティーナが話している間は心ここにあらずといった感じだった。しかし、こんなやりとりはいつもの事だ。トビーはいつも仕事のことで頭がいつぱいなのだ。そんな事は使用人の凜やマトにも分かつているが、トビーの返事を聞いたクリスティーナは明るい表情のままパリの話を続けた。

仕事が終わわり、部屋で寝巻きに着替えている時だった。

「痛っ！」

グレーのワンピースを脱ごうとしていたマトが声を上げて顔をしかめた。右手で左の肘をそつと撫でている。

「どうしたの？」

凜はランプの灯りの中でマトの腕に顔を寄せた。皮膚が擦り剥けて赤くなっている。

「怪我してるじゃない。大丈夫？」

「う・うん」

マトは不安そうな顔で俯いた。

「一体どうしたの？ 転んだの？」

凜が訊いたが、マトは俯いたまま首を振り、寝巻きが傷に当たらないように気を遣いながら着替えた。

いつもはしなやかともいえる身のこなしは影を潜め、動きがぎこちない。よくは見えないが、きつと他にも打ち身などがありそうだった。

凜は首を傾げたが、千代丸は黙ったまま不安そうな顔でマトを見ていた。

「ねえ千代、あなたマトに何か迷惑掛けたの？」

「ええ？僕何にもしてないよ」

次の日の午後、凧は庭の掃除をしていた千代丸を問い詰めた。謂れも無い事で責められた千代丸は目を見開き首をブンブン振って否定した。

「それじゃ、マトに何があつたか知らない？」

千代丸は俯き、上目遣いで凧を見た。理由を知ってはいるが、言うて良いものかどうか迷っているようだった。

「千代！」

凧に威圧的に促され、千代丸はキョロキョロと辺りを見回した。ア―サーはバケツを持って厩舎へと向かっている。周りには誰もいないが、千代丸は凧に顔を寄せると小さな声でおずおずと話した。「あ．．あのね、姉上が奥様と旅行に行っている時．．夜中に旦那様が僕達の部屋にいた事があつたんだ．．」

凧は眉根を寄せて首を傾げた。

「どうして旦那様が？」

千代丸は首を振った。

「分かんない．．。マトの叫び声が聞こえたような気がして目が覚めたら．．旦那様がマトのベッドにいたんだ．．。酔っ払って、怒ってるみたいだった．．。」

「怒ってたって、マトに怒ってたの？」

「違うみたい。『こっちは仕事で忙しいのに』とか、『どうせパリでいい思いしてるんだろ』とか．．。奥様に怒ってたんじゃないかな．．。それで．．手でマトの口を塞いでて．．。何でマトにあんな乱暴な事したのかな？」

凧は胸の中がザワザワするのを感じた。凧が首を傾げると、千代丸は泣きそうな顔で続けた。

「僕怖くて・・・ずっと寝たふりしちゃったんだ。しばらくして旦那様は出て行っただけど、マトはベッドの中で泣いてて・・・裸で」

「その事奥様に言ったの？」
具体的な行為の意味はよく分からないが、とにかくクリスティーナの耳には入れない方がいいという事だけは分かる。千代丸は勢い良く首を振った。

「その事絶対、奥様に言っちゃダメだよ！」
凜が人差し指を出して言うと、千代丸は首を大きく縦に振った。

それからマトはオドオドとした様子で過ごしていた。トビーを怖がっているようだ。それは凜と千代丸も同じだった。今までトビーはとても穏やかな人間だと思っていた。自分の父と同じような。

家に居る時の父はいつも穏やかで怒ったところなど凜は一度も見た事が無かった。もちろん戦ではそんな事はないのだろうが、あの父が戦っている姿など凜には想像出来ないでいた。兄達に剣の稽古をつけている時はとても厳しかったが、怪我をさせる事はなかった。ましてや女になど・・・。

父はたまに凜にせがまれて弓矢を教えた事があった。母はそれを見ると父を叱った。

「あなた！娘にそのような事を覚えさせてどうするのですか！」
それでも父は声を荒げる事も無く笑っていた。

「そう言うな。凜はなかなか筋がいいぞ」
それが大人の男なのだと思っていた。トビーもそうなのだと思っていた。

“それが、どうして・・・。酒に酔っていたとはいえ・・・”

それでも、トビーは普段どおり、何事も無かったかのように振舞っていた。

「社長が喜んでいたらよ。奥さんの機嫌が良いそうさ。旅行中、君が頑張ってくれていたんだね」

トビーが感謝の言葉を述べると、クリステイナは高い鼻をツンと上げた。

「もちろん。あなたのために社長の奥様には気を使ったわよ。でもパリは楽しかったわ。そうそう、奥様ったらね・・・」

トビーに褒めてもらったのがよほど嬉しかったのだろう、クリステイナは少女のようにクスクス笑いながら旅行の思い出話を始めた。クリステイナはトビーとマトがお互いに目を合わせないようにしている事に気付いてはいなかった。

あれからマトは目に見えて元気が無かった。いつも姿勢が良く澁刺としていたのに、口数も少なく俯いている事が多かった。怪我は治ったはずなのに、きつと心にも深い傷を負っているのだらうと凜は心配した。「大丈夫？」と声を掛けても、マトは黙って頷くだけだった。

しばらく経つと食欲も落ちたようで具合が悪そうに見えた。虚ろな目でフラフラと歩いている。

ある日の夕食時、その日は週末で家族全員がテーブルに揃っていた。

「うつ！」

アンディーのグラスに水を注いでいたマトは気持ち悪そうに呻くと、急いでグラスをテーブルに置き手で口を押さえた。その様子を見たアンディーが嫌そうに顔をしかめた。

「何だよ？あつちに行けよ！こんな所で吐いてみる、ただじゃおかないからな！」

マトはそのまま食堂を出て行った。凜は追いかけてよとしたが、リサが空のグラスを差し出してきたため諦めた。

「マトどうしたのかしら・・・？」

クリステイナが心配そうに凜に顔を向けた。凜は首を傾げながら躊躇いがちに答えた。

「あ、あの・・・最近具合が悪そうなんです・・・でも、訊いても何

も言ってくれなくて・・・」

「変な病気に掛かってるんじゃないか？感染されたらいやだなあ」
アンディーが吐き捨てるように言うと、隣のリサも頷いた。

昔からそうだが、アンディーとリサはあからさまに使用人を見下す態度を取る。あまりにも思いやりの無い言葉に凜は悲しくなった。
トビーは仕事の事でも考えているのか、ずっと上の空のまま黙々と食事を口に運んでいた。

その日の夜、億劫そうにベッドに入ろうとしたマトに話しかけた。
「ねえ、マト。一体どうしたの？」

マトはベッドに座り、黙って首を振った。夕食にも殆ど手を付けていなかったのを凜は知っている。相当気分が悪いように見えた。

「奥様が心配してたよ。医者に診てもらおうかって・・・」
それを聞いたマトがパツと顔を上げた。黒い瞳が不安そうに揺れている。

「そんな・・・病気じゃないよ・・・あの・・・」
長い沈黙の後、マトが泣きそうな声で呟いた。

「子供が出来たんだよ・・・」
「えっ？マトのお腹に赤ちゃんがいるの？でも・・・だってまだ結婚してないでしょ？赤ちゃんのお父さんは？」

マトはまた俯いて黙り込んだ。

子供は結婚してから出来るものだと思っていた凜は不思議そうな顔でマトを見つめた。マトは顔を上げると自分を見ている凜を涙で濡れた瞳で見返した。

「どうして・・・奥様は私を・・・私をパリへ連れて行ってくれなかったの・・・？」

「えっ？」

その事とお腹の赤ちゃんとは関係があるのか分からなかったが、マトの恨みがましい口調に戸惑った。

クリスティーナがパリへ凜を連れて行ったのは、他の奥様達が皆

黒人のメイドを連れてきたからだ。凜には分かっていた。他人と違うものを持つていることを見せたかったのだ、と。

クリステーナは自分が数年間住んでいた極東の国の事を誇らしげに話していた。そして凜と千代丸の可哀想な生い立ちを持ち前の豊かな感情表現で話し、その場の話題の中心になった。その二人の孤児を使用人とはいえ引き取って面倒を見ている自分達夫婦を慈悲深い善人だと社長の妻に印象付けたのだ。

凜が何も言えずにいると、マトはベッドに横になり上掛けを頭から被ってしまった。赤ちゃんが出来たと言う事はおめでたい事のはず。でも今のマトからはそんな雰囲気は伝わってこない。

“それは結婚していないのに出来た子供だから？赤ちゃんのお父さんはどこにいるのだろう？”

そんな疑問を心の中で繰り返しながら、すでにぐっすりと寝入っている千代丸の隣に潜り込んだ。

九

ロバートソン一家の中でマトを心配しているのはクリスティーナだけだった。元気が無く、辛そうに動くマトの後姿をいつも不安そうな顔で見ている。

しかしクリスティーナが本気で医者を呼ぼうとした頃になって、マトは急に元気になった。食欲が出てきたようで食事の時は黙々と良く食べるようになった。お茶会で残ったケーキをキッチンで立っただけで食べている事もあった。しかも砂糖が掛かった甘いケーキの上から蜂蜜をたっぷり掛けていたのには凜も驚いた。

少し前までやつれていたマトはふっくらとしてきた。クリスティーナもようやく安心したようだ。でも凜はクリスティーナに「マトのお腹に子供がいる」とは言えないでいた。言うてはいけないような気がしたのだ。

それでもマトのお腹が目立ってくるそうもいかなくなってきた。ある日の夜、クリスティーナが部屋にやって来てマトを問い詰めた。

「お腹の子の父親は誰なの？」

ベッドに腰掛けたマトは俯いたまま黙っていた。クリスティーナはため息をついてマトの隣に座り、優しく諭すように語り掛けた。

「ねえマト、子供を産むって事は女にとってとても重大なものだよ」

クリスティーナは、泣きそうな顔で震えているマトの手を取った。

「言いたくないのなら仕方ないけど、相手の人はこの事を知っているの？」

「き、気付いてるはずです・・・」

マトがやつとの思いで告げた答えにクリスティーナは首を傾げた。

マトが恋人に会いに出掛けて行くところなど見た事がない。

クリスティーナがじつとマトを見つめると、その視線を怖がるようにマトは目を逸らした。

「私はあなたを家族だと思ってるのよ。何でも話して欲しいの。あなたが苦しんでいるのに、放っておくなんて私には出来ない・・・。ね、マト」

「奥様・・・」

マトの目に涙が浮かび、クリスティーナの手をすがるように強く握り返した。そしてマトは苦しそうに喘ぎながら口を開いた。

「奥様が・・・パリに行っていた時のことです・・・。だ、旦那様がご存知です・・・」

「トビー？トビーが何を知ってるの？」

キョトンとするクリスティーナにマトは必死になって訴えた。

「だ、旦那様が・・・私に・・・」

クリスティーナの表情が曇り、眉根に皺を寄せた。

「まさか・・・」

呟いたクリスティーナはマトの手を離すと立ち上がり、蒼ざめた顔で部屋を出て行った。

ベッドの中でずっと寝た振りをしていた凧は、震えながらベッドに突っ伏したマトを見ていた。

凧がウトウトとし始めた時だった。悲鳴とも怒声ともつかないクリスティーナの叫び声が屋敷の中に響いた。凧はがばっと上体を起こした。マトも身体を起こし、二人は無言でしばらく目を合わせる。と、揃ってベッドから降りて部屋を出た。

千代丸は口を開けて眠ったままだ。最近急に背が伸びた千代丸は、昼間庭仕事で忙しかったのだ。

凧とマトは二階のトビーとクリスティーナの寝室へ急いだ。その間もクリスティーナの怒鳴り声が聞こえている。

「何てことなの！何て恥知らずな！」

凧とマトは寝室のドアの前に立った。泣き叫んでいるクリスティーナにトビーも何か言っているが、くぐもって聞いて聞き取る事は出来ない。

「あの子は黒人なのよ！よりによって使用人の黒人娘に手を出すなんて！お腹の赤ん坊がどうなってるのか、考えただけでおぞましいわ！」

ついさつきマトに「私達は家族だ」と言っていたクリスティーナが吐き捨てるように叫んだ。

凜はマトを見てビクツとした。マトは口を一文字に結び、寝室のドアを睨みつけていた。体の横できつく握った拳を震わせながら。その時階段が上がってくる人影が見えた。アーサーだった。部屋からはまだクリスティーナの怒鳴り声が響いている。アーサーは階段の途中で立ち止まり、凜とマトに手招きした。

「何かあったら俺が行くから、お前達はもう部屋に戻れ」

凜は俯いて険しい顔をしているマトの背中に手をあてて促した。階段を降りながらアーサーをチラツと見ると、眉間に皺を寄せ悲しそうな瞳でマトを見送っていた。

部屋のベッドの中で横になっていると、しばらくしてクリスティーナの怒鳴り声は止んだ。静かになっても凜は眠る事が出来ない。

“マトのお腹の子のお父さんは旦那様・・・”

凜は心の中で確認した。

“旦那様は奥様と結婚してるのに・・・何でなんだろう・・・？”

凜は首を巡らせてマトを見た。マトはドアの方を向いて横になっており、凜には背中を向けていた。しばらく見ていたが、マトはピクリとも動かない。クリスティーナのあの掌を返したような言動に深く傷付いたのだろうという事は凜にも分かった。

マトもまた眠れずにいるのだろうが、凜には声を掛ける事が出来なかった。

その日からクリステイナは人が変わってしまった。あんなに優しくかった人間がこつも変わるものかと、凜は恐怖を感じた。笑顔が消え、言葉も消えた。周りの人間全てが敵だと言わんばかりに、殺気立った鋭い視線を投げ掛ける。千代丸もクリステイナを怖がっているようでアーサーから離れようとしない。

週末に帰って来たアンディーとリサも戸惑いを隠せないでいた。ギクシヤクとした両親。お腹の大きなマト。以前は華やかだった口バートソン邸には一触即発の不穏な空気が流れている。食事の時はそんな両親をちらちら見やりながら様子を窺い、兄妹で困ったように顔を見合わせていた。そして日曜日の午後になると、挨拶もそこそこに急いで学校へ戻って行ってしまふ。

夜にはいつも寝室からトビーとクリステイナが怒鳴りあう声が響く。一度はトビーが「マトにこの家から出て行ってもらおう」と言い出した。しかしクリステイナは「とんでもない！」と激昂した。

「あの子を外に出して、あなたの子供を身籠ってるなんて言いふらされたらどうするの？それこそ破滅だわ！」

こんなやりとりが聞こえるうちに、段々と二人に対して憎悪を募らせていくマトを凜は心配していた。

ある日の夕食時、何かと嫌味を並べるクリステイナにとつとつトビーが爆発した。

「その口を閉じろ！」

部屋の隅にいた凜はビクツとした。クリステイナもビクツツとして黙り込んだが、その目は鋭くトビーを睨みつけている。

「もううんざりだ！自分がやった事ぐらい分かってる！何も分かってないのは君の方だ！」

「何ですって？わ、私が悪いと言っの？」

クリスティーナの声は上ずっていた。

「結婚する前の君は魅力的だった。知的で聡明でユーモアもあった。ところが今はどうだ？君の話といえばファッションと噂話だけ。毎日家族のために働いてるのに、そんな下らない事を毎日聞かされる身にもなってくれ！」

「ひどいわ・・・結婚する時にあなたが『もう働かなくていい』って言って・・・私から仕事を取り上げたくせに・・・」

ワナワナと震えているクリスティーナにトビーは続ける。もう止まらないという感じだった。

「まるでガーガーうるさい着飾ったガチヨウと暮らしてるみたいだ！」

「ああー！」

突然クリスティーナが金切り声を上げ、フォークとナイフを料理が載った皿に叩き付けた。皿が割れ、切った肉や野菜がテーブルの上に飛び散った。

気がふれたように叫び続けるクリスティーナは勢い良く立ち上がると走って食堂を飛び出し階段を上がって行った。凧はその後を追おうとしたが、トビーに呼び止められた。

「リン！・・・下げてくれ」

散らかったテーブルの上を払うように手を振った。

「は、はい・・・」

凧が片付けをしている横でトビーはテーブルに肘をつき、両手で頭を抱え込んだ。

凧はクリスティーナをとても哀れに思った。元教師だったクリスティーナは千代丸に読み書きを教えていた時、とても生き生きとしていたのだ。凧やマトに詩集を選んでくれた時も。

結婚して家庭に入ったクリスティーナは家族のために尽力した。度々開かれるトビーの会社の夫人同伴のパーティーでは、男達が酒を飲みながら仕事や政治の話をしている間、クリスティーナは彼ら

の妻達の相手をして会話を盛り上げなければならぬ。クリスティーナはその役目も立派にこなしてきた。決して高尚とはいえない彼女達の興味のある事を熱心に研究して。全てトビーのために。

それなのに、さっきのトビーの言葉はクリスティーナにとっては裏切り以外の何物でもない。しかもトビーは既にクリスティーナの旅行中にとんでもない裏切り行為を犯しているのだ。

食器が載ったトレイを持ってキッチンに戻ると、マトが一人で茹でたジャガイモとチーズを食べていた。二階からはまだクリスティーナの泣き叫ぶ声が聞こえている。その声を聞きながら、マトは形のいい唇を歪めて笑っていた。

マトの態度は豹変した。まるでロバートソン一家を挑発しているかのように見える。顎をつんと上げ、大きなお腹を突き出す。トビーのした事を、この現実を皆に知らしめるように。

「ああもう！体が重いつたら！忌々しい！」

トビーの家族の前で大きな声で悪態をつく。自分がこの家から追い出される事はないと知ったマトは、夫妻に対する憎しみを隠そうともしなくなった。

そうするとトビーはいたたまれなくなったように、その場から逃げ出す。クリスティーナはそんなトビーとマトを交互に睨みつける。マトのお腹の子はその誕生を誰にも望まれていない。母親であるマトにさえも。それでもマトは黒人の血が通ったトビーの子供をこの家で産むのを楽しみにしている。クリスティーナがおぞましいと言ったその子供を二人の目の前に突きつけてやるのだ。そうしてマトの復讐は完成する。

それまで横柄だったアンディーとリサも、開き直ったマトに対して気味の悪いものを見るように怖がってただ黙っているだけだった。ある日の夜、マトの態度を見かねたアーサーが部屋にやって来た。「お前がされた事は確かに酷い事で気の毒に思う。だがなマト、俺達は黒人で使用人なんだ。俺は自分が何者なのかを分かってる。分

をわきまえてる。それが出来ない奴は、そのうち酷い事になるぞ」
凜は千代丸が寝ていて良かったと思つた。アーサーは、自分達は生まれながらの奴隷だと言いたいのだ。

凜は元々武士の家に生まれた。奴隷などではない。でも、今の自分はどうかだろうか？父は「どんな事があつても自分を見失うな」と言っていた。

孤児になつた凜と千代丸はロバートソン一家に拾われたのと同じだ。彼らがいなければ今頃どうなっていたか……。それはマトにとつても同じ事だろう。それならば主である者に、どんな目に遭わされても、どんな屈辱を受けても仕方が無いのだろうか……。

その疑問を心に浮かべた後、凜はハツと気付いた。父は武士と言つてもそんなに位が高かつたわけではない。下級武士だ。その証拠に生活は苦しかった。そして藩の命令は絶対だ。死ぬと言われれば死ぬしかない。

世の中には、上に立つ人間と、その下に跪く人間がいる。凜達の上にいるのがロバートソン一家だ。社会全体を見ればトビーの上に立っている人間もいるのだろうが、自分達はロバートソン一家の足元に跪いていなければいけない。それが父の言っていた事なのだろうか……。

アーサーは何も言わないマトの肩に手を置いて部屋を後にした。マトの表情は変わらない。憎しみと復讐に取り憑かれた顔。アーサーの言葉など聞いていなかったに違いない。

アーサーの忠告も空しく、事態は何も変わらぬまま過ぎていった。ただマトのお腹だけが日を追うごとに大きくなる。それでもマトはいつものように働いていたが、あの細長い脚で大きなお腹を支えるのは大変だろうと、凜はマトを気遣っていた。

クリスティーナは来客がある時、マトを部屋に閉じ込めておいた。客がマトの姿を見て良からぬ噂が立つのを恐れているのだ。

「子供が産まれたらどうするつもりなのだろう・・・？」
そんな懸念を抱いているのは凜だけではなく、この家の者全てが頭を悩ませていることだった。

普通、子供の誕生というのはおめでたい事のはずだ。凜は生まれ育った里の事を思い出した。子供が産まれる時は村中の女達が協力して手伝う。そこには身分の違いなどという物は存在しない。あんな小さな村では女達は皆協力しあうのだ。そして無事出産が終わると、命の誕生を村の皆で祝うのだ。

子供が産まれるとはそういうものだと思っていた。

ある日の事だった。短い夏がもうすぐ来るとは思えない程、どんよりと曇った空が広がっていた。居間の掃除をしていた凜のもとへ、千代丸が血相を変えて駆けて来た。

「姉上！奥様が！」

「どうしたの？」

呼吸を整えて千代丸が外を指差した。

「お、奥様がマトに既舎を掃除しろって・・・。僕がやるって言ったんだけど・・・奥様がどうしてもマトがやれって・・・」

既舎の掃除など、今までマトや凜が言いつけられたことはなかった。とても今のマトにそんな重労働は無理だ。アーサーは馬車でトビーを会社に送っているところで、今邸にはクリスティーナと使用

人しかいない。凜と千代丸は急いで邸を飛び出した。

凜と千代丸が裏にある厩舎へ向かうために母屋の角を曲がったところでマトの姿が目に入った。重そうな木の桶を両手で提げて、ヨロヨロと厩舎から出て来た。その後ろからは腰に手を当てたクリスティーナが怖い顔でマトを睨みつけている。

「マ・・・」

凜が声を上げようとした時、マトが転んで桶の中に入っていた馬の排泄物をぶちまけてしまった。

「しっかりなさい！」

クリスティーナの檄が飛び、凜と千代丸は飛び上がった。二人は凜と千代丸に気付いていない。土の上に膝をついたマトは肩で息をしている。

「汚いわね。でもあなたには馬のフンがお似合いよ」

クリスティーナは跪いているマトの前で高笑いした。するとマトは地面に落ちている馬の汚物を？み、思いつきクリスティーナに投げつけた。それはクリスティーナのリボンが付いた白いブラウスの胸に当たった。クリスティーナは一瞬何が起こったのか分からないというように自分の胸元を眺め、そして金切り声を上げた。

「こ・・・の・・・」

クリスティーナは厩舎の壁に立て掛けてある大きなスコップを握った。凜は胸騒ぎがしたが、脚がすぐんで動く事が出来なかった。

「この・・・薄汚い黒人が！奴隷の分際で！」

クリスティーナはスコップでマトの横つ面をひっぱたいた。マトは頭から地面に叩きつけられた。スコップを振りぬいたクリスティーナの体は真横を向いた。再びマトに向けた顔は完全に正気を失い、凜にはまるで鬼のように見えた。

「私を怒らせたらどうなるか・・・思い知るがいいわ！」

クリスティーナがなおもスコップを振り上げたのを見て、凜は千代丸に向き直り思い切り抱き締めた。恐ろしい蛮行を決して見せまいと。

すると遠くから馬車の音が聞こえた。アーサーが帰って来た。

「千代、アーサー呼んできて！」

「う、うん」

千代丸が駆け出した直後、厩舎の前から叫び声と共にバンツという何かがぶつかる音が聞こえた。凜は母屋の陰に隠れて厩舎の方へ振り向いた。

クリステイーナが倒れているマトの背中にスコップを打ち付けている。何度も何度も。その度にマトの体が跳ね、鈍い音がする。クリステイーナは息を喘がせ、不明瞭な声で動かないマトに罵声を浴びせながら狂ったようにスコップを振り下ろす。

クリステイーナの細い身体のどこにそんな力があるのか、まとめていた髪は乱れ目は吊り上り、その顔はまさに鬼の形相だった。

「あ・・ああ・・」

凜は膝ががくがくと震えて、立っているのがやっとだった。ふと頭の中に母親の姿が映った。家に押し込んできた山賊に殺された母親の姿が。廊下に倒れ、その背中に刀が突き刺された場面。母親の断末魔の叫び声。

息苦しくなり、後ずさった凜の肩に背後から手が置かれた。ビクツとして振り向くと、アーサーだった。アーサーは真っ直ぐにマトとクリステイーナを見ていた。

「何て事を・・」

眉間に深い皺を寄せ、悲痛な声で呟いた。ガシヤンと音がし、凜が振り向くとスコップを脇へ投げ捨てたクリステイーナがガクツと地面に膝をついた。ふわっと広がった若草色のスカートがあまりにも優雅で、それがかえってクリステイーナの狂気じみた姿を際立たせていた。

マトはもうピクリとも動いてはいなかった。クリステイーナは肩で息をしながら、自分の両手の掌を呆然と見つめていた。

「リン、チヨを連れて家に入れ」

アーサーに言われ、凜は背後で震えている千代丸を急いで家に連れ

て行った。

「マトの姿が見えないが・・・？」

その日の夕食時にトビーがクリステイーナに訊いた。凜は食堂の隅で俯いて立っていたが、チラツと目線を上げた。平然と食事をしていたクリステイーナは微笑を浮かべてトビーに向き直った。

「そうそう、言い忘れていたわ。マトは死んだの」

いつもの噂話をするような口調の、その言葉の意味を考えるようにトビーが動きを止めた。

「何だつて・・・？今、何て・・・？」

「ですから、マトは死んでしまったの。既舎の屋根を直すと言って私は無理だと言ったんですけど・・・あの子ったら一度言い出したら聞かなくて。案の定、屋根から落ちて、庭道具の上に」

茶目つ気たつぷりに唇をすぼめ、ヒュウという音を立てながら上に挙げた人差し指を下に下ろした。

「な、何故そんな・・・？」

蒼ざめて問い返したトビーに、クリステイーナは人差し指を口元にあて、考えるような仕草をした。

「さあ、何故かしら・・・。あんな身重の身体でねえ・・・。私は止めたのよ」

クリステイーナの口元には笑みが浮かんでいた。しかし、その目つきは普通ではなかった。凜は身震いした。トビーは言葉を失い、その後ぎこちなく夕食は進んだ。

凜も千代丸もアーサーも、マトの事は話題にはしなかった。とうよりも、口に出す事が出来なかった。あまりにも恐ろしくて、口に出した途端にそれが現実だということ認めなくてはならなくなるから。

夜、当然の如くマトのベッドは空いていた。もうマトが使ったことは無い。それでも凜はいつものベッドで千代丸と一緒に寝た。とて

もマトの物だったベッドで眠る気にはなれなかった。

空のベッドを見つめていると、楽しかった頃のマトの姿が浮かんだ。ワーズワースの詩集を三人で読んだ事。カツコウの話をした時の事。凜の目に涙が浮かんだ。

“可哀想なマト・・・”

家族を知らなくて、誰よりも家族を欲しがっていた。将来は愛する人と結婚して、子供が産まれたら片時も離れたくないと言っていた。

“それなのに・・・”

マトの死は事故として闇に葬り去られる。お腹の子も。一度も祝福されずに闇の中に放り込まれたのだ。

“マトは殺されたんだ・・・。こんな事が許されていいはずない・・・でも凜自身もそれを声に出して言う勇氣は無かった。”

夏休みの間、邸に戻っていたアンディーとリサも、マトの一件を聞いてクリステイーナの様子に違和感を憶えていたようだ。邸の中ではクリステイーナだけが楽しそうに振舞っている。しかし、それは以前のように家族のためのものではない。

この家の厄介事の後始末をしたのは自分だと、さも誇らしげにしていたのだ。

「リン、リン？」

「は、はい！」

食堂の隅で考え事をしていた凜は、クリステイーナに呼ばれてビクツとした。

「パンを持ってきてちょうだい。どうしたの？ぼんやりして」

「す、すみません。ただ今」

キッチンへ向かおうとした凜に、冷たい目をしたクリステイーナが言った。

「きちんとしてくれないと困るわよ。あなたも厩舎の屋根に登りた
い？」

凜は足を止め、蒼ざめた顔でクリステイーナを振り返った。テーブルにいた家族全員が食事の手を止めて、言葉も無く不安げにクリステイーナを見ていた。

「いやあねえ、冗談よ」

皆の視線に気付いたクリステイーナは鈴を転がすような笑い声を上げた。しかし笑っているのはクリステイーナ一人だ。

彼女だけがこの邸に垂れ込める暗い空気に気付いていない。この時既に、クリステイーナは壊れていた。

陰鬱な夏休みが終わり学校に戻ったアンディーとリサは、週末になっても邸に帰ってこないことが多くなった。課題が間に合わない

だの、友達の家泊まるだのといった電報を受け取るたび、クリスティーナはガツクリと肩を落とす。その激しく気落ちした様子は、見ている方が辛くなるほどだった。そして、気落ちしたクリスティーナは奇行に走る。その被害を被るのは使用人たちだ。

庭にはセージが咲き誇っていた。アーサーと千代丸が丹精込めて育てたのだ。しかしクリスティーナは千代丸にそれを全部抜いて燃やせと言いつけた。この匂いが頭痛を引き起こすと言って。アーサーと千代丸は日中その作業に追われた。

摘んだ花を邸に飾り、それを見れば元の優しいクリスティーナに戻るだろうと思っていた千代丸にとっては辛い作業だった。涙を堪えながらせつかく咲いたセージを焚き火に放り込んでいる千代丸が不憫だと、邸の窓から見ていた凜は思った。

クリスマス前のことだった。突然リサの学校から電報が届いた。リサが高熱を出していると言うのだ。

急いでアーサーが迎えに行き、家に戻ったりリサは意識が朦朧としていて体中に赤い発疹があった。医者は猩紅熱だと診断した。高熱による脳炎も引き起こしている、と。

医者はうるたえながらさすがトビーに沈痛な面持ちで首を横に振った。

「残念だが、もう手の施しようが無い。．．本来はもっと小さい子供が掛かる病気なんだが．．」

首を傾げる医者の言葉を聞き、トビーは頭をうなだれた。

「そ．．そんな．．」

クリスティーナは呆然とした顔でリサのベッドの脇にへたりこんだ。

「マ．．マトだわ．．」

「何だつて？」

クリスティーナの呟きにトビーが蒼ざめた。

「そうよ．．マトの呪いだわ．．。あの売女．．」

クリスティーナは震えたまま吐き捨てるように呟いた。

医者が引き上げると、全員が頭を抱えた。このままではリサが死んでしまう。

「別の医者を呼ぼうか・・・？ロンドンで一番の名医を紹介してもらおう・・・」

「いいえ。医者には無理よ」

立ち上がりかけたトビーを制して、クリステイナが決意に満ちた顔で立ち上がった。

その日の夜、クリステイナは初老の男を呼んだ。黒く長い外套を脱いだその男は修道士のような格好をしていた。

「非業の死を遂げた黒人メイドの呪いがリサに掛けられているに違いない」

クリステイナの説明を聞いたその男は訳知り顔で同調した。

男は「これから悪魔祓いの儀式をする」と言ってリサの部屋へ入って行った。それを聞いたトビーと、報せを聞いて帰って来ていたアンディーは共に困惑していた。

その男は苦しそうに喘いでいるリサの胸にロザリオを置くと、まじないのように何かをぶつぶつと呟いた。そして聖水だと言って小瓶に入った水をリサに振り掛け、大金を受け取るとそれを数えながら帰って行った。

その後もリサの容態は変わらない。それどころか時間が経つにつれ、どんどん衰弱していった。トビーとアンディーが止めるのも聞かず、次の日もその次の日もクリステイナはその怪しげな男を呼んだ。

連日同じ儀式を繰り返し、クリステイナも一緒になって祈ったが、リサはこの邸に帰ってきてから四日目の深夜に息を引き取った。一度も目を開けることなく、静かに呼吸が止まり弱々しく上下していた胸が動かなくなった。

「リサ！リサ・・・」

リサの枕元でトビーが叫び、その横でアンディーが嗚咽を洩らした。凜はベッドの足元でアーサーと手を握り合って啜り泣いていた。

「あ・・・あ・・・嫌！」

トビーとアンディーの反対側でクリスティーナが頭を抱え、叫びながらベッドに覆い被さった。俯いていたアンディーが顔を上げ、取り乱しているクリスティーナを睨みつけた。

「母さんのせいだ！母さんがマトを！だからリサが・・・」

「やめなさい！」

トビーがアンディーを制した。クリスティーナはベッドから涙に濡れた顔を上げた。

「クリスティーナのせいじゃない。彼女をここまで追い詰めた原因は私だ・・・。私が悪かったんだ・・・」

トビーはベッドを回り込むとクリスティーナの手を取った。

「クリスティーナ・・・今まで辛い思いをさせてしまつて悪かった・・・許してくれ・・・」

トビーはクリスティーナをきつく抱き締めるとむせぶように泣き出した。アンディーはまだ温かいリサの手を握り、ベッドに顔を埋めていた。

それでもクリスティーナの細い手はだらんと垂れ下がったまま、トビーを抱き締める事はなかった。口を半開きにし、虚ろな何も見えない視線が部屋の空間を彷徨っているだけだった。

今にも雪が降りそうなほど、どんよりと曇った空の下でリサの葬儀が行われた。たくさんの参列者が集まり、茫然自失のクリスティーナの姿は皆の涙を誘った。

しかし棺が埋葬される時になると、支えていたトビーの手を振りほどきクリスティーナはリサが眠っている棺にしがみつこうとした。「私も一緒に！リサ！私のせいなの！ごめんなさい！私のせいでマトの呪いが・・・」

泣き叫ぶクリスティーナをトビーとアーサーが押しとどめた。

そのクリスティーナの様子に参列客の多くはもらい泣きしながら

も、なにやらひそひそと囁き合っていた。

リサの葬儀が終わってからのクリステイナは気落ちしてしまつて、全く自分の事に構わなくなつた。以前あれほど身なりに気を使つていた彼女が、この頃は昼間でもガウンのままではいる事が多い。輝いていた髪は艶を失い、化粧つ気もなくなつた。一日中長椅子に凭れ、落ち窪んだ目でボンヤリとしている。

それでもたまに正気に戻る時があり、そうすると凜が鏡の前で髪を結び上げてやる。穏やかに話をしている時でも、一瞬でそれが破られる事があつた。突然悲鳴を上げ、目の前の鏡にマトが映つたとか、部屋の暗がり指差して、あそこにマトがいると喚いて泣き出すのだ。

一度はガウンのまま邸から飛び出し、閉まっている門に手を掛けて「助けて！助けて！」と叫び出した事があつた。アーサーが抱き抱えるようにして邸に連れ帰つたが、たまたま通りがかつた人達は驚きに目を丸くしてクリステイナの奇行を見ていた。

他の者にはもちろん見えないが、きつとクリステイナには見えているのだらうと凜は思った。あんなに惨い殺され方をしたマトの怨念が、この邸にまだ漂つていても不思議ではない、と。

このような調子で、クリステイナが精神を病んでいるという事実は瞬く間に世間に広がつた。トビーの会社の同僚の奥様方を招いて頻繁に行われていたお茶会も無くなり、またクリステイナが招待される事も無くなつた。クリステイナが彼女達の噂話の種になつているのは明らかだつた。

彼女達の噂話は自然とその夫達の耳にも入る。クリステイナの状態はトビーの会社での立場にも影響した。それでもトビーはクリステイナを心配し、献身的に尽くしていた。出来る限りクリステイナの傍に居ようと心掛けていた。

仕事にも差し障りがないように奮闘していたが、折りしもその頃

ヨーロッパ中を襲った恐慌による不景気のためトビーは会社を追われた。

その後はどうやって生計を立てるかトビー一人で画策していたが、ある日学校からアンディーを呼び寄せると家族の前で自分の計画を発表した。

「私の従兄弟のアダムがアメリカに住んでいるのは知っているね？」トビーはテーブルに身を乗り出し、決意に満ちた顔で話し出した。クリスティーナとアンディーは共に頷いた。今日のクリスティーナはいつになく落ち着いていた。トビーはそのタイミングを待っていたのだ。

トビーはテーブルの上にアダムからの電報を出した。

「アダムから一緒に果樹園の経営をしないかと誘われてね。カリフォルニアなんだが、大陸を横断する列車に乗ればすぐだ。蓄えのあるうちに新しい生活をしたいたいと思ってる」

「カリフォルニア・・・」

クリスティーナとアンディーが同時に呟いた。

トビーは早くこの呪われた邸から逃げ出したかった。どのみち、ここまでクリスティーナの噂が広まっては、これ以上この街に住む事は出来ない。そう考えていた。

「アダムの話では、とても気候が良いらしい。清々しい空気に輝く太陽。魅力的だとは思わないか？」

そんな場所ならば、家族の間に流れる暗い空気も払拭できるし、経営者として労働者を雇えばクリスティーナの傍に居ることが出来る。新しい場所、新しい仕事、そこで新しい生活を始めるのだ。トビーは興奮していた。

「アメリカ・・・」

凜は呟いた。その国の名前は知っている。どんな所なのか詳しくは分からないが、とてつもなく大きい国だと聞いた。

そこに行くのだ。また日本から遠ざかるのだろうか？それともこ

こより日本に近付くのだろうか？いつか千代丸と一緒に故郷へ帰る事が出来るだろうか？様々な疑問が頭の中を通り過ぎていく。唯一つ凧に分かるのは、また新しい波がやって来るといふ事だけだ。

アメリカへ向かう準備は着々と進み、トビーは祖父の代からの邸をも売却した。

「もう後戻りは出来ない。新天地を目指すのだ」

ロバートソン一家は決意に満ちていた。

港へ向かう馬車の用意が済むと、千代丸は庭を見渡した。春の花園には赤とピンクの薔薇が咲き誇っている。

「新しい所にも薔薇が咲くのかな・・・？」

千代丸が少し寂しそうに呟いた。アーサーが千代丸の肩に手を置いた。十一歳になった千代丸はここへ来た時よりも二十センチも背が高くなっていった。

「ああ。薔薇も咲くし、もっと色んな花が咲いてるだろうな。俺たちが見たことも無いような花がね」

アーサーが力強く言って微笑むと、千代丸も顔中に笑みを浮かべて頷いた。

馬車に乗り込んだ千代丸が凧の隣に座った。

「また大きな船に乗るんだね。新しい所もきつと良い所だよ」千代丸はにっこりと笑って凧に話した。

凧は馬車の中から外に居た千代丸を覗き見ていた。庭を見つめていた時の寂しそうな様子を。アーサーの一言で途端に笑顔になったのも。もう心は新天地へ向かっているのだ。

「うん」

凧も笑顔で応えた。何よりも千代丸が笑顔でいるという事、それが大事なのだ。

“何があっても千代丸を守るって決めたんだから・・・”

アーサーが掛け声を掛けて馬に手綱を打ち、馬車はゆっくりと走

り出した。千代丸はニコニコとじていて、もうロバートソン邸を振り返ることはない。気持ちの切り替えが早いのも千代丸の良い所だ。それでも凜には少し寂しかった。千代丸はもう故郷を忘れてしまったのだろうか、と。両親の事、三人の兄達の事も。自分がどこから来たのかを。この長い旅路の途中で思い出す事は無くなったのだろうか。

船に乗り込むと港にいるたくさんの人達が見えた。これから船出をする乗客の見送りに来た人達だ。しかし、クリステイーナの悪い噂が広まり、トビーも会社を追われたロバートソン一家には一人の見送りもいなかった。日本から出港した時はたくさんの人が集まったのに。凜と千代丸の事も、あの時はサムが見送ってくれた。

「せいせいするな・・・」

甲板の柵に背中を預けたアンディーが呟いた。アンディーの同級生もいないようだ。アンディーが通っていた学校にはトビーの会社の同僚の子供もたくさんいたのだ。最近では友達もアンディーから離れていったそうだ。

普段は皮肉屋で使用人を見下し、良い印象を持っていなかった凜だが、この時ばかりはアンディーに同情した。強がっているが、本当は寂しいのだ。もう二度と戻れないかもしれない、故郷を離れる時の気持ち。凜にはそれがよく分かった。

船が外洋に出ると、遙か彼方に水平線が見えた。その向こうに目指す場所がある。凜は背伸びをして、まだまだ見えるはずもないその大陸を捜した。

十四

船が着いたニューヨークはとても大きな街だった。こんな場所で果樹園など出来るのだろうかと思っただが、ここから大陸を横断し西へ向かうのだと聞いた。

通りを行き交う何台もの馬車、そして様々な人種の大勢の人たち。ここにいる全ての人が移民だと聞いて凜は驚いた。色々な国からこの大陸へ仕事や夢を求めてやって来るのだ、と。

すぐ傍にある食料品店から出てきた家族連れが目に入った。てっきり日本人だと思っただけだったが、話している言葉が違う。彼らは中国人だと分かった。

「ここには元々人は住んでいなかったんですか？」
列車を待つ駅の中、新聞から顔を上げたトビーは凜の問いに首を振った。

「いや、そんな事はないよ。たくさん先の住民がいる。ただ・彼らの文明はかなり遅れていてね、とても野蛮だと聞いている。入植者や軍隊と度々トラブルを起こしているんだ。過去にも、今でもね」
トビーが新聞の記事を指差した。

『スー族が反乱、政府軍がこれを制圧』

「・・・あまり関わりたくはないね」

トビーは苦笑いした。家に押し入ってきた山賊のような連中なのかと思ひ、凜は身震いした。

街から森へ、そして長い時間を掛けて溪谷へ。凜は広大な自然の景色に見とれていた。列車には大勢の人が乗っている。ほとんどの人は金を掘り当てるためだ。一発当てれば大金持ち。西部はゴールドラッシュで沸いていると聞いた。

ある日、列車は草原の中を走っていた。起伏に富んだ緑の大地とその上には青い空、それしかない。果てしなく続く、見渡す限りの

大草原。

“一体この国はどこまで大きいのだろうか？”

凜がそんな事を考えていると地響きのような音がした。その直後に銃声が響きビクツと首をすくめた。

「何？」

千代丸がキョロキョロと辺りを見回した。クリスティーナの瞳も不安そうに揺れている。彼女はこの旅が始まってから一言も言葉を発していない。知らない土地が怖いのか、いつもトビーの後を影のようについていた。

数人の男たちが列車の窓から身を乗り出し、外に向けてライフルを発砲している。外の草原には無数の大きな茶色の塊が動いていた。草と土を巻き上げながら。

地響きの正体はこれだ。列車の乗客はその生き物に向けて発砲しているのだ。

「あれは・・・牛？」

「バッファローだよ」

千代丸の問いに窓の外を眺めながらトビーが答えた。

群れの中の一頭が倒れると車内から歓声が上がった。それでもバッファローの移動は止まらない。次から次へバッファローが倒れていく。

「すごい！すごい！」

興奮に頬を上気させてアンディーが叫んだ。

「仕留めたバッファローは食べるんですか？」

列車は止まらない。倒れたバッファローをその場に残して走り去る。やがて先頭を走るバッファローも車窓の後ろへ消えていった。

トビーは短く笑った。

「いやあ、食べたりはしないよ」

凜は驚きに目を？いた。

「食べもしないのに殺すんですか？どうして？」

「うん。バッファローはね、体が大きくて鉄道の施設や線路を壊す

ことがあるんだよ。鉄道会社にとっては厄介者でね。それに、今は小さい群れだと思うが、大きい群れになると、線路を横切るのに数日掛かる事もあるんだって。それじゃあ運行に支障が出るだろう？」

トビーの説明に凜は納得した。だからこそ、列車の窓からバツファローを撃つ事が許されているのだ。

『車窓からバツファローを撃ち放題』

見れば、列車の壁にそんなポスターが貼られている。それがこの列車の旅の大きな娯楽となっており、鉄道会社も客を呼び込む目玉にしていた。

そして自分よりも体の大きい生き物を一瞬で倒してしまう銃の威力に驚愕した。こんな武器があるからこそ、この広大な自然の大陸を開拓することが出来るのだらうと思った。

そして草原にはいくつもの白骨化したものや、朽ちていく過程のバツファローの死体が転がっていた。時折車内に激しい腐臭が立ち込め、そして去っていく。

「俺も撃つてみたいなあ」

アンディーがまだ興奮が冷めやらない調子で呟いた。

クリステイーナは押し黙り、俯いたまま横目で車窓を見ていた。娯楽という名の殺戮を、その目に暗い光を湛えたまま眺めている。凜の目にはその姿が不気味に映った。

それから数日後にトラブルは起きた。その日滞在した町ではちょっとした騒ぎになっていた。西部で列車強盗が起き、線路が無法者によって爆破されたというのだ。そのため列車はしばらく運行停止になる、と。

「今のうちに馬車を手に入れた方がいいな。列車よりだいぶ時間は掛かるが、復旧するのを待つよりかはマシだろう」
食事に入った店でトビーがアーサーと相談をしていた。

クリステイーナは落ち着かない様子で周りをキョロキョロと見回

している。店の中には無骨な感じのする男達がたくさんいた。山高帽を被りジャケットにスラックス姿だが、皆が腰に銃を下けている。彼らは寛いで酒を飲んでいるように見えるが、どこか殺気立った雰囲気があり、決して関わってはいけないと凜の本能が告げていた。

店の奥にあるテーブルで四人の男がカードに興じていた。時折ブーツを踏み鳴らして笑ったり怒鳴ったりの大きな声が響く。

トビーとアーサーが地図を見ながらこれからの事を話し合い、その他の者は静かに食事をしていたが、突然後ろから椅子が倒れる大きな音がして全員が振り返った。

「てめえ！イカサマだろう！ふざけやがって、ぶつ殺すぞ！」

カードをしていたテーブルの一人の男が立ち上がり、腰の拳銃を抜いて向かいの男に突きつけた。銃を突きつけられている男は涼しい顔で肩をすくめた。怯んでいる様子は微塵も感じられない。金を賭けているらしく、立ち上がった男は興奮して怒鳴り続けた。

「俺をなめんじゃねえぞ！今まで何人殺してきたと思ってる！」

店のあちこちからヒソヒソと囁く声がある。その中から「賞金稼ぎ」という言葉が聞こえた。凜は町中に張られた手配書を思い出した。

その首に賞金を掛けられたお尋ね物達だ。罪状は強盗や殺人など多岐にわたる。そんな凶悪な犯罪者を捕まえて賞金を貰うのだ。中には「生死に関わらず」と書かれたものも多い。きつとあの男には生きたまま捕まえようなどという考えはないのだろう。

“こんな所で銃の撃ち合いが始まったらどうしよう・・・”

不安になった凜が震えている千代丸を抱き寄せた時、一発の銃声が響き天井から木片がパラパラと落ちる音がした。

「ひっ！」

短い悲鳴を上げて肩をすくめ、後ろを振り返るとカウンターの中にいるバーテンダーがライフルを持っていた。葉莢の転がる乾いた音が響くほど静まり返った店内にバーテンダーの低い声があった。

「ここで撃ち合いはさせねえ。やるんなら外へ出な」

「何だと！」

賞金稼ぎが向き直るよりも早く、バーテンダーがライフルの銃口を向けた。そしてさっきまで銃を突きつけられていた男も、いつの間にか自分の銃を抜いていた。

「くそっ！」

賞金稼ぎが悪態をつくると、その隣にいた男が立ち上がった。

「もうやめておけ。今日はツキがないんだ」

穏やかな声で諫められると賞金稼ぎは小さく舌打ちをして銃を下げた。バーテンダーもライフルを下ろしたが、その目は油断なく賞金稼ぎを見つめている。

「さあ、もう行こう」

連れの男に促された賞金稼ぎが不満そうに店を出るためこちらに歩いてきた。突然ふらついた賞金稼ぎは、クリスティーナの目の前のテーブルにバンツと手をついた。全体に埃っぽく、もつれた長い髪、歯の抜けた口を歪めて笑うと酒の匂いが漂った。賞金稼ぎは、驚きと恐怖で引きつっているクリスティーナを覗き込んだ。

「へへ．．．いい女だな、あんた幾らだ？」

「なっ．．．？」

トビーが何か言おうとすると、連れの男が賞金稼ぎの身体を支えて起こした。

「悪いな、酔っ払ってるんだ。ほら！しっかりしろ！」

連れの男が申し訳なそうに言い、賞金稼ぎと共に店を出た。

トビーはため息をつき、わなわなと震えているクリスティーナの手をポンポンと叩いた。

「全く．．．西部は荒っぽい所だと聞いてはいたが．．．」

首を振ると再びアーサーと話し始めた。

隣の凜が心配そうに見ている中、俯いていたクリスティーナが顔を上げた。

「薄汚い野良犬が．．私に触るんじゃないわよ．．．」

食いしばった歯の間から絞り出すような声でクリスティーナは呟くと、賞金稼ぎが出て行った店のスイングドアを睨みつけた。

凜以外の者はその様子に気付きもしなかった。

その町で一番立派な宿を取ると、凧はクリスティーナと一緒に部屋で寝る事になった。クリスティーナの解いた髪に凧がブラシを入れていた時、部屋のドアがノックされた。

「リン、ちよつと来てくれ」

トビーが扉の向こうから言った。

「あ、はい・・・」

凧はブラシを置くと部屋を出て行った。クリスティーナは椅子に座ったまま、凧の後姿を冷たい目で追っていた。

廊下に出てドアを閉めた凧にトビーが心配そうな顔で尋ねてきた。

「クリスティーナの様子はどうだね？」

「はい・・・さつき店であつた事がシヨックだつたみたいです。少し落ち着かないみたいです・・・」

トビーは顎に手をあてて俯いた。

「ふむ・・・そうか・・・。ちよつと気を付けて様子を見てくれ。隣の部屋に居るから、彼女に何かあつたらすぐに呼んでほしい」

「はい。分かりました」

凧は神妙な顔で頷いた。

「じゃあ、頼んだよ。リン」

トビーは凧の肩をポンと叩いて隣の部屋へ戻った。

凧は、一度は裏切ってしまった妻を本当に心配しているトビーの背中を見送った。

“きつと後悔しているのだろう・・・”

自分のせいでクリスティーナが精神を病んでしまった事。その責任と、何よりも深い愛情が感じられた。

“奥様がそれに気づく事はあるのだろうか・・・？”

凧はため息をついて部屋に入った。椅子に座ったままのクリスティーナが凧へ顔を向けた。その冷たい視線に捕らえられ凧は一瞬ド

キツとしたが、クリステイナは黙って視線を逸らした。凜はクリステイナをチラチラと見ながら、寝るために着替えを始めた。

もうすぐ十四歳になる凜の体は段々と女らしくなってきた。

クリステイナは首を巡らし、成長著しい凜の体とその瑞々しい肌を眺めた。

「あの・・・何か・・・？」

視線を感じた凜がクリステイナに尋ねた。

「あなたもそのうちトビーと寝るのね・・・」

「えっ？」

膝まであるストンとした綿の寝巻きを被った凜は首を傾げた。言われている事がよく分からない。

「あの・・・何の事・・・ですか？」

クリステイナがスクツと立ち上がった。凜を捉えたその目は激しい怒りに燃えていた。

「とぼけるんじゃないわよ・・・トビーを誘惑するチャンスを狙ってるんでしょ？あの黒人の淫売みたいに」

クリステイナは吐き捨てるように言いながら凜に近付いた。

「な・・・何の事が分かりません・・・」

一歩後ずさった凜の頬をクリステイナが思い切り平手打ちした。

堪らず凜は悲鳴を上げて床に倒れこんだ。クリステイナは倒れた凜に馬乗りになった。

「この薄汚い売女！」

口汚く凜を罵りながら拳で頭や肩をめちやくちやに殴りつけてきた。

「やめて下さい！だ、誰か助けて！」

凜が泣きながら叫ぶと部屋のドアが開き、悲鳴を聞きつけた千代丸が二人の間に割り込んできた。

「やめる！」

クリステイナが手の甲で千代丸の頬を打った。千代丸は後ろによるけ、しりもちをついた。口の端からは血が滲んでいた。

「チヨ、あんたまで私を・・・せつかく目を掛けてやったのに！」

クリスティーナの目に狂気が宿った。

「千代！」

凜が必死で上体を起こすと、千代丸の後ろで驚愕に目を見開いているアーサーとトビーが見えた。

「ク・・クリスティーナ・・」

トビーがクリスティーナを後ろから抱き抱え、凜から引き離れた。

「離して！あなたもこの女の味方なのね！また私を裏切るんだわ！」

クリスティーナは髪を振り乱してトビーの腕の中で泣き叫んでいる。

「すまない、リン・・」

暴れるクリスティーナを抱き抱えたまま、部屋を出ようとしたトビーが泣きそうな顔で言った。

「姉上！大丈夫？」

千代丸が駆け寄り、凜を起こした。殴られた頭や肩がドクドクと脈打っているが、痛みは感じなかった。それよりも心に受けた衝撃の方が強かった。体の震えは止まらなかったが、凜は千代丸に頷いた。

そのままクリスティーナはトビーの部屋で寝る事になった。アンディーがアーサーの部屋へ行く事になると、廊下から大きな声で文句が聞こえた。

「何で俺が使用人と同じ部屋で寝なくちゃいけないんだ？」

「仕方ありませんよ」

アーサーがやんわりとたしなめた。

ベッドに入り横になると、殴られた場所がズキズキと痛み出した。

「大丈夫・・？」

隣のベッドにいる千代丸が心配そうに尋ねてきた。

「うん・・。千代の方こそ大丈夫なの？」

千代丸の口の端はまだ血が滲み、頬も赤く腫れている。それでも千代丸は弱々しく微笑んでみせた。

「大丈夫だよ、これくらい。・・でも、奥様は何でこんな事するんだろう？あんなに優しくかったのに・・」

マトの一件が起こる前、クリスティーナは千代丸をとても可愛がっていた。そして千代丸もクリスティーナを慕っていたのだ。きつと母親のように思っていたのだろう。

その千代丸に手を上げるなど、その頃には考えられない事だった。悲しそうな千代丸に凜は慰める言葉を掛けてやる事が出来なかった。壁の向こうからはむせび泣くクリスティーナの声が聞こえてくる。疑心暗鬼に囚われているクリスティーナ、全ての人間を敵だと思いつ込んでいる。皆が自分を裏切り、陥れようとしていると。

凜はふと恐ろしい考えに至った。このままでは自分も千代丸もそのうちクリスティーナに殺されてしまうのではないかと。マトのように。

寝付かれずに天井を見上げている千代丸の横顔を見つめた。まだ幼さは残っているものの、段々と大人の顔になってきている。純真さと思慮深さが混じり合うその瞳を決して曇らせてはならない。自分に残された家族は千代丸だけだ。それは千代丸にとっても同じ事。それでも今の凜には、どうすれば自分達を守ることが出来るのか分からなかったし、そんな術があるのかどうかも知らないでいた。

次の日トビーは二頭立ての幌馬車を手に入れた。荷物を運び入れ、調達した水と食料も積むと、人が乗る空間はかなり狭くなった。

トビーに幌馬車を売った男が白くなった顎鬚をさすりながら言った。

「インディアンには気を付けたほうがいいぞ。捕まったら頭の皮を剥がされちまうぞ」

列車に乗る前にトビーが言っていた野蛮な先住民の事だ。捕まったらおそらく命はない。クリステイーナを除いた全員が恐れおののいた。そして、その男が勧めた通り、トビーはライフルを一丁手に入れた。

クリステイーナといえば、俯き鋭い視線で凜と千代丸を睨みつけていた。彼女にとっては周りにいる全ての人間が敵なのだ。今さらインディアンという姿の見えない敵が増えたところで、クリステイーナには何の恐怖もなかった。

アーサーが手綱を握り、ロバートソン家の三人が車に乗り込んだ。その後ろに荷物を置き、凜と千代丸は荷物の後ろの隙間に身体を滑り込ませた。

西には険しい山脈がある。幌馬車はひとまず南に向かって進む。岩がちの山地はデコボコとしていて、幌馬車での旅は困難を極めた。そして食料や水を調達するため、近くの町に寄らなければいけないのだから遠回りになることも珍しくなかった。

清しい山の空気も低地に出ると灼熱地獄に変わった。時折別の馬車や人馬が見えると、トビーはライフルを手に油断なく辺りを窺っていた。

トビーは十代の頃、亡くなった父親に狩猟に連れて行ってもらった事があると言う。

「父に『撃つてみる』と言われたんだが、怖くてねえ・・・」

恐る恐る撃つたが反動でしりもちをつき、一発だけ撃つた銃弾は空に吸い込まれていったらしい。

勿論人間を撃つた経験など無いという。百戦錬磨のガンマンに敵うはずもないのだが、トビーは家族を守るために必死だった。

乾いた荒涼とした土地は、旅人の気持ちも荒れさせる。アンディは文句が多くなり、クリスティーナに至ってはトビーの気遣いをよそに被害妄想や強迫観念が日増しに強まっていった。

「こんな目に遭わせて！私を殺そうとしているんでしょ？」

「こんな地獄みたいな所に私を一人置いてけぼりにするつもりなんだわ・・・」

そんな事を突然言い出しては泣き喚くのだ。その度に凜と千代丸は震え上がった。

ある日サンタフェという大きな町についた。オレンジ色の日干し煉瓦の建物が並ぶ、とても綺麗な町だ。ここに一晚滞在する事になった。

その宿で凜は意外なものを目にした。ロビーに置いてあった新聞の一つの記事に、着物を着て鬚を結った男達の写真が出ていた。

それは数年前に日本からサンフランシスコに着いた使節団の写真だった。記事はその欧米人から見たら奇異な日本人の姿を、インディアンと比べて揶揄したものだ。しかし凜はここで日本人の写真を見たことに胸を躍らせた。

「もしかしたら・・・このサンフランシスコという場所に行けば、この人達に会えるかも知れない・・・きつと偉い人達なんだろうけど・・・事情を話せば、一緒に日本へ帰ることが出来るかも・・・」

凜はロバートソン一家が部屋に引き上げてから、宿の主人に聞いてみた。

「さあねえ・・・もう帰っちゃったんじゃないか？」

「そ・・・それじゃあ、サンフランシスコという所から日本に行く船があるんですか？」

「さあ・・・何たって大きな町だし・・・大きな港もあるだろうから、外国に行く船も出てるんじゃないのか？」

主人はたいして関心も無い様子で答えた。それでも凧の心には希望が湧いた。

「そこに行くには、どうすればいいんですか？」

凧は興奮して訊いた。主人は広がった額を掻きながら「うん・・・と唸った。

「まあ・・・行くとしたら駅馬車で北へ向かって、西行きの列車に乗るしかないんじゃないか・・・お嬢ちゃんには馬で行くのは無理だろう。でも、危険だと思うぞ・・・」

結局、数日前に列車を降りた町に戻らなければいけない。その頃には爆破された線路も修復されているだろうか・・・。

危険なのは分かるが、それは今の状況も同じだ。このままではそのうちクリスティーナに殺されるだろう。マトのように。今のクリスティーナは何がきっかけで逆上するのか分からないのだ。

上手く行けば、サンフランシスコから日本行きの船に乗れるかも知れない。時間は掛かるだろうが・・・その可能性に賭けてみてもいいのではないか・・・。

それに何よりも凧は故郷に帰りたくてしょうがなかった。その乗合馬車は朝早く出るといふ。

部屋に戻り、千代丸にその事を告げた。今日は二部屋しか取れなかったため、アーサーも同じ部屋で新聞を読みながら凧の説明に耳を傾けていた。

「どう？千代、一緒に日本に帰ろう」

千代丸は凧の提案に顔をこわばらせながらも頷いた。

「うん・・・インディアンとか無法者とか、ちよつと怖いけど・・・姉上と一緒になら、どこでも行くよ」

凧はホッと息をつくくと、アーサーに顔を向けた。

「アーサーは？私達と一緒に日本に行く？」

新聞から顔を上げたアーサーは首を振った。

「こんな歳で今さら言葉の通じない国に行ったって、どうにもならんよ」

凜は心配になった。今日クリステイナはアーサーにも当り散らしていたのだ。手綱を握るアーサーに「とんでもない場所に連れて行く」としている「だの」「マトと同じ黒人の悪魔」だのと。

クリステイナがこうなると、アンディーはうんざりしたように目を回して肩をすくめ知らん振りを決め込む。トビーは地図を出して説明しながら必死にクリステイナをなだめるのだ。

「でも・・・心配だわ・・・。アーサーもそのうち奥様に・・・」
説得しようとした凜を遮ったアーサーは断固とした口調で言った。

「いいや。俺は死んだ先代の旦那様に雇われて、十代の頃からロバートソン家に仕えてるんだ。トビーのことは生まれた時から知ってる。いくら奥様の気が触れてしまったからといっても、見捨てるわけにはいかない。トビーには地獄まで付き合うよ」

「そう・・・」
これ以上言っても無駄だという事が分かった凜は寂しそうに俯いた。その肩をアーサーが軽く叩いた。

「お前達はまだ若いんだ。未来もある。好きにしたらいい」
立ち上がったアーサーはジャケットのポケットから小さな袋を出し、そこから出した銀貨を凜に手渡した。

「餞別だ五十ドルある。何かの足しにはなるだろう」
「で、でも・・・」

掌の上の銀貨を見て戸惑っている凜にアーサーは笑った。

「大丈夫だ。カリフォルニアまでのタバコ代ぐらいは残ってる。こんな事ぐらいしかしてやれないが・・・。明日は朝早く出たほうがいい。奥様に見つからないように」

「ありがとう・・・アーサー。元気で・・・」
凜と千代丸の目から涙が溢れた。アーサーは微笑みながら頷き、三人は互いに抱擁を交わした。

次の朝、凜と千代丸は日の出と共に目を覚ました。着替えなどのわずかばかりの二人の荷物は、凜の白いブラウスを風呂敷代わりにして包んだ。

アーサーはまだ眠っている。

「別れが辛くなるから寝ている間に行ってくれ」と昨夜アーサーが言ったので、寂しい気持ちを抑えて言われた通りにした。

ロバートソン一家がいる隣の部屋の前を忍び足で歩き、二人は宿の外に出た。

「ごめんなさい・・・」

ロバートソン一家が寝ている部屋の窓を見上げて呟くと、昨夜宿の主人に教えられた停車場へ千代丸の手を引いて急いだ。

しかし、いくら待っても馬車はやって来ない。そのうち辺りに人通りが多くなってきた。正直、こちら辺の人達にとって何時が「朝早く」なのかは凜には分からない。それに馬車がやって来るのは御者次第だし、馬次第なのだろう。

「遅いね・・・」

千代丸が不安そうに言い、凜は黙って頷いた。

どの方角から来るのかも分からないまま辺りを見回していると、アーサーの姿が目に入った。手を頭に載せ、俯きながらこちらに歩いてくる。

「アーサー、どうして・・・？」

その時アーサーの後ろにいるクリスティーナが見えて凜は愕然とした。アーサーが手を頭に載せている訳が分かった。クリスティーナが拳銃を持っているのだ。その銃口はアーサーの背中に押し付けられていた。

「ここにいたのね・・・」

薄笑いを浮かべたクリスティーナの陰鬱な目の光に凜と千代丸は震

え上がった。

「良かったわねアーサー、この子達がもう出発してたら撃ち殺されてたところよ」

「リン、チヨ・・すまない・・」

アーサーが悲痛な声で言うと、クリステイナは細い身体を仰け反らせて高笑いをした。しかしすぐに険しい顔に戻ると、凜と千代丸に罵声を浴びせた。

「私から逃げようとするなんて、この恩知らず！」

「クリステイナ！」

血相を変えたトビーが駆けて来た。

「ここにいたのか・・。何だそれは！何で銃なんか持ってるんだ？」
蒼ざめて問うたトビーに、相変わらず薄笑いを浮かべたクリステイナは手にした銃を自慢げに振ってみせた。

「昨夜、知らない男から買ったの。だって、こんな口クでもない町にいるのよ。銃は必要でしょ？さあ！戻りなさい！」

凜は向けられた銃口から守るように千代丸を背中に隠した。繋いだままの千代丸の手が震えている。

もうこうなってしまうては仕方が無い。駅馬車の姿もまだ見えな
いし、どこにも逃げる事が出来ない。千代丸を庇いながら凜は宿
への道を歩き始めた。

「もっと早くこうしていれば良かったのよ・・。見てトビー、銃が
あれば皆が私の言う事を聞くのよ」

怒気を含んだ声で嘲るようにクリステイナが言った。

宿の前に止められた馬車に寄り掛かり、不機嫌そうに腕を組んで
いるアンディーが凜達に気付いた。その足元には荷物が山積みにな
置かれていた。

「早く積みよ！」

アンディーが荷物を指差して怒鳴った。アーサーと凜と千代丸の三
人は、急いで馬車に駆け寄った。

「全く・・・母さんを怒らせるなよ！」

荷物を積み込んでいる凧の耳元にアンディーが声を潜めて叱責した。
「す・・・すみません・・・」

凧の謝罪の言葉も聞かずにアンディーは踵を返すと馬車に乗り込み、ドツカリと腰を下ろした。

トビーはクリステイナーを馬車に促した後、凧の元に近付いた。

「従兄弟の農園に着いて落ち着いたら、サンフランシスコまで送り届ける。約束するよ。・・・だから、それまでは我慢してくれ」

トビーに懇願され凧は力無く頷くことしか出来なかった。

アーサーと千代丸が馬車の一番後ろに水を乗せようとした時だった。アンディーがうんざりしたように呟いた。

「陽射しに当たると、すぐ熱くなるんだよな・・・」

確かに金属のタンクに入れられた水は、日中の強い陽射しによって瞬く間にお湯に変わってしまう。アンディーの呟きを聞いたクリステイナーは馬車を降りた。

「水をもつと奥に入れなさい。リン、チヨ、あなた達は馬車の後ろに座るのよ」

クリステイナーは凧と千代丸を馬車の後部に付いているステップに後ろ向きに座らせ、二人の手首にロープを巻きつけると幌を支えている支柱に結いつけた。

「あれじゃ干上がりますよ」

御者席のアーサーが振り返ってトビーに言った。

凧と千代丸が座っている場所は幌の影が届かない。トビーは頷くと、強張った声でクリステイナーに呼びかけた。

「ク・・・クリステイナー・・・それじゃ、あまりにも可哀想だよ」

「この子達は私が拾ったの。私のものよ。これは逃げようとした罰薄笑いを浮かべ、事も無げに言い放ったクリステイナーは首を巡らせて広場を見た。そこには絞首刑台があり、昨夜から三人の男が吊るされたままになっていた。

「あれを見なさい！悪い事をした者はああなるのよ！何だったら口

「プを首に巻いてもいいのよ」

“ そう言う自分がマトにした事は悪くないのか？ ”

凜は憤りを感じたが、それを口に出す勇氣は無かった。何故ならクリステイーナの目は今や完全に正気を失っていた。

嫉妬や絶望や裏切りが彼女の心に大きな傷を作り、以前はそこに溢れていたはずの優しさや情愛を全て押し流してしまったのだ。

凜は悔しくて唇を噛んだ。隣の千代丸は俯き、悲しそうな目で陽の当たる地面を見ていた。

幌馬車は南西へ向かって走り出した。日が高くなるにつれてどんどん気温が上がっていく。朝早く逃げ出そうとした凜と千代丸は飲まず食わずで消耗しきっていた。食料も水も貰えない。「これは罰なのだから」とクリステイーナが断固として与えようとしないのだ。誰もクリステイーナに逆らうことが出来ない。傍らに常に銃を置いていた彼女は、今やこの一行の狂った独裁者になっていた。

「ノド・・渴いた・・」

カサカサにひび割れた唇で千代丸が呟いた。段々視線がボンヤリと始めている。自由になる方の手で千代丸のうな垂れた頭に触れた。ひどく熱い。

「千代・・しつかりして・・」

そう言った凜の口もカラカラに渴いて上手く言葉にならなかった。目を閉じてしまった千代丸に身体を寄せた。

その時、幌馬車の前方を馬に乗った一人の男が横切って止まった。アーサーは馬車の速度を落とすと眼を凝らした。その男は風に長い黒髪をなびかせ、浅黒い肌を薄い茶色の革の服に包み、斜に構えてこちらを見つめている。

「どうしたんだよ？」

馬車の速度が落ちた事に気付いたアンディーがアーサーに尋ねた。

「・・インディアンだ・・」

アーサーは斜め前方の馬に乗った男に視線を釘付けにしたまま呟いた。昨夜見た新聞の記事の中で、インディアンの絵が書いてあった。それにそっくりだった。

「本当か？」

興奮した声を上げたアンディーは、御者席に身を乗り出すとアーサーの傍らに置いてあるライフルを？んだ。

「あいつか・・・よし・・・」

「アンディー！何を・・・」

トビーが止める間もなくアンディーは男に向かって発砲した。しかし生まれて初めてアンディーが撃った弾は、銃身が跳ね上がったために大きく逸れた。

「チツ！外したか・・・アーサー、ちよつと馬車停めろ！」

ライフルのレバーを引きながらアンディーが命令した。そして再度その男に銃口を向ける。

「アアアー！エー！」

男が上げた大きな雄叫びは空気を震わせ、馬車の中に緊張が走った。それでもアンディーは男に狙いをつけたままライフルを放さない。トビーが堪らずに叫んだ。

「アンディー！止めるんだ！」

「何で？どつかで聞いたよ、あいつら人間じゃないんでしょ？開拓を邪魔する敵だって。軍隊だってインディアンを殺してる。きつとあいつの首を持っていけば、褒美で金が貰えるよ」

アンディーは乾いた唇を舌で湿らせながらニヤツと笑った。男は右手に弓を持ち、左手で背中に背負った矢筒から一本の矢を抜いた。「アンディー！危ないから止める！」

「フン・・・殺せばいいのよ・・・」

それまで俯いてボンヤリとしていたクリスティーナが薄笑いを浮かべて呟いた。その言葉にアンディーは「へへへ」と笑った。

「大丈夫だよ。あいつ弓矢しか持ってない。あんな物で何が出来る？銃の方が強いに決まってる・・・」

その時アンディーの耳に「ヒュン！」という空を切る音が聞こえた。アンディーが顔を上げると、目の前には茶色の矢羽があつた。

「えっ？」

アンディーは驚愕に目を見開いた。矢はアーサーの首を貫いていた。

「ア・・・アーサー・・・」

アーサーの体がぐらりと横に傾き、御者席から消えた。馬に乗っ

た男は自分の前を通り過ぎる馬車を目で追いながら甲高い口笛を吹いた。

凜の意識は朦朧としていた。アンディーが放った銃声にはビクツとしたものの、今の三人の大騒ぎには気付いていなかった。ただ目を閉じてしまっている千代丸の頭を抱いているだけだ。単調な色の砂地の上に落ちていた黒い塊が目に入ったが、それがアーサーだということとは分からなかった。

御者が居なくなると馬車は暴走を始めた。急に速度が上がり、地面の凹凸に乗り上げガタガタと揺れる。

“もしこのステップから落ちたら・・・”

腕をロープで繋がれているのだ。馬車に引き摺られてしまう。凜は縛られている手で支柱を握ると、もう片方の腕で千代丸の身体を強く抱き締めた。

ロバートソン一家の叫び声は凜の耳に届いていなかったが、遠くからドドドドツという地響きのような音が聞こえ首を巡らせた。

立ち昇る陽炎の中、砂煙を従えた人馬の一隊がこちらへ向かって疾走して来る。

「やっぱり・・・やっぱり・・・」

凜は呟いた。兜を被り弓矢を持っている。凜には彼らが武將に見えるのだ。

“この国にも日本人がいたんだ・・・もしかしたら・・・さっきの町で私達の事を聞いて、助けに来てくれたのかも知れない・・・”

凜は大きく口を開けて、熱い空気を吸い込んだ。

「助けてー！助けてー！」

肺が痛んだが、精一杯の声を張り上げた。彼らは疾走する馬の上で弓矢を構えた。

「まずい！団体で来た！仲間を呼んだんだ！」

トビーは御者がいなくなつて暴走する馬の手綱を取ろうと手を伸ばしながら叫んだ。

「あ・・あ・・」
アンディーはすっかり怖気づき、幌の中に引っ込んだ。荷物に背中を押し付けてしゃがみ込むと、脚の間に立てたライフルを抱き締め、震えていた。

「皆死ねばいいのよ・・皆・・」
クリステイーナは薄笑いを浮かべたまま、小さな声で繰り返し呟いている。

突然先端に尖った石が付いた矢が、幌を突き破って飛び込んできた。トランクに刺さった矢を見てアンディーが大きな悲鳴を上げた。
「大丈夫か？アンディー、クリステイーナ！」
御者席に身を乗り出したトビーが後ろを向いて叫んだ。

その時馬車を引いている二頭の馬のうちの一頭の脚の付け根に矢が刺さった。馬が大きくいななき、後ろ足を蹴り上げて前につんのめってしまった。もう一頭の馬は前に進もうとするので、馬車はバランスを崩して傾いた。

凜は馬車が倒れると気付いた時、咄嗟に千代丸の頭を腕に抱え込んだ。あつという間に横倒しになった馬車の幌の支柱に凜は額をたたかにつつけ、意識を失った。

「・・痛い・・」
ズズズキする額の痛みは無意識に呟いた自分の声で目を覚ました。どれくらい気を失っていたのか分からないが、さっきまでの喧騒は消えて辺りは静寂に包まれていた。その中で、横倒しになった馬車の車輪がカラカラと空転する音だけが小気味良く聞こえている。

凜はハツとして上体を起こし、自分の下敷きになっている千代丸を見た。千代丸の髪や顔は砂に汚れているが、怪我はしていないようだった。

「千代！千代！」
必死で呼びかけたが、千代丸は目を閉じたままだった。顔を寄せる

と「はあつ、はあつ」という荒い息遣いが聞こえ、凜は安堵の息を洩らした。

その時、それまで容赦なく照り付けていた太陽の光が遮られ凜と千代丸は影に包まれた。凜が顔を上げると、数人の男に取り囲まれている事が分かった。真ん中の男は黒く鋭い目で凜と千代丸を見下ろしている。日に焼けているのか分からないが浅黒い肌、両方の頬骨の間、鼻梁を横切つて黄色い線が描かれている。

彼らを侍だと思ったのは自分の勘違いだと、凜は気付いた。兜だと思つた物は、柔らかそうな革で出来た鉢巻だつたのだ。それでも凜は無意識に彼らに向かつてすがるように手を伸ばした。

「た・・すけて・・」

彼らに日本語が通じるのか分からなかったが、今はそれしか口から出なかった。

男達は互いの顔を見合わせて、何事が言葉を交わしていた。

「お・・お願い・・助けて・・」

真ん中にいる男は隣の男の顔を見て頷くと、腰に下げていたナタを手に取り頭上高く振り上げた。その刃の先端で屈折された太陽の光が凜の目を強く射つた。クラクラとした凜は、振り下ろされるナタを見つめながら、また暗闇の中へ引きずり込まれていった。

十九

「凜、見てみる！こんなに獲れたぞ！」

長兄の藤丸が、竹で編んだザルを凜に差し出した。水面から突き出した岩に座り、素足で小川の水をジャブジャブと蹴っていた凜は、ザルの中の丸々と太った三匹の岩魚を見て歓声を上げた。

「うわぁ、すごい！あと四匹、頑張つて獲つてね兄上！」

藤丸は顔をしかめた。

「えっ？あと四匹も・・・？」

「そおよ！だつてうちは七人家族でしょ？あと四匹いなきゃ」

凜が笑いながら言うと、藤丸は頭を掻きながら弱った声で呟いた。

「しょうがないなあ・・・三匹獲るのも大変だったんだけどなあ・・・」

三人の兄は皆、凜に甘かった。男兄弟の中のたった一人の妹を、まるで姫のように扱っていた。その姫から何かを頼まれるという事は彼らにとって身に余る光栄なのだ。

「あと四匹だ！早くしないと日が暮れるぞ！」

藤丸は竹丸と桐丸に声を掛けると身をかがめて川床に目を凝らした。凜も岩に腰掛けながら水面を見つめる。

「何をしている？」

声が出た川岸を見ると父が立っていた。お勤めから帰ってきたのだ。

「父上！」

皆が一斉に声を上げた。父は川岸に置いたザルの中身を見ながら微笑んだ。

「ほう、岩魚か。よし、手伝おう！」

荷物が入った風呂敷包みを置くと、着物の裾を捲り上げてジャブジャブと川の中へ入って来た。

夕暮れ間近の小川に歓声が響く。皆で協力して家族全員分の岩魚が獲れた。家に帰ると庭先で母と千代丸がえんどう豆の筋を取っていた。父の帰宅に気付いた千代丸は嬉しそうな笑みを顔いっぱい

広げて駆け寄ってきた。

「父上！お帰りなさい！」

ゆっくりと歩み寄って出迎えた母に、凧は七匹の岩魚が入ったザルを見せた。

「皆で獲ったんだ。今日の夕飯だ」

「まあすごい。立派な岩魚ですこと」

「見せて！見せて！」

喜ぶ母の隣で千代丸が背伸びをしてザルの中を覗こうとした。

「ほら」

凧が誇らしげにザルを千代丸の目の前に差し出した。

「うわぁ・・・」

千代丸は一瞬目を輝かせたが、エラから血の滲む岩魚を見て表情を曇らせた。

「これ・・・死んじゃったの・・・？」

「えっ？う・・・うん」

悲しそうに訊いた千代丸に戸惑いながら凧は頷いた。

「何か・・・可哀想だよ・・・」

千代丸が泣きそうな顔で俯いてしまい、困った凧は父を見上げた。

父は千代丸の前にしゃがむと、その肩に大きな手を置いた。

「いいか千代丸、皆、何かを食べなければ生きていけないんだ。その食べ物というのは全て生き物だ。命あるものは他の命を貰って生きていくんだよ」

「そ・・・そうなの・・・？」

生きるという行為の罪深さに衝撃を受けた千代丸に父は優しく微笑んだ。

「そうだ。でもこの魚は無駄に死んだ訳じゃない。お前が食べる事によって、この魚はお前の血となり肉となり骨となる。お前と共に生きていくんだ」

千代丸は父の言葉にジツと耳を傾けながら、ザルの中の岩魚を見つめている。

「千代丸、お前に出来るのは、この魚を残さずに食べて丈夫で強い男になる事だ。それがお前のために死んでくれた魚への、せめてもの償いなんだ」

千代丸は真つ直ぐな目で父親を見ると、こくんと頷いた。

「分かりました・・・。お魚にありがとうを言つて、残さずに食べます・・・」

その日の夕食は家族全員いつもよりも丁寧に手を合わせ、「いただきます」と「ごちそうさま」を言った。塩を振って焼いた岩魚はとても美味しかった。そして凧が母と一緒に作った大根の味噌汁に口をつける。

凧の唇にひんやりとした液体が触れた。夢うつつの状態の凧だったが、それが味噌汁ではなく水だという事は何となく分かった。

誰かが自分の身体を支えて、水の入った器を口にあてがっている事も。薄つすらと開けた凧の目に白っぽい光が見えた。

凧は水を夢中で飲んだ。与えられた水を飲み干し、深い息をつく。頭がズキズキと痛み出し、また眠りについた。

遠くから子供達の遊ぶ声が聞こえる。その中に千代丸の声もあった。

「千代・・・千代・・・」

呟いて目を開いた。目の前には、自分を覗き込む見知らぬ三人の女の顔があった。

「あ・・・あの・・・？」

身体を起こした凧は戸惑いながら声を掛けた。

三人の女はそれぞれに口を開いたが、何を言っているのか凧にはさっぱり分からない。英語でも日本語でもない。三人とも顔立ちは東洋人に似ているが、どこの国の人なのだろうと凧は不思議に思った。

言葉が通じないと分かった様子の一人の女が、キョトンとしている凧に掌を見せて待つように命じると、立ち上がった。

凜は周りを見渡した。二メートル四方ほどの部屋、壁ではなく布のような革のようなものが張ってある。四隅の柱は上に行くほど幅が狭くなり天井からは柔らかな外の光が差し込んでいた。凜が寝ていた床には動物の毛皮が敷かれているが、真ん中は土そのままで囲炉裏のように焚き火が置いてある。今はほとんど消えていて白く細かい煙が一筋、天井へと伸びていた。

立ち上がった女はくるぶしまで届くベージュ色の服を着て、スカートの裾を揺らしながらテントの出入り口まで歩いていった。布を開き、そこから上半身を出すと声を上げた。

「チヨ！チヨ！」

「はい！」

外から返事が聞こえ、女に促されて千代丸がテントの中に入ってきた。起き上がっている凜を見ると、満面の笑顔で近付いた。

「良かったあ！姉上、丸一日寝てたんだよ。このまま目を覚まさなかつたら、どうしようって思っちゃった」

「千代こそ！無事だったのね！」

大きな声を出すと頭がズキツと痛んだ。額を触ると、カサカサとしたかさぶたがある。その傷の周りが少し腫れているのが分かって思いつ出した。幌馬車が倒れて頭を打ったのだ。そして縛られていた手首も赤く擦り剥けている。

クスクスという笑い声が聞こえて目を上げると、入り口から二人の男の子が顔を覗かせていた。千代丸よりも少し小さいくらいの子達だった。それに気が付いた女が、子供達に手を振って外へ行くように促した。

「ちっちゃい子がたくさんいるんだ」

千代丸が楽しそうに言った。

「ねえ千代、ここはどこなの？この人達は？奥様や旦那様はどこにいるの？」

その質問に千代丸は表情を曇らせて下を向いた。

「旦那様達はいないよ。ここに連れて来られたのは僕と姉上だけ・

。この人達はインディアンだよ。聞いたことあるでしょう？」

「えっ？」

凧は驚き、千代丸の肩に手を置いて自分へ引き寄せると声をひそめた。

「インディアンで野蛮だつて聞いたわよ。大丈夫なの？」

千代丸はキョトンとして頷いた。

「うん……。みんな親切だよ。英語を話せる人達もいるし……」

「……そう」

凧は脱力して千代丸の肩から手を下ろした。千代丸はソワソワして凧に訊いた。

「ねえ、もう行ってもいい？あの子達に草笛の吹き方を教えてあげてたんだ」

「うん・うん」

戸惑いながらも頷くと、千代丸はテントを飛び出して行った。三人の女達はその元気な千代丸の後ろ姿を微笑んで見つめている。すぐに外から千代丸と他の子供達の笑い声が聞こえてきた。

言葉の通じない見知らぬ三人の女に囲まれて所在無げにしていた凜の肩を、四十代ぐらいのその中で一番年長の女が軽く叩いた。動揺して警戒している凜に、その女は手を口に運ぶ仕草をして「何か食べるか？」と訊いた。

そういえば、ロバートソン一家から逃げ出そうとした前日の夜から何も食べていなかった。このキリキリとした胃の痛みは、お腹が空ききつているせいだと気が付いた。

凜が躊躇いがちに頷くと、さつき千代丸を呼んだ女が頷き、テントの外へ出て行った。

しばらくして戻ってきた女はパンのような物と水が載った盆を持っていった。それを凜の前に置くと、三人の女は揃ってテントを出て行った。

それは黄色味が掛かった色で、少しパサパサしているが素朴な味のとうもろこしで出来たパンだった。一口食べると、お腹が大きな音を立てた。凜は夢中でそれを口に運んだ。

食べ終わって落ち着いた凜は立ち上がり、テントの外を覗いた。木立の中に同じような形のテントが幾つもあり、そのテントとテントの間を子供たちが駆け回っていた。

「食事・・・終わった？」

突然たどたどしい英語で話し掛けられ、凜は声のした方に首を巡らせた。そこには長い三つ編みを垂らした少女が立っていた。手には凜の風呂敷包みを持っている。

「はい・・・あの・・・それ・・・私の？」

凜は少女が持っている風呂敷包みを指差した。

「着替え・・・必要かと思って・・・」

少女はニツコリと笑って風呂敷包みを凜に差し出した。

歳は千代丸と同じくらいだ。着替えを受け取るとテントの中に戻

った。少女も一緒に中に入ってきた。着替え始めた凜をキラキラと好奇に満ちた黒い瞳で見つめている。なかなかの美少女だ。

「私・・・ミア・・・あ、あなたの名前は・・・？」

「私は・・・凜」

二人はしばらく見つめ合って笑顔を交わした。

着替えが終わった凜は脱いだ服が随分汚れていたことに気付いた。一度砂にまみれたようで埃っぽい。ブラウスは肩の身頃と袖の継ぎ目の部分が大きく裂けている。

“一体何があつたのだろう・・・？”

乗っていた幌馬車が倒れた事は何となく憶えている。でも何故そうなったのか、そして何故自分と千代丸だけがここへ連れて来られたのか分からない。

“そうだ。彼女なら何か知っているかもしれない。英語も話せるみたいだし・・・”

凜はミアの前に正座すると、円く黒い目を真っ直ぐに見つめて尋ねた。

「ねえ、私と私の弟の千代の事なんだけど・・・何があつたか、あなた知ってる？」

「あ・・・あなたとチヨ・・・サン達・・・連れて来た・・・あの・・・えっと、幌馬車・・・」

ミアの話はどうも要領を得ない。それでも考えながら一生懸命に話すミアの一言一言を頷きながら聞いていた。

だが、ミアは口をパクパクさせたかと思うと黙り込み、俯いて上目遣いに凜を見た。

「ごめんなさい・・・。英語・・・うまく・・・話せない・・・。あつ、サンなら・・・英語分かる。サンに・・・」

「うん・・・あの・・・サンって？」

ミアはまたにつこり笑った。

「サンは・・・戦士」

それから凜はミアと一緒にテントを出た。ひんやりとした空気に柔らかな木漏れ日が降り注いでいる。ここは山の中だ。テントの間を抜けるとちよつとした広場があった。数人の女が火を焚いている。一人の女の背中には赤ん坊が背負われていて、その横には小さな女の子がしゃがんで火を見ている。

別の場所では年老いた男が木の枝をナイフで削っていた。その老人の前には木の枝で出来た小さな檻があり、中から鳥の鳴き声がする。凜が目を凝らして見ると、どうやらウズラが二羽いるようだった。

たくさんの人達が皆それぞれの仕事をしているが、広場をミアと並んで歩く凜に気付くと手を止め、黙つて二人を眺めている。

広場の隅の方に、焚き火を囲んで丸太が横たえられていた。その一本の丸太に座つた二人の男の後姿が見える。ミアはその二人に近付いた。

「彼がサン」

丸太の横に来ると、手前にいる男が顔を向けた。腰に届きそうなほど真っ直ぐな長い黒髪、切れ長の鋭い目。

凜はその男に見覚えがあった。あの日、侍だと勘違いした男だ。そして自分にナタを振り上げた男。

「やつと目が覚めたのか」

紹介されてもニコリともせずサンは低い声で言った。

「は・・・はい・・・」

あの時は夢中で助けを求めたのだが、今さらになつて恐怖が込み上げてきた凜は緊張して応えた。

「彼はダニエル」

サンの隣に座っている男をミアが示すと、ダニエルは顔を前に突き出して人懐っこい笑顔を凜に向け、手を振った。

二人とも二十代前半に見えた。何から聞けばいいものか考えあぐねている凜にミアはニコリと笑った。

「私・・・これ洗って・・・直す」

凜が脱いだ汚れた服を見せた。

“ そんな・・・悪いわ。自分でやるわよ”

凜がその口に出す前にミアは踵を返してサッサと歩き去っていった。

戸惑ったまま突っ立っている凜にダニエルが声を掛けた。

「座ったら？君、名前は？」

「あ・・・凜です・・・」

名乗りながら、彼らが座っているのとは隣にある丸太に腰を下ろした。

サンは黙ってライフルを布で磨いていた。そのウインチェスターを凜は知っている。トビーが買ったものだ。凜はおずおずとサンに話し掛けた。

「あ、あの・・・旦那様は・・・えっと・・・そのライフルの持ち主は・・・」

「殺した」

にべも無く言われた凜は言葉を失った。

サンは開いた機関部から銃筒を覗きながら付け加えた。

「最初にあいつらが俺に向かって発砲してきた」

「旦那様が・・・まさか・・・」

トビーが自分から発砲するなんて凜には信じられなかった。その凜の呟きをサンは聞き逃さなかった。黒く鋭い目を凜に向ける。

「旦那様？ライフルを持っていたのは、俺よりも年下の若い男だったぞ」

“ アンディー・・・？”

アンディーならやりかねないと思った。列車から撃ち殺されるバツファローを見て、とても興奮していたアンディーの様子を思い出した。

「俺も撃つてみたい！」

そう言っていた。

サンはライフルを傍らに立て掛け、紙巻煙草に火を点けた。その

ライフルの隣には拳銃が置いてある。クリスティーナがアーサーと凜と千代丸に突きつけた銃だ。あの冷たく光っていた銃口とクリスティーナの目は忘れられない。

丸太の上に置かれたその銃の下には所々赤黒く汚れた布が敷いてあった。ライフルを磨いていた布も同じように汚れている。きつと血を拭っていたのだらうと思った。

「あの・・・全員・・・？」

そうなのだらうとは思ったが、訊かずにはいられなかった。サンは煙草をくゆらせながら頷いた。

「ああ。白人三人と、御者の黒人」

予想していた事ではあったが、実際に耳にすると体が震えた。もうトビーもクリスティーナもアンディーも、アーサーまでもが殺されてしまっていたのだ。今頃あの四人の死体は灼熱の荒野に打ち捨てられ、ハゲタカにたかられているのかと想像すると胸の奥から悪いものが込み上げてきそうだ。

二十一（前書き）

こんにちは。読んでいただきありがとうございます。

注釈です。「アパツチ」と言うのは、彼らと敵対する別の部族の言葉で、「敵」という意味だそうです。そのため彼らは自分達の事を「アパツチ」とは呼ばないらしいのですが、分かりやすくするためにこのようにしました。

それと、「インディアン寄宿舎」ですが、実際に出来たのはこれよりも少し後の事だそうです。ですが、話の流れ上……。ご都合主義で申し訳ありません。。。

凜は自分の膝が震えていることに気付いた。

“トビーが言っていた事や、新聞に書いてあった事は本当なんだ・
。やっぱりこの人達は人を殺して物を盗ったりする野蛮な人種なん
だ。・・でも、それならどうして・・”

「どうして私達だけ・・？」

サンは射るような眼差しを凜に向けて答えた。

「お前が俺に助けを求めたんだろう？俺は最初、お前らを別のバン
ドのアパッチだと思った。白人に捕まっているんだと。馬車に繋が
れていたな。あいつらの奴隷だったのか？」

確かに彼らの顔立ち、白人よりも自分達と似ている。黒い髪も
黒い目も。凜も最初、彼らが日本の侍だと思ったのを思い出した。

「私と弟の千代丸は、あの人達の使用人だったんです。・・奴隷と
は違うと思います・・」

「フン、白人は使用人にあんな仕打ちをするのか？あの状態じゃ、
日が暮れるまでに二人とも死んでただろうな」

冷たく突き放すようなサンの言葉に、凜は俯いて涙が滲みそうにな
った目を隠した。

「最初は・・奥様はとても優しくかったです・・。でも・・」

「白人は皆そうだ。最初は友達みたいな顔をして近付いてくるが、
その後すぐに裏切りやがる。お前も騙されてたんだ」

凜は顔を挙げ、吐き捨てるように言ったサンを見た。その目には激
しい憎悪が浮かんでいる。サンは続けた。

「俺達は元々この山に住んでいたわけじゃない。ここよりももっと
南の平地に住んでたんだ。人もたくさんいた。ある日、米軍が休戦
協定を結びにやって来た。俺たちが度々衝突してたメキシコ軍から
国境を守るためだと言って。奴らは俺達の村の隣に砦を造って駐留
した。酒を持ってきたり、畑仕事を手伝ってくれたり。最初は上手

くやつてたさ。でも、俺達の畑のとうもろこしが収穫の時期を迎えた頃、あいつらは掌を返すように村を襲ってきた。戦士が狩りに出ている隙を狙って女と子供を殺したんだ。俺の家族も全員殺された」
凜は眉をひそめた。

「そんな・・・何があつたんですか・・・？」

「何も無い。あいつらは最初からそうするつもりだったんだ！あいつらが約束を守った事なんて一度も無い！」

サンは声をつい荒げてしまった事に気付き、口をつぐんで咳払いをした。

「・・・ここにいるのは、その時に逃げ出した生き残りだ」

サンは怒りを抑え込んだ低い声で呟いた。

凜にはどうも理解できない。軍の兵隊がそんな非人道的な事をするとはい。

「ほ・・・本当に・・・？」

凜はダニエルに顔を向けて訊いた。ダニエルは薄茶色の目を凜に向け、がっしりとした割れた顎を撫でながら頷いた。

「ああ、本当だろうな・・・というのも、俺は実はよそ者でね・・・」

「おい、そんな事を言うなよ」

サンがダニエルに咎めるような声で言った。それは大事な仲間から疎外されたような、少し傷付いたような声でもあった。ダニエルは柔らかな笑顔で頷いた。

「まあいいんだ・・・俺は見ての通り、白人の血が入ってる。もともとはここより西にある居留区で生まれて、アパッチの母親に十歳まで育てられた」

「お父さんが・・・白人なんですか？」

凜が尋ねると、ダニエルは口元を歪めて笑った。

「父親なんかじゃない。俺に父親はいないよ。白人の種から生まれただけだ。それが誰なのかも分からない。軍にいるクソ野郎だって事だけだ。母親はそいつに犯されたんだ」

凜はマトの事を思い出して俯いた。今ではそれがどういいう事かぐら

い分かっている。

「ある時、政府からの命令で場所を移れと言ってきた。その時に俺は白人との混血だつて事でインディアンの寄宿舎に入れられたんだ。奴らの言うところのきちんとした教育と、文明的な生活を身に付けるためだ。英語を叩き込まれ、改宗も迫られた」

凜と千代丸はキリスト教徒ではないが、トビーにもクリスティーナにも改宗を迫られた事はなかった。食事の前などに神に感謝の祈りを捧げる彼らを見て、その場の厳かな空気を乱さぬように一緒に頭を垂れてはいたが、神に祈った事など無い。信じてもない物を信じると迫られるのは辛い事だつたに違いない。凜はそう思った。

「あいつらの聖書も読んだよ」

ダニエルは苦笑いをしながら首を振った。

「別に聖書が正しいとか、正しくないって事じゃないんだ。その聖書によると、この世界の全てのもは神が創つたと書いてある。でも、あいつらがやってる事は何だ？口では神の偉業を讃えながら、その神とやらが創つたはずの山を切り崩し川を汚して、掘り出した金属で殺しまくる。一体そこに何の信仰がある？」

陽気そうだったダニエルの表情が固くなり、凜は緊張して身じろぎも出来ずにいた。

ダニエルは重ねて凜に尋ねた。

「あいつらが何故、食いもしないバッファローを殺すか知ってるか？」

その理由は凜も知っている。列車の中でトビーに教わった。

「それは・・・バッファローが鉄道の施設を壊すからだ・・・」

「フツ！」

サンが嘲るような笑い声を上げ、凜は言葉を切った。

「表向きはな・・・実際はインディアンを殺すためだよ」

「な・・・なぜ、それが・・・？」

サンの言葉に戸惑った凜にダニエルがその後を繋いだ。

「多くのインディアンはバッファローを糧にしてる。そのバッファ

ローを殺す事でインディアンを飢えさせて殺そうとしているんだ」

凜は列車の窓から見た夥しい臭気を放つバツファローの死体の数々を思い出した。殺すだけ殺して放置し、腐るがままにしてあったインディアンは野蛮だと聞いていたが、それが本当ならそんな行為は野蛮以上のものだろう。顔をしかめた凜を見てダニエルは肩をすくめて続けた。

「話は戻るが、その寄宿舎を出たところで行き着く先は炭鉱ぐらいだ。そこで死ぬまでこき使われるだけだし、ほとほと嫌気が差してきた頃、寄宿舎に俺の母親が乗り込んできた。居留区を抜け出してね。『息子を返せ』と・・・そこで母さんは・・・」

ダニエルは言葉を切り、唇を噛みしめた。

しばらくの後、ダニエルは震える声を絞り出した。

「母さんは・・・その場で門兵に陵辱されてなぶり殺しにされた。叫び声に気付いて駆けつけた俺に門兵は・・・切り取った母さんの乳房を投げつけて笑ったんだ。『そんなに母親が恋しいなら、思う存分しゃぶってる』って」

凜は瞬きも忘れ、戦慄を覚えながらダニエルの話を聞いていた。

サンはウイスキーのボトルを出して一口呷ると、そのボトルをダニエルに渡した。その時後ろの方から子供達の声に混じって千代丸の笑い声が聞こえてきた。三人が揃って声のした方を向く。千代丸は自分よりも小さい子供達と追いかけっこをして遊んでいた。

「あのボウズと同じくらいの歳の頃だ」

ダニエルはサンから受け取ったウイスキーをグイと飲み、息をつくと続けた。

「その夜、俺は闇に紛れて母さんを殺した門兵の喉をナイフで切り裂いて寄宿舎を逃げ出したんだ。その後は・・・まあ色々やったな・・・白人のならず者と家畜を盗んだり・・・。その時の仲間に裏切られて無一文で彷徨ってたところを、ここの酋長のレッドベアに拾われたんだ」

ダニエルは元の明るい表情を取り戻した。

この一見陽気そうな男の過去がどれほど壮絶だったかは、今の凛にはまだよく分らない。ただ、目の前で母親が殺された事。凜自身もあの時の悪夢のような出来事は忘れたくても忘れられないでいた。きっとダニエルもその時の悪夢にうなされ続けているだろうという事は容易に想像できた。

「それでお前はどこから来た？」

サンの問いに凜はハツとして顔を上げた。

「ロンドン・でも、元々は日本です」

「日本・・・」

サンとダニエルは互いの顔を見ながら肩をすくめた。凜は大事な事を思い出した。

「あの・・・私達、サンフランシスコって所に行かなくちゃいけないんです。そこなら日本へ行く船があるかも知れないんです！日本に帰りたいの！」

「無理だ」

サンの言葉に凜は愕然とした。

「どうして・・・？」

「サンフランシスコがどこにあるか知ってるのか？」

凜は俯いて首を振った。知っているのは町の名前だけで、場所まではよく分かっていない。サンは呆れたようにため息をついた。

「西の果てだ。途中には険しい渓谷がありモハーヴェ砂漠があつて、さらにシエラネヴァダ山脈を越えなくちゃいけない。お前とあの小僧で行ける訳がない」

凜はどうしても諦めきれないし、サンの冷たい言い方にも段々腹が立ってきた。上目遣いにサンを見ると、口を尖らせた。

「だ、だって・・・元はといえば、あなたが馬車を襲つたりするから・・・」

「先に発砲してきたのはあいつらだ」

そう言われると何も言い返せない。それでも何とかしてサンフランシスコまで行かなければいけない。自分だけの問題ではなく、千代丸の人生をも左右する事なのだ。

今までは周りの大人達に自分の行き先を決められていた。自分の

力の及ばぬ事だと、半ば諦めていたのだろう。でも、今は確かに大人とは言えないかも知れないが、かといって小さな子供でもない。そろそろ自分の道は自分で決める時期だ。その為の手段など選んではいられない。

目の前の男達は自分より身体も大きく、確かにさつきまでは恐怖を感じていた。しかしこの二人が戦士だというなら、自分だって武士の娘だ。怯む必要はない。

凜は意を決して顔を上げるとサンを見据えて口を開いた。

「私達をここへ連れて来たのはあなたです。あなたには責任がありますよね・・・？」

凜の強い決意とは裏腹に、その声は震えていた。さらにサンは凜のそれよりも強い眼力でその決意を打ち砕いた。

「俺にサンフランスコまで送って行けと言いたいのか？冗談じゃない！そこに行くまでには軍隊も賞金稼ぎもウロウロしてるんだ。奴らは皆アパッチを狙ってるんだぞ。俺は戦士だ。ここの部族を守るのが俺の使命だ。お前達と一緒に死ぬわけにはいかないんだよ」

ダニエルも困ったような顔をして頭を掻いている。冷たい口調でサンはさらに続けた。

「それにお前、自分達は運が良かったと思えないのか？さつきも言ったが、あのままだったら今頃はコヨーテの餌だ。ま、お前らみたいなやせつぽうち二人じゃ、コヨーテも満腹にはならないだろうがな」

凜は自分の不甲斐無さに情けなくなつた。こんな自分で千代丸を守る事が出来るのか、と。自然と溢れてきた涙を隠すために下を向いた。

「おいおい、サン、そんなにきつい言い方しなくてもいいだろう・・・。相手は女の子だぞ。リン、泣く事無いぞ、サンが悪いんだからな」

ダニエルがこの場を和ませようと身を乗り出して、おどけた口調で凜に呼びかけた。

凜が手の甲で乱暴に涙を拭いて顔を上げると、相変わらず自分を睨みつけているサンの目に会った。サンは凜から目を逸らすと、傍らの拳銃を手に取って弄びながら静かに口を開いた。

「それに・・・お前達をどうするかは、俺達が勝手に決められる事じゃない」

その後、ミアに誘われ、広場の焚き火の前で夕食を摂った。凜達が乗っていた幌馬車から略奪した食料の干し肉と、とうもろこしのパンを食べている時に酋長のレッドベアを目にした。

ここが一番偉い人物だと聞いていた凜は、きつと殿様のような人だろうと想像していた。しかしレッドベアは、ここ多くの人と同じように白髪混じりの長い黒髪を背中に垂らし、飾り気の無い鹿革の上下の服を着ていた。

レッドベアは大きな身体でゆっくりと歩きながら、深く皺が刻まれた顔を凜と千代丸に向けた。穏やかだが思慮深い眼差しでしばらく二人を眺めた後、黙ったまま自分のテントへ入って行った。

凜は、自分と千代丸の運命はあの老人が握っているのだと確信して落ち着かない気分になった。千代丸はそんな事は全く気にしていない様子で、小さな子供のためにパンを小さくちぎり、それを口に運んでやっていた。

ところが夕食の後、話し合いがもたれると聞き、男達はレッドベアのティッピーと呼ばれるテントへ集まり、そこへ千代丸も呼ばれた。

どうやら酋長が全てを独断で決めるというわけではないようだ。その証拠に凜はミアに手を引かれ、女達が集まる別のティッピーの中へ入った。

そこには若い女も歳をとった女も子供達も、あらゆる年代の女達が集まっていた。全員がティッピーに入ってきた凜を興味深げに眺め回している。

ミアはその輪の中に入っていく、凜に座るように促すとティッピーを出て行った。そこかしこで話し声があるが、何を喋っているのか凜には全く分からず不安は募るばかりだ。

凜は恐る恐る周りを見渡した。目が合うと微笑んでくれる女もいるが、不審そうに目を細める者もいる。自分がこの人々にどう思われているのか、これから自分と千代丸はどうなるのか。

“まさか・・殺されるなんてこともあり得るの・・？”

恐怖で体が震え始めた時、ティッピーの入り口が開いてミアが顔を出した。

ミアは身体の小さな老婆の手を引き、腰の曲がった背中に手をあてていた。それまで思い思いに喋っていた女達の声が一斉に止んだ。老婆はミアの手を借りて、凜の正面であり全員の顔が見渡せる場所に座った。前屈みになり顔を前に突き出して小さな身体をさらに縮こませたその姿は、しょぼくれた年寄りの猫が蹲っているように見えた。ほとんどが白髪の高い三つ編みの先端が毛布を敷いた地面に輪っかを作っている。

「私のお祖母ちゃんよ。シャーマンなの」

この部族の巫女である老婆の隣にチヨコンと座ったミアが凜に微笑んで言った。

鳥の羽や石が付いた重そうな首飾りを揺らしながら老婆が口を開き、凜には分からない言葉を呟いた。すると凜の後ろから一人の女がそれに応え、次々に一人ずつ発言していく。老婆は目を閉じて、その一人一人の声に頷いていた。

自分の分らないところで話が勝手に進んでいるような気がした。最後にミアが老婆に向かって何か喋ると、老婆は目を開いて真っ直ぐに凜を見た。

垂れ下がった脛から覗くその目に凜は身動きが出来なくなった。優しいとも恐ろしいとも言えないその眼差しに、凜は頭がクラクラして吸い込まれるような感覚を憶えた。

やがて老婆の瞳が揺れると、ゆっくり右手を凜へ伸ばした。

「手を・・・合わせて」

ミアに呼び掛けられ凜は戸惑いながら、ひび割れた皺皺の手に触れた。すると老婆は頷きながら何かを呟いた。

「リンの霊が見えるって・・・悲しみに満ちてるって・・・」
ミアが心配そうに表情を曇らせて老婆の言葉を凜に伝えた。

最初は乾いた冷たい手に驚いた凜だったが、やがて合わせた両の掌の間から湧き上がって来た熱に何とも言えない安らぎを感じた。この手にいつまでもすがっていたい、そんな気持ちになり、凜は目を閉じて俯くと老婆の手の甲に額を付けた。

「この娘は我々に災いをもたらすような存在ではない」

老婆が集まっている女達に告げると、安堵の溜息がそこかしこから聞こえた。

老婆は左手を凜の肩に回した。すると何故かは分からないが凜の目から涙がとめどなく溢れ出してきた。

家族が殺されて千代丸と二人になってしまっただから、強くあらねばと張り詰めていた自分を解きほぐし、隠していた涙を開放する事を許されたのだ。凜は涙を拭こうともせず流れるにまかせ、声を上げて泣きじゃくった。

凜と千代丸は彼らに受け入れられた。その夜から凜は、ミアとその祖母でシャーマンのウナと一緒にティッピーで眠る事になった。ミアの両親は既に亡くなっているらしい。肉親は祖母だけだ。ミアは凜と一緒に暮らせる事をとて喜んでくれた。

千代丸はサンのティッピーに入って行った。

凜と千代丸が彼らに受け入れられたといっても、それは客としてではない。次の日からは彼らの一員として、他の者達と同じように扱われた。

凜はミアがしている洗濯や繕い物を手伝った。千代丸はとうもろこしや豆が植えられた畑の仕事を手伝い、その合間には小さな子供達の遊び相手をするのが日課になっていた。

ここでの生活は凜が生まれ育った山間の里である故郷とそう変わらない。トビーはインディアンというのは文明が遅れていると言っていたが、凜にはそうは思えなかった。

確かに天蓋付きのふかふかしたベッドも、金の飾りが付いた豪華なティーポットもここにはない。それでも生きていくのに必要な物の全てがあった。

年下の者は年上の者を敬うが、そこには奴隷も使用人もなく、階級も無い。あるのは役割だ。

全ての人が皆の為にそれぞれの役割を担っている。子供や老人、病人をいたわる彼らには欺瞞も策略も必要ない。

そしてこの男達は女性をとて大切にしている。自分よりも力の弱い者をいたわる事が出来るというのは高い文明がある証拠だ。

元々山育ちの二人だからだろうか。凜も千代丸も、あつという間にここでの暮らしに馴染む事が出来た。

ある日、籠いっぱいにごんぐりを拾い、戻るために森の中を歩いている時だった。背中に矢筒を背負った男の後姿が見えた。男といつても、凧とそう変わらない年齢の少年だ。

十メートルも離れていない杉の木に向かって弓を射っている。しかし上手いかわらないようで、木の幹に刺さっている矢はなく、周りの地面に何本も落ちていただけだった。その少年が力任せに矢をグイと引いた。

「エイ！」

掛け声を掛けて放った矢に力は無く、少年の足元から一メートルほどの所にポトリと落ちてしまった。

「プツ！」

凧が思わず吹き出してしまうと、弾かれたように少年が振り返った。目元まで下がった前髪、太い眉毛に大きな目。その少年の顔は知っている。話をしたことはないが、千代丸と一緒に遊んでいた、サンやダニエルにまとわりついているのをしょっちゅう見掛けていた。少年は不機嫌そうに凧を睨んでいる。

「あ・・・ごめんなさい・・・」

凧は謝ったが、少年はプイとそっぽを向くと木の周りに落ちている矢を拾い集めた。

“英語・・・通じないのかな・・・？”

このまま立ち去るのも後々気まづくなるだろうし、どうしたものかと悩んでいる凧に、少年はツカツカと歩み寄った。そして黙ったまま手に持った弓と矢をつっけんどんに差し出した。出来るものならやってみる、と言いたげに。

凧は頷くと、どんぐりが入った籠を足元に置き弓と矢を受け取った。弓を握った瞬間、胸が高鳴った。父親にせがんで教えてもらった日々を思い出した。父親からは「筋が良い」と褒められたのだ。

“もう何年もやってないけど、上手く出来るかな？”

凧は矢の束を足元に置き、その中から一本取った。少年は傍らで相変わらず不機嫌な顔で腕を組み、凧の動作を見ている。

凜は肩幅に脚を開き、弦に矢羽を引つ掛けた。一度下に向けた弓矢を上げて構えると同時に矢を引いた。かなり張りの強い弦だが、こうすればそれほど力を入れずとも矢を引く事が出来る。

凜は狙いを定めて矢を射った。矢は空気を切り裂き、一直線に飛んだ。先端に付けられた尖った石が杉の木の側面の皮を抉って遠くへ飛んでいった。

「ああ！失敗した！」

凜が狙った幹の中心からは逸れてしまった。足元からもう一本矢を取って構える。さっきは久しぶりの事で気持ちが浮ついていた。凜は目を閉じて大きく息を吸い込んだ。すると父の言葉が聞こえてきた。

「凜、何も考えるな。心を無にするんだ。的だけに集中しろ。そうすれば、的が浮き上がって見えてくる」

森の木々のざわめきも、隣で自分を睨んでいる少年の事も凜の頭の中からは追い出された。凜は隣で囁く父の声と、的である杉の幹だけを意識していた。

凜はゆっくりと目を開けた。

「見えた」

まるで木の幹が手の届く所にあるように見える。凜は静かに矢を放った。矢に付けられた茶色い鳥の羽がフワツと凜の頬を撫でた。

「タンツ！」

狙ったとおりの場所に矢が突き刺さると、凜は会心の笑みで少年に振り向いた。少年は口をあんぐりと開け目を見開いている。

幹に突き刺さった矢を抜き、木の向こうに落ちたもう一本を拾い、弾む足取りで少年の元に戻った。

「ね、今の見たでしょう？あなた腕に力が入り過ぎてるのよ」

すっかり気を良くした凜が少年に弓と矢を差し出しながらアドバイスをした。しかし少年はさらに不機嫌そうな顔で弓矢と凜を交互に見ている。

「カイー！カイー！」

凜の右手にある斜面の上から声がした。少年がサツと声のした方を見上げた。斜面の上で千代丸が少年に向かって手招きをしている。

「あれ？姉上、そこにいたの？」

凜が千代丸に向かって頷くのを見た少年は、凜が差し出した弓矢をひったくるように取ると斜面を駆け上がった。行った。

「何よ、あの子。感じ悪い・・・」

凜はどんぐりの籠を持ち上げながら呟いた。カイの男としてのプライドを傷つけてしまった事には気付いていなかった。

その日から凜は時間を見付けては弓矢の練習をするようになった。ミアや千代丸や子供達が見学に来て、凜が矢を的に当てる度に歓声を上げる。カイは少し離れた所から食い入るように見ている。「すごい！すごいわ、リン！」

ミアが手を叩いて歓声を上げる中、凜は照れながら矢を拾い集めている。

凜の腕前を褒め称える輪の外で、木にもたれかかっていたカイはため息をついた。

「へえ〜たいしたもんだなあ」

不意にダニエルの声がしてカイは驚いて振り返った。ダニエルの隣ではサンが腕を組んで頷いている。

「な、何だよ！気配もなく来るなよ！ビックリするじゃないか！」

「気付かないお前が悪い。そんなんじゃ、敵にすぐやられちまうぞ」カイの抗議にサンはぶっきらぼうに応えた。カイは口をへの字にして怒りをグツとこらえる。ダニエルが笑いながらカイの肩を叩いた。

「お前も戦士になりたいなら、ちゃんと練習しないとな」

「・・・だったら、俺に矢の特訓してくれよ！」

カイが口を尖らせて訴えたが、サンとダニエルは互いの顔を見合わせて肩をすくめた。

「だったらリンに教えてもらえよ」

サンが追い討ちを掛けると、カイは顔を真っ赤にして怒り出した。

「何だよ！サンのケチ！バカ！」

捨て台詞を吐くと走り去った。

「あゝあ、可哀想に……。カイはお前に憧れてるんだぞ」
ダニエルにつつかれたサンは肩をすくめた。

凜が弓と矢が入った矢筒を持って歩いてきた。

「どこで習った？」

凜の隣を歩きながらサンが尋ねた。『怖い』という印象のあるサンに話し掛けられ、凜は少し緊張しながら答えた。

「あの・・・父に・・・」

「僕達の父上は侍なんだよ！」

サンのすぐ後ろで千代丸が自慢げに言った。サンが首を傾げた。

「サムライ・・・？」

「侍っていうのは、戦が起こると戦いに行くんだ。普段は心身を鍛えて剣術なんかの腕を磨いて戦いに備えるんだよ」

サンは合点がいったように頷いた。

「ふう〜ん・・・戦士か・・・」

「本当はね、今時、戦で弓矢なんてほとんど使われてないの。だけど、精神を集中させるのに良いからって、父はよく練習していて、私も教えてもらったの」

おぼろげな記憶の中の父の顔を思い出そうとした。

最近では意識してそうしななければ思い出すことが出来なくなっていた。言われた言葉や声は、今でも鮮明に耳に残ってはいるのだが、。

「動物的を射った事はあるか？動物とか」

サンの問いに凜は立ち止まって首を振った。

「ないわ！さっきも言ったけど、これは心身を鍛えるための物よ。殺生のためじゃないわ！」

サンは腕を組んで空を仰ぐと、しばらく考えてから凜に顔を向けた。

「明日、朝食が終わったら、さっきの場所で待ってる。弓矢を忘れるなよ」

有無を言わせないその口調に凜は慌てて頷いた。

次の日の朝、言われた場所で待っていると、手に麻袋を持ったサンがやって来た。黙って凜の横を通り過ぎ、いつものように杉の木の手前に立った。

「あ、あの・・・？」

「お前はそこにいる」

戸惑っている凜の足元を指差してサンは言うと、手に持った麻袋を凜に見せた。

「これをよく見る」

そう言うとサンは麻袋を放った。凜の十メートルほど先の視界を、綺麗に弧を描いた麻袋が通り過ぎる。土が詰められた麻袋はドサツという音を立てて地面に落ちた。凜は首を巡らせて、地面に落ちた麻袋を見つめてからサンを見た。

「・・・見ましたけど？」

自分の真意が伝わらなかつた事で、サンはあからさまに脱力したように肩を落とすため息をついた。

「これが的だ。地面に落ちる前に射るんだ」

凜は目を瞬いた。

「そんな難しい事・・・無理です！やった事無いもの！」

「無理かどうかは、やってから決める。ここにある麻袋は五つだ。

今日のところは掠るだけでもいい、全部に当てる事が出来たら終わりにする」

凜は絶望的な気分になった。日が暮れる前に終わるだろうか・・・。

「ほら！矢を構えろ！行くぞ！」

サンがまた麻袋を投げた。凜は矢を構えたまま麻袋の軌道を追ったが、放つタイミングを失った。

“ やっぱ無理だ・・・ ”

そんな事を思う間もなく次の麻袋が飛んだ。凜は麻袋目掛けて矢を

放ったが、大きく外れてしまった。

「遅い！的は動いてるんだぞ！動きを予測しろ！」

“そ・・そんな事を言われたって・・”

動く物を射る時、矢をその的に合わせても当たる訳が無い。的がどの軌道を通るか、そして矢を放ってからの到達するまでの時間を瞬時に見極めなければいけない。理屈は分かっても、実践できるかどうかは別の話だ。

サンが麻袋を投げると、凜は当てずっぽうに矢を放った。当たるはずもないと凜には思えたが、矢の先端の石は麻袋の側面を擦り、中の土をばら撒かせた。

凜は目を見開いて破れ落ちた麻袋を見た後、サンに得意げな顔を向けた。しかしサンは表情を全く変えずに凜をじろつと見た。

「まぐれだな。ちゃんと理解してるわけじゃない。真剣にやれ」
サンに見抜かれていた事に凜はガツクリと肩を落とした。

その後、何度も同じことを繰り返した。やはりさっきのはまぐれだった。全く矢は当たらない。陽はすでに頭の真上を通り越していた。

凜は落ちた矢を拾い集めながら痛くなってきた腕を振った。土の詰まった麻袋を投げ続けるサンも疲れているのではないかと目をやったが、全くそんな様子はない。強靱な戦士だ。

凜は絶望的な気分で空を仰いだ。父親がここにいれば、何と云うだろう。

「もう諦めなさい」

そう言ってくれるだろうか・・。そんなはずはない。

「最後まで諦めるな。お前は俺の娘だ。きっとやり遂げられる。的に集中するんだ。心を無にしろ」

そう言うに決まっている。

凜は目を閉じた。

“そつだ・・。的に集中して・・他の事は一切頭の中から追い出そう。放った矢が的と出会う瞬間を心に思い描くんだ・・”

凜は目を開いて頷いた。その顔つきが変わった事にサンも気付いていた。

投げられた麻袋を見つめた凜は、それが上昇し頂点に達した時、描くであろう放物線が見えた気がした。凜は矢を放った。到達するのに掛かる時間は、今までの経験で分かっていた。要は落ち着くこと、そして集中する事。

バスツという音と共に、矢が刺さった麻袋が後方へ吹っ飛んだ。この瞬間、凜の今までの疲れも一緒に吹き飛んだような気がした。凜は満面の笑顔をサンに向けた。

「思った通りだ・・・お前なら出来ると思ってた。気を抜くなよ、まだ三つ残ってるからな」

冷静なサンに言われると、凜はガツクリしてため息をついた。でも、もう絶望感はなかった。やり方が分かったのだ。あと三つ、当てる自信はあった。

それから程なくして二つの麻袋に矢を当てた。あと一つという時、サンは突然矢を構えている凜に向かって麻袋を投げた。

「えっ？何？」

慌てた凜の肩に麻袋が当たり、バランスを崩してそのまま尻餅をういてしまった。

「何するの！」

堪らずに凜が抗議すると、サンは呆れたような顔で言い返した。

「お前なあ・・・何のためにやってると思ってるんだ？敵はお前に向かって来るかも知れないんだぞ。矢を向けるなり避けるなり、とにかくすぐに反応しろ！」

凜は服に付いた土を払い矢を構えなおした。サンが麻袋を放り投げた瞬間、その手元の上空目掛けて矢を放った。矢は勢い良く麻袋に突き刺さり、中に入っていた土の塊がサンの顔目掛けて飛んでいく。サンは手の甲で飛んで来た土を払いのけた。その反射神経に凜は驚いたが、それで全ての土が払えたわけではない。残った土がサンの顔にまともに掛かった。

「ぶはっ！」

手で顔に付いた土を払うサンを凜はニヤニヤしながら見ていた。こ
うなる事は分かっていてわざとやったのだ。

「やってくれたな・・・」

サンが手の甲で顔を擦りながら凜を睨んだ。凜は肩をヒョイツとす
くめた。

「油断したら、いけないんじゃないですか？」

「ふん！・・・たいした奴だよ」

サンは呆れた声で言い、二人で破けた麻袋を拾って中の土を落とす
た。

「サンー！リン！」

二人を呼ぶ声がして目をやると、ミアが手を振りながら傾斜を駆け
下りてきた。

「食事！一緒に・・・カイモ・・・」

ミアに誘われリンが頷くと、少し離れた所にいたカイモも歩み寄つて
きた。ちよつと前から矢の練習を見ていた事は凜もサンも気付いて
いた。

「サン、顔をどうしたの？」

ミアの後ろからゆっくり傾斜を降りてきたのはターニヤだ。ターニ
ヤは酋長であるレッドベアの娘で、十九歳だと言っていた。凜と五
つしか違わないのに、ターニヤはとても大人っぽく見えた。背が高
くほっそりとしていて、優しくて綺麗な憧れのお姉さんといったと
ころだ。

「リンにやられた」

皆で傾斜を上りながらサンが答えると、ターニヤは驚きに目を見開
いて凜を見た。

「ここの最強の戦士の顔に土を付けるなんて、すごい女戦士になり
そうね」

「えっ？女戦士・・・？」

凜は驚いてサンを見た。

“サンは私に敵と戦わせるつもりなの・・・？”

サンは凜をチラツツと見た後、ターニヤに顔を向けた。

「別に戦士にしようと思ってるわけじゃない。リンが望めば別だけど・・・」

凜はホツとした。女の自分が戦いに行くなんて考えた事もない。

凜とミアのティピーの前に来ると、サンは破れた麻袋を凜に渡した。

「繕っておけ。明日またやるから。それから、カイも来い」

後ろで俯きながら歩いてきたカイが顔を上げた。

「本当に？俺もいいの？」

興奮して尋ねたカイにサンが頷いた。

「ああ、ついでだ。でも、今日リンがやってた事を見ただろう。手加減はしないからな」

「もちろん！へっちゃらだよ！やったー！チヨ！チヨ！聞いてくれよー！」

うんざりしている凜の横でカイは嬉しそうに叫び、食事の支度を手伝っている千代丸の元へ駆けて行った。

次の日もまたその次の日も弓矢の練習は続いた。サンが狩などに
出掛けている時は、凜は弓矢の練習を早めに切り上げてミアと一緒に
脚の不自由なウナの世話をしたり食事の仕度や繕い物などをして
いた。サンはその事を知っているが、それについて凜を咎める事は
なかった。

「弓矢の練習は少しの時間でも、とにかく毎日続ける事が大事な
んだ」

そう言ったただけだった。

カイはといえば、熱心に戦士になるための訓練を積んでいた。弓
矢の練習のほかに、千代丸に木の枝を自分目掛けて投げさせ、それ
を巧みに避ける事で俊敏さを養うというサンに教えてもらった事を

真面目にやっていた。

時には長い距離を走らされる事もあった。半日ずっと山の中を走り続けなければいけない。それだけの体力が無ければ敵から逃げる事が出来ないからだ。

「捕まれば、あとは殺されるだけだ」

走るのが好きではない凜も、真剣な顔でサンにそう言われると、やらざるを得なかった。最初のうちは脚が痛くなり、夜寝るのも辛かったが、慣れてくると自分でも体力が付いてきたのを自覚するほどになった。

サンは特にカイには厳しかった。口に水を含ませて半日走らせるのだが、口の中の水が残っていなければならぬ。最初のうちカイには全くそれが出来なかった。

「もう諦める」

サンに冷たく言われても、何度も何度もカイは食らい付いていき、決して諦めようとはしなかった。

たまにカイに付き合っつて千代丸と一緒に走る事もあった。この時に千代丸はとも足が速い事に気付いた。そして同じ距離を走りながらも、息が上がっているカイを明るく励ましているその姿は皆の度肝を抜いた。

ある日の朝、食事をしてきた凧の元にダニエルがやって来た。

「リン、この後一緒に出掛けよう。食事が終わったら仕度をしてくれ」

そう言つてダニエルは凧の足元に革のトランクを置いた。

凧は目を瞬いて尋ねた。

「あの・・出掛けるつて・・どこへ？」

「街へ行くんだ。だからドレスアップして来いよ」

ダニエルは軽くウイंकをすると自分のティピーに戻つて行つた。食事が終わつた凧はティピーの中でトランクを開けた。そのトランクにも中に入っているドレスにも見覚えがある。クリスティーナの物だ。躊躇いもあつたが気にしないように務めた。

ミアとターニヤに手伝つてもらいながらドレスを着ると、肩の下まである髪を柔らかく結び上げた。クリスティーナの化粧品でターニヤに眉を整えてもらい、口紅を塗る。日焼けした鼻の頭と額にだけ白粉をはたいた凧はクリスティーナの手鏡を見て驚いた。自分がまるで別人のようだった。

「リン、すごく・・きれい」

ミアとターニヤが互いに顔を見合わせて微笑んだ。

ティピーの外に出た凧を上質なツイードの三つ揃えを着たダニエルが迎えた。ダニエルが着ている服もやはりトビーの物だった。長い髪をまとめ、黒いシルクハットを目深に被つたダニエルはどこから見ても白人だ。

「これは、これは・・」

ティピーから出てきた凧を見てダニエルが大げさに手を開いた。ダニエルの隣にいるサンは凧をチラッと見て「クックッ」と笑つていた。

サンのその反応にムスツとした凧の肩を抱いてダニエルがおどけ

た。

「これなら英国紳士とその若き中国人妻に見えるだろう？おいおい、サン。あんまり笑うな」

「ああ、悪い悪い」

そう言いながらも笑いの止まらないサンは、赤い革の鞘に入ったナイフを凜に手渡した。

「護身用だ。持ってけ」

凜には丈の長いクリステイーナのドレスは、ウエストに巻いた紐で折り返して調節してある。凜はそのナイフを紐に挟み、折り返したドレスの生地で隠した。

「じゃ、行こうか、マドモアゼル」

馬を引いたダニエルが気取って凜に右肘を差し出した。凜は笑いながらダニエルの肘に左手を絡めた。

「街へ行って何をするの？」

山の中の獣道を歩きながら、凜は隣で馬を引いているダニエルに尋ねた。

「買い物さ。あと偵察もね」

「偵察？」

キョトンとした顔で訊く凜にダニエルは笑顔で頷いた。

「ああ。もしこの辺りを軍隊がうるついでたら、あそこのキャンプは引き払わなきゃならないからな」

その陽気な声音からは危機感を感じられなかったが、初めてサンとダニエルと会った時の話を思い出した。彼らは軍の急襲を受けて逃げ出してきたのだ。

“ 彼らは追われる身であって、この山の中に身を潜めているんだ・・ ”

弓矢の練習などは厳しいが、山の暮らしは穏やかで平和に思える。しかしその平和はとても脆い物の上にあるのだ。

麓に着くとダニエルが手綱を握り、凜はその後ろに乗った。ダニ

エルは岩がちの荒野を街に向かってジグザグに回りこみながら馬を走らせる。人目に付かない場所を選んでいるのだ。

三時間ほどで目指す街に到着した。建物が立ち並ぶ埃っぽい通りには、たくさんの人々の往来があつた。男の人は皆腰に大きな銃を下げている。この街にいるのはほとんどがアイルランドからの入植者だとダニエルが教えてくれた。

「俺から離れるなよ。危険な街だ」

穏やかな表情を崩さずにダニエルが囁くと、凜は緊張して頷いた。俯き加減で辺りを見渡したが、自分達に気を留めている者はいないように感じた。

ダニエルはまず銃砲店に入り弾薬を買った。店の外に出ると、凜はダニエルが持っているお金の事が気になって訊いてみた。

「ねえ、そのお金って・・・もしかして・・・」

ダニエルは凜の顔をしばらく窺つた後に頷いた。

「そうだ。君の元ご主人様が、結構な大金を残してくれたんでね・・・」

それを聞いた凜は暗い顔で俯いた。

やはりロバートソン一家とアーサーが殺されたという事実は変わらない。今では自分も彼らの一員として一緒に暮らしているが、どうしても心の中ではわだかまりが消えていないのだ。

“この人達はやっぱり盗賊なのだろうか・・・”

凜が顔を上げると、ダニエルは腕を組んで歩きながら続けた。

「まあ、こんな世の中じゃなければ、俺達にとつて金なんか何の価値も無い。でも、こういう状況じゃそうもいかない。こういう物が必要になってくるんだ」

ダニエルは買ったばかりの弾薬の箱を凜に見せた。

その時、突然男達の怒声と銃声が聞こえた。前方の道を片手に拳銃、片手で頭の上の山高帽を押さえた一人の男が横切ろうとして飛び出した。そしてもう一発銃声が響き、その男が顔から地面に倒れると歓声が響いた。

撃ち合いと殺し合いが日常のこの国。失われた命の何と軽い物か。凜は震える手でダニエルのジャケットの袖を握り締めた。ダニエルは空いている方の手で自分の袖を握っている凜の拳を優しく叩くと、男が倒れている道の手前の角を曲がった。盗賊だろうが何だろうが、今凜が頼りに出来るのはこの混血のインディアンだけなのだ。

それからミアに頼まれていた布と糸を買い、ダニエルに連れられてサルーンに入った。

「ちよつと息抜きだ。たまにはこういうのもいいだろう？」

ダニエルは凜にウイंकをすると、新聞を読みながらウイスキーを飲み始めた。凜はダニエルの向かいに座り、冷たいレモネードを飲んだ。

新聞にはコロラド州で起きたインディアンと軍の争いの記事が出ている。

『野蛮人を撃破！ 大勝利！』

軍がインディアンを何百人退治したのだの、この勝利は我々文明社会の繁栄の礎となるのだという事が、勝利に酔いしれ、熱に浮かされたような言葉で書き連ねてある。

“私と千代丸も、そのうち新聞に書かれているような争いに巻き込まれる事になるのだろうか・・・”

不安が頭の中に渦巻くが、ダニエルはいつもの陽気な笑顔を浮かべ、他愛も無い話で凜を笑わせた。

「そろそろ戻るか」

ダニエルが言い、二人は席を立って店を出た。そのすぐ後、同じ店で酒を飲んでいた二人組みの男が互いに顔を見合わせると、同時に席を立った。

ダニエルが手綱を握る馬は、来た時とは違う方角に走り出した。街を抜けると、灌木の茂みの間に建つ崩れかけた小屋の前を通る。

その先はサボテンと入り組んだ岩だけの荒涼とした景色が広がる。

「ねえ・・・ダニエル、方向が間違ってるない？」

不安になつて尋ねた凜にダニエルはチラッと振り返つて笑顔を見せた。

「いいんだよ。ちよつと遠回りして帰ろう」

「え・・ええ」

凜は腑に落ちない顔で頷いた。

ダニエルは岩が入り組んだ狭い場所をスピードを上げて駆け抜けて行く。凜は振り落とされないようにダニエルにしがみ付いた。荒っぽい乗馬を楽しんでいるのかと凜は思った。

“私を怖がらせて楽しんでるの・・？”

凜がダニエルに文句を言おうとした時、大きな岩をぐるっと回り込んで馬が止まつた。

「ちよつとここで待つてくれ」

「えっ？ちよつと、どこに行くの？」

馬を降りたダニエルに凜は慌てて訊いた。

「あんな、もう・・漏れそうなんだよ。まさかレディーの前では出れないだろ？」

「ああ、そう・・」

凜が納得して頷き、顔を上げた時には既にダニエルの姿は消えていた。

ダニエルは凜からは見えない岩の影に身を潜めた。自分達を通つてきた方角から二頭の馬がやって来るのが目に入った。さっきの酒場にいた二人組だ。その店を出た時からずっとこの二人が後を尾けて来ていたのは知っている。

二人はダニエルが潜んでいる岩のすぐ傍を通り過ぎて馬を止め、キョロキョロと辺りを見回している。

ダニエルはゆっくり岩から出ると、手前にいる馬の背にすばやく飛び乗った。馬が揺れ、騎乗の男が驚いて声を上げる間もなくダニエルは背後から手を回し、男の口を塞いだ。同時にブーツに隠していたナイフを抜き、その男の喉を切り裂いた。

二人組の男は街の酒場から尾けていた男女が突然姿を消した事に戸惑い、辺りを見回していた。

「ちくしょう！どこに行きやがった？」

先頭の男は悪態をつき、岩の陰を覗き込んだ。そこにもいない。すると後ろからドサツという音が聞こえて振り返った。後ろには相棒の馬がいるが、その背中に相棒の姿は無かった。

「おい・・・」

呼び掛けようとした時、突然馬が揺れ同時に背後から伸びてきた手に口を塞がれた。

「ん、ん・・・」

慌てふためき、もがく男の耳元に低い声が聞こえた。

「お前らみたいな飲んだくれの賞金稼ぎに、俺が捕まるとでも思ってるのか？甘いんだよ」

必死で後ろを振り返ろうとした男の喉に、生暖かく濡れた金属が押し当てられる感触がした。

凜が馬の首を撫でながら待っていると、ダニエルが戻ってきた。

驚いた事に馬を二頭引き連れている。

「いやーラッキーだったなあ。野生馬が二頭も手に入ったよ」

「野生馬？」

凜は眉を潜めた。二頭とも背中に鞍があり、しかも荷物まで載っている。鐙にはライフルまで刺さっているのだ。

「この馬・・・絶対持ち主がいるはずよ」

凜の言葉にダニエルは悪戯っ子のような笑顔を向けた。

「でも誰もいないぜ？」

「で・・・でも・・・」

辺りを見回しても確かに人の気配は無い。乗り捨てられた馬なのだろうか。凜が首を傾げると、ダニエルはそのうちの二頭に跨った。

「まあまあ、気にすんなよ。もう帰ろう、着く頃には暗くなっちゃっせ」

「う・うん」

動き出したダニエルに付いて凜も馬を歩かせた。ダニエルに引かれていた馬の誰も乗っていない鞍をチラッと見た。焦げ茶色の鞍は何かで濡れているような気がした。

「サンに良い土産ができたなあ。ウイスキーがあるよ」

ボトルに口を付け一口呷ったダニエルの手が汚れている事に気付いた凜だったが、それが血だと言う事は分からなかった。

「リン、これ・履いて・」

ミアが差し出したのは鹿の革で出来たモカシンだった。凜が元々履いていたブーツはボロボロになっていて、それを見かねたミアが作ってくれたのだ。

「ありがとうミア！」

感激した凜がお礼を言った。はにかんだように笑うミアはとても可愛い。しかも茶色の柔らかい鳥の羽根が縫い付けてある。ミアは自分のモカシンのくるぶしの所を指差した。同じような鳥の羽根が付いている。

「お揃いね。ミアはとっても上手だわ」

「うふふ・お婆ちゃんがね・教えてくれるの・。ね、お婆ちゃん」

この間ダニエルと一緒に買った町で買ってきた糸を使い、服に刺繍を施していたウナが微笑んだ。細めた目と広がった口が、皺だらけのその顔にさらに深い溝を作った。

凜は少しではあるが、彼らの言葉が分かるようになってきた。今度、自分にも教えて欲しいと頼むと、ウナは微笑んだまま頷いてくれた。

鹿の革で出来たモカシンはゆったりとしてとても柔らかいが、甲の部分と底には厚くて丈夫な革が縫い合わせてあった。袋状のブーツは最初、中で足が遊んでしまう感じだったが、ミアに教えてもらった通りに水に濡らしてそこらじゅうを歩き回った。そうすることで段々と革が足の形に馴染んでくるのだという。

そのモカシンが足にしっくりと馴染んだ頃、凜は戦士達と共に森の中へ分け入った。背中に弓と矢筒を背負い、水囊とわずかな食料を持って。

獣道を進み、キャンプ地からは反対側の山の中を流れる小川に近付いた。ダニエルとカイはそのまま下流の方へ向かい、他の戦士達は上流へと上つていった。凜はサンと川岸から五メートル程の所にあるメスキートの下の茂みに身を潜めた。草の上に毛布を敷き並んで腹這いになると、底の浅い小川の水が岩に当たってチャプチャプという澄んだ音と鳥の鳴き声が聞こえる。

サンは息を潜めたまま小川に目を凝らしている。全く動かないサンを眺めながら凜が口を開いた。

「あ・・・」

「しっ！」

サンに一喝され凜は声を潜めた。

「あの、いつまでこうしてなくちゃいけないの？」

「さあな。次に瞬きするまでの間か、三日か四日か・・・俺に分かるのは、何かを獲って帰らなきゃ皆が飢え死にするって事だけだ」

凜には顔を向けず小川を見たまま言い放った。サンのその言葉に凜は気が遠くなつて俯いた。

それから長い間、二人は押し黙ったまま小川を見張り続けた。降り注ぐ柔らかな木漏れ日は暖かく、時折吹き抜ける風は山の冷気を孕んでとても爽やかだった。草木の揺れる音と小川の水が流れる音が眠気を誘う。しかも朝早くから山を半周してきたのだ。

「ふあっ・・・」

思わず欠伸が出るとサンに睨まれ、凜は慌てて手で口を塞いだ。

「気を抜くな」

「・・・はい」

サンに怒られた凜は素直に謝った。しかし凜は、また小川に目を向けたサンを睨んで不満げに唇を尖らせた。

“しょうがないじゃない・・・こんな場所で横になつてて、「寝るな」って言う方が無茶よ。それに、何で女の私を狩になんか連れ出したの？私は戦士になるなんて一言も言っていないのに・・・”
心の中で不満を並べ立て、その怒りで何とか眠気を追い払おうとし

た。口をへの字に結んで荒く息をついた時、またサンが凧を見た。

「気を鎮める。そんなんじや何も寄って来ないぞ」

凧は脱力して俯いた。もはやどうしていいのか分からない。諦めて仕方なく小川に目を向けた。

そうしていると、やはり睡魔が襲ってくる。目の前の草がボンヤリと霞んできて、勝手に瞼が下りてくる。

“起きてなきゃ・・起きてなきゃ・・”

そう思えば思うほど意識が遠のいていく。

サンは腹這いのまま、不意に重くなつた自分の右肘を見た。それを枕にして凧はぐつすり眠っていたのだ。サンは呆れて溜息をつくと、小川に顔を戻した。

「ク・・ツシヨン！」

「おい！」

凧は寒さに震えて目を覚ました。何かすごく楽しい夢を見ていたような気がするのだが。

「あ・・あれ？」

目の前には呆れた顔のサンがいた。さつきまで頭上の高い所で輝いていた太陽は、だいぶ西の方へ傾いていた。

「あの・・私、寝てました？」

サンは凧をジロツと睨んで頷いた。しかもサンの肘の所が濡れている。どうやらよだれまで垂らしていたようだ。

「ご・・ごめんなさい・・」

凧は慌てて自分の服の袖でよだれの痕を拭いた。と、突然サンが左手で凧を制した。

小川の対岸の森がざわつき始めたのだ。息を潜めていると、木々の陰から十頭ほどの鹿の群れが出てきた。サンはまだ動こうとしない。鹿は用心深く辺りを窺っている。

やがて鹿は警戒を解いたように、緩やかな流れの小川の水に口を付け始めた。木の葉の間から差し込むオレンジ色の日差しを浴びた

その姿は、まるでおとぎ話の一場面のようで神々しくさえもある。ロンドンにいた頃、貪るように読んだ詩集を思い出した。

しかし、その中に群れから少し離れて水を飲んでいる一頭がいた。群れの真ん中にいる身体も角も立派な牡と比べると、身体も小さい角も貧弱だった。同じ群れの他の鹿達の様子を窺い、遠慮しながら水を飲んでいるようなその姿に凜は哀れを感じた。

「リン、アイツをやれ」

隣のサンが囁き、凜が見ている貧弱な牡鹿を指差した。

「えっ？私が射るの？」

「当たり前だ。何のために連れて来たと思ってるんだ？」

凜は戸惑いながらサンと牡鹿を交互に見た。あの哀れな牡鹿を殺すつもりなのだ。

「で、でも・・・あの子、何だか可哀想・・・」

「アイツは牡同士の争いに負けたんだ。雌と強い牡が残れば、この森に住む鹿の種族自体が強くなる。そうすれば、この先もこの森には命が溢れるんだ。どの道、アイツに子孫は残せない」

道理は凜にも分かる。でも弱い者いじめのようで気が進まない。凜はサンの傍らにあるライフルをチラツと見た。

「そ、それならサンがやってよ。ライフル持つてるじゃない！」

「これは万が一の時にしか使わない。鹿は臆病で警戒心が強いんだ。こんなところで発砲してみる、あいつらは当分ここには近寄らなくなる。ここはあいつらの貴重な水場なんだ。そんな事は出来ない」

凜は渋々矢筒から一本抜いた。矢を指で挟み、弦と一緒に引く。バツファローの腱で出来た弦はキリキリと音を立てた。

牡鹿が頭をもたげ、真つ黒な瞳で頭上を見上げた。少し首を傾げるその姿が何とも愛らしい。凜はギョツと目を瞑った。

「嫌だ・・・可哀想・・・」

呟いた凜に顔を寄せ、牡鹿を見つめたまま冷徹な声でサンが囁いた。「そう思うなら一発で仕留めろ。苦しませるな。首を狙うんだ。やれ！」

凜は矢から指を離した。矢はヒュンと空を切る音を発し、牡鹿の首に突き刺さった。牡鹿は弾かれたように頭を仰け反らせ、前脚を跳ね上げるとそのまま倒れた。

「ああ・・・」

凜が思わず悲痛な声を上げると、他の鹿がビクツと頭を上げ、踵を返し飛び跳ねながら森の中へ消えていった。同時に立ち上がったサンは走り出し、水飛沫をあげながら浅い小川を横切った。

全身の震えが止まらない凜がヨロヨロと近付いて行くと、倒れた牡鹿の脚は痙攣し腹は大きく上下に動いていた。

「ま・・・まだ生きてる・・・」

凜は怖くなつて後退したが、サンは牡鹿の首を脇に抱えると一気に力を込めて締め上げた。目を逸らした凜の耳にバキツと鈍い音が聞こえ、ヘナヘナとその場に座り込んだ。

「よくやった」

サンからの労いの言葉が空虚に聞こえた。自分のしてしまった事が信じられない。

「どうして・・・？どうして・・・私にこんな事させるの？」

口からついて出た言葉も、溢れる涙も、心に押し寄せる罪悪感も止める事が出来ない。

「お前・・・腹は減らないのか？」

サンの質問に凜は涙を拭く事も出来ずに顔を上げた。

半開きの口から一筋の血を流し、今は何も見えていない死んだ牡鹿の真つ黒な瞳が凜を捉えた。サンは顔色一つ変えずに、その牡鹿の脚をロープで縛っている。

「い、今・・・何て・・・？」

「お前は何も食わずに生きていけるのか？」

「・・・」

何も答えられずにいる凜をせせら笑うようにサンは続けた。

「まあ、ロンドンじゃ切つてある肉が店に並んでるんだろっからな」
凜は俯いた。確かにそうだ。店に並んでいる物も、かつてロバート
ソン邸のテーブルに並んでいた皿に綺麗に盛り付けられた肉料理も、
元は全て生きていた動物なのだ。

多くの人の目には触れなくとも、誰かが手を下している。誰かが
やらなくちゃいけない事。美味しい食事は欲しいけれど、手を下す
のは可哀想だから嫌だというのはここでは身勝手に過ぎない。

あの頃のきらびやかな生活の中で、そんな当たり前の事も忘れて
しまっていたのかも知れない。

それでも目の前に横たわる自分が殺してしまった牡鹿を見ている
と、気持ちが悪くすぐに吹っ切れるわけでもなかった。しゃくり上げる
事も、涙が流れるのも自分では止められない。

サンは手を止めると、座り込んでいる凧の前にしゃがみ込んだ。
「コイツの肉だけじゃない。毛皮は寒さから身を守ってくれるし、
角も骨も俺達には必要なんだ。・・あそこの子供達を飢えさせたく
はないだろう?」

凧がグシャグシャに濡れた顔を上げると、サンは両の掌でグイツと
その顔を拭いた。

「生きるってというのは、こういう事だ」

凧はハツとした。ずっと前、父親にも同じ事を言われたのだ。あの
時は岩魚だった。でも死んだ岩魚がかわいそうだと言って泣いたの
は千代丸だ。凧はそんな風には思わなかった。

“それは何故なんだろう・・”

岩魚の命が鹿のそれよりも軽いという事はない。命は命だ。そんな
事は分かっている。・・筈だった。

それでも無意識のうちに、命に優劣を付けていたのだ。凧は頭を
うなだれた。父の言った事を、本当はきちんと理解してはいなかつ
た。

「顔を上げる」

サンに言われて凧はその通りにした。ジツと凧の顔を見たサンは、
それから自分の汚れた掌を見て気まずそうな顔をした。

「悪い・・顔を汚しちまった。美人が台無しだな・・」

サンは苦笑いしながら凧に掌を見せた。泥で汚れた掌。でもそれは
とても大きく、自分の父親の手もこんなに大きかったのかと凧はふ
と思った。思い出せない自分が悔しい。

凧はその手にしがみつく、また泣き始めた。

「ごめんなさい・・ごめんなさい・・」

その謝罪は何に対してなのか、命を軽視していた岩魚に対してか、
殺めてしまった牡鹿に対してか。それともせつかく教えてくれた命
の営みをきちんと理解していなかった自分が情けなくて、父親とサ
ンに謝りたかったのか。凧自身にもよく分からなかった。

泣き止まない凧に戸惑ったサンは困ったように溜息をついた。

「リン、大丈夫だ。やれと言ったのも、とどめを刺したのも俺だ。この鹿が誰かを恨むとしたら、俺を恨むさ」
聞いたこともないほど優しいサンの声。

「大丈夫だ。大丈夫だ」

サンは自分の手にしがみついている凜に何度も囁いた。

その声を聞いていると、本当に全てが大丈夫だという気がしてきた。身体の震えも治まってくる。優しい音楽のように凜を包み込み、穏やかな小川のせせらぎのように全ての汚れも罪も洗い流してくれる。ずっとこの声を聞いていたい、凜はそう思った。

それでも凜が泣き止んだ事に気付いたサンは、手を離して牡鹿の元へ戻った。凜は少しの寂しさを感じながら、川の水で顔を洗った。牡鹿の脚を縛り終わったサンは甲高い口笛を吹いた。鷹の鳴き声にそっくりなその口笛は森の中に響き渡る。すぐにそれに応える鷹の鳴き声が聞こえてきた。ダニエルだ。

ダニエルとカイを待つ間、サンは凜の隣に来て川の水で汚れた手を洗った。しばらく黙って何かを考えていた様子のサンが、凜に顔を向けて口を開いた。

「お前を狩に連れて来たのは・・・」

凜もサンに顔を向けた。サンは生真面目な顔で続けた。

「お前達を助けた俺には責任があると言ったよな。俺はお前達をサンフランシスコに連れて行く事は出来ない。その代わり、ここで生き抜く術は俺が教えてやる」

真っ直ぐなサンの瞳と言葉に、凜の心臓が一つ大きな音を立てた。さっきまで自分はサンに父親の面影を見ていたのだと思っただが、そうでない事に気が付いた。初めて感じた胸が締め付けられるような痛みは、父親に対するものではない。顔を濡らす川の水はとても冷たかったはずだが、いつの間にか火照っていた頬は真っ赤になっていた。

それからすぐにダニエルとカイ、他の戦士達もやって来た。皆笑

顔だ。

ダニエルとカイの獲物は、やはり一頭の鹿。他の戦士達も手に三羽の七面鳥をぶら下げている。七面鳥は昨日仕掛けておいた罠に掛かっていたらしい。

縛った鹿の脚に丸太を通して皆で運んだが、凜は七面鳥を持って俯きながらトボトボとついて行った。

「カイ、これはお前が仕留めたのか？」

二頭の鹿を五人の男で運んでいる。小さめの鹿だったとはいえ、かなりの重さだ。カイはヨロヨロしながら小さい声でサンに答えた。

「あ・・ダニエルが・・」

「やつぱりな・・」

冷笑を浮かべたサンにカイは必死に弁解した。

「だ・・だって、隣でダニエルがあれこれ指図するから・・緊張して外しちゃったんだ・・。それで・・その後、ダニエルが仕留めた・・」

サンは黙ったままカイを見つめ、「言い訳はするな」とばかりに大げさに肩をすくめた。

しばらくしよんぼりして歩いていたカイは後ろを振り向いた。獲物を仕留めた凜が自分よりも浮かない顔をして歩いているのを不思議に思った。

「ねえ、リンどうしたの？何かあったの？」

カイに尋ねられたサンは後ろを振り向いた。夕闇が迫る森の中、凜が大きな溜息をついて俯くのが見えた。サンはカイに視線を戻した。「お前も初めての獲物を仕留めた時には、きっとリンの気持ちがかかるさ」

サンは、凜がまだ死んだ牡鹿の事を気にしているんだろうと思っていた。

凜達がキャンプ地に戻る頃には、すっかり日が暮れていた。それにも関わらず、皆は戦士達が獲物を持ち帰った事に昂揚した。火が高く焚かれ、女達は鹿と七面鳥を捌き干し肉を作り始める。残りの者は燃え盛る火の回りで歌い、または踊ったりしている。命の熱狂、そんな言葉がぴったりだった。

疲れ果てていた凜は大きな焚き火から少し離れた所にある丸太に座ってそれを眺めていた。火の回りではカイの隣で千代丸が楽しそうに踊っている。ウナは山の精霊を讃える歌を詠唱し、ミアとターニヤは干し肉作りに勤しんでいる。

ひと際騒いでいたダニエルが踊りの輪から離れて凜の隣にやって来た。

「リン！飲め！ほら、ほら！」

ダニエルは手に持っていたウイスキーのボトルを差し出した。

「えっ？でも・・・」

今まで酒など飲んだ事がない凜は躊躇した。でもボトルを差し出すダニエルのキラキラとした楽しそうな目を見ていると、とても断ることが出来そうな雰囲気ではない。凜は恐る恐るボトルに手を伸ばした。ボトルにゆっくり口を付けると、それだけで酔ってしまいそうな程どぎつい匂いが鼻をついた。

「ほら！グイツといけ！」

ダニエルに大きな声で言われ、凜はボトルに口を付けたままグイツと一口呷った。いつもサンやダニエルがやっているように。

しかし、すぐに後悔した。強い苦味に舌が痺れ、飲み下すと喉が焼けるような痛みにもわせてしまった。

「ゲホッ！ゲホッ！」

「アハハハ！もしかして初めて飲んだのか？そうなのか？」

喉を押さえたまま凜はダニエルに頷いた。顔をしかめて身を縮こま

せるとブルツと震えがきた。

「アハハハ！全く、可愛いな〜リンは！」

丸太から転げ落ちそうな勢いで笑っている。

「笑い過ぎよ！もう、悪ふざけはやめて！」

むくれた凜と、まだ笑いの止まらないダニエルのもとに一人の女性
がやって来た。笑顔で鹿肉のバーベキューと、とうもろこしのパン
が載った皿を差し出した。

肉汁で濡れた湯気の立つサイコロ状の肉を見ると、お腹の虫が騒
ぎ出した。朝早くから狩りに出ていて何も食べていなかったのだ。

焼きたての温かい肉はジューシーでとても美味しかった。普段は
保存が出来て、持ち運びにも便利な干し肉を食べる事が多かったか
ら。

ダニエルも美味しそうに肉を食べて酒を飲み、「もっと踊れ！歌
え！」と皆を煽っている。いつにも増して陽気だった。

「いや〜楽しいな〜。リン、見てみる、あの子供達の顔」

今日だけは夜更かしを許された子供達が、踊りの輪の外側をはし
やいで走り回っている。どの顔も炎に照らされ上気している。

凜は自分が育った里の、年に一回行われる祭りを思い出した。普
段は真つ暗な夜の里が、焚かれた炎によって赤く照らし出されてい
た。見慣れたはずの木や畦道がいつもとは違って見えて、見知らぬ
世界を覗いているような気がして興奮したものだ。

それは、その年の豊作を願う祭りだった。やはり人々は火の回り
で太鼓や笛の音に合わせて踊るのだ。一年間、誰も飢えることなく
生きていられる事を祈りながら。

大人が踊る命のダンスに合わせて、見様見真似で身体を動かしま
がら子供達はその魂に刻んでいく。生きている事の喜びと、命ある
事の尊さを。それは彼らの子孫にも伝えられるのだろう。こうして
命は繋がっていく。

いつの間にかダニエルは踊りの輪の中に戻っていた。焚き火を見

つめていた凜は自分の顔が火照っているのを感じた。この宴の熱気のせいなのか、無理矢理飲まれたウイスキーのせいなのかは分からない。おそらくその両方だろう。

そこへさっきの女性がやって来た。焼いた鹿肉を盛った椀を凜に差し出した。

「これをサンに持って行ってね」

その名前を聞いた凜は幸福な気持ちに包まれて頷いた。

サンはキャンプ地の遙か上、斜面に張り出した岩棚の上で見張りをしている。天を焦がすような大きな火を焚いているのだ。その光が遠くにいる軍隊を呼ぶ恐れもある。

今時、居留区以外にインディアンがいるとなれば、軍隊は大勢でやって来るはずだ。その時には、このキャンプの形跡を全て消して逃げなければならぬ。そのためには近付いて来る敵をいち早く見つける必要がある、その見張り役をサンは買って出た。

凜はサンの食事を薄い革で風呂敷のように包むと斜面を登った。崖は険しいが、モカシンは既に凜の足の一部になっているほど馴染んでいた。

“冷めないうちに届けなきゃ・・・”

心の中でそう自分に言い聞かせながらも、心臓は別の理由で高鳴っていた。

「どうした？」

サンがいる岩棚のすぐ下、斜めに生えている木に手を掛けたところで声がした。凜が崖を登っている事は、ずっと前から分かっていたのだろう。

「食事を持って来たの。よいしょ・・・」

木の根に足を掛けて、岩棚の上によじ登った。サンは山の斜面に背中を付けて、あぐらをかいている。その膝の上にはライフルが横たわっている。サンの視線は油断なく遠くの森へ注がれていた。山の中のどんな小さな変化も見逃さないように。

凜は食事をサンのすぐ横に置くと、その隣に膝を立てて座った。サンは鹿肉を口に運ぶとゆっくり噛んでいく。その間も自分の任務を怠る事はない。

「お前は食べないのか？」

凜は首を振った。

「さつき食べたから。それに、熱さで頭がボーっとしちゃって・・・もしかしたら、ダニエルに飲まされたウイスキーのせいかも知れないけど。ついでにちよつと涼みに来たの」

炎は二人の遥か眼下にある。いつもなら凍えるような夜の冷たい風も、炎の熱が混じっており暑くもないし寒くもなかった。

サンはダニエルの行いに「クツクツ」と笑って、凜がここに居座る事を認めた。

「あまり前に出るなよ。斜面に影が映る」

「はい・・・」

凜は膝を立てたままの姿勢でモゾモゾとお尻を動かし、背中が斜面に当たるまで後ろに下がった。

長い沈黙が続いた。それでも傍に居られるだけで凜には満足だった。

“時間が止まればいい・・・ずっとこのまま・・・”

凜は立てた膝に顔を埋めた。

「リン、何か話せ。眠くなってくる」

サンが静かな声で呟いた。そう言いながらも視線はしっかりと暗い闇に沈む森の方へ向けられている。

「あ・・・でも、何を・・・？」

「何でも良い。そうだな・・・お前の生まれた場所の事を話せ。どんな所だ？」

下から響く歌声と歓声を聞きながら、凜は故郷の景色を頭に思い浮かべた。

「あの・・・山に囲まれた小さな村で・・・田んぼとか野菜を作ってる畑があつて・・・近くには綺麗な小川も流れてるの。冬になるとね雪

が降るの、それもたくさん。私の背丈よりも高く積もる事もあるわ。あ、でも・・・あれは子供の頃の事だから、今の私の背丈じゃ、どうか分からないけど・・・」

凜は一気に喋った。意識は一面の雪景色の中にあつた。田んぼも畦道も全て雪で埋め尽くされ平らになつた白い地面。ザクザクと踏みしめると、まるで雲の上に居るような気がしたものだ。

そして、あの日の事も思い出した。母と兄達が殺されたあの夜を。凜はギョツと目を瞑ると頭を振った。サンはそんな凜をチラツと見て、また視線を戻した。凜は話を続けた。

「春になると山に桜が咲くの」

「サクラ・・・？」

「そう、一本の枝に小さなピンク色の花がたくさん咲くの。ピンクつていつても、赤っぽいのも白っぽいのも色々あつて・・・すごく綺麗な。私の母は、桜が好きで・・・よく庭に出て山の斜面いっぱい咲いてるのを眺めてたわ」

目を閉じると、父が死んだ後、庭で母と手を繋いで桜を眺めた時の事が浮かんだ。その時凜は不安でいっぱいだった。父が死に、これから自分達家族はどうなつてしまうのか。気丈にも涙こそ見せてはいなかったが、寂しそうに桜を見つめる母が哀れに思え、あまりにも早く逝つてしまった父を少しばかり恨みもした。

凜は母の着物の袖を引っ張った。母は凜の不安を察したのだろう、柔らかに微笑んだ。

「御覧なさいな、凜。桜が綺麗だわ」

遠くの山肌を彩る可憐な桜を指差した。凜は桜よりも母の事が気になつていて、桜を見つめる母から目が離せなかった。

「凜、私はここへお嫁に来て、とても幸せですよ。あの人は死んでしまつたけれど、こんなに美しい景色を私に与えてくださったのだから」

それが母が見た最後の桜だった。

「すぐに散っちゃうけどね」

明るく言ったつもりだったが、笑顔が引きつっているのは自分でも分かった。声が震えてしまいそうで、凧は押し黙って俯いた。

「まだ、日本に帰りたいのか？」

サンの声が聞こえて凧は顔を上げた。昨日までの自分なら「当たり前でしょ！」と即答していただろう。でも今は……。凧はサンの横顔を見つめた。

“あなたと、ずっと一緒にいたい・・・”

そんな事を言える筈もなく、熱くなってきた顔を隠すために俯いた。

押し黙った凧を見て、サンは自分の愚問を詫びた。

「変な事訊いて悪かったな。帰りたいに決まってるよな」

サンが手を伸ばして凧の頭をクシャクシャと撫でた。自分の気持ちに全く気付かないサンの事を、凧は上目遣いで覗き見るとため息をついた。

凍てつく長い冬を越えて、命はその身を躍らせる。固い蕾が膨らむように。土が若芽を押し出すように。溶けた雪が大地の割れ目を川となって進むように。全てが光り輝く夏を目指して。

ティピイーの中、ミアはビーズと鳥の羽根で作った髪飾りを付けていた。

「うわあ、可愛い！」

凜が思わず歓声を上げると、ミアは嬉しそうに微笑んだ。いつもは二本の三つ編みにしている髪を下ろし、サイドの一房だけを革紐で結わいて飾りを付けている。そうしていると、ミアはいつもより大人っぽく見えた。

「気に入った？じゃあ、今度リンにも作ってあげるね」

「ありがとう！」

最近、自分を綺麗に見せたくて仕方のない凜が喜んだ。ミアはミアで鏡を手に髪飾りの具合を入念に確かめている。

「チヨはこんなの好きかなあ？」

「えっ？」

ミアの呟きに凜は目を丸くした。自分の独り言を聞かれてしまったミアはハツとして振り向くと、顔を赤らめながら照れ笑いをした。

そんなミアがとても可愛くて、凜も思わず口元を綻ばせた。

恋は一日の大半、その心の中を占領する。朝は時間を掛けて髪を梳かし、それと同じくらい長く鏡を覗き込む。それからテントを出る時も、無意識に彼の姿を探してしまう。居なければ居ないでがっかりするし、居れば自分に何かおかしいところは無いかと、気にし過ぎてきこちなくなってしまう。

想いを寄せている相手が、自分より八つも年上となればなおさら

だ。何とか子供っぽく思われないように、背伸びをしたくなる。

しかし凜がいくら頑張って髪型を変えても、服に新しい飾りを付けても、サンは全く無反応だった。

「リンは今日も可愛いなあ」

大体は、ダニエルが大げさに社交辞令を述べるだけだ。

「何だよそれ？似合わないねえな」

そしてカイが追い討ちを掛ける。その後凜は一人、小川の岸に座って落ち込むのだ。「似合わない」そう言ったのはカイだが、きつとサンだってそう思ってるに違いない。そんな風にクヨクヨと思いつむ。

そしてサンに声を掛けられた日は嬉しくて有頂天になり、眠りにつくまで交わした言葉を心の中で繰り返す。凜は初めての恋に振り回されていた。

ある日、凜は焚き火を囲む丸太に座り、サンとダニエル、カイと千代丸と共に矢を作っていた。鉄の矢じりを焚き火で炙り、石で叩いて先端を尖らせる。凜は出来上がった矢じりを葦に取り付けていた。

「チヨ！」

大事そうにモカシンを抱えたミアが走り寄って来た。

「今履いてるのがもうきついつて言ってたでしょ？だから、新しいの作ったの。どうぞ」

まさに育ち盛りの千代丸は、会う度に大きくなっている。今はサンのテントで暮らしている千代丸とは四六時中一緒に居るわけではない。凜の背丈を追い越すのも時間の問題だろう。

はにかみながらミアが差し出したモカシンを、嬉しそうにっこりと笑って千代丸が受け取った。

「ありがとう」

千代丸のその反応に凜は違和感を覚えた。てっきり「わーい、わーい」と大喜びして飛び跳ねると思っていたのだ。いつの間にかん

なに落ち着いてしまったのだろうか・・・。

確かに、笑っている千代丸の横顔はもうあどけない子供の顔ではなかった。女の子のような面立ちだったのに、きりつとした眉毛に顎もしつかりとしてきて、逞しい男の顔になってきていた。

しばらく微笑み合った後、ミアは弾むような足取りでその場を離れた。千代丸はミアの後姿を崇めるような憧れるような、そんな眼差しで見送っていた。

それを見ていたサンとダニエルが、互いに顔を見合わせてニヤツと笑った。

「ミアって本当にいい子だなあ。可愛いし優しいし」

感心した様子でダニエルが言うと、サンが頷いた。

「そうだなあ。でも、あのミアも年取ったらウナ婆さんみたいになるんだろうな・・・。時間て奴は残酷だよな・・・」

「本当、本当」

そのやりとりを聞いた千代丸は、サンとダニエルをキツと睨むと猛然と言い返した。

「そんな事ないよ！ミアはお婆ちゃんになったって綺麗だよ！」

全員がポカンとして千代丸を見た。

「千、千代・・・やだあ、あんた・・・」

凜は驚いて声を上げた。

“千代とミア・・・この二人、相思相愛だったんだ・・・”

「な、何だよ凜！」

最近凜の事を「姉上」とは呼ばず、皆と同じように名前で呼ぶようになった千代丸は顔を真っ赤にしてうるたえている。

サンとダニエルとカイが大きな笑い声を上げた。

「だーはっは！チヨは正直だなあ！可愛い奴！」

「なあ！ミアと何かしたのか？何かしたのか？」

興味津津で訊いてくるカイに向き直り、千代丸は首を千切れんばかりに振った。

「何もしてないよ！何言ってる・・・あつ！ゲホッ！ゲホッ！」

急に千代丸の声が掠れ、咳き込んだ。

「どうしたの？千代、風邪でもひいた？」

「あ、ううん。でも、最近なんか喉が・・・」

喉を押さえて咳払いしながら首を傾げている千代丸にサンが平然として言った。

「普通だろ？それ」

「えっ？何で？」

「声が変わるんだよ。お前も大人の声になるんだ」

凜は思い出した。昔、兄にもそういう事があった。突然兄の声が変わった事に戸惑い、まるで違う人になったように感じたものだ。

「そうだよ。俺みたいな渋い声になるんだよ」

ダニエルがオペラのテノール歌手のように歌いながら手を広げた。

「そんな声嫌だ」

千代丸ににべもなく言われたダニエルはガクツと頭をうなだれたが、すぐに立ち直るとニヤニヤしながら千代丸に顔を近づけた。

「お前そろそろアレじゃないか？朝起きたらさあ・・・」

ヒソヒソと千代丸に話し掛ける。何を話しているのか凜には聞こえないが、千代丸の顔が見る見る赤くなっていく。

「なっ・・・何言ってるんだよ！もう！変な事言うのをやめてよ！」

真っ赤な顔で首を振る千代丸を見て、またサンとダニエルが大笑いをはじめた。凜は顔をしかめると、呆れて肩をすくめた。

「楽しそうね。何の話？」

トウナというサボテンの果実をいっぱいに乗せた籠を持ってターニヤが現れた。

「あ・・・いや、何でもないよ」

ダニエルはまだ笑っていたが、サンは手を振ってごまかした。

ターニヤが皆にトウナを配り、暫しの休憩となった。

「サン、ちゃんと食べるのよ。ウイスキーばかり飲んでちゃダメよ」

「はいはい・・・分かってるよ」

サンは苦笑いしながら、足元に置いてあるウイスキーのボトルを爪先でダニエルの方へ押しやった。

トウナが入った重そうな籠を持ち直し、ターニヤは踵を返して歩き出した。振り返ったサンは、やおら立ち上がって丸太を跨ぎ越え、るとターニヤに駆け寄った。

「ターニヤ、それ持つよ」

「あら、ありがとう」

互いに微笑を交わしながら歩いていくターニヤとサンの後姿を、凧はトウナの皮をナイフで？きながら見つめた。サンと美しいターニヤはとてもお似合いに見えた。何よりもターニヤを見つめるサンの顔。あんなに優しい顔でサンに笑い掛けられた事などない。

凧の心の奥の方がズキッと痛んだ。

それからの凜は、気分が沈みこむ事が多くなった。ターニヤと自分を一つ一つ比べては激しく落ち込むのだ。

もともとターニヤは皆の憧れの女性だ。凜とて例外ではない。美しく優しいターニヤを見て、自分もそうなりたいと願っている。

“でも・・あんなに美人じゃないし、胸だって大きくないし、脚だって長くない・・”

凜は鏡を見て溜息をついた。

“私がターニヤに勝つてるところなんて一つもない・・”

「リン、どうしたの？」

凜が見ていた手鏡の脇からミアが顔を出した。

最近のミアの笑顔は以前にも増して輝いている。きつと千代丸と上手くいつているんだろう。自分だけの可愛い弟だった千代丸が、いつの間にか大人になり、好きな女の子が出来たという事に少なからず寂しさも感じていた。

「うっん・・何でもない・・」

凜は弱々しい笑みを浮かべた。それを見たミアは怪訝そうに眉を寄せた。

「リン、ちょっと後ろ向いて」

ミアに言われてその通りにすると、凜の髪をブラシで梳き始めた。

凜が鏡を見て溜息をついていたので、どんな髪型にしようか悩んでいると思っただけらしい。

千代丸のせいなのか、ミアは最近おしゃれに夢中だ。クリスティーナの物だったトランクからブラシやヘアピン、日本で買ったかんざしまでを使って色んな髪型を研究している。

凜はターニヤを真似るつもりで、ミアに「ああしてくれ」「こんな感じで」と注文をつけた。髪をサイドに流し、三つ編みにして肩から胸に垂らす。そして反対側の耳の上にミアが作ってくれた髪飾

りを付けた。

出来上がった髪型は確かにターニヤと似ていた。しかし、だからこそターニヤと自分の違いをはっきりと目の当たりにしてしまい、凧は再び大きな溜息をついた。

凧は沈んだ気持ちで一人、森の中の丸太に座っていた。

「おい！」

突然声が出て凧は慌てて振り返った。背後の木にカイが寄り掛かっていた。凧は溜息混じりに返事をした。

「何？」

カイは不機嫌そうな顔でしばらく凧を見下ろした後、口を開いた。

「何か・・・ターニヤみたいだな・・・」

「えっ？ 本当？」

「・・・髪型だけな」

凧はガツクリしてうなだれた。てっきり褒めてくれたのだと思った。「サンがお前なんか相手にするわけないだろう」

「な・・・何言ってるの？サンの事なんか別に・・・」

カイの言葉は凧の心に鋭く突き刺さった。何よりも、誰にも言っていないのに、どうしてカイがその事を知っているのが分からず、凧は必死で取り繕った。

カイは疑うような視線を凧に送った。

「へえ、そうなんだ？」

「そ、そうよ！ サンは・・・何ていうか・・・お父さんみたいっていうか・・・師匠・・・そう！ 師匠よ！ 弓矢も教えてもらってるし・・・」

心にも無い事をしどろもどろで言っているのが自分でも分かる。

カイは凧の話に言葉を被せた。

「どうでもいいけど。皆、とうもろこしの収穫で忙しいんだよ。怠け者は嫌われるぞ」

凧は言葉を切り、立ち上がった。

「行くわよ・・・」

今日は朝早くから皆が張り切って畑に向かっていたのは知っていた。しかし、その活気に溢れた輪の中にどうしても入る事が出来ず、一人で森の中に入ったのだ。

ティッピーが並ぶキャンプ内では、収穫されたとうもろこしが山積みになり、女達が葉をむしったり実を挽いたりしている。

「おはよう、リン」

明るい声で挨拶をされ、凜も無理に作った笑顔でそれに応えた。

畑に向かって歩いていると、前からとうもろこしを抱えたサンがこちらへ向かって来るのが見えて凜はドキツとした。サンはダニエルとターニヤと共に楽しげに笑いながら歩いている。

「よお！」

凜に気付いたサンが声を掛けた。

「あ・・・お、おはよう・・・」

緊張してぎこちなく応えた凜にダニエルが笑い掛けた。

「やあ、リン！ 今日是一段と可愛いねえ」

「おはよう、リン」

ターニヤは今日は畑仕事があることを見越していたのだろう。髪を頭の天辺から編み込んで小さくまとめていた。とても清楚で素敵に見えた。

三人はすぐに話しに戻ると凜の横を通り過ぎて行った。

“綺麗だな、ターニヤ・・・あの髪型、今度同じにしてみようかな”

懲りずにまだそんな事を考えている凜の後ろからは、不機嫌な顔のカイが歩いていった。

例によって英国紳士に扮したダニエルと街へ偵察に行く日がやって来た。ダニエルは毎回、ドレスを着た凜の事を褒めちぎる。思わず凜が赤面してしまうほどだ。ダニエルは「とにかく女性は褒める」というのがモットーで、サンはその隣で呆れた顔をしている事も多

い。

街にはすんなりと到着する事が出来た。ダニエルは毎回のよう
にサルーンでウィスキーを飲みながら新聞を読んでいた。それによ
ると、政府軍とインディアンの戦争は熾烈を極めていた。

北の方ではカスター中佐率いる部隊二百二十五人全員がイン
ディアンに虐殺されたと伝えている。そして隣の州では収容所から逃
出したアパッチの追跡のため、兵士が増員されるらしい。

凜はそういった記事を見るたびに不安になった。

「いつになったら・・安心して暮らせるようになるの？　いつまで
こんな事が続くの？」

「インディアンの最後の一人が死ぬまでだ」
表情も変えずにダニエルは答えた。

その後、街の中を歩いていても軍隊の姿を見掛けることはなかつ
た。しかし相変わらず腰に大きな銃を下げた男達が闊歩し、彼らを
誘うように娼館の前に立つ妖艶な娼婦達。賑わう広場の絞首刑台に
は、若いインディアンの男が吊るされていた。

その街の持つ退廃的な雰囲気息苦しくなつた凜は顔を俯けた。
その時大きな音で鐘が鳴り、凜とダニエルは同時に首を右に向けた。
そこには白く塗られた壁の清潔そうな教会があつた。荒れた埃っぽ
いこの街の中で、もし少しでも良心が残っているとすれば、全てが
ここに集められている。そんな感じがした。

しばらく眺めていると教会の重い扉が開き、中から人が出てきた。
立派な身なりの壮年の夫婦と法衣を纏つた司教が握手を交わしてい
る。

「あいつ・・・」

ダニエルが呟いた。

「知り合いなの？」

ダニエルは頷いたまま、帽子のつばで隠れた目を鋭くその司教に向
けている。

「ああ。あいつの事は忘れないさ。寄宿学校で宣教師をしてた奴だ。よく『ケダモノ！』って言われて鞭で叩かれたもんだ。俺だけじゃない、皆あいつにやられてた。インディアンの子供達をいたぶるのが、あいつの楽しみだったんだ。聖職者のくせしてインディアンの若い女を何人もおもちゃにしたのも知ってる」

凜は身じろぎも出来ずにダニエルを見つめていた。いつも陽気なダニエルからは想像も出来ないような、ただならぬ殺気が漂っていたからだ。

夫婦が帰ると、司教はロープをはたいて埃を払い、甲高い鳴き声を上げながら教会の上空を旋回するノズリを顰めた顔で一瞥して建物の中に入って行った。

「さあ！ リン、そろそろ行こう。キャンディーでも買ってやろうか？」

顔を上げたダニエルは、いつもの陽気さを取り戻していた。

「いらない。子供じゃないもん」

「あはは、そうだったな。貴婦人だもんな？」

ダニエルは大きな笑い声を上げながら、チュールの付いた帽子の上からポンポンと凜の頭を撫でた。全くの子供扱いに凜は不機嫌になり、頬を膨らませた。

山へ戻った頃には、深夜近くになっていた。皆ティピーの中なのだろう、人影は見えなかった。

「俺はレッドベアーと話があるから」

「分かった。後は任せて」

凜はダニエルから馬の手綱を受け取った。

馬を繋ぎながら、歩いていくダニエルの後ろ姿を見てみると、レッドベアのティピーからサンが出てくるのが見えた。二人は二言三言言葉を交わし、ダニエルがレッドベアのティピーに入ってしまった。

凜がかいば桶を馬の前に置くと、水の入った重い桶をサンが運ん

でくれた。

「あ・・ありがとう」

「いいや、ご苦労さんだったな。どうだ？ 何か変わった事はあったか？」

凜は馬の鞍を外しながら、教会の前でのダニエルの様子を話そうかと思つた。あの憎しみに燃えた目の事を。でも、こうして夜にサンと二人きりでいる事に緊張してしまい、言葉がなかなか出てこない。凜は首を振つた。

「わ、私は・・ダニエルについて行つただけだから・・」

それだけ言うのが精一杯だった。それにあの街であつた事は、後で直接ダニエルがサンに話すだろうと思つた。

「そうか」

サンは笑つて頷いた。なぜだか今夜のサンは機嫌がいい。

片づけが終わると、サンは「うーん」と唸つて腕を伸ばし、夜空を見上げた。くつきりとした満月が空の高い所で輝いている。凜は、微笑を浮かべて月明かりを浴びるサンを見つめた。その整つた端正な顔立ちに、凜の心は締め付けられるようだった。

胸を焦がすこの想いに気付いてくれる日は来るのだろうか。もしこの気持ちを受け入れてくれたら、後はもう何もいらぬ。凜はそう思った。

そんな言葉を口に出す事は出来ず、ただ黙つて立つているだけの凜にサンが顔を向けた。凜は慌てて目を逸らした。

「何だ、疲れた顔してるな・・。早く休んだ方がいいぞ」

サンは笑みを浮かべたまま凜の肩を軽く叩くと、千代丸が寝ているティッピーへ戻つて行つた。

凜は眠りにつくまでずっとサンのことを思い浮かべていた。月光の中でのサンの穏やかな笑顔、サンの言葉の一つ一つを。甘く疼く胸を抱き締めながら、夢の中に落ちて行つた。

次の日の朝、凜のティッピーにターニヤがやって来た。

「おはよう、皆」

明るい笑顔のターニヤは、今までで一番綺麗に見えた。

「ねえ聞いて、あのね・・・」

「どうしたの？」

髪を編みながらミアが尋ねた。ターニヤはそのほっそりとした頬をバラ色に染めている。

「昨夜サンがね・・・父さんに、私との結婚の承諾を貰いに来てくれた・・・」

サンとターニヤが結婚する。凜は呆けた顔で、その報告を聞いた。「それで、それでレッドベアは何て？」

ミアが興奮して叫んだ。ターニヤは幸せそうに微笑んでいる。凜は胸がちぎれるような痛みを感じた。ただ引きつった笑顔顔を顔に貼り付かせる事しか出来ない。

「すごい！すごい！」

自分の事のように大喜びしているミアの隣で、凜は涙を堪えるのに必死だった。

“だから・・・昨夜、サンはあんなに・・・”

サンもまたターニヤと同じ喜びに震えていたのだ。それを勘違いしていた自分を恥ずかしく思った。

「すごいね・・・ターニヤ・・・お、おめでとう」

凜が何とか絞り出した言葉にターニヤは輝くような笑顔を向けた。

“ターニヤ・・・すごく綺麗・・・”

凜は眩しそうにターニヤの顔を見つめた。

“男なら誰だつてターニヤみたいな女性と一緒に居たいと思うだろう・・・。こんな笑顔を見せられたら、一生守りたいと思って当然だ・・・”

「でも、ずっと前から愛し合ってたでしょう？当然だよね！」

ミアが嬉しそうに言うと、ターニヤは頷いた。

「ええ、軍隊が攻め込んできて母さんが殺された時、一緒に手を繋いで逃げたのよ。その後もサンは私を慰めてくれて・・・。自分は両親も兄弟も皆殺されてしまったのに・・・」

ターニヤは悲しそうに目を伏せ、それからまた凜とミアに顔を向け微笑んだ。

「お互いの気持ちに気付いたのはリンと同じ歳の頃だったかしら・・・。でも、サンは戦士になるために頑張っていたから・・・」

自分が入り込む余地など全く無かったのだという事を知り、凜は気が遠くなった。その後は二人の会話もほとんど耳に入ってはこなかった。

ミアとの話が終わると、ターニヤはウナの前に跪いた。ウナはほとんど切れ目のような目をターニヤに向けた。皺だらけの左手をターニヤの手に重ね、右手を艶やかな漆黒の髪に伸ばして優しく撫でた。

「ウナ・・・」

ウナは頷きながら穏やかな声で語りかけた。

「おめでとう、ターニヤ。早く子供を作った方がいい・・・」

ターニヤは微笑むと、恭しく頭を下げた。

凜の初めての恋は、気持ち伝える事もなく、誰に気づかれる事も無く静かに終わった。凜は激しく落ち込んでいた。

サンはキャンプ地の端っことで切った木を組み上げて革を張り、新居用のティピーを造っている。凜はその光景から目を逸らし、森に向かった。

いつの間にか小川のほとりに出ていた。初めて鹿を狩った場所だ。川岸に手頃な石を見つけて腰を下ろすと、モカシンを脱いで素足を冷たい川の水に浸した。小さな頃、故郷の小川でよく遊んでいたのを思い出す。母に叱られて落ち込んだ時などは、清らかな水が嫌な事を全て洗い流してくれた。

今はもう、そんな事は起こらない。恋する事を覚え、それが儂く散ってしまった今では、もう小さな子供に戻る事は出来なかった。

「うっ・・・」

息を吸い込むと自然に嗚咽が洩れた。呼吸が小刻みにしか出来ない。視界が滲み、涙がとめどなく溢れてきた。

「サン・・・サン・・・」

呼べば辛くなるだけの名前を何度も何度も呟いた。スカートの膝の部分に幾つもの滴が落ちて染みを作った。

「よお！リン！」

突然誰かに呼ばれて、飛び上がりそうなほど驚いた。泣いているのを気付かれたくなくて、俯きながらそつと後ろを振り返る。カイだった。

カイは落ちてしている小枝をパキパキと踏みしめながら大股で歩いてくる。

「ど・・・どうしたの？」

動揺したまま、震える涙声を何とか隠そうと無理に明るいう声を作った。

カイはモカシンを脱ぎ、鹿の革で出来たズボンの裾を膝まで捲り上げるとザブザブ水飛沫を上げながら小川に入ってきた。

「たまに来るんだよなあ。気持ち良いだろ？川の水、冷たくてさ」
凜には目もくれず、手で水をすくうとバシャバシャと顔を洗い始めた。

「もう！よりによつて・・何でこんな時に来るのよ？」

泣いているなんて事が分かったら、また意地悪をされるに違いないと思い、カイが顔を洗っている隙に涙を拭いてしまおうとした。

カイは鼻の先、顎、濡れた前髪から雫を垂らしたまま、俯いて必死に涙を拭いている凜を覗き見て表情を曇らせた。カイは手ですくった水を凜の顔に勢い良く引つ掛けた。凜は顔も服もびしょ濡れになり、驚いて一瞬言葉が出なかった。

「な・・な、何するのよ！」

怒り出した凜にカイはニヤツと笑った。

「な？冷たくて気持ち良いだろ？」

凜は呆れ果てた。

「全く、何て意地悪なの・・。っていうか、すごく子供っぽい！」

凜は水遊びに興じているカイから顔を背け、びしょ濡れの顔を手で拭いた。元々涙でぐしょぐしょだった顔は、川の水が混じってもうどれが涙なのか分からなかった。膝の上の涙の染みも、掛けられた水に紛れてしまっていた。

もはやあの状況ではメソメソ泣いている場合ではなく、凧はカイと憎まれ口を叩き合いながらキャンプ地に戻った。すると、ティッピーの中で焚く焚火用の薪を抱えたサンと出くわした。凧は凍りついたように動けなくなり、顔を俯かせた。サンをまともに見る事が出来ない。

汚れた格好の二人にサンは眉をひそめ、それから意味ありげな笑みを浮かべた。

「何だ？お前ら最近仲良いなあ」

サンに冷やかされ、カイはムスツと不機嫌な顔になった。

「そんなんじゃないよ」

カイは素っ気無く返すとプイツとそっぽを向き、自分のティッピーへ向かつてずんずん歩いて行った。凧も黙って俯いたままサンの前を通り過ぎた。

チラツと後ろを振り返ると、サンはティッピーから顔を出したタニーヤと笑顔を交わしながら肩をすくめていた。

幸せそうな二人の姿に、締め付けられた胸を抱えながらティッピーに戻る、ウナが一人で座っていた。

「そんな格好でどうしたんだい？」

「あ・・・」

戻ってくる間に服は乾いていたが、森の中を濡れた服で歩いたのでスカートには土やら埃がこびり付いている。

新しい服に着替えた凧は、自分が脱いだ服を眺めた。前だけでなく、後ろの身頃の裾にも跳ね上げた泥や葉っぱまで付いている。自分の事を、まるで泥んこ遊びをしていた子供のように思え、情けなくなってきた。

「リン、こつちへおいで」

ウナに手招きされ、凧は目の前に正座した。垂れ下がった瞼の奥の目は、どこまでも優しく凧を見つめている。凧は無理に笑顔を作ってみたが、きつと情けない顔をしているんだろうと思った。

ウナはゆっくりと口を開いた。

「喜びも悲しみも心の傷さえも、全ては魂に刻まれる。そうしてリ
ンの魂は強くなっていくんだよ」

全ての事は無駄ではない。そうウナは言いたいのだと分かったが、
今の凛にはそこまで人生を達観出来るような心の余裕は無かった。

サンを好きになってしまった事。こんなに傷付くのなら、それが
そもそもの過ちだったのだ。出来る事なら、恋を知る前の自分に戻
りたい。サンと出会う前の自分に。そんな後悔ばかりが心の中に渦
を巻いている。

ウナは右の掌で、涙を堪えているせいでヒクヒクと震えている凛
の左の頬を包んだ。その手はとても温かく、自然と凛の目から涙が
零れ落ちた。ウナは頷いた。辛いときは泣きたいだけ泣けばいい、
と。

ある日、凜は千代丸のティピーを訪れた。サンがターニヤと結婚したため、今千代丸は一人でティピーを使っているのだ。きつと散らかしているだろうと思い、必要ならば掃除をと、様子を見に来たのだ。

「チヨ、いる？」

ティピーの入り口で声を掛けると、すぐに返事が返ってきた。

中に入ると、思いの他きれいに片付けられている。衣類は畳まれ、木を組んだすのこの上に置かれているし、きれいに洗ってある食器も隅の方に重なっている。

「ちゃんと・きれいにしてるのね・・・」

ティピーの中を見渡しながら感心すると、千代丸はバツの悪そうな顔をして笑った。

「うん・・・あ、でも・・・俺がやってるんじゃないけどね、あはは・・・」

凜はすぐにピンと来た。

「もしかして、ミアにやらせてるの？ そうなんでしょ？」

結婚する前のサンは、時々愚痴をこぼしていた。「チヨはすぐに物を散らかして片付けない」と。

後から聞いた話だが、最初に凜と千代丸をどうするかという会合が持たれた時、他の者からは「異国から来た子供など、白人に売ってしまえ！」という意見も出たそうだ。しかしサンはそれに反対しただけ。千代丸が、すぐにここの子供達と仲良くなってしまったからだ。

「チヨが居なくなれば、ここの子供達が悲しむ事になる。俺が責任を持ってこいつの面倒を見る」
そう言って皆を説得したそうだ。

『面倒を見る』というのは、可愛がり甘やかして世話を焼くとい

う事ではない。この部族のしきたりを教え、自立を促す教育をするという事だ。あの厳しいサンが注意しても直らなかつたのだ。一人になつた今、千代丸が急に片付けが出来るようになったとは思えない。

千代丸は胸の前で掌を振りながら弁解した。

「や、やらせてるわけじゃないよ……。その……。ミアが、自分から片付けてくれるんだ。『サンが居なくなつたから、大変でしょ？』
つて……」

「まあ、ミアつたら……」

凜は大きな溜息をついた。ミアに千代丸を甘やかさないように警告しようかとも考えた。しかし、それでは仲睦まじい二人をやっかんでいるみたいだ。それに、千代丸はその顔立ちのせいで、小さな頃から身近にいる女性のほとんどから甘やかされてきた。しかも好きな女の子がこうして世話を焼いてくれるのだから、千代丸にとっては自然に喜ぶべき事なのだろう。凜は腕を組んで溜息をついた。ここ数日、凜には考えている事があつた。ここを出て行くかと思つているのだ。もちろん千代丸も一緒に。自分達は日本人であり、元々この人間ではない。彼らが幌馬車を襲撃し、ここへ連れて来たのだ。

確かにあのまま馬車に乗っていれば死んでいたかも知れないし、生きていたとしても、精神錯乱状態のクリスティーナによつて殺されていたかも知れない。しかし自分達は彼らに受け入れられ、ここで彼らと共に生きていく。

果たして自分達は彼らにさらわれたのか、それとも助けられたのか……。なんとも複雑な身の上だ。

「一緒にここを出て行くか」

ミアの事を嬉しそうな笑みを浮かべて話す千代丸の顔を見て、凜はその言葉を飲み込んだ。

はたして、それを言つたらどうなるのだろうか。千代丸はその提案に渋々頷くかも知れないが、きつと悲しい顔をするだろう。凜の一

番見たくないものだ。

それに、もしかしたら千代丸はきっぱりと拒否するかも知れない。「俺は行かない。ここでミアと一緒に居る」

そう言われたら、凧にはどうする事も出来ない。千代丸はもはや小さな子供ではないのだ。自分の人生は自分で決めるだろう。

“ たった一人でここを出たら、どうなるのだろうか・・・？”

凧はあれこれと想像してみた。考えられる限りに明るい未来を。

しかし、一人ではきつとどうする事も出来ない。凧は以前偵察のため訪れた街の娼館を思い出した。命をすり減らし、危険を承知で僅かな金のために無法者を誘う女達を。彼女達のように、銃を下げた男達がうろつく物騒な街で、生きるために娼婦になるのが自分の末路だろう。

「チヨー！」

ティピーの外からミアの声がした。姉が自分に呆れていると思いい、シュンとしていた千代丸の顔がパツと輝いた。

「ミアだ！ 行かなきゃ！ あ、そういえば何か俺に話があったの？」

立ち上がり出口に向かいかけた千代丸が凧に尋ねた。凧は首を振って答えた。

「ううん、何でも無い。散らかってないか、様子を見に来ただけ・・・」

千代丸の後にゆっくりとティピーを出た凧は、仲良く手を繋いで森へ向かう二人の後姿を見送った。その向こうには、出来たばかりのティピーに楽しそうに鳥の絵を描くサンとターニヤが見える。傷付いた心を抱える凧には辛い光景だったが、恋人達が幸せそうに笑っていられる平和がここにはある。その事は認めざるを得なかった。サンとターニヤの仲睦まじい姿を見るのが辛いからと言って、ここを出て行くのは愚かな事なのかもしれない。

凧は穏やかに降り注ぐ木漏れ日の温かさを感じながら、自分のティピーへと戻った。

その頃、山から百数十マイル離れた場所では、ささやかな幸せなどあつという間に呑み込んでしまう程の大きな砂煙が上がっていた。

東部から来たグローバー大佐は、新しい赴任先の砦に向かう途中で早くも荒れ果てた西部にウンザリしていた。綺麗に整えられた軍服も口の上の髭も、馬車を降りて用を足す間にすぐ埃まみれになる。「ペンシルヴァニアじゃ、こんな事は無かった」

最近のグローバー大佐の口癖だった。

彼の任務とは、アリゾナの保留地から逃げ出したアパッチの団の追跡である。この国の繁栄を阻む敵だ。

東部には、もはやインディアンなどいない。東部で起きたインディアンとの戦争など、もう過去の話だ。豊かで洗練された生活を送っていた自分が、今さらインディアンを相手にするという事は憤り以外の何物でもなかった。

獣のような蛮行を重ねる悪しき異教徒。きっと虫けらほどの知能も持ち合わせてはいないだろう。文明などとは程遠い野蛮人相手に、なぜ軍がこれほど手を焼いているのか、彼には理解出来ないでいた。その一団を率いている指導者の噂は何度も聞いている。過去にメキシコの町を幾つも壊滅させた事から、『赤い悪魔』という異名で恐れられている男だ。獰猛かつ狡猾、そして神懸りのな人物だとも、ほぼ同時刻に何百マイルも離れた場所で報告された目撃証言などのせいだろう。

「フン！ 臆病者の見間違いだ。大方、黒熊か何かだろう」
グローバー大佐は、そんな獣のような男に神が宿るなどとは考えない。

「神は常に我々と共にある」

グローバー大佐は唾を付けた指で自慢の髭を撫で付けた。

そのアパッチの団はメキシコへ向かったと言われているが、神

出鬼没で軍は何度も出し抜かれているらしい。先程のような目撃証言も多数ある事から、近隣の州に渡って搜索の命令が出ているのだ。奴らを討伐して、初めてこの国の開拓は完成する。

「全く・・・不可解な連中だ。大人しく政府に従えば良いものを・・・。もはやこの国にインディアンが生きる道などありはしないのに」

不可解な事は不愉快に繋がる。グローバー大佐はガタガタと揺れる馬車の中で腕を組み、大きな息をついた。

「まあいい。その男の首を捕れば、俺は英雄だ」

そうなれば、こんな荒野になど用は無い。いずれは政界に打って出るつもりだ。

岩とサボテンしかない不毛の地で、むさ苦しい兵士達の陣頭指揮など自分の柄ではない。祖父も父も軍人であつた慣習に従つたままで。金とビロードに彩られた執務室こそが、自分の本来の居場所だ。彼はそう信じていた

ロッキー山脈の麓、台地の上に建つ砦に着くと、グローバー大佐は八方に偵察隊を出した。

ある日の朝早く、まだ霧が立ちこめる中、キャンプの女達は連れ立って山を下り、メスカルの群生地を目指していた。龍舌蘭とも呼ばれるその植物は、茎が短く地面から直接細長く固い葉が生えているように見える。球根は食用になり、名前の由来となる形状の葉は繊維質で布や糸に出来る。

凜もミアやターニヤや他の女達と同じように、掘り起こしたメスカルを次々と籠へ運んだ。皆で持てる限界の重さになると、採集は終わりにして山に戻る。重たい荷物を運びながらも、女達は皆楽しそうにお喋りに興じる。この重労働の中での楽しいひと時だ。既婚者の女は自分の夫の悪口や子育ての苦労を。未婚の若い女はやはり、気になる男の子の事と自分の容姿についてだ。

「チヨはね、とっても優しいの。明るいいし、何よりもあの目が好き。キラキラしてて」

ミアは籠を持つ凜の隣を後ろ向きに進みながら顔を赤らめる。この中で最年少のミアは木の枝を地面に擦り付け、皆の足跡を消しているのだ。

自分の弟を褒めちぎるミアに、凜は何と言葉を返していいのか分からないまま、ただ苦笑いをしていた。しかし、頬の赤みも取れないうちに、ミアは不満そうに唇を尖らせ柳の葉のような形のいい眉根をぐつと寄せた。

「でも、他にもチヨの事を気に入ってる女の子がいるんだろっなあ。」

それを聞いて凜は、嬉しそうにミアの事を話す千代丸の顔を思い出した。

「大丈夫よミア。千代はミアに夢中みたいだから」
「本当？」

顔をグツと寄せて訊いてくるミアに、凜は自信を持って大きく頷い

た。ミアの顔はさつきよりも真っ赤になり、まるでリンゴのようだ。クルクル変わるミアの表情が可愛くもおかしく、凧が含み笑いをすると、同じ籠の端を持っているターニヤもクスクスと笑った。

「ねえ、リンは？ リンには好きな人はいないの？」

「うん、いないなあ・・・」

サンの事が好きなどとターニヤの前で言えるはずも無く、凧は首を傾げてはぐらかした。

「カイは？」

悪戯を考えている時の子供のような目で訊いてきたミアに、凧は顔をしかめた。

「カイ？ カイの事なんて何とも思っていないわよ。好きでも嫌いでもない。ただ、あの子ちょっと意地悪よね？」

悪意を込めて言うと、ミアはキョトンとして首を捻った。

「そうかなあ？ 私カイに意地悪された事なんて無いけど・・・」

「本当に？ 私にだけ意地悪してるの？」

憤慨した凧にターニヤは声を上げて笑った。「リンもまだまだ子供ね」そう言いたげに温かい目で凧を見ている。

「カイはリンの事が好きだと思っわ」

凧が疑わしそうに見ると、ターニヤはにっこり笑って続けた。

「きつとそうよ。でも、カイ自身もそれを認めるのが恥ずかしくて、ついつい意地悪しちゃうのよ。カイも本当は優しい子なのにな」

「子供っぽいわ。それなら、もっと大人になってから出直して欲しい」

カイの好意を凧が一刀両断すると、ミアとターニヤが顔を見合わせ、て肩をすくめた。きつとカイを気の毒に思っているのだろう。

「じゃあ、ダニエルの事は？」

今度は凧が肩をすくめた。

「ダニエルに関してはカイとは逆ね。私の事なんて全くの子供扱い。二人で街へ偵察に行くたびに『リン、キャンディー欲しいか？

ケーキがいいか？』って訊いてくるのよ。たまにすごく腹が立つ事

があるわ」

ミアとターニヤはそれを聞くと、大きな声で笑った。憤慨して頬を膨らませていた凜も、二人が笑い転げているのにつられて吹き出してしまった。この頃では凜もやつと素直にターニヤの笑顔を見る事が出来るようになっていた。

まだまだ喋り足りないが、キャンプ地に辿り着いてしまった。たくさんのメスカルを抱えてさぞや重かっただろうに、それでも笑顔で戻ってきた女達を見て男達はそのタフさに感嘆し尊敬の眼差しを送る。本当はお喋りに夢中で、重いのがさえ忘れていただけなのだが。そして男達は夕食の支度を手伝おうと、いそいそと火をおこす。採ってきたメスカルを積み上げた女達は、その男達の様子を腰に手を当てて満足そうに眺めながら、さつきまでこぼしていた夫の悪口をこの時ばかりは忘れてしまうのだ。

大地を照り付けていた真っ赤な太陽が西の山塊に吸い込まれようとしている頃、山の麓を馬に跨った一人のインディアンが通り掛かった。三十に手が届きそうな歳のその男は、痩せた顔は前を向いたまま、せり出た額の奥の目を周囲に油断なく光らせていた。

ふと男はある物に目を留めて馬から降りた。瘦身のその男は背も高く、一見すると飄々とした雰囲気醸し出しているが、身のこなしはコヨーテのようになやかで大地に注がれた視線は鷹のように鋭い。

男のブーツの足元にはメスカルがまばらに生えていた。ほとんどがまだ生育しきっていない。男は辺りを見回した。すると、灌木と岩の間にメスカルの葉が一枚落ちていた。それは、ここに生えているメスカルのどれとも違う長い葉だった。

男は近付き、着ていた青いジャケットの袖を窮屈そうに捲り上げると葉を拾い上げ、切り口を眺めた。刃物で断ち切られたかのように

な真っ直ぐな切り口は、まだ乾ききつてはいない。

男は目の前の山を見た。岩肌が？き出しになった幾つもの切り立った崖の間に、まばらな森が点在している。どこにでもあるような山で、何も変わったところは見当たらない。そのメスカルの群生地には、足跡も掘り返した形跡も残ってはいない。男はゆっくりと頷いた。

「まあ、白人どもには分からねえだろうな・・・」

葉を捨てて歩き出し、馬に飛び乗ると走り去った。

次の日の朝、食事を終えた女達は地面に穴を掘り始めた。そこに熱く焼けた石を置き、前の日に採ってきたメスカルの球根を入れて土を被せる。丸一日蒸し焼きにするのだ。そうして地中から取り出した球根の中には熱々の甘い汁が満ちている。そのままなら子供達の大好物だし、汁を蒸留すればテキーラになる。球根自体も食料となり、乾燥させれば保存がきく。

凜はしゃがんで地面から立ち昇る蒸気を楽しげに見つめていた。

「リン」

呼ばれて顔を上げるとサンがいた。

「明日狩りに出るんだが、お前も一緒に行くか？」

凜は少し考えてから首を振った。

「行かない・・・明日もこれで忙しいと思うし・・・」

凜は球根が蒸し焼きにされている地面を指差した。サンは穏やかに頷いた。

「そうか、まあ無理にとは言わないから。それより、あんまりシロップを舐め過ぎるなよ。太って体が重くなるぞ」

サンが憎まれ口を叩くと、凜はむくれた。

「何よ！前は私の事、痩せっぽちって言ったくせに！」

「そうだったっけ？」

サンはとぼけて首を傾げながら戻って行った。

サンが行ってしまつと、凜はふうつと息をついた。やっと以前の

ようにサンと普通に喋る事が出来た。ここまでくるのに、随分と長い時が掛かったような気がする。それでも長く一緒に居れば、また苦しくなるだろう。凜の心の中では、サンはまだ特別な存在なのだから。少し距離を取っておけば、忘れる事は出来なくても、気にならなくなる日が来るかもしれない。凜は自分にそう言い聞かせると、膝をきつく抱きしめて目を閉じた。

次の日、太陽が顔を出す前に戦士達は狩りに出た。

「リンは？」

まだ薄暗い森を歩きながらダニエルがキョロキョロした。

「来ない。今メスカルが蒸し焼きになってるから、そっちで忙しいらしい」

ライフルを背負ったサンが張り出した枝を避けながら答えた。

「リンと話したの？」

驚いた顔でカイが尋ねた。隣を歩くサンは腕を組んだまま、怪訝そうに眉を寄せた顔をカイに向けた。

「は？」

「あ・・うつん。何でも・・ない」

カイは慌てて首を振って俯いた。

後ろを歩くダニエルは残念そうに溜息をついた。

「せっかく弓矢の名手の腕前が見られると思ったのになあ・・。まあ、リンもむさ苦しい男達と狩りをするより、女の子同士で居た方が楽しいのかなあ？ もうお転婆はしないのかなあ・・。」

真剣な顔で悩んでいるダニエルを振り返ったサンとカイは互いに顔を見合わせた。

「何か・・ダニエルってばお父さんみたいだね？」

「そういう心境なんだから・・。」

戦士達はさらに森の奥深くへと分け入って行った。

「ハアツ・・本当にこんな山ん中にいるのか？　メキシコに向かったんじゃないのか？」

太陽が僅かに西に傾き始めた頃、森の中の獣道を二人の偵察隊の兵士が歩いていった。

「斥候からの報告だ。逃げたアパッチかどうかは分らんが、とにかくインディアンがいる事は間違いないらしい」

「気に入らねえ・・何でインディアンの指図を受けなきゃならねえんだ・・」

三十代半ばの兵士がライフルを担ぎ直しながら、草が茂る足元に唾を吐いた。もう少し年長の兵士が油断無く辺りを見回しながらたしなめる。

「おい、大きな声を出すな。仕方がないんだ。あいつらを見つけて出すには、同じインディアンを使った方が手っ取り早い・・ん？」

その時、二人の遙か前方を何かが横切った。カツツと微かな音がした方を見ると、それは一本の矢だった。二人の兵士は足を止めた。ガサガサと森の中が騒ぎ出し、木々の間を逃げていく動物達の茶色の毛皮がチラチラと見える。二人は同時に身を屈めてライフルを構えた。

「驚いたな・・本当にいるとは・・」

年長の方の兵士のこめかみを一粒の汗が伝い落ちた。

「クソツ！　外した！」

カイが弓を握ったまま悔しそうに歯を軋らせた。その横でサンは大きな溜息をつく。

「はあ・・やっぱりリンを連れて来た方が良かったかな・・」

聞き捨てならない言葉にカイは太い眉毛を吊り上げてサンを睨んだ。サンも負けずにカイを見返す。

「何か文句があるのか？ あんな至近距離で外しやがって。・・・あ、そうか！」

サンが何かを思いついたようにニヤツと笑った。

「お前リンの事が好きなんだよな？ 男としてのプライドが傷付いたか？ 悪い、悪い」

「べ、別に好きじゃねえよ、あんな奴！ お、女だなんて思ってねえし・・・」

顔を真っ赤にして否定するカイにサンは続けた。

「そうかあ？ まあ、俺から見ればまだちょっと子供っぽいけど、もう少しすれば割といい女になると思うぞ。リンもあと数ヶ月で十六だろ？ そうしたら一人前の女として認められるし」

「興味ないね！」

なおも突っ張り続けるカイをからかうのが楽しいサンは、腕をカイの首に回して顔を近づけた。

「気取るな、気取るな。何だったら俺が、女の喜ぶ台詞でも教えてやるつか？ ん？」

凜の気持ちを知らないとはいえ、あまりにも無神経なサンの言葉にカイは猛烈に腹が立った。

カイは肩を弾いてサンの腕を払いのけると、うんざりして顔を背けた。

「もういいよ！ 放つといてよ！」

「何怒ってるんだよ？」

「うるさい！ 結婚したからって調子に乗るな！」

立ち上がりざまに怒鳴ったカイに、サンは驚いて目を見開いた。

「な、何だお前・・・？」

年長者に向かつて罵声を浴びせるなど言語道断である。しかしカイはサンに背を向けて森の中を大股で歩いて行く。

「おい！ どこへ行く？」

カイは振り返りもせず、投げやりな返事をよこした。

「あの鹿、仕留めりゃいいんだろ？ 一人でやるよ！」

「無理だ！ 戻れ、カイ！ 深追いするな！」
その時、サンの耳に「ガチツ」っという金属音が微かに聞こえた。
首を巡らせ音がした方に目をやると、茂みの間から森の中では異質
な青い色が目に入った。そしてその先に木漏れ日を受けて鈍く光る
銃口。それはカイに向けられていた。

カイは気付いていない。サンは走り出した。

「アパッチだ……。まだ若いな、十五か十六のガキだ……」

戦闘用の鉢巻と両頬を繋ぐ黄色の条を確認して、ライフルを構え
た年下の兵士が舌で乾いた唇を湿らせながら呟いた。

「脚を狙え。殺すなよ。生け捕りにして砦に連れて帰り、その後仲
間の場所まで案内させる」

狙いを定めながら年長の兵士の指示に頷き、引き金を引いたその
時、もう一人のアパッチの男が標的の前に飛び込んできた。

「サン！」

サンに突き飛ばされたと同時に銃声が鳴り響き、驚いたカイは地
面に手をついたまま叫んだ。ガクツと膝をついたサンの右の大腿部
が真っ赤に染まっている。カイはサンに駆け寄った。

「もう一人いる！ まずい！ 殺せ！」

年長の兵士が立ち上がり、ライフルを構えた。

「クソツ……」

歯を食いしばりながらサンは背中中のライフルを手にとると構えて
兵士に発砲した。それと同時に兵士も引き金を引く。

サンが撃った銃弾は年長の兵士の額を貫いた。兵士はライフルを
落とし、音もなく後ろの草の中に倒れた。兵士が撃った銃弾はサン
の腹を捉えていた。硝煙が細く立ち昇るライフルを握ったまま後ろ
に倒れかけたサンを、背後からカイが受け止めた。

「サン！ サン！」

「カイ……このバカ……早く……逃げる……」

ゴボツと血を吐きながらサンはカイを睨んだが、カイはサンを抱き締めたまま離れようとしない。

額を撃たれ目を大きく開いたまま倒れている仲間を、呆けた顔で凝視していた兵士はハツと我に返った。

「畜生！ 二人とも殺してやる・・・」

兵士はライフルを構えた。撃たれたインディアンはもう虫の息だ。その横で泣き喚いている少年の頭に狙いを定めた。その時、右側にある茂みが揺れたかと思うと、右手首に重い衝撃を感じてライフルを落とした。

突然の事に驚いた兵士が顔を上げると、傍らにナタを持ったアパツチの男が立っている。そして、今まで経験した事のない痛みに吐き気を催した。顔を下に向けると、ライフルと一緒に地面に落ちている自分の手が見えた。

「う・・・うわぁー！」

兵士は絶叫すると、血を噴出している右の右手首を左手で抱え込んだ。

「サン！ 嫌だぁ！ サン！ 死ぬなぁ！ サン！ サン！」

カイの泣き叫ぶ声が森の中に響いている。銃声が聞こえて駆けつけてきたダニエルは、もがき苦しむ兵士の横でナタを持ったままそちらへ顔を向けた。

サンは既に目を閉じており、力無くカイに身を委ねていた。ダニエルはゆっくりと、手首を押さえて蹲る兵士に向き直った。

ダニエルは兵士の肩に足を掛けて強く押した。兵士はもんどりうって仰向けに倒れた。

「あ・・・あ・・・」

兵士は呻きながら交互に膝を立て、必死に後退さろうとした。ダニエルはその左足の膝を思い切り踏みつけた。

「ああー！」

グシャツと膝が砕けた音が響き、兵士はのた打ち回った。ダニエル

は兵士を跨ぐと、全くの無表情で見下ろした。しかし体中からは煮えたぎるような激しい憎悪を漲らせている。

「ハアツ、ハアツ・・・」

苦痛と恐怖に顔を歪めた兵士は真正面からダニエルと向き合った。ダニエルの顔を凝視した兵士は驚いたように目を見開いた。

「お、お前を・・・知ってるぞ・・・」

手首から先の無い右腕を震えながらダニエルに向けた。

「だろうな」

ダニエルは抑揚のない声で応えると、手にしているナタを握りなおして一步前へ出た。兵士は顔を引きつらせながら、泣き出しそうな声で命乞いを始めた。

「ひっ！ や、やめろ！ やめてくれ！ 助けてくれ・・・ああ、神よ・・・」

「神か・・・」

吐き捨てるようにその名前を口にしたダニエルは、空を見上げて声を張り上げた。

「神よ！ 居るなら出て来い！ 出て来て俺を殺せ！ お前の息子が助けを求めてるぞ！」

ダニエルの叫びを飲み込んだ空は青いままで、すぐに静けさを取り戻した。鳥さえも鳴くのを止めている。ダニエルはゆっくりと兵士に向き直った。

「残念だったな・・・」

唇を歪め残忍な笑顔を浮かべると、ダニエルはナタを頭上高く振りかざした。

凜はターニヤとミアと共に地面に掘られた穴を覗き込んでいた。革のグローブを嵌めたターニヤが熱い球根を取り出した時、狩りに出ていた戦士たちが戻って来た。

ターニヤは立ち上がり、美しいその顔に弾けるような笑みを浮かべた。が、次の瞬間その笑顔は凍りつき、持っていたメスカルの球根を落とした。

凜はしゃがんだまま不思議そうにターニヤを見上げた。何かが変わった。いつもなら帰って来た戦士に皆が労いの言葉を掛け、陽気にそれに応えるダニエルの声が聞こえるはずだった。今は誰も言葉を発する事も無く、皆呆然と立ち尽くして帰って来た戦士達を見ている。

ターニヤの隣にいるミアが息を飲み、震える手を口元に当てた。胸騒ぎを覚えながら凜は振り向き、その悪夢を目にした。

「サン・・・」

呟いたターニヤはフラフラとした足取りで、ダニエルが抱えているサンの亡骸に近付いた。

「すまない・・・ターニヤ・・・」

ダニエルが呟くと、ターニヤは黙ったまま首を振った。カイはその横で俯いたまま震えている。

誰かが敷いた毛布の上に、静かに横たえられたサン。その周りに皆が集まり嗚咽の声を洩らしている。凜はどうする事も出来ずに、立ち尽くしてその光景を見ていた。ただ、“この悪夢から早く目覚めればいいのに・・・” そう思っていた。

乾いた血と土がこびりついて汚れたサンの顔を、ターニヤが涙を流しながら濡れた布で愛おしそうに拭いていた。凜はサンを挟んでターニヤの向かいに跪くと、新しい布を用意してターニヤに渡した。凜がそっと触れたサンの手は信じられないほど冷たくなっていた。

初めての狩りの時、涙を拭いてくれたこの手。その後の宴の見張り台で頭を撫でてくれたこの手。あの温もりが、この手に戻る事はもう無い。

涙がはらはらと落ちてきた。凜はそれを拭う事も出来ずに、自分のスカートの膝をギュッと握り声を押し殺して泣き出した。

サンの埋葬が済んだ後も、その死を悼む嘆きの声が止む事は無かった。それは大きなうねりとなり、葬送の詠唱と共に森を包んだ。

正直で真つ直ぐなサンは、ここの皆から愛されていた。子供が好きで、皆を守るため責任感も人一倍強かった。肉親全員を軍に殺されたサンにとつて、ここの皆は家族同然だったのだろう。

悲しみに暮れるターニヤ。ターニヤの父である酋長のレッドベアが娘を強く抱き締めていた。戦士の妻になつたからには、それなりの覚悟はあつたのだろうが、こんなにも早く夫を失う事になるとは誰にも予想し得なかつたに違いない。

“いや、違う。きっとウナだけは、こうなる事が分かつていたんだ。”

凜は思い出した。だからこそ、結婚の報告をしに来たターニヤに早く子供を作るように薦めたのだ。

その証拠に、サンの死を知らされた時、ウナは驚いてはいなかった。ただ悲しみに満ちた嘆きの声を上げただけだった。

人の魂が見える巫女。しかし運命を変える術は持たない。それはどんなに辛い事だろうと凜は想像した。サンの魂が永くこの世界に留まれない事が分かつていても、どうすることも出来なかつたのだろう。

父親から離れたターニヤは、サンとの新居であつたティッピーに火を放つた。それは、遺産相続を許さない彼らの風習だった。仲間の死によつて誰かが得をするのを嫌うためだ。ターニヤはティッピーの外に干してあつたサンの服も、サンの為に縫っている途中だったモカシンも燃え盛る炎の中に投げ入れた。形見は無くともサンが

生きていた証は、皆の魂に刻まれているという事だ。

それでも凧はサンから貰った赤い革の鞘に収められたナイフを火にくべる事はどうしても出来なかった。決して手の届かない初めての想い人を凧は忘れるはずが無い。

“このナイフを手離したら、きつとサンは私の存在などすぐに忘れてしまっただろう・・・”

そう思えてならなかったのだ。

夜が明ける気配が漂い始めたが、ほとんどの者は自分のティッピーに戻る事も無く焚き火の前でまんじりともせず座っている。朝が来ても悪夢が覚める事はない。

ターニャは燃え尽きようとしているティッピーの前で立ち尽くし、ウナはレッドベアの隣でずっと歌を詠唱している。千代丸とミアはぴつたりと身を寄せ合って手を握りながら涙を流していた。

焚き火の前で丸太に座っていた凧がふと顔を上げると、カイのティッピーの前でカイの父親が困った顔をしてウロウロ歩き回っているのが目に入った。隣で俯きながら火を見つめていたダニエルもそれに気付いて立ち上がり、カイの父親に近付いて声を掛けた。

カイの父親は昔は戦士だったが今は肺を患っており、あまりティッピーから出て来る事は無かった。カイの母親は、カイを産んですぐに亡くなっただけらしい。

ダニエルは深刻な顔で戻ってきた。

「どうしたの？」

「カイが・・・どこかに行っちゃまって戻ってこないらしいんだ。埋葬の時にいたのは知ってるんだが・・・」

そっぴいえば凧もずっとカイを見掛けていない。ダニエルは顎をさすりながら辺りを見回した。

「全く・・・斥候がウロウロしてるかも知れないのに・・・リン、カイの行きそうな所、心当たりないか？」

凧は首を傾げた。

「え？ そんなの分かんない……。あ、でも、もしかしたら……。」
凜とダニエルは朝霧の立ち込める薄暗い森の中へ入って行った。

小川に着く頃にはすっかり明るくなっていて、東の空にある太陽が木々の間から柔らかな光を放っている。

「やつぱり……。あそこ……」

川岸のメスキートの横で膝を抱えて座っているカイの後姿が、手前にある灌木の茂みの隙間から見えた。

「おい、カイ！」

小川に近付きながらダニエルが呼び掛けると、カイはビクツとして振り返った。泣いていたのか汚れた顔、サンの血が付いたままの服。普段は猛々しく見える戦闘用の鉢巻と両頬を繋ぐ黄色の条が、今その弱々しい表情とは全く釣り合いが取れていない。戦士というよりも、まるでピエロだ。

「一晩中ここにいたのか？ 危険だぞ。それぐらい分かるだろう？」
ダニエルの叱責にカイは顔を背けた。

「……俺の事なんかほっといてくれよ。本当なら……。俺が死ぬべきだったんだ……。何でサンは……。俺なんか助けたんだよ？ 皆だつて、そう思ってたんだろ？」

ダニエルはカイの腕を乱暴に？んで立ち上がらせた。

「冗談じゃない……。それじゃあ、サンは無駄死にだったのか？ ふざけるな！」

ダニエルの厳しい眼差しに、カイは泣きそうな顔で目を逸らした。普段の鼻っ柱の強さは完全に影を潜めている。そんなカイの両肩を？んでダニエルは強く揺すった。

「お前が必要のない人間なら、サンはお前を助けたりはしなかった！ お前は戦士なんだろう？ だったら、お前の命はもうお前一人の物じゃない！ 自覚しろ！」

「うっ……。うっ……。」

カイは感情が昂ぶり嗚咽を洩らした。流れ出した涙を見せまいと、

一生懸命顔を背けようとしている。ダニエルがカイから手を離し背を向けて、もと来た道に戻り始めた。

「さあ、戻るぞ。ついて来い！」

カイは黙ったまま下を向いて動こうとしない。凜は歩いていくダニエルの背中とカイを交互に見た。

「ねえカイ、戻ろうよ……。お父さんが心配してるの……」

しばらく口を一文字に結んでいたカイは、踵を返すとダニエルの後を追った。

森の中を縦一列に歩きながら三人ともが押し黙っていた。一番後ろを歩く凜はボロボロのカイの背中を眺めて溜息をついた。きつとその心の中もボロボロに違いない。どんな言葉で慰めたとしても、きつとカイは一生背負っていくのだろう。

サンの死は、誰の心にも影を落とした。そしてそれが全ての始まりであり、終わりでもあった。

その夜、戦士たちはレッドベアのテイピーーに集まった。

「きつとあちこちに偵察隊がいるはずだ。今急いでここを出るのは得策じゃない」

老練の戦士の言葉にレッドベアは頷き、ダニエルへ顔を向けた。ダニエルが口を開いた。

「俺とサンが殺した偵察隊を探しに来るはずだ。もし奴らがここを見付けたからつてすぐに攻撃はしてこないだろう。山の中でやみくもにアパッチに戦いを仕掛けてくるほど軍も馬鹿じゃない。その時は……大勢で来るはずだ」

それを受けて一同が頷いた。

レッドベアは顔を天井に向けた。

「まずはインディアンの斥候が来る。もう、ここを突き止めているかも知れんな……。姿の見えない奴らは、今この瞬間も我々を見張っているかも知れない」

サンの死から数日のうちに、その日はやって来た。

あの日から男達はもろろん、女達の間にも緊張が高まっていた。キャンプ地の上の崖では、昼夜問わず戦士が交代で見張りに就いていた。その他の者も鳥達が不自然に飛び立つ音、馬の蹄の音に火薬の匂い、そういった物がしないか神経を研ぎ澄ました。サンを失った悲しみに打ちひしがれながらも、いつまでもそこに留まっているわけにはいかないのだ。

その日の夕暮れ時、見張り台の戦士はそれを見た。遠くの平原からこちらに向かってくる騎兵隊が上げる大きな砂煙を。

見張りの戦士は崖の上から鷹の鳴き声を真似て注意を促し、兵士の数と位置を腕を振って示した。皆は大急ぎで身支度を始めた。エイピーを畳み、焚き火も土に埋めた。草や木切れを被せると、今までの生活の痕跡は瞬く間に消えた。

レッドベアと戦士達が向かう先を確認する。肩から弾薬帯を掛けたダニエルは、ライフルを馬の鞍に差しこみ飛び乗った。皆が徒歩で逃げる間、全く違う方向に蹄の跡を付けて軍の追っ手を混乱させるのだ。ダニエルはその供に足が速くてスタミナのある千代丸を選んだ。

老人と病人、食料や生活必需品を馬に乗せる。その他の者は歩きで移動をするのだ。二人ずつ縦に並び、等間隔に戦士を配置して出発した。列の一番後ろの者は足跡を消しながら歩いていく。凜も弓矢を持たされ、小さな男の子と手を繋いでいた。木の根やぬかるみに注意しながら、列を乱さぬように整然と歩いていく。

サンが眠るこの山を離れる事は、凜にとって辛かった。

“サンの魂はもう旅立っただ。あそこに眠っているのはサンの抜け殻なんだ。”

そう自分に言い聞かせながらも、何度も何度も振り返りながら足を

進めた。

凜達が山の麓に着く頃には夜の帳が下りていた。どこからともなくコヨーテの遠吠えが聞こえる。この山からアパッチが逃げ出した事に気付いたのは彼らだけだ。そこから闇に紛れて北の方角へと向かった。

その頃ダニエルと千代丸は馬に乗り、地面に細かく蹄の跡を付けながら南へ向かっていた。今、兵士達は山の西側に居る。山に入った気配は無く、おそらく今夜は麓で野営を張り、明日の朝を待つて搜索を始めるのだろう。ゲリラ戦を最も得意とするアパッチに対しては夜目の利かない状況で、しかも彼らの懐である山に入つての戦鬪は圧倒的に軍にとっては不利となる。

そして朝が来て軍隊が山に入り、ダニエルと千代丸が付けた蹄の跡を見つける頃には、凜達は三十マイル以上離れた溪谷に身を潜めているのだ。時間帯も味方をした。隠れる場所の無い平地を夜に移動する事が出来るのだ。時間を無駄にする事無く。

夜通し歩き続ける事は辛かったが、それに文句を言う者はいない。軍の急襲を受けた経験のある者達だ。軍隊の恐ろしさは分かっている。

それでも足が止まりそうになる者には戦士が駆け寄り、肩を？んで激しく叱責する。女子供とて容赦はしない。

「足を止めるな！ 歩け！ 生きるんだ！ 歩き続ける！」
普段はとても温厚で物静かな男の怒鳴り声に凜は驚いていた。

以前サンが言っていた通りだ。

「体力が無ければ逃げられない。逃げ切れない者は死ぬしかない」
凜は上がってくる息を整えた。自分と手を繋いでいる男の子を見る。機械的に足だけは動いているが、せいぜい五歳ぐらいの子供ではやはり辛いのだろう。疲れと眠気でボンヤリとしている。凜はその子を励ますように話し掛け続けた。それは自分のためでもある。幼い頃に母から聞いたおとぎ話をしてやると、男の子の虚ろだった顔に

表情が戻った。目を輝かせ、笑顔を浮かべて凜の話に頷いている。足取りも軽くなったようだ。その様子をみて凜の心も軽くなった。生き抜くためにサンが教えてくれた事を無駄にしたいくない。月だけが照らす荒野を男の子と笑顔を交わしながら、遙か前方にそびえる切り立った溪谷を目指した。

ダニエルと千代丸は山から遠く離れた南の岩塊の入り口に辿り着くと、そこで乗っていた馬を放した。その後は歩きで東に向かい、僅かな水が流れる谷の底を北へ向かって走って行った。

夜が明けると岩陰に身を潜め日没を待った。その間、持って来た僅かな干し肉の切れ端で空腹を紛らわし、水囊の水で喉を潤しながら。辺りが闇に沈めば、昨夜凜達が移動した平地を走って集合場所へ向かうのだ。風の匂いを嗅ぎ、自身をそれに同化させる。人目に付かぬように気配を消しながら、夜の移動のために身体を休めた。

その頃グローバー大佐は苦虫を噛み潰したような顔で、傍らに立つインディアンの斥候長を睨み付けた。トパハと名乗るその男は、以前メスカルの群生地を調べていたインディアンだ。しかしグローバー大佐にとつて、その男の名前などどうでも良かった。獣に名前など必要ない。グローバー大佐は常にそう思っている。自分と同じ軍服を着てはいるが、この男も例外ではない。

この山にインディアンがいると言ったのはこの斥候長だ。三百人の兵士を使って山狩りを行ったにも関わらず、インディアンはおろか、奴らが居た形跡すら見つけられない。

「どういう事だ、これは？」
怒りを滲ませたグローバー大佐の詰問に、その斥候長は萎縮するでもなく平然とした顔で答えた。

「逃げられたんですよ」
斥候長は薄暗くなってきた森の中を見渡し、紙巻煙草に火を点けた。肩をいからせているグローバー大佐をチラッと一瞥すると、悠々と

煙を吐き出して続けた。

「あんな行軍で来て、山の麓に野営を張って……逃げてくれって言ってるようなもんだ」

自分の戦略を否定され、グローバー大佐は額に青筋を立てた。一昨日の晩には州知事との会食があつたのだ。自分のキャリアのためには大切な晩だつた。それに皆からこの山へ来るのには半日掛かる。

麓で野営をし、朝を待つ事は仕方無かつたのだ。エリートとして生まれたるのしがらみが、インディアンなどに理解出来るはずはない。グローバー大佐は、初めて会つた時からこのインディアンの斥候長が気に入らなかつた。前任者との契約があるからと言われたが、インディアンなど信用できない。きつと最初からここにインディアンなどいなかつたに違いない。

“こいつは俺を陥れるために、いい加減な事を言っているのだ……何を企んでる？”

煙草をくゆらせながら、しゃがんで小枝や落ち葉の積もつた地面を眺めているトパ八斥候長に銃を向けようとした時、兵士の声が響いた。

「蹄の跡を発見しました！ こちらです！」

兵士が示した場所には、草や落ち葉を踏みしめた相当数の蹄の跡と馬糞も落ちていた。それは森の南方へと続いている。グローバー大佐は興奮に身体が震えるのを憶えた。さっきまでトパ八斥候長に疑いを持っていた事はすっかり忘れていた。

「よし、追跡だ！ 奴らは馬で逃げた！ 蹄の跡を追え！」

グローバー大佐は興奮した声で叫んだ。勝機が見えた。あの逃げたアパッチ『赤い悪魔』は追い詰めたも同然だ。メキシコを恐怖に陥れ、アメリカの軍隊を翻弄し続けているその悪魔も、こんな形で尻尾を出すとは……。グローバー大佐はほくそ笑んだ。

「そんな物いくら追つても無駄だ。下手すりゃ、待ち伏せされて全滅だ」

せつかく高まつた気概にことごとく水を差してくるトパ八斥候長の

言葉を、グローバー大佐は顔をしかめて無視した。

兵士達はダニエルと千代丸が付けた蹄の跡を追って南方に向かつて山を下りた。そこからの追跡を明朝に持ち越し野営を張った頃、ダニエルと千代丸はそこから北へ十マイルも離れていない場所を走っていた。

千代丸は弱音も文句も吐かず、ダニエルの指示通りに走り続けた。別行動をしているミア達が気になって仕方が無い。走るのが辛いとは思わなかった。皆とまた会うために、生きて集合場所まで辿り着かなければいけない。その気持ちだけだった。

ダニエルと千代丸は、朝が来る前に集合場所に到着する事が出来た。切り立った岩が乱立する渓谷の中、風から焚き火の匂いがした時には二人同時に安堵の溜息が出た。しばらく岩の上に留まり、追っ手が無い事を確認して皆と合流した。

子供以外のほとんどの者が起きていて二人を出迎えた。皆と抱き合いながら、一人も命を落とすことなく逃げ切った事を喜び合った。

グローバー大佐率いる一隊は馬の蹄の跡を追跡し、それが途切れた岩塊一帯の搜索を始めた。しかしどこにもインディアンはいない。鞍の付いた馬が二頭、それぞれ違う場所で草を食んでいるのを発見しただけだった。

斥候長が言った通り、この搜索が無駄足だったと気付いた時には、凜達は元居た山から百マイル以上離れた森の中まで移動を終えた後だった。

木立の中に立つティッピーから出た凜は、大きく息をして森の空気を吸い込んだ。あれから数ヶ月が経ったが、キャンプの中はまだ緊張感が漂っている。

しつこい軍隊は追跡の手を緩めない。偵察隊の姿を見掛ける事もあり、既に二回も移動を繰り返してきた。インディアンの行動パターンを熟知する斥候によって、包囲網は確実に狭まってきていた。そして一ヶ所に長く留まれないという事は、穀物も植える事が出来ない。備蓄の食糧が底をつけば、飢えが深刻な問題として襲い掛かってくる。敵は軍隊だけではなかった。

そんな日々の中でも、彼らは楽しみを忘れない。その日は凜にとって特別な日だった。十六歳になった凜に成熟の儀式が行われるのだ。日が落ちると高く焚かれた火の周りに独身の男女が集まった。凜はこの日のために用意した綺麗なビーズが散りばめられた服を着ている。

男と女がそれぞれに輪を作り、焚き火の周りを回る。その外側では既婚者が儀式を盛り上げるために手拍子をし、足を踏み鳴らして歌を歌う。喪に服しているターニヤも既婚者の中で歌っていた。

歌が止むと立ち止まり、内側を回っている男達の中からダンスの相手を一人選ぶのだ。凜が誰を選ぶのか、誰もが笑顔で見守っている。焚き火の前ではおどけたダニエルが、してもいない蝶ネクタイを整える仕草で凜に自分を売り込み皆の笑いを誘っていた。その隣ではカイが顔を俯かせているが、緊張に揺れる瞳で凜の一挙手一投足を見つめている。

クスクスと笑う女の子達に肩を叩かれ、はにかみながら凜が一歩前へ足を踏み出した時だった。その場に突然緊張が走った。

暗い森の中から、青い軍服に身を包んだインディアンと白人の将校が現れた。皆、すぐに行動を起こした。女達は子供達を庇い、男

達はナイフを抜く者もいれば、ライフルを手に取る者もいた。目の前にいたはずのダニエルも、いつの間にか姿を消していた。

「リン」

不意に呼ばれて振り向くとダニエルから弓矢を渡された。ダニエルはライフルを持ち、焚き火に背を向けて辺りに油断無く目を走らせている。

軍服のインディアンは手を揚げて、交戦の意思はないことを示した。その後ろにいる白人の将校も、嫌悪感？き出しの顔をしてはいないもの、腰に下げた銃に手を掛けてはいなかった。その将校を守るように、やはり白人の兵士が二人、手にしたライフルの銃口を下に向けて歩いてくる。

「この酋長との会談を申し入れたい。こちらは連邦政府軍グロバー大佐だ」

軍服のインディアンがアパッチの言葉で叫んだ。皆は突然の来訪者と一定の間合いを取りながらその動きを見張っている。

凜は矢羽を弦に掛け、鏃を下に向けたままインディアンの斥候を見ている。

「あ、あの人・・・インディアンなのに、どうして軍隊に・・・？」

凜は背中合わせに立っているダニエルに小声で訊いた。

「斥候だ。金で雇われてる。隠れてるインディアンを捜すのは、同じインディアンじゃなけりゃ無理って事さ」

「どうして、そんな事を・・・？」

「きつと居留地暮らしが退屈で仕方ないんだろう。さもなきゃ、家族を人質に取られてるんじゃないか」

どんな気持ちで軍隊に手を貸しているのか、その男の全く表情の無い顔からは推し量る事は出来ない。

それまで丸太に座っていたレッドベアがゆっくりと腰を上げた。

「大事な儀式の途中だったんだ。邪魔をしないでもらいたかった」

レッドベアの穏やかな、それでいて毅然とした態度の抗議に斥候は丁寧に詫びを入れた。

「それは申し訳ありません。ですが、こっちの兵士もあなた方を捜すのに疲れてヘトヘトでしてね、お時間を割いていただけるとありがたい」

レッドベアはいつもの思慮深い目で斥候と大佐をしばらく見た後、自分のティッピーに招き入れた。

会談とはいうものの、内容は一方的なものだった。この土地は連邦政府が所有しており、今現在不法に占拠されている状態だということだ。即刻の立ち退きを命じられた。

「君達が安心して住める場所の用意はある」

グローバー大佐の言葉をそのまま斥候はレッドベアに伝えた。

そこでは食料の配給もあるという。これは文化的な生活を拒否し、政府に反旗を翻し続けるアパッチ族に対する懐の深い政府からの恩恵だという事だ。

しかもグローバー大佐はこう付け加えた。

「これは提案ではなく、政府の決定事項である。受け容れない場合は武力による排除も辞さない」と。

もはや選択肢は無かった。要求を突きつけるとグローバー大佐と斥候は二人の兵士を引き連れて引き上げて行ったが、この山一帯を軍が包囲しているのは皆分かっていた。

すでに自分達が囚われの身なのだという事を凜は理解した。

そのまま凜の儀式は中止となった。男達はレッドベアのティッピーに集まり、これからの事を話し合った。

皆は逃げ続ける生活に疲弊していた。だからこそキャンプ地に軍の侵入を許してしまったのだ。政府の要求に応じなければ戦いが起きる。この状態では多くの者が死ぬ。女子供だろうと軍隊は容赦しない。皆殺しになるだろう。元々政府はそれを望んでいるのだ。インディアンが死滅する事を。

レッドベアは目を閉じて細く長い息をついた。妻を軍に奪われ、

そして娘の最愛の伴侶だったサンをも失った。もうこれ以上、誰も失いたくはない。

レッドベアは目を開けると、静まり返った男達の顔を一人ずつ見つめた。男と言っても年端も行かない少年も多い。レッドベアは静かに口を開いた。

「降伏するしかない・・・」

女達が集まったティピーでは、レッドベアの意思を受けてざわめきが広がった。「もうそうするしかない」と頷く者、嘆くように首を横に振る者。

「レッドベアは死ぬ気だよ」

ウナの一言で皆のお喋りが止まった。ウナは相変わらず腰を屈めて座り、長い白髪の三つ編みの先端が床に輪っかを作っている。ウナは呟くように続けた。

「デルシャイ、マンガス・・・降伏したアパッチの酋長がどうなったかは、皆分かっているだろうか？」

和平を求め、軍に白旗を掲げたにも関わらず殺された別の部族の酋長の名前を出した。皆は表情を曇らせて俯いた。

「戦いになれば多くの死者が出る。降伏して政府が用意した居留区にいけば、何とか生きていく事は出来る・・・。レッドベアは自分の命と引き換えに、皆が生きていく道を開こうとしているんだ」

全員が押し黙っている。父親の決意にターニヤは声を出さずに身体を震わせて泣いていた。

その時、「うぐっ、うぐっ」という声がかして、全員がそちらに目を向けた。まだ一歳にも満たない赤ん坊に母乳を含ませている女がいる。赤ん坊は目を閉じ恍惚とした表情で懸命に唇を動かしている。誰もがその赤ん坊に魅せられていた。その柔らかい頬を銃火に晒す事は出来ない。

政府に投降する事が決まり、ティピーに戻ったが凜はどうして

も眠る事が出来なかった。きつと皆が眠れぬ夜を過ごしているに違いない。横になっていても胸がざわつき、息苦しくなった凧はそつとティッピーを抜け出した。

外に出て頭上を見上げると、木々の隙間から大きな三日月が見える。静まり返った暗い森の中、その中に一つだけ煌々と燃えている焚き火があつた。そこに人影が見える。ダニエルだつた。

ダニエルは焚き火の前の丸太に座り、膝を抱えてぼんやりと火を見ていた。凧が近付き、隣に座るとダニエルはゆっくり顔を向けた。「何だ？ 眠れないのか？」

凧が頷くとダニエルはフツと笑つた。

「まあ、そりゃそうだろうな・・・」

ダニエルは肩から毛布を被っているが、その中はジャケットにスラックスを穿いていて、まるで街に偵察に行く時のようだつた。

「ねえ、ダニエル、まさか・・・」

不安になつた凧の問いに、ダニエルは頷いた。

「そつだ。俺は皆とは一緒に行かない」

愕然として言葉を失う凧にダニエルは顔を向けた。

「俺、お尋ね者なんだよ。俺の首に賞金が掛かつてるんだ」

そつ言つて親指を自分の喉の前に立てると、ウインクをしながらスツと横へ引いた。

凧は訳が分からず一瞬眉をひそめたが、一番最初に会つた時の話を思い出した。インディアン寄宿学校を逃げ出した後、無法者と一緒になっていた事を。

「一体、何をしたの？」

「やめとけ。血生臭い話は聞きたくないだろ」

凧が戸惑いながら頷くと、ダニエルは続けた。

「皆と一緒に行って、居留地に着く前に俺は絞首刑台行きだ。レツドベアも分かつてくれた。それに、俺を匿つてた事が分かれば、ここも皆もどうなるか・・・」

凧は以前目にした街の広場の絞首刑台を思い出した。いつも陽気

なダニエルが、あんな所に吊るされている姿など凜は想像したくない。

そしてダニエルがいなくなるという事に激しい不安を覚えた。これからどうなってしまうのか。どうして軍や政府はここまで彼らを追い詰めるのか。

「ねえダニエル、どうしてなの？ この国はこんなに広いのに、どうして私達には行き場が無いの？ どうしてあの人達はインディアンを放つといてくれないの？」

凜の問いにダニエルは「うーん」と唸ってから静かに口を開いた。

「きつと、あいつらは俺達を可哀想だと思いたかつたんだ」

「どういう事？」

「人間は大抵、他人よりも優位に立ちたいと思うものだろう？」

凜は黙って頷いた。

「どんなクズでも、自分より蔑むべき存在を見つけると安心できるもんなんだよ。あいつらは俺達にそういう存在でいてもらいたかつたんだ。あいつらの言うところの文明ってやつに背を向けた俺達が許せないんだ」

「許せない？」

ダニエルは首を傾げて苦笑いした。

「許せないってのは、ちょっと違うかも知れないな……。あいつらは自分の見たいものしか見ようとしないうし、信じたものしか信じようとしないうし。あいつらとは違うものを信じて、あいつらには見えないものを見る俺達に恐怖を感じるんだ」

凜はこの国に来た時、トビーや新聞などから得た知識でインディアンは野蛮だと認識していた。しかし今では軍人達の方が遙かに恐ろしいと思っている。ダニエルは続けた。

「恐怖は敵意に変わったんだ」

「自分達と違うから・・・？」

ダニエルは頷いた。

凜は俯いて、震える自分の手を握り合わせた。そんな人達の管理

下で、これからどうやって生きていけばいいのか、そもそも生きていられるのか。凜は震える唇から途切れ途切れに息を吐き出した。

「リン」

ダニエルは凜の肩に手を置くと、顔を覗き込んだ。

「お前は遠い国から来て、今まで色んな事があつたんだろ？ それでも今こうしてここで生きてる。その事に自信を持って。自分の判断力を信じるんだ」

凜が顔を上げるとダニエルは身体ごと凜に向き直った。

「いいか、あいつらに虫けらのように扱われても卑屈になるな。あいつらはお前に金や物をちらつかせて甘い言葉を掛けてくるかも知れない。でも、そんなものに惑わされるな。そんなものを追い求めるようになれば、お前の魂の自由は無くなっちまう」

ダニエルは自分の胸を拳で叩いた。

「魂はいつだって、自由でなくちゃいけないんだ」

頷いた拍子に零れた涙が凜の頬を伝い落ちた。

「ありがとう、ダニエル。どうか無事で・・・」

ダニエルは凜をきつく抱き締めた。

「リン、会えてよかった・・・」

抱き締めるダニエルの腕の力で、これが今生の別れになる事が凜には理解できた。

朝霧が立ち込める中、凜がティピーを出る頃には既にダニエルの姿は消えていた。森は静まり返っているから、包囲している軍隊の警備の目を上手くかいくぐる事が出来たのだらう。

キャンプ内は重い空気に包まれていた。皆は何をするでもなく自分のティピーから出て丸太に座っていたり、落ち着かない様子でウロウロと歩き回ったりしていた。子供達だけが、いつものようにとうもろこしのパンで朝食を摂っている。

そんな中、レッドベアは馬の手綱を引き、軍の砦に出頭するためキャンプを後にした。その後ろにはターニヤが続いた。

ターニヤが最初に「一緒に行く」と言った時、レッドベアは首を横に振った。しかし父親の胸の内を分かっているターニヤは頑として「行く」と言い張った。その強い決意に満ちた眼差しに、ついにレッドベアは折れて娘に同行を許した。そんな二人に誰も言葉を掛けることも出来ず、その後姿を見送った。

山を下りる途中で五人の騎馬兵がレッドベアとターニヤを囲み、丸腰の二人にライフルの銃口を向けたまま砦へと追い立てた。

砦に入るレッドベアの威厳に満ちた堂々とした姿に衛兵達は、ある者は畏怖を感じて黙り込み、ある者は顔をしかめて罵声を浴びせ、その足元に唾を吐いた。そしてレッドベアの後ろを歩く美しいターニヤを、口元に歪んだ笑いを浮かべて眺めている者もいた。

「インディアンにしとくにや、もったいねえな・・・」
そんな囁き声が聞こえた。

レッドベアは自分が率いる民のために最善を尽くすつもりだった。居留地には耕せる土地をあてがって欲しいと。そこでとうもろこしや豆を植えて生きていけるようにと。政府の施しは受けずに、何とか自活の道を切り開こうとした。

命を掛けたレッドベアの嘆願をグローバー大佐は冷笑を浮かべて

退けた。

「合衆国政府はインディアンを人間とは認めていない。したがってお前らはアメリカ人などではなく、いかなる権利も与えられない」

軍に監視を受けながら、凜たちはレッドベアとターニヤの帰りを待つていた。しかし一週間経っても二人は帰ってこなかった。

そして皆は周りを騎馬隊に囲まれて居留地への道を歩き始めた。今回は馬も没収され、子供達の手を女が引き、老人を男達が背負っていた。千代丸はウナを背負い、隣を歩くミアと手を繋いでいた。

山を下り、太陽の照りつける平地を列をなして歩いていく。日が暮れてくると風が出てきた。次第に強さを増してきた風は、地上の砂や小石を孕んで襲い掛かってくる。皆は頭から毛布を被り、身を縮込ませて歩を進める。ただでさえ暗い夜の中、舞い上がる砂で灯りも役に立たない。

困難な状況ではどうしても歩みが遅くなる。それは騎乗の兵士も同じだ。打ち付けてくる砂混じりの風に馬の歩みも遅くなり苛立ちが募る。その怒りはこの任務の原因となった者達へ向けられる。

「くそ忌々しいインディアンめ！ この場で全員撃ち殺してやろうか！」

凜の近くにいる騎兵が叫んだが、その悪態も風に掻き消され微かにしか聞こえない。

「こんな風の中で大きな口開けて、バカみたいね」

凜のすぐ隣を歩く女が、腕に抱いた赤ん坊をくるんでいる毛布を直しながら顔を近づけて囁いた。怒鳴った騎兵は砂が口に入ったのか、苦しそうに咳き込みながら唾を吐いている。凜は同意するように微笑んだ。

全てのものには存在する意味と目的がある。こんな時の風は機嫌が悪く怒っているのだ。そうなれば人間は互いに身を寄せ合って縮こまり、風が通り過ぎるのを待つしかない。自然の中にあつては、人間など小さな存在なのだから。それがこの軍人達には分からない

のだ。力と武器で何でも思い通りに出来ると思っている。だから上手く行かないと怒り出す。凜は彼らを少し気の毒に思った。

丸二日歩き通すと砦が見えてきた。荒地の中にレンガ造りの巨大な建物がそびえている。それを囲むやはりレンガ造りの高い塀。それが途切れた門の前、空中に黒い塊が蠢いているのが見えた。

門が近づくにつれ、それが夥しい数の蠅だと分かった。激しい耳鳴りのようなるさいほどの羽音の中、門の前に来た誰もが目を見開いて震えた。

皆が帰りを待っていたレッドベアがそこにいた。白髪混じりの束ねられた長い髪が門のすぐ横にあるポールに結わいつけられ、どす黒く変色した首だけのレッドベアが蠅の隙間から見えた。腐敗が進んでいることから、この砦に出頭したその日に殺された事が分かる。その反対側の門の横のポールには全裸のターニヤが吊るされていた。全身に切りつけられた痕があり、腕や脚も変な方向に曲がっている。深い傷と血と痣で、もとの肌の色など分からなくなっていた。酷く殴られた顔は腫れあがり、美しかったターニヤの面影はもはやそこには無かった。

遺体の様子はまだ新しい。レッドベアと違いターニヤは何日もの間、何人もの兵士に犯された拳句になぶり殺しにされたのだ。凜が憧れた流れるような黒髪も右半分が燃やされ、焼け爛れた頭皮が露になっていた。焼け残った髪は汚れにまみれ、もつれて身体に張り付いている。

「何て酷い事を・・・」

嘆きの声が洩れ、女達はその場にくずおれて泣き出した。千代丸もすすり泣くウナを背負ったまま、きつく拳を握り締めて歯を食いしばり、叫び出しそうになるのを何とか堪えていた。

「立ち止まるな！ 進め！」

騎兵の怒号が飛ぶ。

一行は砦の前で方向を変え、そこから南東に向かった。その砦に

寄ったのは明らかに遠回りだった。酋長とその娘の死体を見せ付けるためだ。

「逆らえばこうなるぞ」

暗にそう言っているのだ。

凜達は何度も砦を振り返りながら荒野の中を歩き続けた。

グローバー大佐は、血に飢えたケダモノどもの気落ちした姿を、口元に歪んだ笑いを浮かべて砦の窓から眺めていた。

捕まえたアパッチの中には、政府が血眼になって捜している男はいなかった。その事には焦りを感じるが、別の部族の一団を捕えた事は讃えられるべき成果だ。その指導者である酋長を殺した事も、たとえそれが至極穏やかな人物で和平を望み、丸腰で無抵抗であったとしても、だ。

新聞はこの事を賞賛の言葉で世間に伝えるだろう。奴が隠し持っていたナイフで襲い掛かってきた、報告書にそれだけ付け加えればいいのだ。それなのに、新たに命ぜられた任務はこの砦に留まり、捕えたアパッチの管理をするというものだった。グローバー大佐は激しい不満を抱えていた。本心では一刻も早く『赤い悪魔』を捕えに行きたい。このままでは他の誰かにその手柄を横取りされてしまう。奴らに酋長とその娘の死体を見せたのは、この憤りの捌け口も多分に含まれていた。

「いい気味だ」

部屋の隅で壁に寄り掛かっていたトパハ斥候長は、グローバー大佐の呟きに顔をしかめた。斥候長は大佐がレッドベアを殺した事からさまざまな嫌悪感を示していた。

「悪趣味だな・・・」

その言葉を聞いたグローバー大佐は斥候長を睨みつけたが、熱くなつてはこつちの負けだ。務めて冷静に、戦争のルールというものをこの無知なインディアンに教えてやろうと思った。

「何を言う。戦犯である司令官を処刑し、兵隊の士気を削ぐ。戦争

はそうして終わるんだ。当たり前的事だろう。それに奴らは人間などではないのだから、裁判など必要ない」

斥候長はこれ見よがしに深い溜息をついた。

「大佐殿は全くインディアンの事が分かかってらっしゃらない・・・。

酋長が殺されたからといって、奴らの戦意が喪失すると思っただら間違いだ。かえって憎しみが募るだけだ」

グローバー大佐は腕を組み、不機嫌そうに斥候長を睨んだ。その視線にも臆さず斥候長は続ける。

「インディアンはあんたらのように大義名分や物欲のために戦うわけじゃない。部族や家族、何よりも自分の魂のために戦うんだ。アパッチはあんたら白人がこの地にやってくる何百年も前から戦いの中に身を置いていた。戦う事が魂に刻まれているんだ」

“また始まった・・・”

グローバー大佐はうんざりして鼻を鳴らした。魂だの精霊だの、この男の言う事は全く理解できない。

「天上を捨て、地上に生まれてきた魂には目的がある。全ては神から与えられたと言って刹那的に生きてるあんたらとは違う。インディアンには審判の日も関係ない！」

「もういい！」

グローバー大佐は斥候長の話を遮った。

「貴様の任務は、野放しになってるインディアンを見付けることだろう。こんな所で油を売ってていいのか？ 惨めな収容所で女房と子供達が腹を空かせてるんだろう？」

斥候長は表情を無くした顔でグローバー大佐を見遣ると、踵を帰して部屋のドアを開けた。

「せいぜい気を付けることです、大佐殿」

斥候長が出て行き、ドアは閉まった。

グローバー大佐は忌々しげにドアを睨むと、気を晴らすかのよう
に外の死体に目を向けた。

「ふん！ 異教徒が！」

グローバー大佐には理解できていなかった。酋長は戦闘の司令官などではなく、部族の調停者であるという事に。そして、戦士は一人一人が自分の意思で動くという事に。

人々は辛い季節を過ごしていた。凧達が連れて来られたのは岩とサボテンと灌木の茂みがまばらにあるだけの砂地だった。昼は強烈な陽差しが照りつけ、夜になれば闇が瞬く間に熱を奪って凍えるほどの寒さになる。そして度々砂嵐にも見舞われた。境界線ギリギリの場所で強風によってねじれた松の木を見付け、それを使ってティピーを建てて暮らしていた。

生活を過酷にしていたのは環境だけではない。政府からの配給の食糧がまた酷かった。かろうじて餓死を免れる量の牛肉と穀物。それも腐っている場合が多い。傷んでいる部位を取り除くと、食べられるのは僅かだった。

こんな土地では作物を植えることも、また狩りをすることも出来ない。生き物といえばちよつとした物音ですぐに隠れてしまう臆病で小さなトカゲと、腐った肉に集る蠅ぐらいのものだった。

そして月に一度の配給の日には十マイル以上離れた砦まで全員が歩かなければならない。男も女も子供も老人も病人さえも。そうしなければ食料が貰えないのだ。政府はインディアンの人数を確認するため、砦に出向いた者の分しか食料を渡さないのだ。人口を把握し、管理するためだ。

配給の日には凧とミアも子供達の手を引き、千代丸はウナを背負って砦に出向いていた。以前は手を借りれば歩く事が出来たウナも、ここへ来て半年の間にととう自分では立ち上がることも出来なくなっていた。

この過酷な日々の中でカイの父親が死んだ。肺を患っていた彼は、自分の命が残り少ない事を知っていた。自分の分の食料を息子に食べさせようとしたが、カイはそれを拒絶した。そのため彼は、カイには内緒で他の小さな子供達に分け与えていたのだ。病に冒されながらも戦士としての魂が衰える事はなかった。家族と部族を守るた

め、飢えと刻一刻と迫る死の恐怖と戦ったのだ。

最後の発作に襲われた時、骨と皮ばかりになった身体では耐えられるはずもなかった。酷い砂嵐の夜、彼は息子であるカイの腕の中で静かに息を引き取った。カイの慟哭は風に掻き消されたが、誰もがその戦士の死を嘆き悲しんだ。カイはまたしても自分を責めた。カイは自分の父親を別段強い戦士だとは思っていなかった。その勇敢さと偉大さに気付いたのは彼の死の間際だった。カイは強い後悔と自責の念に駆られ、しばらく誰とも口をきかないでいた。凜はそんなカイが放っておけず、四六時中一緒に居るようになった。次第に打ち解けていった二人の間には特別な感情が生まれ始めていた。カイも以前のように凜に対して憎まれ口を叩く事はなくなった。

カイの父親の死後も、子供達が飢えを凌いでいられるのには理由があった。時折食べ物の差し入れがあるからだ。誰かが境界線の警備を掻い潜り、夜中に干し肉やとうもろこし等を置いていくのだ。それを兵士に見付からないよう隠して皆で分けていた。

誰もその姿を見た者はいないが、この食料を持つてくるのはきつとダニエルだ。口には出さないが皆がそう思っている。盗んだのか馬車でも襲撃して奪ったのか、食料の出所は深く考えたくはなかったが、これが届けられる限りダニエルは無事にいるという事が分かる。

千代丸はいつもウナの世話をするミアを手伝っていた。ウナは最近昼間でも寝ている事が多くなった。ウナが床に着くと千代丸はミアと散歩をしたり、岩陰で凜とカイと四人で話をしたりした。

少ししか英語が分からないカイとミアに、小枝を使って地面にアルファベットを書いて読み書きを教える事もあった。兵士同士が話している言葉が分からずに不安になるからだ。奴らが何を考えているのか、それが知りたかったのだ。

「あゝあ、ヒマだなあ・・・畑仕事も狩りも出来ないし。しかも、この暑さじゃ・・・」

千代丸は上着の裾をパタパタと仰いで風を送っている。

「あんまり動くなよ。腹が減るから」
岩に背を預けて呆れたようにカイが言った。

二週間前の配給はこれまでに無く酷いものだった。傷んだ肉だけでなく、挽いたとうもろこしの粉にも虫が湧いていた。さらにダニエルからの食料も途絶えており、空腹とダニエルの安否が気になつて皆の気持ちはざわついていた。

「メスカルでも探しに行こうか？」

千代丸が提案したが、そうするには境界線の外に出なければいけない。万が一、兵士に見付かれただでは済まないし、最悪の場合、射殺されるかも知れない。凜は静かに首を横に振った。

「今日は無理よ。明日は人数確認の日よ」

兵士が来た時に全員が揃っていないければ大変なことになる。それにもしメスカルを採れたとしても、それが見つかってしまえば境界線の外に出た事がばれてしまう。

「じゃあ明日、兵士が戻って行ったら探しに行こう。このままじゃ皆飢え死にしちまう」

カイは手で庇を作ると、怒り狂ったように照り付ける太陽を恨めしそうに見つめた。

生きるために何かしたくても、それが許されない。このままでは飢え死にするのを待つ事しか出来ない。

「山に帰りたい」

そんな嘆きがあちこちから聞こえる。皆同じ気持ちだ。山でなら飢えることなく暮らしていける。誰もが山に帰る日を夢見ていた。

「チヨー！」

ティピーの前で笑顔のミアが手を振っている。千代丸も笑顔で立ち上がり、ミアの方へ駆けて行った。千代丸は凜よりも遙かに大きな身体に成長していた。幼さの残る笑顔が見えない後姿は大人の男と変わらない。

千代丸とミアは片時も離れたくないという感じだ。一緒に居るだ

けで幸せなのだと分かる二人を見てみると空腹も忘れてしまいそうになる。凜の口元が自然と緩んだ。

「リン、あのさ・・・」

その場に二人きりになると、俯いたカイが躊躇いがちに声を掛けた。
「何？」

「そ、その・・・リンの十六歳の儀式の時・・・お、俺とダニエルと・・・どっちに・・・」

凜がダンスの相手を選ぼうと、隣同士で立っていたカイとダニエルの前に足を一步踏み出した時、軍隊がやって来て儀式は中断されたままだった。顔を真っ赤にして尋ねてくるカイを眺め、凜は素っ気無く応えた。

「ダニエルよ」

「そ、そうか・・・」

明らかに落胆した様子で肩を落としたカイを見て凜は唇を噛んだ。

カイの父親の死後、一緒に居る時間が増えたことでカイの自分に対する想いには気付いていた。しかし恥ずかしさからなのか、こうして遠回しに自分を試すような態度のカイに凜は少しじれったさを感じていた。

「だって私、ダンスなんてした事無いのよ。初めてだったら上手な相手と踊った方がいいでしょ？ カイとダニエルじゃ、どう考えたってダニエルの方が上手に決まってるもの」

「えっ？ それだけ？」

顔を上げたカイの真剣な眼差しにたじろいだ凜は慌てて頷いた。

「そ、そうよ・・・だってダンスだけでしょ？ 別にその相手と結婚しなくちゃいけないわけじゃないでしょ？」

「そ、そうだよな・・・」

大きく安堵の息をついたカイを見て、凜は違う意味の大きな息をついた。

その日の夜中から強い風が吹き始めた。朝になり風は少し弱まっ

たものの、いつもなら陽炎の向こうに揺らめいて見える遙か彼方の山の稜線が今日は霞んで見えない。空には青みがかつた灰色の雲が一面に敷き詰められ、太陽の光はいつもよりも弱々しい。まるでこの場所だけが世界から切り取られ、取り残されてしまったような寂しい感じがした。千代丸に背負われているウナも心配そうな顔で空を見ていた。

舞い上がる砂の中を七人の騎馬兵がやって来た。人々は空腹を抱えて難儀そうに立ち上がり、疲れきった身体に汚れた毛布を纏って一列に並んだ。首から下げた金属の認識プレートを兵士が確認していく。

「こんな日は外に出るもんじゃない。それなのに軍人さんは律儀だねえ」

ライフルを肩に担ぎ、しかめつらしい顔で歩く将校に老人が笑いながら声を掛けた。砦から過酷な荒野を渡ってきたそのコナーズ中尉は険しい顔で老人を睨みつけると、いきなりライフルの台尻で頭を殴りつけた。

「ああ・・・あ・・・」

殴られ倒れた老人は額から血を流しながら、その小柄な身体を震わせて呻いていた。

「ああ！　しつかりして！」

すぐに老人の息子夫婦と、まだ幼い孫達が駆け寄った。

「老いぼれのケダモノが！　生意気な口をきくな！」

非難の目を向けてくるアパッチの一团を憎らしげに一瞥してコナーズ中尉は吐き捨てるように叫んだ。

「いいか！　無駄口は叩くな！　今度は撃ち殺すぞ！」

こんな面白くも無い任務は早く終わらせた方がいいだろう、自分が殴った老人をその家族が抱えてティッピーに運び入れるのを横目に、他の者の確認を続けた。

ウナは千代丸の肩を叩き、老人が運ばれたティッピーを指差した。ミアと連れ立って三人で老人のティッピーに入って行く。

人数確認が終わり兵士が帰ったら、カイと千代丸と共にメスカルを採りに行く事になって、凛は焦る気持ちを何とか押さえ込んでいた。前を通りかかったコナーズ中尉が、そんな凛の顔を陰湿な目つきで執拗に見ている事に気付き慌てて目を逸らした。

老人のティピーからすぐに千代丸と孫達が出てきた。

「大丈夫だよ、大丈夫だからね」

千代丸は安心させるように笑顔で老人の孫達に言葉を掛けている。きっとティピーの中では老人の手当てをしているのだろう。しかし今ここには薬にもなるメスカルは無い。手当てといっても出来るのは、血が止まるのを祈りながら傷口を布で押さえる事ぐらいだろう。

飢えから来る苛立ちと兵士への怒りで、その場には張り詰めた緊張感が漂っていた。溜め込んでいた不満が今にも爆発しそうな雰囲気だ。

コナーズ中尉が通り過ぎると、凛はカイと千代丸に目配せした。早めに出発した方がいいだろう。メスカルを探して持ち帰れば、皆の尖った神経もきっと少しは静まるはずだ。頷いたカイと千代丸は今では一緒に寝泊りしているティピーへ、そして凛も自分のティピーへと向かった。

しかし、その緊張の糸は突然弾かれた。殴られた老人の息子が猛然とティピーから飛び出し、鞍にライフルを差して帰り支度をして、いたコナーズ中尉に詰め寄ったのだ。

「お前達は何て酷い事をするんだ！ それでも人間か？ 大体、食料はどうした！ 何故お前達は約束を守らない！」

コナーズ中尉は手を止めて黙ったまま、そのインディアンを睨みつけた。それでも溢れ出した不満は止まらない。喚き散らすインディアンを前にコナーズ中尉と、その後ろにいる兵士達の口元に歪んだ笑みが広がっていった。

「暴動だ！ 暴動だ！」

コナーズ中尉は叫びながら腰の拳銃を抜くと自分に詰め寄るインディアンの胸に至近距離から発砲した。周りにいる人々は悲鳴を上げた。他の兵士達も鞍のライフルを抜き取ると、怯えている人々に向かって発砲を始めた。

「暴動だ！ 撃て！ 撃ち殺せ！」

部下に命令するコナーズ中尉の顔には嬉々とした笑みが浮かんでいた。兵士達は、武器も無くただ逃げ惑うだけの人々にライフルを発砲していく。

その中で一人、一番若い兵士がこの状況に驚愕して目を見開き、顔を強張らせたまま引き金を引けずにいた。その兵士に気付いたコナーズ中尉がツカツカと歩み寄った。

「撃て！ 撃てと言っのが分からんか！」

若い兵士は、撃たれて次々と倒れていくインディアンから目を逸らせずに答えた。

「し、しかし・・・彼らは・・・逃げているだけです・・・」
コナーズ中尉の眉が吊り上った。

「何を言うか！ 奴らは獰猛なアパッチだ！ 撃ち殺せ！ 命令が聞けないか！」

血塗れで倒れている女の身体を、傍らで泣き叫びながら一生懸命揺すっている小さな子供の姿を見て兵士は震えていた。

「で、出来ません・・・」

確かに無抵抗の者達を虐殺したとなれば、国際的にも人権団体なる生ぬるい輩からも軍は非難を浴びせられる。しかし奴らが暴動などを起こした場合は、もちろんその限りではない。コナーズ中尉はグローバー大佐の、そして連邦政府の意図を正しく理解していた。

『インディアンは死に絶えるべきなのだ』と。それがこの国の繁栄のためなのだ。コナーズ中尉は、目に涙を溜めて拒絶した若い兵士の顔を躊躇い無く撃ち抜いた。

ティッピーの中に居る凜は、轟く銃声と悲鳴に怯え身動きも出来ないでいた。皆の事が気になるが、恐ろしくてどうしても外を見る

事が出来ない。

その時ティッピーの入り口が乱暴に開けられ、コナーズ中尉が入ってきた。その目は先程と同じに陰湿な輝きを放っている。

「見つけたぞ・・・」

凜の背筋が凍りついた。コナーズ中尉は口元を歪ませながら、後退る凜に近づいた。腰に提げたサーベルから耳をくすぐるような金属音が鳴り、凜の恐怖を煽り立ててくる。

「ずっとお前を見てた。まだ男なんて知らないんだろう？ 殺す前

にお前に本当の男を教えてやろう」

凜は恐怖に脚が震え、四つん這いで逃げようとした。しかしコナーズ中尉に髪を？まれ、そのまま仰向けに引き倒された。

「嫌！ やめて！」

コナーズ中尉に押し掛かれた凜は叫んで滅茶苦茶に暴れた。しかし凜の力では軍人の巨体を押しつける事など出来ない。しかも凜が暴れば暴れるほど、コナーズ中尉は息を荒げて獣のような歓喜の唸り声を上げてくる。

「この売女め！」

コナーズ中尉は唾を撒き散らしながら叫ぶと顔を凜の胸にすりつけた。蹴り上げようともがく凜の足を力づくで押し広げ、スカートを捲り上げようとする。

“もうダメだ・・・”

絶望的になった凜が激しく頭を振った時、赤い革の鞘に入ったナイフが畳まれた毛布に半分隠れるようにして落ちているのが目に入った。サンから貰ったナイフだ。凜は震える腕を伸ばした。指先にナイフの柄があたると凜は力を振り絞り、必死で膝を蹴り上げて暴れ出した。凜の膝はコナーズ中尉の腹に当たった。

「何しやがるんだ！ 大人しくしろ！」

凜の胸から顔を上げたコナーズ中尉の顎に手を当てて腕を伸ばすと、もう片方の手に持ったサンのナイフで？き出しになった喉に当て横に引いた。凜はもう無我夢中だった。

ぱっくりと開いたコナーズ中尉の喉から夥しい量の血が凧に降り注いだ。顔を背けた凧の身体の上に、目を見開いたままのコナーズ中尉ががっくりと倒れ込む。凧は必死でそこから這い出ようともがいたが、コナーズ中尉の身体は全く動かない。凧の犯した罪の重さを知らしめるように己の身体を石に変え、絶対に逃すまいとしている怨念のようなものを感じた。

そこへ、再びティピーの入り口が開いて誰かが駆け込んできた。凧は死に物狂いで逃げようとした。

「リン！ いるのか？」

聞き慣れた声、カイだった。

「カイ！ た、助けて・・・」

凧は叫んだつもりだったが、胸が押しつぶされて弱々しい声しか出なかった。カイはうつ伏せになっているコナーズ中尉の軍服を？むと凧から引き離れた。血塗れで上体を起こした凧を見てカイは肝を潰した。

「リン！ 大丈夫か？ 怪我してるのか？」

肩を揺すられた凧は力なく首を振り、ホツとした顔のカイから目を逸らした。そして転がされて仰向けになったコナーズ中尉が目を開いたまま息絶えているのが見えると激しく身体を震わせた。

「わ、私殺しちゃった・・・人を。私・・・な、何て事を・・・」

凧は血の滴るナイフを握り締めて激しく取り乱した。

「リン・・・」

カイが肩を？んだまま呼び掛けたが、凧は泣きながら首を振り完全に自分を失っていた。外では依然として銃声と悲鳴が響いている。

カイは平手で凧の頬を張った。

「しっかりしろよ！ 殺らなきゃ殺られてたんだ！ こいつはお前を殺すつもりだったんだぞ！ お前だって・・・サンに訓練された戦士だろう！」

凧は痛む頬を押さえてカイに目を向けた。ワナワナと震えながらも、やっと自分を取り戻した凧は小刻みに頷いた。

「凜！ カイ！」

入り口が開き、蒼ざめた顔の千代丸が飛び込んできた。喉を切り裂かれていたコナース中尉の死体を見て一瞬ギョツとした千代丸だったが、すぐにカイと凜に向かって声を張り上げた。

「あいつら皆殺しにするつもりだ！ 早く逃げないと！」

凜とカイは弾かれたように立ち上がった。

ティピーの外に出て凜が目にしたものは、まさに地獄だった。舞い上がっているのは砂か硝煙か。銃火の中を逃げ惑う人々。そして、そこかしこで積み重なるように倒れている砂と血に塗れた幾つもの死体。青い服の軍人は、ライフルを手に自分に課せられた使命を忠実に全うしていく。赤ん坊を抱いて逃げる女を背中から撃ち殺し、倒れて呻いている老人に止めを刺す。血に飢えたケダモノを、この地から絶滅させるために。

凜は瞬きも忘れてその悪夢を見ていた。脚はガクガクと震えている。

「い、嫌。 やめて。 やめて・・・」

凜の呟きは銃声と泣き叫ぶ声、そして風の音に掻き消された。

「俺はミア達を捜してくる！ 凜もカイと一緒に逃げて！」

「分かった！ リン、こっちだ！」

千代丸の言葉に頷いたカイはティピーの後ろを回り込むように駆け出した。

凜がカイの後を追おうとした時、砂埃の中を背中にウナを背負い、ふらつく足で歩いているミアの姿が目に入った。

「千代、あそこにミアが！」

凜が指差した方を千代丸が見た瞬間だった。ミアとウナの背後から兵士が近付き発砲した。ミアはウナを背負ったまま前に倒れた。千代丸はまるで自分自身が撃たれたかのように身体を弾かせて叫んだ。

「ミアー！」

背中を撃たれてピクリとも動かないウナの下からミアが這い出して

きた。上半身が出たところで身体の向きを変えて起き上がったミアだったが、目の前には兵士が構えるライフルの銃口があった。

ミアとウナの姿が見えてから一瞬の出来事だった。死んだウナの身体の下に脚を挟まれたまま、胸を撃たれてミアは地面に叩きつけられた。

「ミアー！ あ、あ・・・」

絶叫する凧の胸にミアとウナと共に過ぎた日々断片が去来した。素直なミアの明るい笑顔、妹のように思っていた。そしてウナの皺の手に触れた時感じた精神的な庇護の念。その手にしがみ付いて泣いた事。

大切な家族だった。でも、目の前であっけなく命を奪われた。凧はこの悪夢に胸を掻き毟られるような痛みを感じ、激しい虚脱感に襲われた。

「あの野郎・・・」

千代丸が喉の奥から唸るような声を上げ、ウナとミアを撃ち殺した兵士へ向かって走り出した。

「千代！」

凧が叫んだが、千代丸は止まらない。疾風のように自分に向かってくる少年に気付いた兵士が慌ててライフルを構えた時には、千代丸の姿は目の前から消えていた。千代丸は脇にあった岩に飛び乗ると、しなやかな身体のパネを使いそこから兵士に向かって宙に舞い上がった。手にはナイフを握り締めている。

「うわああ！」

叫びながら兵士に飛び掛った千代丸は、その首の根元にナイフを突き立てた。

凧は戦慄を憶えたまま身じろぎも出来なかった。こんなに激しく憎悪と敵意を？き出しにした千代丸を見たのは初めてだった。

「凧、早く逃げて！ すぐに追いつくから！」

千代丸は殺した兵士の襟を？んで盾にしながら、凧が居るのは反対側のティッピーの陰に隠れた。

すばしこい千代丸の姿が見えなくなると、凜は慌ててカイが逃げたのと同じ方向へティッピーを回り込んだ。気ばかりが焦っているが、震える足はなかなか前へ進んでくれない。銃声が鳴るたび、興奮した兵士の怒鳴り声が聞こえるたびに肩はすくむし足は止まってしまう。

「カイ、どこにいるの・・・？」

不規則に並んだティッピーとティッピーの間、岩と灌木の間に隠れるようにしながらカイを捜した。

“もしかしたら、兵士に見つかって殺されてしまったかも知れない・・・”

そんな絶望的な思いに囚われ、大きく傾いたサボテンの陰にしゃがみ込んだ。

こんな場所に隠れていてもすぐに見つかってしまうだろう。目に滲む涙を拭いて立ち上がろうとした時、横から出てきた馬に行く手を塞がれた。兵士が乗ってきた軍馬だ。誰も乗っていないように見えたが、次の瞬間それまで馬の横腹にしがみ付いていたカイが軽やかに鞍に跨り凜に左手を差し出した。

「リン！早く乗れ！」

凜は夢中で立ち上がると、カイの腕に自分の左腕を絡めて後ろに飛び乗った。カイが掛け声を上げ手綱を馬の肩に当てると、健脚な軍馬は勢い良く走り出した。

「チヨは？」

カイの体にしっかりと腕を回し、周りの轟音に負けじと叫んだ。カイは顔を少しだけ凜の方に傾けて叫び返した。

「後ろにいる！大丈夫！」

凜が振り向くと、カイと同じように馬の横腹にしがみ付いてティッピーの間を駆け抜ける千代丸が見えた。

舞い上がる砂煙の向こうに目を凝らすと、立っているアパッチはもういないように見えた。しかし油断は出来ない。隠れているイン

ディアンを探し出すのは至難の業だ。しかも奴らは悪名高いアパッチだ。奇襲をかけて来ることも有り得る。

兵士は転がる死体を避けながら、緊張して辺りを窺う。さっきからコナーズ中尉の姿が見当たらない。きつとどこかのテントの中で女を犯しているんだろう。

「全く、物好きめ・・・」

以前にもこういう事があった。その後女を楽しそうにいたぶって殺すのだ。この部族の酋長の娘への仕打ちを目にした時は、さすがに胸が悪くなりそうだった。自分の上官ながら呆れる。コナーズ中尉はアパッチの事を『ケダモノ』と呼ぶが、それを力ずくで犯す自分は何なのだ？

兵士が顔をしかめて足元に唾を吐いた時、一つのテントの前で部下が叫んだ。

「コ、コナーズ中尉が！」

そのテントの中を覗くと、コナーズ中尉が喉を切り裂かれて死んでいた。ズボンのボタンが外れかけている事から、犯そうと思っていた女に殺されたのだろう。コナーズ中尉に同情の念は感じないが、やはりアパッチは油断ならない。恐るべき国家の敵なのだ。

ライフルを構え辺りに目を遣ると、自分達が乗ってきた馬が走っている事に気が付いた。誰も騎乗していない。きつときちんと手綱を繋いでおかなかったのだろう。

馬は段々速度を上げて離れていく。銃声に怯えているのだ。

「おい！ 誰か馬を・・・」

コナーズ亡き今、指揮官である事を自覚した兵士が指示しようとした時だった。駆けていく馬の激しく揺れる尻尾の隙間から白い物が見え隠れしていた。柔らかい革で出来た不恰好な袋のようなブーツ。「アパッチだ！ 馬を盗んで逃げたぞ！」

しかもよく見ると、その先にも二人乗りの馬が疾走している。後ろを走る馬のインディアンも鞍に飛び乗った。四人の兵士はライフルを構え、逃げていく二頭の馬に乗った三人のインディアンに向か

って発砲した。しかし複雑な起伏の隙間と、入り組んで乱立している岩や灌木の茂みを縫うように走る馬を見失ってしまうのは時間の問題だろう。

「逃がすな！ 追え！」

二人の兵士が弾かれたように走り出し、残っている馬の元へ駆け寄った。しかしいつまで経っても馬を出さない。

「何をしている！ 早く追うんだ！」

「し、しかし・・・手綱が・・・」

横木にきつく結わいつけられた革の手綱は濡れていた。解こうと引っ張れば引っ張るほど結び目が食い込み固くなっていく。

「何なんだ、畜生！」

兵士が毒づき地団太を踏むと、鞍に積んでいたはずの水筒が地面に転がっているのが目に入った。

「くそっ！ あいつらの仕業だ！ イカれたインディアンめ！」

後ろから追いかけてくる銃声を聞きながら、凜はいつ銃弾が自分達や乗っている馬に当たりはしないかと気が気ではなかった。すぐそばのサボテンが突然砕け飛び、凜は小さな悲鳴を上げると、しがみついているカイの背中に顔を埋めた。

馬は小石の浮いた急な傾斜を蹄を滑らせながら駆け降り、方向を変えデコボコした岩山を上り始めた。銃声が遠のいていく。聞こえてくるのはカイの荒い呼吸と蹄の音。その蹄が崩す小石が転がる音、それに叫ぶような風の声。高台に出ると凜は後ろを振り返った。

その時見えた光景を凜はきつと忘れない。風にはためく無数のテイピー、その波の向こうに見えた血に染められた砂を。色彩の乏しい荒野に広がった赤い色。それは彼らがそこで生きていた証。銃弾と蔑みに引き裂かれた幾つもの命。それも明日には風が運んできた新しい砂に覆い隠されているのだろう。やがて乾いた赤い砂は、風によって散り散りにどこかへ運ばれる。何の痕跡も残さず、人々の記憶にも残らない。

凜は血だらけの手でカイの上着をきつく握ると、唇を噛みしめて嗚咽を洩らした。カイは気付いているのだろうが、ただ前を向いて馬を走らせるだけだった。

闇雲に走り続けた。やがて涸れ谷を横切ると群生するメスキートがあり、その向こうに湖が見えた。湖岸に出るとカイは馬を止めた。馬から降りた二人は大きく息をついて耳を澄ました。とりあえずは逃げ切れたようだが、そこには重い空気が流れている。皆死んでしまった。それでも軍隊は逃げた自分達を追ってくるだろう。

“私も千代丸も軍人を殺したのだ。捕まれば、きつとただでは済まない・・・”

「千代・・・千代は？」

凜が呟くとカイは今来た道を振り返った。するとすぐに蹄の音がしてメスキートの茂みを掻き分けながら千代丸がやってきた。

凜とカイを見つけた千代丸は目を細めて嬉しそうに笑った。

「良かった……。やっと追いついた……」

その言葉を聞いて凜もカイも安堵の息をついた。そのいつもと変わらないはずの明るい千代丸の笑顔、その中に潜む影が少しだけ見えた二人は言葉を飲み込んで俯いた。

愛するミアを失ったこと。そのミアの亡骸を置いて逃げてこなければいけなかったこと。その笑顔の下の感情は怒りというよりも諦め。それはいつまでも千代丸の心を苛むのだろう。でも、それは凜とカイにとっても同じ事だ。

「これからどうするの……？」

午後の陽射しにキラキラと輝く湖面を見つめながら凜が呟いた。

凜の問いにしばらくは誰も答ええない。他に人影のない湖畔は静まり返った。二頭の馬さえも息を潜めているようだ。聞こえるのはメスキートの葉がサラサラと風に揺られる音、そして水際の砂利がチャプチャプとさざ波に洗われる音だけだ。その穏やかな静けさが、心に押し掛かる不安をかえって大きなものにしていった。

カイが重そうに口を開いた。

「……逃げ続けるしかないだろう。しかし、腹減ったなあ……何か食い物積んでるんじゃないか？」

馬の背に詰まれた荷物を解き始めたカイは、馬から降りようとしないう千代丸を不思議そうに見た。

「どうしたんだ？　チヨ、早く降りるよ」

千代丸は少し困ったような顔で微笑んだ。

「うん……ちよっと、手え貸してよ」

「……つたく、しょうがないなあ」

あの混乱の中でミアの仇を取って兵士を殺し、命からがら逃げ出してきた。自分がした事に、今になって腰が抜けてしまったのかと凜は思った。

カイが千代丸の手を？んで引つ張った。すると千代丸の身体が滑るように馬の背から落ちてきた。

「あっ！ お、おいつ！」

カイは落ちてきた千代丸を必死で受け止めた。しかし自分よりも少し大きいその身体を支える事は出来ず、カイは千代丸を抱えたまま後ろへよるめいて尻餅をついた。

「お、おいチヨ・・・どうしたんだよ・・・？」

二人とは馬を挟んで反対側にいる凧は、千代丸が乗ってきた馬の鐙からポタポタと何かの雫が落ちていているのに気が付いた。

「チヨ・・・お、お前・・・背中・・・」

「へへへ・・・当たっちゃった・・・」

カイは赤く染まった自分の手を見て、震える声を上げた。千代丸の背中血塗れだった。

凧は鐙から落ちてきた雫が、自分の埃にまみれたモカシンの上に赤い染みを作っていることに気が付いた。

「千代！ 千代！ 千代丸！」

凧が駆けつけると千代丸はカイに身を預けたまま弱々しく笑った。

「何か、おかしいんだ・・・。脚が動かないんだよ・・・。まるで、脚が無いみたいに・・・。情けないよね・・・。こんなんじゃ、サンとダニエルに怒られちゃうよ・・・。あと・・・父上にも・・・」

凧とカイには分かっていた。背骨を酷く傷つけたその銃創は致命傷だと。出血も酷く、ここまで逃げてくる事が出来たのも信じられないくらいだ。

「ち、千代・・・」

凧は顔に張り付いた千代丸の長い髪をかき上げた。汗でぐっしょりと濡れているにもかかわらず、蒼ざめたその頬はとても冷たい。涙で滲む凧の視界に、カイの膝に頭を載せた千代丸の目がゆっくり閉じていくのが見えた。カイは歯を食いしばり、泣き声を上げそうになるのを必死に堪えている。

「ねえ！ 千代・・・起きて！」

凜が呼び掛けると、弱く長い息を吐いて千代丸は目を開けた。しかし涙で満たされたその目は虚ろだった。

「あ・・姉上、見える・・。見えるよ・・。」

「えっ？」

凜は千代丸の視線を追って振り向いた。でもそこには静まり返った湖面と、遙か遠くの山々の峰が霞んで見えるだけだ。凜は千代丸に向き直った。

「何が見えるの？ 千代・・。」

「ほら、皆いるよ・・。父上も母上も・・兄上達も・・。皆笑ってる・・。家もそのまま、山も小川も・・桜も・・。」

千代丸は幸せそうに微笑んだ。微かに細めた目からは今にも涙が零れそつだ。

「帰りたいなあ・・。ずっと、ずっと・・。帰りたかつたんだ・・。」

凜はこれまで、ずっと自分が千代丸の事を守っているものだと思っていた。弟を守るのが姉である自分の役目だと。でも、そうではなかった。実際は自分が千代丸に守られていたのだと、今この時になつて気が付いた。

千代丸はもうずっと昔に故郷の事など忘れたのだと思っていた。いつも前向きな千代丸にとっては今が全てなのだ。二人きりになつたあの時から、千代丸は一度も故郷の事を話さなかつたからだ。きつとそれは凜のため。泣き言を言つて凜を困らせないように。そうして望郷の想いを胸に閉じ込めて明るく振舞つていたのだ。

凜は流れる涙を止める術も無く、震える唇で言葉を紡いだ。

「帰れるよ・・。いつか一緒に帰ろう・・。千代・・。だから、お願い・・。」

その言葉に安心したように千代丸はゆっくりと目を閉じた。両の目から一筋ずつの涙が、蒼ざめていてもなお美しいままの顔を伝つてカイの膝に落ちた。

「千代！ 千代！」

凜はもう二度と聞くことの出来ない愛おしい千代丸の声を求めて、

両手でその頬を包み込んだ。

カイと凜は焚き火の前に並んで座っていた。赤い炎が湖の際を微かに照らし、時折暗闇の中からブルブルと二頭の馬の鼻息が聞こえる。あまりにもくつきりとした三日月が、夜空の黒い幕に出来た裂け目のように浮かんでいた。二人は押し黙ったまま、乾いた音を立ててはぜる炎を見つめているだけだ。

血の匂いは夜の獣を引き寄せる。汚れた服は湖で洗い、背後に立つ松の木の枝に干していた。凜は馬の背に積まれていた兵士の外套で身を包み、地面に敷いた軍の野営用の毛布の上で背を丸めていた。もう一頭の馬に積まれていた毛布は千代丸を埋葬する時に遺体をくるんだため、カイは腰帯だけの格好で膝を抱えている。

暗闇の中で赤く燃える焚き火だけを見ていると、この世界に二人だけが取り残されたような気になってくる。実際そうなのだろう。この国に安住の地などない。

凜はどうしてこんな事になってしまったのだろうと考えていた。

“サンが私達を拾ったから？ ううん、違う・・・”
今まで、死んでしまってもおかしくないような事はいくらでもあった。その度に助けられてきた。生かされてきたのだ。周りの大切な人達を奪われながら。そう思えてならない。

その時風が吹いた。メスキートがざわざわと音を立て、揺れる炎に照らされた部分の水面にさざ波が立ったのが分かった。凜は凍えるような冷たい風に肩から被った外套が飛ばされないよう両手でしっかりとかき合わせ、身体をさらに丸めた。

風は全てを奪い去っていく。こんなに小さな身体の体温さえも。

“彼らの言う通り、風には目的があるのならば・・・”

風が起こす大きな波に飲み込まれていくだけで。そんなものに抗えるはずもない。

凜は月を見上げた。自然の物はいつまでもそこにあるのに、自分はこうして流され続けている。

“ 父上・・・ ”

凜はもはや顔も思い出せない父親に心の中で呼びかけた。

“ 結局・・・千代丸を守る事も出来ませんでした・・・。私には波を泳ぎきる事など出来ません・・・。もうすでに、溺れてしまっているのでしょうか・・・ ”

幸せな時間は、それが貴いという事にも気付かずに通り過ぎる。

凜はまだ幼い頃の、家族が全員揃っていた日々に想いを馳せた。何もかもがありきたりで、些細な事は些細な事として通り過ぎたが、今思えば何を投げ打つても取り戻したい時間だ。

そしてロンドンで過ごしたクリスマス。クリスティーナが貸してくれた詩集を夢中で読んだ日々。

ふと月光に照らされたサンの姿が胸に浮かんた。儂く消えた初めての恋。それでもずっと見つめていたかった。そしてミアやウナ、ダニエル達との山の暮らし。

それらの思い出の全てに千代丸の笑顔があった。千代丸がいたからこそ、この長い旅路を歩く事が出来た。

“ それなのに・・・ ”

体中を針で刺されたような痛みが走り涙がこぼれ出す。

「ごめんな・・・リン」

それまで押し黙っていたカイが、膝を抱え炎を見つめたまま口を開いた。凜は涙を拭ってカイを見た。赤銅色の痩せた身体が小刻みに震えている。寒さのせいだけではないのだろう。

「 け、結局・・・誰を守る事も出来なかった・・・。皆死んじまった・・・。戦士になりたいなんて言って・・・サンの言うとおりだったんだ。俺には無理だったんだ・・・。 」

カイが歯を軋らせる音が聞こえた。

凜は身を包んでいる外套の端を胸の前で片手で押さえると、もう片方の端を広げてカイの肩に掛けようとした。しかしカイは身を引

いた。外套の下は裸である凜を見ないように顔を背けている。

「い・・いいよ。平気だよ」

そう強がるカイの肩はとても冷たくて凜は不安になった。

「カイ、お願い。朝になった時、この寒さであんたが凍えて死んでたら・・私どうしていいのか分からなくなる・・」

馬に積まれた荷物の中に、外套は一枚きりだった。他に身を包む物はない。カイは俯くと、黙ったまま凜に身体を寄せた。

一枚の大きな外套に二人で包まり炎を見つめた。カイにとっても、生まれた時から共に生きてきた部族の者を全て失ったのだ。家族もなく、家もない。

「それでも、カイは私を助けてくれたわ・・。そうでしょう？」

カイはゆっくり凜へ顔を向けた。苦しそうに眉間に皺を寄せたかと思うと、外套の下の腕を凜の肩に回して強く引き寄せた。

「お、俺はサンみたいに強くないし・・ダニエルみたいに物知りでもない・・。もう、戦士なんかどうでもいい・・。戦士じゃなくてもいいから・・でも・・それでもリン、お前の事だけは・・何があっても守りたいんだ・・」

絞り出すような言葉を凜はカイの頬に額を付けたまま聞いていた。

胸が疼き熱い涙が込み上げてくる。自分はいつからか、カイのこんな言葉を待っていたのだと気が付いた。凜はこくと小さく頷くと、そのまま目を閉じた。

真夜中過ぎ、居留区の境界線を越えたダニエルは奇怪な音を聞いた。胸騒ぎを覚えながら、遠くにぼんやりと浮かび上がるティピイの群れへ向かう。

その途中で足を止めた。いつもならここに溢れているはずの命の息吹が全く感じられない。またあの音が聞こえた。それは岩やティピイの間を吹き抜ける風の唸り声か、それとも・・。

ダニエルは商人の荷馬車から盗んできた干し肉の入った包みを足元に落とし、ティピイが連なる集落へと走った。

辿り着いたダニエルは、そこで目にした光景に呆然と立ち尽くした。

「だ・誰か、誰かいないのか・・？」

生きている者がいないという事はすぐに分かったが、それを信じる事を拒否した心が無意識に呟いていた。人の形をしたものはたくさん転がっているが、もちろんダニエルに応える声は無い。猛り狂うように強さを増した風が死者の嘆きを運んでくるだけだ。

折り重なって半分砂に埋まっているウナとミアの傍で、ダニエルの膝は力無くくず折れた。地面についた掌に何か固い金属があたった。ダニエルは砂ごとその空薬莢を震える拳で握り締めた。

凜はふと目を開けた。カイの肩に頭を載せたまま目を閉じていたが、眠ってはいなかった。眠れなかったのだ。目を閉じた暗闇の中、瞼の裏に映る赤い焚き火の残像を追いかけ、極力何も考えないようにしていた。辺りはまだ暗い。しかし焚き火の炎はさつきよりも大きくなっていた。カイは左手で凜の肩を抱き、右手で傍らに積まれた枯れ枝を火に投げ入れていた。一番冷え込む夜明け前に備えているのだ。

「カイ、寝てないの？」

寝ていると思っていた凜の声が聞こえ、カイは一瞬枝を投げ入れる手を止めた。

「う、うん・・・」

「少し寝たら？ 火の番は私が変わるから」

凜は心配そうに覗き込んだが、カイは目を逸らして俯いた。

「ね、眠れるわけないだろ・・・」

二人とも裸で一枚の外套に包まれているのだ。カイにそんな余裕はなかった。

凜は強情なカイの説得を諦めて溜息をつく、頭を上げて背後を振り返った。風に揺れるメスキートの葉がおぼろげにみえる。遠く遠く東の山の稜線が紫色に縁取られ、朝が近づいているからだ。

生命は東の空からやって来る。新しい一日と共に全ては生まれ変わる。凜は目を閉じて願った。悲しみも不安も全て消えてしまえば、違う自分に生まれ変わることができたら、と。

凍てつくような風が僅かな隙間を見つけて外套の中に入り込む。

凜は身震いし、身体を縮こまらせた。カイもまた震えている事に気づき、凜はその瘦せた背中に掌を当てた。最初は冷えていたカイの背中だったが、触れ合っている部分から徐々に温かさが広がっていく。

「リン・・・」

掠れた声でカイが囁き、凜の肩に置いた手に力が入った。炎に照らされているからなのか、カイの顔は激しいほどの命の熱を発している。凜は胸の鼓動が息苦しいまでに早くなったのを感じた。

カイが両腕で凜を抱き締めると、二人の身体全体に熱が広がっていく。凜は温かな腕の中に身を任せた。二人の熱い息が絡み合うと、どちらからともなくまるで引き寄せられるように唇を重ねた。それで悲しみや不安が消える事はなかったが、カイの身体に腕を回した凜は、自分が新しい何者かへ生まれ変わっていくのを感じていた。

朝陽が放つ柔らかな一条の光がメスキートの葉の間から湖岸へ差し込んだ頃、二人は溶け合うようになつた。

グローバー大佐は椅子にふんぞり返つてその朗報を聞いた。自分にとつてお荷物でしかない居留区の獣どもが殲滅されたという報告を。

脇に帽子を抱え、直立不動の兵士を満足気な顔で眺めた。その中でコナーズ中尉はじめ三人の兵士が戦死した事は大きな犠牲だがやむを得まい。特にコナーズに限つて言えば、むしろ喜ばしい事だ。普段は上官である自分に媚びへつらい従順ではあるが、あの男の素行の悪さはいつかこの脚を引っ張るだろうと思つていた。コナーズ中尉がしでかした事で自分が責任を取るなどご免だ。

それでもあの邪魔なアパッチどもが居なくなり、この皆も不要となつて閉鎖されれば新しい任務が待っている。次こそ『赤い悪魔』の追跡だ。奴の首を取り、この国の英雄となるのだ。

この皆でこの下らない任務に当たっている間に『赤い悪魔』が投降したというニュースを聞いた時は激しく失望した。しかしワシントンの愚かな連中が奴の処刑をめぐつて利権争いをしている間に、まんまと脱獄したと聞いて小躍りしたものだ。

“ 奴はこの私に首をはねられるのを待っているのだ・・・ ”
グローバー大佐は緩む口元を隠すため、口髭を撫でながら兵士に労

いの言葉を掛けた。

「それでは君がコナース中尉に代わって指揮を取ったわけだな？
ご苦労だった。もう下がっていいぞ」

それまで不自然なほど背筋を伸ばし、顎を前に突き出していた兵士は言い難そうに視線を下げた。

「そ、それが・・・実は三人のインディアンが馬を奪って逃げ出しまして・・・。未だ逃亡中であります・・・」

グローバー大佐は口髭を撫でていた手を止めた。今までの高揚した気分が沈んでいく。

兵士は三人が逃げた経緯を説明した。その中の一人が恐ろしく俊敏に兵士に飛び掛りナイフで刺殺した事。その中の女がおそらくコナース中尉を殺したであろう事。そして彼らの見事な馬術の事も。

「ですが、少なくとも一人は被弾しているのを望遠鏡で確認しました。あの傷ではまず生きてはいないと・・・」

「もういい！」

グローバー大佐は声を荒げて遮った。

「そんな名も無い三人のインディアンのことなどどうでもいい！ どうせ何処かで野垂れ死んでるに決まってる！ そんな奴らに関わっている暇は無い！」

机と反対側にあるドアの横の壁に寄り掛かっていた斥候長のトパハが短く笑い声を上げた。

「そりゃあ間違いないく戦士だな。厄介な事になりましたね、大佐」
事の成り行きを楽しんでいるような斥候長を、グローバー大佐は苛立った目で睨みつけた。

「それがどうした！ 戦士だろうが何だろうが、奴らの酋長は死んだんだ。ただ敗走を続けるだけで何の脅威もないだろう！」

「申し上げたはずです、大佐。彼らは戦士であって兵隊とは違つと。特にアパッチは家族や部族との繋がりが強い。報復だつて有り得ますよ」

グローバー大佐は齒軋りした。誰も彼も、なぜこつても自分の邪魔は

かりするのだ、と。

「報復を恐れて軍人など務まるか・・・」

依然直立不動の兵士を見据えた。

「いいか？ 將軍にはあそこのインディアンは全滅したと伝える。

どうせ今頃は死んでるはずだ。しかし念には念を入れる。次の命令があるまでお前達はその残党を捜すんだ。分かったら下がれ」

「イ・イエス、サー！」

上擦った声の兵士はしゃちほこばって部屋のドアを開けた。その様子を横目で見ていた斥候長は嘲るように口元を歪め、兵士に続いて部屋を後にした。

グローバー大佐は二人が出て行ったドアを睨みつけてから、おもむろに立ち上がると後ろの窓の前に向かった。斜めに差し込む朝の日差しが、地面の起伏によって所々に影を作っている。グローバー大佐にはそれが疫病に冒された病人の肌のように思えた。

「忌々しいこの場所とも、もうおさらばだ」

グローバー大佐の目は既に『赤い悪魔』に向いていた。

辺りが明るくなると凜とカイは乾いた服を着て、荷物を二頭の馬の背に積んだ。焚き火を埋めて自分達がいた痕跡を隠し、湖畔を後にした。

赤い土に松が群生する山道を慎重に馬で下り、途中で鞍に積み残っていた水筒の水を飲んで干し肉を食べた。日が傾く頃、麓に着いた二人は茂みの影で暗くなるまで休んだ。この先の平原を夜の闇に紛れて渡るためだ。馬を休ませておく必要もある。

特に相談をしたわけではなかったが、目指す場所は二人とも分かっていた。凜が最初に連れて来られたあの山だ。

木の幹に背中を預けているカイの肩に頭を載せ、凜は目を閉じて臉の裏に映る山の景色を見つめた。豊かに茂った葉の隙間から差し

込む柔らかい陽射し。それが乳白色のティピーに斑な模様を作る様を。そしてどこまでも清冽な小川。そこに集まる神々しいほどに美しい鹿の群れ。

あの山には自然の恵みが溢れている。あそこでならカイと二人でも生きていく事が出来るだろう。

「今頃はトウナが美味しい季節かなあ」
凜の呟きにカイは柔らかな微笑を投げ掛けた。

何とか未来の事に希望を見出そうと必死になっていた。昨日の惨劇の事を口に出してしまえば、きつと恐怖が全てを支配して前に進む事が出来なくなる。少しでも希望があるのなら、その光を目指して夜を駆け抜けていこう。

太陽が姿を消すと、カイの後ろに続き馬を疾走させた。月の白い光が、穏やかな風に揺れる草原を微かに照らしている。満点の星空と地面が溶け合う場所を目指してひた走った。

何とか夜明けが来る前に、人目に付きやすい平原を渡る事が出来た。赤茶色の地肌？き出しの岩が壁のようにそびえる渓谷に入ると、岩と岩の隙間が作った洞窟に入り疲れた身体と馬を休ませた。

ひんやりとした岩の上に毛布を敷いて横になり二人は目を閉じた。カイの腕に抱かれていると、とても安らかな気持ちでいられた。これから先は幸せな日々が戻ってくるのではないか、そんな気がした。山に戻ればレッドベアが出迎えてくれる。そこにはサンとターニヤが寄り添って笑いかけてくる。千代丸とミアが抱きついてきて、その後ろでウナは歡喜の歌を詠っている。

「遅かったな。お前らどっかで怪しい事でもしてたんじゃないの？」

ダニエルがいつもの明るい笑顔で、陽気に冷やかしてくるのだ。

それが有り得ない事なのは分かっている。もう二度と取り戻せない日々である事は。それでも、あの山に辿り着く事さえ出来れば何もかもが上手く行く、そんな気がしてならなかった。

居留区を逃げ出してから五回目の夜明けを迎えた時、凜とカイは目的の場所に辿り着いた。馬に積まれていた食料もちょうど底をついていた。空腹を抱えていたが気にはならない。待ち望んだ生活がすぐそこにある。

並んで馬を止めた二人は言葉も無くその光景を見つめていた。遠くに見える山塊も岩もサボテンも変わらずにそこにあるのに、あの山だけが無くなっていた。

豊かに茂っていた木も全て消え失せ、赤茶色の土が露出する山の残骸。鉦脈でも見つかったのだろうか、山肌には木の枠で支えられた大きな横穴が幾つも開けられている。まだ早朝で動かされてはいないが、張り巡らされたワイヤーと滑車の付いたトロツコ。そこにはもはや、あの楽園の面影は無い。

サンがその種を守ってきた鹿達も、もうここにはいないだろう。あの清らかだった小川も、きっと流れ込んだ赤茶色の土で淀んでいくに違いない。凜は激しい絶望感に襲われて頭を左右に振った。

「あいつらは狂ってるのか？ 生き物が何にも居なくなつた世界で、どうやって生きていくつもりなんだ・・・？」
カイが吐き捨てるように呟いた。

彼らは過信してしまっているのだ。彼らの信じている神が人間と同じ姿をしているから。自分達が一番神に近い存在なのだ。人間は何でも創り出す事が出来るのだと。自分達が自然の一部だとは考えられない。簡単に壊れてしまうもの、でもそれを取り戻す事はとても難しい。難しいどころか、不可能である事の方が多い。凜もカイも、その事は痛いほどによく分かっていた。

もうすぐ労働者達がやって来るだろう。その前にここから立ち去らなければいけない。馬首を転じると、打ち砕かれた夢の残骸である死んだ山に背を向けた。もう枯れてしまったと思っていた涙が一

筋類を伝った。

両側に険しい岩の崖がそびえ立つ涸谷。グローバー大佐を乗せた馬車は、約五百人から成る騎馬隊を率いて南へ移動していた。いよいよ『赤い悪魔』を追うのだ。

奴は数日前にメキシコの山中でメキシコ軍と一戦交え、その後北へ向かったという。これから国境付近でキャンプを張り奴を待ち受ける。南からはメキシコ軍、北からは米軍が奴を挟み撃ちにするのだ。

「フンツ！ メキシコ人ごときに手柄を横取りされてなるものか！」馬車に揺られながら呟いたグローバー大佐は葉巻に火を点けた。

その馬車を先導するトパハ斥候長は用心深く周囲に目を遣った。間もなく正午になるうというこの時間、左側の崖の上からは強い陽射しが照りつける。斥候長はこの地形を知り尽くしている。ここがどんなに危険な場所かという事も。回り道を進言したが、グローバー大佐は全く意に介さなかった。一刻も早く『赤い悪魔』を捕らえるべく、キャンプ地に着きたいのだ。

斥候長は視線だけを左斜め上に向けた。でこぼことしているはずの崖と空の境目が、強烈な光を放つ太陽によって完全に隠されている。そして少し前から感じる、肌が泡立つような感触。斥候長は肩から掛けた弾薬帯を直し、ライフルに手を掛けた。

「全体、止まれ！」

すぐ後ろ、グローバー大佐が乗っている馬車を操る将校が号令を掛けた。大佐が小用を足すというのだ。斥候長は馬を降りるとライフルを手に取った。

ここで小休止となると途端に馬車の後ろにいる騎馬隊の列は乱れた。水を飲む者、お喋りに興じる者、馬を降りて腰に手をあて伸びをする者。長い移動の道程で緊張感も途切れたようだ。

将校が馬車の右側の扉を開け、グローバー大佐が尊大な態度で降りてきた。足元でゴロゴロする石に悪態をつき、馬車の後ろに回り

こむと強い陽射しに目を眇めた。その時日差しの中から一羽の猛禽が現れ、黒い影を落としながら西へ向かってグローバー大佐の頭上を通り過ぎていく。首を巡らし、何気なくその姿を追った。嘲るような甲高い鳴き声を残して、あっという間に猛禽の姿は西側の崖の向こうに消えていった。

「フンツ！ 鳥の分際で、人を見下しおって・・・」

苦々しく呟いて顔を東へ向けた時だった。何か先の尖った物が自分目掛けて飛んでくるのが目に入った。空気を切り裂く音が耳を襲う。それが額に突き刺さる直前、グローバー大佐が最後に見たものは矢に付けられた殆どが白髪の細く束ねられた三つ編みが揺れる様だった。

「忠告したんだがなあ・・・」

崖の上の射手から狙われないように、馬車の陰に入っていた斥候長は葉巻に火を点けながら呟いた。今しがた馬車の中からくすねた物だ。グローバー大佐はもう二度と葉巻を吸う事はないのだから構わない。

斥候長は馬車の陰から顔を出し、矢が飛んで来た崖の上を見た。照りつける太陽の光を背に受けて立っていた男が、長い髪を翻して姿を消すところだった。逆光ではあったが、その男の復讐に燃える冷たい眼光が見えた気がした。

「た・・・大佐が！」

「崖の上だ！ 撃て！ 逃がすな！」

しかし、今までだらけきっていた兵士達の反応は鈍かった。腰のサベルをガチャガチャと鳴らしながら右往左往している。

「無駄だよ・・・」

斥候長が呟くと同時に、耳をつんざく様なライフルの一斉掃射の音が轟いた。砂埃と硝煙が去った後には、ほんの少し削られた崖があるだけだった。

「残念だったなあ、大佐・・・」

目を見開いたまま倒れているグローバー大佐が失禁しているのを見

て、斥候長は顔をしかめた。

「最初から無理だったんだ。あんたにジエロニモは捕まえられねえよ。こんな殺気にも気付かねえようじゃな・・・」

葉巻の煙を吐き出すと、こめかみから流れる冷たい汗を拭った。

その後、行き場をなくした凜とカイは荒野を彷徨い続けた。山の麓にあったメスカルの群生地には新しい町が出来ていた。夜になるのを待ってその町に忍び込み、闇に乗じて食堂の倉庫から食べ物を盗んだ。鉱山労働者を相手にする町であり、かなり荒っぽい人間が多いようだ。万が一捕まったら命は無いだろう。そう思うと怖かったが、その時の二人には恐怖心よりも怒りの感情の方が強かった。

彼らによって山を壊され、糧であるメスカルまでも奪われた。二人の絶望は、それを行った者達への嫌悪と憎しみに変わっていた。だからといって、ナイフぐらいしか携行していない二人が彼らに立ち向かう事など到底出来るわけでもない。盗んだ食料を抱え、闇に紛れて逃げるだけだった。

行く当ても無ければ、助けてくれる者もない。二人は人目を忍びながら閉鎖された鉱山に入り、朽ちかけた小屋で寒さを凌ごうとした。長居をするつもりは無かったが、そこで数人の見知らぬ男達と鉢合わせになった。いきなり銃口を向けられた時は「もうダメだ」と観念した。彼らは明らかに無法者だった。しかしその中の一人にナバホ族の青年がいた。彼は凜とカイがアパッチだと分ると仲間に銃口を下ろさせ、話をすることができた。

彼らもまた追われる身であるという。これからメキシコに逃げるつもりだと言っていた。

「メキシコ・・・」

凜とカイは顔を見合わせて首を振った。自分達がメキシコへなど行けるわけがない。危険すぎる。メキシコ兵に捕まれば悲惨な死が待っている。

メキシコ政府はアパッチ族の頭の皮に賞金を払う。それは昔からメキシコのあらゆる町に襲撃と略奪を繰り返してきたアパッチへの報復だ。不正規兵も混じり、アパッチを狙うメキシコ人はたくさんいる。自殺行為だ。

「これより東には行かない方がいいぜ。俺達を追ってる役人や賞金稼ぎがウジャウジャいやがるからな」

リーダー格である金髪の若い男が口元を歪ませて笑いながら言った。皆からビリーと呼ばれているその男は、これがあたかもゲームであり、それを心底楽しんでるかのような口調だった。凜は最初、その男は気がふれているのかと思った。しかし青く澄んだ目はまったくの冷静さを保っている。知性と狂気の狭間で生きている、そんな感じがした。

彼らが持っていた新聞を見て凜は目を見開いた。グローバー大佐が殺されたという記事が出ていたのだ。『アパッチ討伐作戦』のため国境近くの涸谷を移動中、何者かの矢に射抜かれた、と。目撃者の話によれば、崖の上にインディアンらしき男が居たという。

「インディアン男？ ダニエル・・・？」

凜が呟くと、カイも顔を寄せて新聞を覗いた。

グローバー大佐の経歴も書かれていた。『インディアン絶滅政策』の功労者であると。そして、白人と見れば見境無く襲い掛かる凶悪なアパッチの一部族を全滅させたと賞賛し、彼の死を悼んでいた。

グローバー大佐の額に突き刺さった矢には編まれた白髪が巻きつけられていた。彼が全滅させた部族の中には、薄気味の悪い呪い師の老婆がいた事が分かっており、兵士の中では「その老婆の呪いだ」と怯えている者もいる、と。軍への多少の嘲りと、インディアンとは得体の知れない不気味な異教徒であるという偏見に満ちた言葉が連ねてあった。

「ウナの事だわ。ひどい、そんな風に言うなんて・・・」

ウナは確かに霊的な力を持ってはいたが、邪なまじないをしたり他

人に呪いを掛けたりなどは決してしない。悔しくて涙ぐんだ凜の肩をカイが引き寄せた。

「大丈夫だ……。奴らは何も分かってないだけだ。ウナ婆さんの本当の姿は俺達がちゃんと知ってる。・・それにしても、ダニエルは生きてるんだな……。良かった」

もしかしたら、もう一度ダニエルに会えるかも知れない。そう思った二人は朝が来ると彼らに別れを告げて南に向かった。

ダニエルを捜して南へ向かった凜とカイだったが、この広い大地で一人の人間と会う事は容易ではない。しかもお互いに身を潜める逃亡者であり、情報も全く入らないのだ。いつまで経ってもダニエルの行方は分からなかった。

二人が国境付近に辿り着いた頃、突然凜が体調を崩した。いつも胃がムカムカとして気持ち悪く、食べ物を受け付けなくなってしまった。カイは凜が何かの感染症にでもかかったのかと心配した。凜自身もそう思っていた。しかし食べた物を吐き戻した直後は驚くほどにスツキリとする。さらに、乳房が張り急に大きくなった事で気付いた。凜はカイの子供を身籠っていたのだ。

これ以上荒野を移動し続けるのは無理だと判断した。二人は渓谷の底を流れる川沿いを上流へと向かい、ついに人の手の入っていない山奥に辿り着いた。ブナやナラの原生林の中を清らかな小川が流れる。その川岸を少し登った場所にティピーを建てた。爽やかな山の冷気に、降り注ぐ暖かな木漏れ日。小川には魚が泳ぎ、森の中では鹿やリスが顔を出す。上を見上げればカササギが実った果実をついばんでいる。豊かな自然がそこにはあった。

風は全てを奪い、その代わりに新しい種を運んでくる。二人はここで子供を産み、生きていくことを決めた。

新しい生活の中でカイは全身全霊を掛けて身重の凜に尽くした。部族の男達が皆、自分の妻にそうしていたように。苦手だった狩にも必死で取り組んだ。サンにもダニエルにも一人前の戦士とは認めてもらえなかったが、自分がやらなければ凜の事もお腹の中の子供も守る事が出来ない。

最初のうちは地面に穴を掘って罾を作りウズラやウサギを獲っていた。しかしやがてやって来る冬に備えなければいけない。一冬を

越せるぐらいの食料と、身体を温める毛皮が必要だった。

カイは意を決して獣道の脇に一昼夜身を潜めた。その間、ティッピーで一人待つていた凜は心配と心細さで張り裂けそうになっていた。カイが掘った穴で脚をくじいた一頭の鹿がいた。カイは死に物狂いでその鹿にナイフを突き刺した。

足元をふらつかせながら獲物を担いでティッピーに戻ったカイは、体中が土にまみれ小枝で作った切り傷だらけだった。ドサツとティッピーの前に獲物を下ろし、満身創痍の疲れきった身体を草の上に投げ出したカイは誇らしげな笑顔を凜に向けた。そのカイの姿を見た凜の頬を熱い涙が流れる。大の字に横たわり荒い息をつくカイを覆い被さるように抱き締めた。嬉しかったのは鹿が手に入ったからではない。カイが無事に還って来た事が嬉しかったのだ。自分がどれほどカイに愛され、そして愛しているのか、凜はこの時身を以って理解した。

時は穏やかに過ぎていった。二人きりの森の中、ここへ来てから他の人間を見掛けた事は無い。カイとの愛に満ちた暮らしの中で、深まっていく実りの秋と共に凜のお腹の子供も次第に存在感を増してきた。

そんなある日の午後、カイは薪を集めに出て行った。凜はカイを見送った後、ティッピーの近くの木に干してあったカイのシャツを枝から外した。乾いたシャツは日向の匂いがする。それを胸いつばいに吸い込んで空を見上げた。今日は抜けるような青空で、この季節にしては珍しく陽射しが暖かだった。突然遠くの森からバサバサと木がざわめく音が聞こえ、鳥の群れが飛び立ったのが見えた。きつとその場所にカイがいるのだ。

このところすぐに眠くなる凜はティッピーに戻ると、床に敷かれた鹿の毛皮の上に横になった。カイはまだ戻ってこない。きつともうすぐ両手にたくさんの薪を抱えて帰って来るだろう。凜は微笑を

浮かべたまま、重い瞼を閉じた。

不意に人の話し声が聞こえて凧は目を覚ました。強い睡魔の割に眠りは浅く、ちょっとした物音ですぐに起きてしまうのだ。凧はすぐに上体を起こした。両の掌を毛皮の敷物についたまま、耳を澄まして蒼ざめた。

「おい、見るよ。インディアンのテントだ」

「ああ、毛皮が干してあるし、薪も積んである。誰か住んでるな・

」

「気を付けるよ。何処かに潜んでて、いきなり襲ってくる事があるからな。相手はインディアンだ」

二人の男の音がする。

凧の体が震えだした。ティピーの外から聞こえるカチャカチャという金属音。居留区のティピーの中で、コナーズ中尉に襲われた時の事を思い出した。あの時も、コナーズ中尉の腰に提げられていたサーベルがカチャカチャと不気味な音を立てていたのだ。

「ど、どうしよう・・カイ・・」

凧はくるぶしまで下げていたモカシンを急いで膝まで伸ばした。

しかし、手が震えていてなかなか紐で縛る事が出来ない。そのうちに男達は声を潜め、ティピーに忍び寄る摺り足の音が聞こえるだけになった。しかし、その不気味な気配はしつこく纏わり付く蟻のように、凧の皮膚を這い上がってくる。サンからもらった赤い鞆に入ったナイフをモカシンの紐に挟み、出入り口とは反対側へ這って行った。敷物の下に織り込まれているティピーの天幕を必死で捲り上げる。

男がティピーの出入り口を開けたのと、凧が天幕の隙間から外へ出たのはほぼ同時だった。灌木の茂みの中を這ったまま進む。小枝が頬を引っ掻き血が滲んだが、そんな事を気にしてはいられなかった。

「カイ、カイ・・」

凧は何度も呟いた。

“まさか・・・カイはもう捕まってしまったのだろうか・・・？”
そんな不安が渦巻き、目に涙が浮かんだ。

「いたぞ！ あそこだ！」
ティピイーの天幕が不自然に捲られているのに気付いたのだろう、
後ろから声が聞こえて凜は振り返った。

“ やっぱり・・・ ”
二人の男の青い服が見えた。軍人だ。背筋に冷たいものが走る。凜
は震える脚で立ち上がると走り出した。

「おい！ 待て！ 止まれ！」
兵士の怒声が響き、次いで銃声が響き渡った。恐怖で凜の肩が跳ね
上がったが、それでも止まるわけにはいかない。もう一発銃声が聞
こえたのと同時に、走る凜の右前方の木の幹が被弾し、抉り取られ
た木っ端が飛んで来た。ついに凜の足が止まってしまった。

“ もうダメだ・・・ ”
一度止まった足は竦んでしまつて、もう動いてはくれなかった。そ
れに身体が重い。お腹に子供がいるのだから当たり前だ。身体が走
る事を拒否している。凜はくず折れるようにその場にしゃがみ込ん
だ。

「いやああ！」

二発の銃声の後に凜の叫び声が聞こえ、カイは両手に抱えていた
薪の束を放り出して走り出した。腰から提げた革の袋が揺れて太腿
に当たる。中には山頂付近まで登って採ってきた松の実がぎっしり
入っている。

何が起こっているのかは分からない。しかしただ事でないのは確
かだ。カイの心臓の鼓動が激しく跳ね上がる。それでも凜の声がし
た方を目指し、全速力で走り続けた。幼い頃、戦士だった父親が戦
いの神に捧げていた祈りの言葉を呟く。最後の最後まで、戦う勇氣
を失わないように、と。

「何があつても守ると約束したんだ・・・」

二人の兵士は、泣き叫びながら抵抗する凜の腕を？み、引き摺るように森の中を連行していた。

「やめて！ 離して！」

「大人しくしろ！ この女インディアンめ！」

腰を後ろに落とし両足を地面に踏ん張りながら虚しい抵抗を続ける凜に、一人の兵士が吐き捨てるように怒鳴った。それぞれが肩に掛けられたライフルを片手で握っている。尋ねた事には決して口を割るうとしないこの女インディアン仲間を警戒しているのだ。

うんざりした声で兵士同士が話し出した。

「これを連行するのか、面倒臭えなあ……。いつその事、ここで殺しちまうか？」

「皆に戻るよりも国境の方が近い。メキシコ兵にでも引き渡すか？ 金になるぞ」

凜は激しく頭を振り腕を解こうともがくが、男の兵士二人の力には到底かなわない。

その時突然左側の茂みが揺れ、中からカイが飛び出してきた。カイは物凄い勢いで前を歩いてきた兵士に体当たりをくらわせた。不意打ちをくらった兵士はもんどりうって倒れ、そのまま反対側の急な傾斜を転げ落ちていった。

「カイ！」

「クソッ！」

残った兵士は舌打ちのような悪態をつくると凜の手を離しライフルを構えた。

カイは体当たりをした勢いそのまま地面を転がり、根元に草が生い茂る木々の隙間に姿を消した。

「出て来い！」

兵士は怒鳴りながら、カイが逃げ込んだ木の幹に向かって発砲した。

「やめて！ 撃たないで！」

凜がライフルを持つ兵士の手元にすがりついたが簡単に振り払われ、その場に座り込んだ。

「カイ逃げて！ あんたまで捕まる事ない！ 逃げて！」

姿の見えないカイに向かつて泣きながら叫ぶと、膨らみかけているお腹を両腕で抱え込んだ。

「クソツ、どこに行きやがった！」

兵士はライフルに銃弾を装填しながら周囲を見渡した。銃声を飲み込んだ山の中はシンと静まり返っている。動くものは見えない。

「フンツ！ 女を置いて逃げやがったか・・・おい！」

連れの兵士が転げ落ちていった崖の下に呼びかけた。落ちた兵士は二十メートルほど下の斜面に生えている木の根元に引っ掛かっており、呼び声に手を挙げて応えた。

「怪我はないか？」

膝についてヨロヨロと立ち上がる兵士に大声で尋ねた。

「ああ、体中痛いが大丈夫だ。畜生・・・」

「なら早く上がって来い！ インディアンが一人逃げて行ったぞ！」

凜はしゃがみ込んだまま、もはや動く事が出来ないでいた。

“これでいいんだ・・・。カイまで死ぬ事はない。私が一緒にいたんじゃない足手纏いになる。カイ一人なら、きつと何処にでも逃げられるだろう・・・”

兵士が凜に向き直った。両手でお腹を抱え目に涙をいっぱい溜めている。恐怖に凍りついた顔で見上げている凜を兵士はまじまじと見て眉をひそめた。

「お前は・・・」

「うわああー！」

何の前触れも気配も無かった。突然カイが叫び声を上げ、兵士目掛けて頭上から飛び降りてきた。いつの間にか木に登っていたのだ。カイに襲われた兵士はライフルを落として尻餅をついた。

「クソツ！」

悪態をつきながら立ち上がった兵士は、呆然としたまま動けないでいる凜の右手首を？んだ。カイとぶつかった時に口の中を切ったのだろう。血の混じった唾を吐き捨てた。カイは兵士が落としたライフルを奪い、草の上を転がって後ろへ退がった。

「彼女を放せ！」

カイはライフルの銃口を兵士に向けて叫んだ。ライフルを奪われた兵士は凜の手首を？んだまま齒軋りをした。

「そんな事が出来るか！　ここはお前らが居ていい場所じゃない！　何故命令に従おうとしないんだ？　逃げ回って何になる！」

唾を飛ばし激しい言葉で責め立てる兵士を、カイは荒い息をつきながら睨み据えている。

黙ったままのカイとしばらく睨み合った後、兵士は凜へ顔を向けた。

「大体、お前はインディアンじゃないだろう。中国人か？　あいつにさらわれたのか？　そうなんだろう？　それなら、こんな獣みたいな生活をする事はない。助けてやるから一緒に来るんだ。暖かい家にも住めるし、綺麗な服だつて着れるんだ」

兵士のその言葉にカイの心が揺れた。元々凜はインディアンではない事を思い出した。千代丸と共に異国からやって来たのだ。こんな風に軍隊に追われる謂れなどない。この兵士の言っている事が正しいのかも知れない。凜とお腹の子供の幸福を考えるなら、ここで別れた方がいいのかも知れない。ずっと一緒に居たいという熱望と、凜を愛するならば巻き込むべきではないという理性の間を漂いながら、カイは彼女の決断を待った。

凜は不安そうに瞳を揺らしているカイを見つめた。カイの迷いが伝わってくる。そして自分自身どうするべきなのか分からないでいた。凜は兵士に向き直った。四十がらみのその男は、まるで聞き分けの無い娘を優しく諭すような微笑を浮かべて凜を見つめている。

「分かつたら一緒に来るんだ。家族の元へ返してやる」

「家族・・・」

凜が呟くと、兵士は頷いた。

「そうだ。約束する」

“何故この人は・・・”

凜は不思議に思っただけ首を傾げた。

“何故この人は、そんな事を約束できるんだろう。私の家族は皆殺されて、千代さえも死んでしまった・・・。そんな事知ってるはずもないくせに・・・”

その時、凜の頭の中でダニエルの声が聞こえた。

「惑わされるな」

凜は兵士の顔を凝視した。優しい笑顔のままだったが、そのこめかみから汗がひと筋流れるのを見た凜は目を見開いた。

“この人は嘘をついてる”

凜は自分のお腹に手をあてた。このお腹の中の子供とカイこそが自分の家族なのだ。

凜は自分でも驚くほど素早く兵士の腰の拳銃を奪っていた。銃口を兵士に向け撃鉄を起こす。

「馬鹿な！ なっ、何をやる！」

慌てふためく兵士の腕を解き、凜はゆっくり立ち上がると銃口を兵士に向けたままカイの元へと歩み寄った。

「愚かな女だ・・・。逃げたって無駄だ！ どうせすぐに捕まるんだ！」

吐き捨てるように呟いた兵士を睨みながら、カイは自分の元に戻ってきた凜を背後に隠した。もうカイに迷いはない。

「お前らの将軍に伝える。もう俺達に構うな。お前らに迷惑は掛けない。世界を喰い荒らし続けたいなら勝手にすればいい。俺達は静かに暮らしたいだけだ。もしそれすら許さないと言うなら、追ってくる奴らは皆殺しにしてやる」

もはやカイは矢が的に当たらなくて悔しがっている少年ではなかった。守るべき家族を得て、勇敢なアパッチの戦士になっていた。

「ハア・・・ハア・・・」

その時後ろから声が聞こえて兵士は振り返った。崖下に落ちた連れが這い登って来たのだ。

「クソツ！ 木の根に躓いて足を挫いた……。ん、あのインディアンはどうした？」

兵士は振り向いたが、既にカイと凜は姿を消していた。二人がいた場所には晩秋の冷気を孕んだ風に撫でられた草木が揺れているだけだった。

「逃げられたのか？」

ブーツの上から挫いた足をさすり、苦虫を噛み潰したような顔の兵士に尋ねた。

「構わん。どうせすぐに捕まえてやる。・・あの娘、妊娠してた。

今捕まえても金は二人分しか貰えないが、ガキが産まれてから捕まえれば三人分だ。外国人だろうが知ったことか、インディアンの子供を身籠ってるんだ。あの女も既にインディアンだ」

急いでティピーに戻ったカイと凜は、干してあった鹿の毛皮と干し肉が入った包みを持って、この楽園を後にした。

二人は更に山の奥へと入って行った。幾つもの山が連なる高い所の峰は白く染まっている。冬はもうすぐそこまで来ているのだ。早急に寒さを凌げる場所を探さなくてはいけない。

二人は溪谷の岩の隙間などで休息を取りながら歩き続けた。一週間ほどが過ぎた頃、草木が生い茂る山の中で、明らかに人工的に作られた道を見つけた。そこだけ一直線に木が切り倒されているのだが、随分前に作られたらしく地面には膝ほどの高さの草が蔓延っている。長い間使われていない事が分かる。二人は慎重に歩みを進めた。

その道の終わりには一軒の山小屋があった。きつい傾斜の付いた三角の屋根と煉瓦の煙突が灌木と絡みつく蔦の上から覗いている。二人は小屋の近くの茂みに身を潜めてしばらく観察した。人が居る気配は無い。カイは小屋に近づき蔦をかき分けると汚れた窓から中を覗いた。周りを囲む草木のせいで中は薄暗い。テーブルなどの家具があるが、動くものは見えなかった。入り口の前の伸びきった雑草がなぎ倒されていないのは、ここに住人が居ない証拠だ。

裏に回ると小さな納屋があった。木の壁に打ち付けられた釘にナタが掛かっている。その下には少量だが薪が束ねられていた。その反対側には小屋の室内に通じる裏口がある。カイはナイフを口に咥えると、音を立てないようにそっとドアを開けた。

小屋の中は埃っぽい匂いがした。窓から差し込む僅かばかりの日光が、部屋の中央に置かれたテーブルを照らしている。くすんだ金属の燭台に立てられたいびつな形の三本の蠟燭。テーブルに載っているのはそれだけだ。椅子は四つ。裏口の横にある煉瓦造りの暖炉は灰が残っているのか、埃が積もっているのか分からない。とにかく

く、長い事全く使われていないのだろう。

カイがゆつくりと一步踏み出すと床板が軋んで音を上げた。その直後、テーブルの下からガタガタと音がし、カイが慌ててナイフを向けると何か黒っぽいものが勢い良く飛び出してきた。それは、思わず短い叫び声を上げたカイの脚をかすめると、開けっ放しの裏口から一目散に外へ逃げて行った。野ウサギだった。

「はぁ・・・脅かすなよ・・・」

胸の動悸を抑えながら、ダイニングの奥にある半開きの扉を覗き込んだ。

「おい・・・誰か居るか？」

さつきウサギに驚いて声を上げてしまったのだ。今さらコソコソしてもしょうがない。予想はしていたが何の返事も聞こえない。それでもカイは慎重にテーブルの横を通り過ぎ、ゆつくりと奥の扉へ近づいた。今度は熊が飛び出してくるか、それとも白骨死体を見つける事になるか。そんな事をあれこれ考えながら扉を開けた。そこは寝室で、埃を被った空のベッドが二つあるだけだった。カイは気が抜けたように大きな息をついた。

二人はその小屋に落ち着いた。ところどころ修繕は必要だが、屋根と壁と暖炉まであるのだ。冬を越すにはうつつでつけた。部屋はきれいに掃除をしたが、窓は汚れたままにしておいた。そして切ってきた木の枝を壁に立て掛け、人目に触れないようにした。

寝室の隅には屋根裏へのはしごがある。カイが薪を割っている間、凧はその屋根裏へと上がってみた。一つだけある跳ね上げ式の窓から光が差し込んでいる。屋根裏は全体が厚い埃で覆われ、蜘蛛の巣まで張っていた。隅に凧の肩幅ほどのトランクが一つだけ置いてある。凧は好奇心に駆られてそのトランクを開けた。蓋から埃が落ち、凧は窓を開けて山の新鮮な空気を入れた。

トランクの中にはアイボリーのドレスが入っていた。さらに豚の毛で出来たヘアブラシと、隅の方には綺麗な緑の宝石がついたブ

口―ち。この小屋で初めて見つけた女性の持ち物だ。寝室に置いてある木箱には男物の服などが入っていたのは知っている。

“この小屋の持ち主はどんな人だったのだろうか・・・”

そんな事を考えながら後ろを振り返ると、背後の壁に作られた棚の上になんかが置いてあるのが目に入った。何だろうと思ひ、近づいてよく見てみるとそれは高さ三十センチほどの陶器で出来た聖母マリア像だった。埃と蜘蛛の巣にまみれているが、聖母マリアは赤子を腕に抱えて穏やかな笑みを浮かべている。キリスト教徒ではない凜も、その笑みには神々しいものを感じて心を動かされた。

不意に自分の母親の顔が浮かんだ。そしてクリスティーナとウナの顔も。彼女達も、かつてはこんな慈愛に満ちた眼差しで、産まれたばかりの我が子を見つめていたのだろう。人種や宗教が違っていても、子供を思う母親の心は変わらないはずだ。凜は自分のお腹にそつと触れた。

自分は、こんな風に逃げ回る生活を続けながらも母親になろうとしている。この子は生まれながらにして逃亡者になるのだ。

「それでいいの・・・？」

凜はマリア像に尋ねた。マリアは何も応えず、ただ腕の中の赤子を慈しんでいるだけだ。

凜はトランクに入っていたハンカチでマリア像を綺麗に拭いた。それからそのハンカチで丁寧に包むと、トランクの中にしまい屋根裏を後にした。

小屋の片づけが済むと、二人は山の中を散策した。陽射しが当たる場所は心地よく暖かいものの、日陰に入ると途端に身を切るような寒さが襲ってくる。しばらく歩くと、ごつごつした岩の隙間から水が溢れ出す場所がある。毎日カイはそこで水を汲んでくる。複雑に入り組んだ岩の間を流れ、やがてそれは小川となって流れていく。二人はその流れに沿って山を下っていった。

三十分ほど歩いた頃、ふと食べ物匂いが鼻に届いた。見れば、

木立の上に微かな煙が昇っている。二人は顔を見合わせると慌てて木の陰に隠れ、身を潜めながらゆっくりとそこへ近づいていった。煙が出ている場所の手前にインディアンの住居である半円形のウィキャップが見えた。

「インディアンだ！ インディアンがいる」
隠れている木の幹を？み、カイが興奮した口調で凧に囁いた。

さらに近づいてみると、ウィキャップの前で椅子に座った女が機を織っている後姿が見えた。木を組んで出来た機織機の縦糸に、流れるように横糸を絡ませていく。そのリズムカルな動きは、まるで優美なダンスのように感じられた。女の手首には、屋根裏のトランクにあつたブローチの寶石とは違う色合いの緑の石を付けたブレスレットが嵌められている。ターコイズだ。

機織をしている女の奥に、屋根付の囲いに入れられた五頭の羊が見えた。ふかふかの白い毛皮を纏い、狭い小屋の中をうろつくと歩き回っている。時折聞こえる間の抜けた鳴き声が、この光景を牧歌的で平和な雰囲気にしていた。

「ナバホ族だ・・・」

カイが凧に顔を向けて小声で呟いた。

「そこに居るのは分かってるよ！ 隠れてないで出て来たらどうだい？」

女はカイと凧に背を向けたまま、咎めるような声を上げた。強い訛りがあるが、言葉はアパッチ語とほとんど変わらない。

カイと凧はばつが悪そうにしばらく互いの顔を見合わせた後、手を繋いでおすおすと女の元に歩み寄った。

女はかなりの高齢に見えた。長い髪はまだ黒いものの、顔全体に深い皺が刻まれている。しかしウナとは全く違い、この老女は大柄だった。がっしりとした輪郭の顔を向け、ギョロリとカイを一瞥すると不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「フンツ！ アパッチか。揉め事はごめんだよ」

「ご、ごめんなさい。驚かすつもりじゃなかったんです・・・」

隠れて覗き見していた事を謝罪した凜の大きなお腹をチラツと見ると、老女の眼差しが少し柔らかくなった。

「あそこの小屋に住んでるのかい？」

機を織る手を一度も休めることなく、老女は鼻先をついっと川の上流へ振った。カイが頷いた。

「ええ。あの小屋を知ってるんですか？ 持ち主の事も？」

「大丈夫だよ。今は誰も住んでない。持ち主はもう死んじゃったからね」

カイと凜は顔を見合わせ、ほぼ同時に老女に向き直った。

「死んでしまった？ 何故？」

カイの問いに、老女はやれやれといった様子で溜息をついた。

「詮索好きだねえ。あそこに住んでたのは白人の中年の夫婦だった。金でも掘りに来たんだろう。でも、奥さんがすぐに胸の病で死んじゃってね、それから旦那の方は酒浸りになっちゃまった。二年前の冬の朝、川の中で浮かんでるのを私が見つけたんだよ。結局、金なんて見つからなかったみたいだね」

自分から質問したものの、事情を聞いたカイは黙り込んでしまった。伏目がちに俯いているカイは凜と繋いでいる手に力を込めた。

凜は不思議そうにカイを見たが、その時木立の向こうから数人の話し声と笑い声が聞こえてきた。今居る場所から木立の向こうは見えないが、さつきから肉の焼ける美味しそうな匂いと立ち昇っている煙には気付いていた。首を伸ばして木立の向こうを覗こうとした凜に、老女は掌を向けて制止した。

「やめときな。彼らに姿は見せない方がいい。アパッチを嫌ってる者も多いからね」

凜は慌てて頷いた。

インディアンの中には、この期に及んでまだ連邦政府や軍に抵抗しているアパッチを快く思わない者も多い。そのせいでインディアン全体への締め付けが強くなっている、そう考えるのだ。迫害されている先住民の同胞といえど、全ての者が味方というわけではない。

「ごめんなさい。迷惑を掛けるつもりはありませんから・・・」
凜が頭を下げると、老女は何も応えず仕事に戻った。

凜は老女が作っている毛布を見つめた。茶色地に赤と緑と黄色の模様が散りばめられている。それは色付いた紅葉や銀杏が落葉した山道を思わせた。晩秋のこの季節にぴったりだ。しかしよく見てみると、その模様はでたために散りばめられているわけではない。きちんと規則性を持って並んでいるのが分かった。複雑に計算された幾何学模様だ。老女はそれを、考える素振りも無く流れるように織り込んでいく。

“この人は、とても優れた職人なんだ・・・”

「とても綺麗・・・」

思わず出た凜の感嘆の言葉に、老女は初めて口元を綻ばせた。

「ああ。ここでこのシャナンの右に出る者はいないよ」

怒っているようなしかめつらしい顔の老女が相好を崩し、凜は一気に緊張が解けた。

「シャナン・・・。私は・・・」

「名前は聞かなくておくとよ。そうすれば、あんた達があの小屋に住んでいても皆に知らん振り出来るからね。さあ、もう行きな。ここに長居は禁物だよ」

シャナンのぶつきらぼうな優しさに、凜とカイはホッとして微笑を交わした。

仕事の邪魔をした事を詫び、その場を後にしようとして歩き出した。

「身体を冷やさないようにね。気を付けるんだよ」

シャナンは紡いでいる毛糸から目を離さずに言った。凜は自分のお腹に目を遣り、掌で優しく撫でた。

「ありがとう」

凜の言葉にシャナンが小さく頷くのを見届けると、手を繋いだまま川沿いとは反対側の山道を登り始めた。

シャナンと別れ、二人が歩き出した時には陽光は既に弱まり日暮れが近づいていた。小屋に向かつていた二人は、途中で見晴らしのいい場所を見つけて立ち止まった。遙か西にそびえ立つ真つ黒な影になった山塊。その真上に真つ赤な太陽がゆつくりと降りていく。照らされたものは全てが赤く染まり、その背後に長い影を従える。動かざるものに太陽はその輝きで動きを与える。

この山の大きく広がった裾野の一角に、ぽつりぽつりと灯りが灯っていった。凜もカイも今まで気付かなかったが、程近い所に街があるのだ。急激に冷え込んでいく山の空気の中で、ゆらゆらと揺れる小さな光の束はとても暖かそうに見えた。あそこではたくさんの人達が安心して新しい朝を迎えるために灯りを灯し、身体を温めながらこの夜を越えようとしている。しかし、分け隔てなく注がれる太陽の光とは違い、その灯りは輪の中に入る者を選ぶ。放つ光が大きければ大きいほど影は濃くなる。そして異質なものは光の輪から締め出され、暗闇の中で寒さに震え蹲っていなければならない。

自分達はその輪の中に入れないのは分かっている。今立っている場所とあの街の間には、目には見えないが波の荒れ狂う大海が異端の者を排除すべく横たわっているのだ。凜は疎外感と諦めが混じり合う視線を、その街から空へ向けた。太陽は半分ほど山塊に沈んでいる。頭上の空は既に暗く、無数の星が瞬いている。その輝きはどれも柔らかく優しい。しかし、決して手の届かないもの。あの街の灯りと同じだ。

「リン・・・」

それまで黙っていたカイが突然、凜の名前を呟くと肩を引き寄せ強く抱き締めた。凜はカイの腕の中で涙の溜まった目を瞬かせた。カイは震えていた。

「どうしたの？ カイ・・・」

「リン、行くな！ どこにも行かないでくれ！」

切羽詰った口調に凜は驚き、首を巡らせてカイの横顔を見た。目をきつく瞑り、唇を噛みしめている。カイの細い肩に重く押し掛かる不安が凜にも感じられた。しかし何がそんなに不安なのか、凜には分からない。

「どこにも行かないよ。ずっと一緒に居るよ。どうして・・・？」

とにかくカイを安心させようと、子供をあやすような口調で凜が囁いた。凜の両肩に手を置き、カイはゆっくりと身体を離すと俯いたまま首を振った。その姿は、今にも吐き出してしまいそうな恐ろしい懸念を必死で堪えているようだ。

カイは昔からそうだった。強がりで天邪鬼、自分の本心をなかなか口にしない。その心はとても繊細なのだ。苦しげに絞り出した言葉の裏に、どれほどの葛藤があるのか凜には想像も出来ない。

思えばカイはずっと、その命を掛けて凜を守ってきた。カイの深い愛をただ受け取るだけだった自分に凜は気付いた。そしてカイへの気持ちは、サンに抱いていた憧れのような幼い恋心ではなく、もっと深いものだということにも。愛し合い、子供を宿した相手でも分かち合えない物がある事に凜は寂しさを覚えた。カイの方こそが自分から離れていくのではないかと、そんな気がしてくる。

「もう戻ろっよ。暗くなってきちゃった」

凜の囁きに、カイは黙って頷いた。

きつく手を繋いだ二人は、眼下の街の灯りに背を向けた。アパツチの男が自分の妻や子供達を守るためにするように、カイは凜の手を引きながら少し前を歩く。暗い森の中、目を凝らして油断無く辺りを見回すカイの横顔はもはや少年ではなかった。少年ではいられなくなったのだ。

ふと振り返ったカイは、凜に穏やかな笑みを投げ掛けた。ついさつき見せた激しい動揺など無かったように。不安は解消されたのか、それとも強がっているだけなのか、とにかく凜はその笑顔に胸が締め付けられた。いつまでもこの笑顔のそばにいたい。凜は繋いでい

た手を解くと、そのままカイの腕にしがみついた。カイの心の奥底には辿り着けなくとも、この腕だけは放すまい、と。

そうして二人は寄り添ったまま、暗い森の中を小屋へ向かって歩いて行つた。二人だけの灯りを灯すために。

数日後の朝、出入り口として使っている納屋に続くドアを開けた所に見慣れない籠が置いてあつた。そこにはタマネギと乾燥させた豆、挽いたとうもろこしの粉が入っている。二人には送り主がすぐに分かつた。シャナンだ。

以前に会つた時のシャナンの話では、彼らナバホ族と関わつてはいけない、二人はそう考えて孤独感に苛まれた。言葉はぶつきらばうでも、自分達の事を気に掛けてくれる人が居る。その事がとても嬉しかつた。

カイは充分過ぎるほど用意してあつた薪を一抱え持ち、シャナンのウイキャップの前に置いてきた。運良く誰にも見咎められる事は無かつた。小屋に戻る途中でカイは冬の匂いを感じた。澄んだ冷たい空気が鋭く鼻に刺さってくるようだ。木々は葉をすっかり落とし、ちよつと前まで忙しく冬支度をしていたりスも見掛けることはなくなった。山の頂だけにあつた白い部分も、確実に広がってきている。小一時間ほどで戻つたカイは白い息を吐き出していた。鹿の毛皮を羽織つたまま暖炉の火にかじかんだ手をかざしているカイを眺めて凜が呟いた。

「雪が降るわ」

「うん。多分ね」

薪は充分にあるし、シャナンのお陰で食料も何とかなる。カイは赤く燃える火を見つめながら余裕の笑みで応えた。しかし、凜は汚れた窓から僅かに覗く外の景色を不安げに見つめていた。

葉の抜け落ちた枝の隙間から見える遠くの山頂。強い風に煽られ積もつたばかりの粉雪が、澄み切つた青い空に舞い上がる。舞い上

がった粉雪はすぐに吹き散らされて見えなくなった。

凧は故郷で同じ光景を見た事がある。兄達が屋根の雪下ろしをしているのを眺めていた時だ。自分の口から出てくる白い息と舞い上がった雪を見比べて、寒がりの山が吐く白い息なのだと思うって楽しんでた。今はとてもそんな気持ちにはなれない。

「だって・・・その日の夜に・・・」

「どうかしたのか？」

振り向くと、カイが心配そうな顔で近づいてきた。凧は慌てて首を振った。

「何でもないよ。ただ、寒くなるなあって思ってた・・・」

カイは、鹿革のワンピースを着て窓辺に立つ凧の肩に毛皮を掛けた。カイはこの小屋のクローゼットに置いてあった白いシャツの上に茶色のツィードのベスト、同じ茶色のスラックスをサスペンダーを付けて穿いている。足元は凧と同じモカシンだ。

「大丈夫だよ」

自分が被っていたウサギの毛皮で出来た帽子を凧の頭に載せ、カイはそのまま腕を回して背後から抱き締め囁いた。頬に掛かるカイの息が温かい。凧は静かに頷き、その後は二人とも黙ったまま窓の外を眺めた。

『大丈夫』

何の根拠も無い言葉だが、今一番必要な一言だった。

凧の予報どおり夜半から雪が降り、朝には小屋の周り一面が白い雪に覆われていた。空は晴れ渡り、降り注ぐ陽射しは白い雪に乱反射している。雪が音を吸収し、とても静かな朝だった。聞こえるものといえば、きつい傾斜のついた屋根から時折雪の塊が勢い良く落ちる音ぐらいだ。

凧は物音がする度に恐怖を感じた。あの盗賊が押し入ってきた日を思い出すのだ。食事をしていても、ベッドで横になっている時でも。逃れられない記憶が凧の背筋を冷たく撫でていく。さらに、四

方を雪に覆われたこの閉塞感が余計に凜を不安にさせた。

居留区でカイの父親が死んだ時に、凜は自分の身の上を話していた。それを憶えていたカイは、精神的に不安定な凜を何も言わずに優しく包み込んだ。それはまだ遠い春を待ち侘びる凜にとって、かけがえのない温もりとなった。

冬の間中、ほとんどの時間を小屋で過ごした。カイの笑顔と優しさは一条の木漏れ日となり、あの時のまま凍り付いて止まってしまった凜の心の一部をゆっくりと溶かしていった。

窓から見える幾つもの氷柱から、ぱたぱたと水が落ちてきて長い冬が終わりに近づいた。夜の寒さはまだ残った雪を凍らせるが、昼の陽射しの暖かさがじわじわとそれを溶かしてゆく。小屋の周りの雪は日を追うごとに少なくなっていた。カイはぬかるんだ道を歩き、久しぶりに水汲み場である川の源流に行った。岩の隙間からは清冽な雪解け水が迸っている。桶から溢れた水が手に掛かると痛いほどに冷たく、顔を洗うとまるで長い冬眠から叩き起こされたような衝撃だった。

小屋に戻ると凜は起きているものの、まだベッドで横になっている。この頃では大きなお腹は段々と下に下がってきていた。そのせいで脚の付け根が圧迫され、痺れを訴える事が多い。さらに胎動が激しく、立ち上がるのにも難儀する日が続いていた。出産が近づいているのだ。

それでも待ち侘びた春がやって来たことと、もうすぐお腹の子供に会えることで凜の表情は明るかった。そんな凜とは対照的に、カイの瞳に時折差す影は日増しに濃くなっていく。勿論子供が産まれることは喜びだ。しかしそれも無事に産まれてくれれば、の話だ。

凜はベッドに手をついてゆっくり起き上がった。

「水、汲んできてくれたのね。ありがとう。食事にしましょう」

モカシンに付いた泥を落としていたカイは慌てて凜に駆け寄った。

「いいよ！俺がやるから、寝てるよリン」

「大丈夫よ。充分寝たから」

重い身体を左右に振りながらヨタヨタと歩き出し、にっこりとカイに笑い掛ける。そうするとカイはそれ以上何も言えず、ただ心配そうに凜の隣を歩くだけだ。

そんな毎日が続いたある日の夕方、二人はいつものように夕食の仕度をしていた。ナイフで干し肉を切り分けていた凜は脚の付け根にピリツとした痺れを感じた。いつもの事だと思った凜は、ナイフをテーブルに置いてスカートの上から脚を擦った。しかし、いつもとは違った。両脚の間を何か水のようなものが伝っていく。

「ああ・・・どうしよう・・・」

「どうしたんだ？」

暖炉に薪をくべていたカイが手を止めて振り返ると、凜は目を見開いて震えていた。

「う、産まれるかも知れない・・・」

そう呟いた凜は呻いて片手をテーブルに、もう片方の手をお腹にあてた。鈍い痛みがゆっくりと波のように広がっていく。お腹の辺りが何か柔らかい物で締め付けられていくようだ。

「リン！ 大丈夫か？ と、とにかくベッドへ・・・歩けるか？」

凜は呻きながら頷いた。漏れ出した羊水はふくらはぎを伝い、くるぶしで折り返してあるモカシンの中に入り込んだ。すでに止まってはいるが、お腹の子供がずいぶん下がってきたのを感じる。

カイに支えられて寝室へ歩き出すと痛みは引いていった。しかし膨らんだお腹は張って固くなっている。ベッドに辿り着くと、またあの痛みが襲ってきた。床に膝をつき、ベッドに屈みこんで呻いている凜をカイはただ見ている事しか出来ない。左手をお腹にあて、右手はベッドの上の毛布をきつく握り締めている。苦しそうに歯を食いしばっている凜の額には玉の汗が浮かんでいた。

カイは凜から後退った。凜が首を巡らせると、強張った顔のカイが震えていた。

「カイ・・・？」

「リ、リン……。待ってくれ……。お、お願いだ……。待ってくれ……」
喘ぎながら懇願するカイを、凜は目を瞬かせて見た。お腹にあてていた手を伸ばそうとした時、突然カイは踵を返して走り出した。

「どうしたの？ カイ！ カイ！」

掠れた声は届くはずもなく、その間にカイはテーブルの横を抜け、裏口から外に飛び出して行ってしまった。

四十八

薄闇の山の中をカイはひたすらに下っていった。「はあっはあっ」と口で息をしながら、恐怖に押し潰されそうな心臓を抱え、次々に迫り来る木の根を飛び越えていく。子供の誕生。それは待ち侘びていたものでもあり、永遠に來ないで欲しいと思う瞬間でもあった。

母親は自分を産んですぐに死んでしまった。出産が原因で死んだ女は母親だけではない。部族の女達の中で、そういう悲劇が何回かあったのを記憶している。そして死産だったり、産まれてもすぐに死んでしまった赤ん坊も。母親と子供、両方死んでしまう事だってある。生まれることと死ぬことは背中合わせだ。

そして、あの小屋にまつわる夫婦の悲劇。妻に先立たれた男の悲しい末路。その話を聞いた時から、ずっと恐怖に囚われていた。凜を死なせる事になるかもしれない。そうなったら自分の責任だ。凜と愛し合ったことを後悔するだろう。

「嫌だ・嫌だ・」

祈るように呟きながら走るカイの目の前に、突然張り出した木の枝が迫った。まばらに小さな緑の若芽を纏った枝は、嘲笑うようにカイの頬を引つ掻いていく。それでも立ち止まる事も、流れ出る赤い血を拭う事もなくカイは走り続けた。

「カイ・・お願い・・戻って来て・・」

毛布を握り陣痛に耐えている凜の呟きは、荒い息でほとんど声にはなっていないかった。もうどれくらいの間そうしているのか分からない。辺りはもう真つ暗で、テーブルの向こうにある暖炉の灯りが遙か遠くに思える。カイは出て行ったとき戻ってこない。陣痛は今ではひっきりなしに襲ってきていた。一人痛みに耐えていると、暗闇の中に引きずり込まれていきそうな感覚になる。

「カイ・・カイ・・」

毛布に頬をあてた。鼻梁を横ぎった涙が毛布に染み込み、心細さに絶望感が這いこんでくる。凧は息を喘がせながら顔を上げた。今は雪が完全に溶けたため、窓があるはずの場所も真っ暗だ。ガラスが汚れているので星も月の光さえも入らない。自分が目を開いているのか、閉じているのかもよく分からなくなってきた。死ぬという事は、こういうものなのかと凧は考えた。痛みに苦しみながら暗闇に落ちていくものなのか、と。

その時、裏口の扉がけたたましい音を立てて開いた。

「こつちだ！」

カイの声が聞こえて凧は顔を寢室のドアの向こうへ向けた。暖炉の火を背に、二つの人影が見える。

「真っ暗じゃないか！ 可哀想に！」

ランプを持って寢室に入ってきたのはシャナンだった。凧の汗で濡れた顔に涙が滲む。

「あ・・あ・・」

凧は言葉にならない声を発してシャナンに手を伸ばした。シャナンはランプを窓辺に、持って来た荷物を隣のベッドに置くと凧の元にしゃがみ込んだ。

「このシャナンが来たからには、もう大丈夫だ。私は部族の子を百人以上取り上げてるんだよ。ああ、まだまだこれからだ。頑張るんだよ、一緒にいるからね」

自信に満ちたシャナンの言葉に、凧は弱々しい笑みを向けた。シャナンは立ち上がり、寢室の入り口で不安そうに凧を見ているカイに用意する物をてきぱきと指示した。カイは慌てて頷くと寢室を飛び出して行った。

シャナンは水で濡らした布で凧の顔の汗を拭いていた。

「身体の力を抜いて、上手く痛みを逃がすんだ。ほら、そんなに力んだら赤ん坊が苦しいよ」

必死で痛みと闘う凧にシャナンが声を掛け続ける。言いつけられた用事が終わると、カイは所在無げにウロウロし、ついにはシャナン

に寢室から追い出された。

カイは知っていた。こういう時、男が出来る事は何もないと。部族の男達もそうだった。百戦錬磨の屈強な戦士でさえ、ティピーから洩れる苦しそうに喘ぐ妻の声を聞きながら忙しなく煙草をふかし、熊のように焚き火の周りを歩き回っているのだ。

カイは椅子に腰を下ろし、テーブルに両肘を載せると手を組んだ。まだ震えている。そんな自分をカイは情けないと思った。それでも最悪の事態が頭から離れない。カイはそれを追い出そうとするかのように頭を振ると椅子から立ち上がった。テーブルの周りを二周ほどするとまた椅子に腰掛ける。どうにも落ち着かない。そんな事を繰り返しているうちに、寢室から聞こえてくる凜の苦しげな声が大きくなっていった。ほとんど泣き叫んでいる。それに負けないくらい大きなシャナンの声。

「今だ！ 思い切りいきんで！ 頭が出てきたよ！」

凜の絶叫が聞こえた後、小屋は静寂に包まれた。カイは口で息をしながらか閉じられた寢室のドアを見つめた。心臓が早鐘を打つ。

「リ、リン？」

不安でいたたまれなくなつたカイが呟いた時、凜でもシャナンでもない甲高い泣き声が響いた。それが産まれたばかりの自分の子のものだと理解するのに数秒掛かった。心地良かった胎内から押し出され、初めて吸い込んだこの世界の空気が苦しいと、激しい抗議をしているようだった。

カイまで息苦しくなつた。感情が昂ぶり、自然と熱い涙が込み上げて視界を曇らせる。それと同時に、凜の安否が気になって仕方がない。カイは服の袖で目を拭くと、寢室のドアの前に駆け寄つた。

「リン、リン！ 大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫よ・・・」

切羽詰つたカイの問いに、凜は弱々しい声で応えた。そのすぐ後にシャナンの大きな声が響く。

「そこで待つてな！ これを見て気絶しない自信があるなら入つて

もいけど。あんたの面倒までは見切れないからね！」
それを聞いて蒼ざめたカイは、急いでテーブルに戻った。

「全く、男っていうのは・・・」

シャナンは開かれぬドアを一瞥し、首を振りながら呟いた。その間も手は休みなく動いている。赤ん坊の身体をきれいにすると、自分が持つて来た毛布で包み、ベッドに横になっっている凧の腕に抱かせた。すると真つ赤な顔で怒っていた赤ん坊は泣くのを止め、代わりに甘ったれた声で鼻を鳴らし始めた。その様子に凧とシャナンは目を合わせて微笑んだ。

「ありがとう、シャナン。この毛布・・・」

それは、初めて会った時にシャナンが織っていた毛布だ。シャナンはにっこりと笑った。

「あげるよ。私からの祝いだ」

「でも、これ・・・」

凧は躊躇った。とても美しいその毛布は芸術品ともいえる。売ればいい金になるだろう。シャナンは笑った。

「いいんだよ。あんたはこれを綺麗だと言ってくれたからね。この子の誕生に間に合って良かったよ。・・・いいかい？」

シャナンは赤ん坊の胸の前で合わせた毛布を指差した。

「これは世界なんだよ。この下地の茶色は大地、赤は太陽そして緑は木、すなわち命だ。父なる太陽は母なる大地を温め、そして命が産まれる」

それからシャナンは黄色の模様を指差した。大きさが様々な黄色は、しかしちゃんとした規則を持って並んでいる。

「命は月の満ち欠けを見て時を知る。それが生きるために必要な知識となるんだ。何事にも時期というものがある。とうもろこしの収穫も、鳥が空を渡っていくのも。この子がこうして今日産まれてきたのにも、ちゃんと意味があるんだよ」

今では目を閉じてすやすやと眠る赤ん坊に目を遣り、凧は頷いた。

シャナンは少し寂しげな顔で微笑んだ。

「あんたの言うとおり、世界は本当は美しいものなんだ。人間が必要以上の物を求めて争いを始めるまではね」

寝室からシャナンが出てくると、テーブルに肘をついていたカイが顔を上げた。

「何だい？ 情けない顔して、アパッチの男が。怖いのかい？」

不安に揺れるカイの瞳を覗き込んだシャナンがからかうように訊いた。カイは黙ったまま顔を俯かせた。シャナンがふんつと鼻を鳴らす。

「初めてのことが怖いのは当然さ。だからこそ勇気が出せる。勇気つてのは恐怖心の後からついてくるんだ。“怖いもの知らず”なんて、言葉はいいけど私に言わせりゃただの馬鹿だね」
カイはそつと顔を上げた。

「リン・彼女は大丈夫なのか？ 赤ん坊は？」

「ああ、大丈夫さ。あんたが思ってるほど、あの子達は弱くはないよ。それじゃ、私はそろそろ帰るからね」

自信に満ちたシャナンの言葉に励まされ、カイは大きく息をついた。今までに積もった心の澱が僅かながら消えていったようだ。

シャナンの優しさにカイは心から感謝した。初めて会った時は、これ以上関わってはいけないと暗に警告されたのだ。それでもシャナンはこうして助けてくれた。カイは椅子を引いて立ち上がった。

「本当に助かったよ。ありがとうシャナン。送っていくよ」

「結構だよ。もう夜も明けてきた。一人で帰るよ。それより早く行ってやりな。あんたに良く似た可愛い女の子だよ」

汚れた窓がボンヤリと光を放っているのに今気が付いた。

「これからは、あんたが頑張らなくちゃいけない。あの子は自分の血を乳に変えて子供を育てていくんだ。そのためには、あんたがちゃんと食べさせてやらなきゃね。まあ、そんな事はもう分かっているだろうけどね」

カイが神妙な顔で頷いている間に、シャナンは裏口から出て行ってしまった。

カイがゆっくりと寢室のドアを開けると、ベッドの中にいる凧と産まれたばかりの我が子が見えた。眠っている二人を窓から差し込む柔らかな光が包んでいる。シャナンが持つて来た毛布に包まれている赤ん坊を覗き込んだ。シャナンはカイに似ていると言っていたが、正直なところ自分に似ているかどうかはよく分からない。顔の下で握られている手が、あまりにも小さくて戸惑った。とても脆く、すぐにも壊れてしまいそうだ。

カイはベッドの傍らに跪き、その小さな手を握ると暖かい掌に自分の親指を差し入れた。インディアンの子。生まれながらにして追われる身だ。頼りない自分がこの命を掛けたところで、守りきる事が出来るのだろうか。そう考えると胸の奥に鈍い痛みが走った。失いたくないものが増えていく。それが良い事なのか、そうでないのかはカイには分からない。それでも愛おしくて仕方のない小さな手を自分の唇にあてた。

クスクスと小さな笑い声が聞こえて顔を上げると、凧が自分を見ているのに気付いた。額に薄っすらと汗をかき、上気した顔で微笑む凧は妖艶であると共に、侵しがたい神聖さを漂わせていた。自分の子供を産んだ凧が、こんなにも美しかった事に改めて気が付いた。その凧がゆっくりと口を開いた。

「ねえカイ、この子の名前、サクラって付けてもいい？」

「サクラ？」

凧は頷いた。

「私の大好きな花の名前。小さな花だけとても綺麗なの。永い冬を乗り越えて春に咲くのよ」

嬉しそうな凧の顔を見つめ、カイは話に耳を傾けた。今のこの幸福が、永遠に続けばいいと願いながら。

心の中に浮かぶ遠い故郷を見つめながら凧は続ける。

「厳しい寒さの冬を耐え忍んで、誰もがその開花を待ち侘びる花・・・
それが桜よ」

カイは目を細めて凜に微笑みかけた。

「サクラ・・・可愛い名前だ、この子にピッタリだよ」

四十九

サクラが産まれてから二ヶ月ほどは穏やかな日が続いた。最初のうちは昼夜問わず泣いて乳を求めていたサクラも、この頃では夜はまとめて眠るようになってくれた。そうなると思の体力も回復し、小屋の掃除や洗濯、炊事もこなすようになった。それでも手の掛かるサクラは凜とカイを一日中振り回す。静寂の中に突然響き渡るサクラの泣き声で、小屋は嵐か竜巻の真ん中に放り出されたようになる。抱いてあやしても泣き止まない時は、サクラを小屋の外に連れ出す。緑が濃くなつた木々の間を吹き抜ける風が頬に触れると、サクラはピタリと泣き止んだ。葉が擦れ合う音、活発に虫達が飛び交う羽音、そういったものに静かに耳を澄ましている。

“ ずっとこの山で暮らす事が出来たら・・・ ”

柔らかなサクラの頬に自分の頬を付け、凜は目を閉じてそう願った。その時、凜の頭上を横切る影があった。ふと顔を上げると一羽の鳥が森の中へ消えていき、その直後にカツコウの鳴き声が響いた。その声を聞いているうちに凜の鼓動は早まり息が苦しくなっていた。身体が強張りサクラを抱く腕に力が入る。

「 やめて・・・ やめて・・・ 」

凜は呟いていた。声のする方に背を向け目を閉じたが、カツコウは鳴くのを止めない。それは黒衣を纏った預言者の不吉な言葉のように凜を苦しめた。

「 やめて！ 私はこの子を手放したりしないわ！ あなたとは違う！ あっちへ行つてよ！ 」

凜は草の上に膝をつき、サクラを抱き締めながら泣き叫んでいた。母親の緊張を感じ取ったのだろう、サクラも火が付いたように泣き始めた。

「 リン！ 」

二人の泣き声を聞いたカイが家から飛び出し、肩を震わせている凜

に駆け寄った。

「どうしたんだリン！ 何があった？」

凧は涙で顔じゅうを濡らしながら首を振った。

「サクラは・・・この子は誰にも渡さない・・・」

泣きじゃくる凧の様子にカイは眉をひそめた。どうして急にこんな風になってしまふのか、わけが分らなかつた。子供を守らなければという重圧で不安定になっているだけなのか。

「リン、大丈夫だよ。誰もサクラを取ったりしない！ そんなこと俺がさせないよ！」

しゃくり上げながらカイを見上げると、いつの間にかカツコウの鳴き声は止んでいた。

カイと一緒に小屋の中へ入った凧は、忍び寄る不吉な影を締め出そうと裏口の扉を固く閉ざした。

その日の夕方、突然森の中に雷鳴のような轟音が轟いた。小屋の中で寛いでいた凧とカイは互いに顔を見合わせた。カイは急いで暖炉の火を消すとランプを持ち、サクラを抱いている凧を屋根裏に促した。その間も轟音は止む事がない。カイは屋根裏の窓から外を覗き見た。既に闇に沈んだ山の中、その森の一角が赤く光を放っている。ナバホ族のキャンプがある方角だ。カイは泣き出したサクラに乳を含ませる凧に顔を向け、それからまた窓に向き直った。カイの心臓が早鐘を打つ。漏れ出しそうになる叫びを必死で押さえ込み、大きく息をつくと汚れた窓が白く曇った。

屋根裏で朝を迎えた頃には、山はいつもの静けさを取り戻していた。カイはずっと窓の横に立ち、辺りを窺っていた。ナバホ族のキャンプ地の方からは煙が立ち昇っている。凧が不安そうに顔を上げた。

「俺、様子を見てくる。俺が戻ってくるまで、ここに隠れていて」
逆光になり、カイの表情はよく見えなかったが、その声音には有無を言わせぬ響きがあった。不安であり何よりもカイが心配だったが、

凜は頷くしかなかった。

カイが行つてしまうと、凜は柱に背中を預けて身体を縮め、サクラを覆い隠すように抱き直した。

カイはナイフを咥え、山の中を慎重に進んでいった。初夏らしく虫が飛び交い、鳥達がさえずる森には平穩が戻っているかのように見えた。しかし、やがて何か焼く焦げるような臭いがカイの鼻をついてきた。

シャナンのウィキヤップが見えると足を止めた。

「シャナン・・・」

カイは立ち竦んだまま呟いた。ドーム状のウィキヤップは半分が焼け落ちていた。火は消えているが、まだ嫌な臭いのする煙が立ち昇っている。入口の前に回ると、機械機が倒されていた。作りかけの毛布の上には踏みつけられた跡がある。そして羊小屋は壊され、その周りには数頭の羊の死骸が転がっていた。刈り取る寸前の豊かだった羊毛が無残にも血と土にまみれている。シャナンの姿はない。

異臭の立ち込める木立の向こうへと足を踏み入れて、カイは目を覆いたくなるような惨状を目の当たりにした。燃えカスと化したウィキヤップ、銃弾を浴びて皮一枚で幹にぶら下がる枝。そして、そこらじゅうに死体が転がっている。男も女も、老人も子供も。撃たれた者、サーベルで切り刻まれた者。川岸では焼け爛れた死体が上半身だけ水に浸かっている。

静かな森の中には、いまだに燻っている火が木を焦がす音、そして死肉に群がり始めた虫達の羽音が聞こえるだけだ。人間の声は聞こえない。

夕食の最中だったのだろう。焚き火の傍では鍋がひっくり返っており、その周りには食器が散乱している。その上に降りかかった赤黒い血、木の幹にも草の上にも。そこに大柄な老女が地面に蹲って死んでいた。顔は見えないが、その姿を見間違うはずはない。恩人のシャナンだ。背中への刀傷は小さいが、身体の下は血の海だった。

シャナンはその胸に小さな男の子を抱えていた。きつと彼女の孫なのだろう。シャナンの肩越しに見える五歳にも満たないその子は目を見開いて死んでいた。この子を守るため身を挺したシャナンの背中に突き刺されたサーベルは、二人と一緒に貫いたのだ。この子が最後に見たものは何だったのか。魂を失ったまま恐怖に凍りついた顔でカイを見上げている。カイの胸は掻き毟られたように痛んだ。

「ごめんよシャナン。助けてくれたのに・・・」

「おい」

不意に声がして驚いたカイは、ナイフを構えて辺りを見回した。

「ここだよ。若造」

少し離れた場所の木に背中を預けて座り込んでいる男がいた。まさか生きている者がいるとは思っていなかったので、慌てて駆け寄った。

その男はインディアンだったが、青い軍服を着ていた。斥候だ。

しかもその男の顔は忘れるはずがない。凜の儀式の最中にグローバ―大佐と共にやって来た斥候だ。暗く激しい憎悪が込み上げてくる。鋭く睨みつけるカイの眼差しを受けて、トパハは少しだけ首を傾げた。

「俺とどこかで会ったか？」

この男のせいで自分は部族を失ったのだ。なのに、この男は自分の事など憶えてもいない。憤りにカイはギシギシと奥歯が砕けそうなほどに歯を軋らせ、その隙間から絞り出すような声を出した。

「軍隊の犬に成り下がった奴に、知り合いなんかいるもんか・・・」
「き出しの敵意も意に介さぬ様子の無表情でトパハはカイを見ている。」

「その話し方、お前ナバホじゃねえな。アパッチか？」

カイが黙ったまま睨みつけていると、トパハは口元を歪めて短く笑った。

「まあいい。それより、悪いが俺の上着のポケットから煙草を出してくれねえか？　ずっと吸いたくて堪らなかつたんだ」

この男が何を企んでいるのか分からず、カイは近づこうとはせずに身構えた。警戒しているカイを見てトパハは自嘲気味に笑うと、苦しそうに顔を歪めた。

「大丈夫だ、何もしやしねえよ。見りゃ分かるだろ、腕も脚も動かねえんだよ」

見ればトパハは酷い状態だった。傷だらけの両腕は身体の脇にだらんと垂れ下がり、被弾している脚も前に投げ出されている。特に腹の傷の周りには、まだ乾いていない血がべったりと付いている。動けないというのは本当なのだろう。それでもカイは用心して軍服の胸ポケットから紙巻煙草を出した。

「こ、これは軍隊が？」

昨夜の雷鳴のような轟音を思い出したカイが躊躇いながら尋ねると、トパハは無表情のまま頷いた。

「そうだ。ガトリングって銃身を何本も束ねたような銃でな。飯の時間を待つて、こいつらが集まったところを一網打尽だ。その後、火を点けて回った。ひでえよなあ……。奴ら、銃の威力に満足して笑ってやがった……。こりゃ、人間のすることじゃねえよな……。いや、こんなことするのは人間だけか……」

「そんなに強力な武器がある軍隊に付いてて、何であんたがやられたんだよ？」

カイは火を点けた煙草の煙を吐き出し、それをトパハに啜えさせながら訊いた。トパハは待ちかねた煙草を心底味わうように深く吸い込むと、小首を傾げ鼻から煙を吐き出した。

「そこで一人坊主が死んでるだろ？ そいつにやられた」

トパハの視線の先を見遣ると、カイの膝ほどの高さに茂った草の中に血塗れの死体があった。銃弾で蜂の巣にされたその身体は、坊主と聞いていなければ性別も定かではないが、大きさからまだ成熟しきっていないという事が分かるだけだ。トパハは遠くを見るような目で昨夜の出来事を思い出しながらゆっくりと話し出した。

「何でなのか分からねえけど、この坊主を見た時に守らなきゃいけ

ないって思ったんだよな。自分のせがれに見えたのかも知れねえ。こんなところに居るはずもないんだがな……。駆け寄ったところをナイフで刺された。その後はもう訳が分からねえ。気が付いたらあちこち撃たれてた」

改めてこの惨状を呆然と見ているカイトにトパハは視線を戻した。その目は次第に虚ろになつてきている。

「ところで若造、お前に家族はいるのか？」

カイトは弾かれたように振り返り、眉間に皺を寄せてトパハを睨んだ。凜とサクラの存在をこの男に知られるわけにはいかない。しかしトパハはカイトの動揺を察した。

「どうやらいるみてえだな。いいか若造、絶対に収容所なんかに入るんじゃねえぞ」

カイトは困惑した目でトパハを見つめた。これまで多くの同胞を軍隊に引き渡してきた男の言葉とは思えない。

「あんたは一体……」

「俺もアパッチだ。マスカレロだよ。俺達が送られた場所は酷かつたぞ……。あそこの太陽はどこか狂ってるんだ。全てを焼き尽くそうとしてる。しかもそれを遮る木も一本も生えてねえ。そんなだからティピーも作れねえ。皆は地面に掘った穴の中で暮らしてる。そんな生活が想像出来るか？ あんなどこにいたら、皆数年のうちに死んじまう。俺の女房と子供達みてえにな……」

トパハの表情が歪んだ。この男の顔に感情らしきものが表れたのをカイトは初めて見た。しかしそれも一瞬のことだった。吐き出した煙草の煙が晴れると、安っぽい手品のように元の無表情に戻っていた。カイトは最初にこの男に対して抱いていた印象が徐々に変わっていくのに気が付いた。もちろん全てを許すなど出来るわけがない。しかし、もし自分がこの男の立場なら、やはり同じ事をすると思つた。凜とサクラのために、なりふりなど構っていられないだろう。

「そうだ。若造、お前にいい物をやるよ。俺の腰についてる袋を持つてけ」

トパハに言われ、カイは躊躇いながら血に塗れた小さな革の袋を取った。大きな割りにずっしりと重く、それもそのはずで中には相当数の銀貨が入っていた。カイは戸惑い、眉をひそめてトパハを見た。

「でも、これ・・・」

「いいんだ。どうせ俺はもう金なんか使えねえ。逃げ回るにゃ金があつた方がいいだろう」

確かにそうだ。金があれば遠くへ逃げることも出来るし、食料や衣服を調達するのに危ない事をしなくて済む。頷いたカイにトパハは虚ろな眼差しを向けた。

「その代わりと言っちゃ何だが、頼みがある・・・。このくそ忌々しい軍服を脱がせてくれ」

被弾しナイフで刺された軍服は血塗れで既にボロ布のようだ。それでもカイはトパハの前にしゃがむと軍服の袖口にナイフの切っ先をあて、内側から上に向かって切り裂いた。反対側の袖も同じように切り裂き、脱がすというよりも引き剥がした軍服を脇へ投げ捨てた。軍服の下に着ている血に染まった綿のシャツに目を凝らした。ナイフで刺された腹の傷はかなり深い。一晩生きていられたのは奇跡だろう。こんな軍服を纏ったまま死にたくないという強い念がそうさせたのか。

剥ぎ取った時に少しばかり身体を動かしたせいだろう、トパハは苦しそうに息を喘がせていた。それでもトパハは、汗が伝い落ちる痩せた頬を微かに持ち上げて笑った。

「ありがとよ。それと、もうひとつ・・・」

トパハは浅く長い息をついた。

カイは燃やされなかったウィキャップの一つからバツファローの皮で出来た大きな天幕を剥がし、トパハの物だったライフルと拳銃、弾薬帯を包んだ。それを両手で抱えると虐殺の現場を後にした。静寂を取り戻した森の中には、両頬を繋ぐ黄色い糸をつけたトパハが

木に凭れ、その顔に安らかな微笑を浮かべて息絶えていた。

カイが戻ってきた時、サクラは凧の腕の中で眠っていた。その安らかな寝顔とは対照的に不安そうな顔で様子を訊いてきた凧に、カイは穏やかに頷いて応えた。

「もう皆行っちゃったよ。残ってるのは俺達だけだ。俺達もここを出よう」

カイの言葉に凧も静かに頷いた。それがどういう意味なのか、訊いたとしてもカイはもう答えないという事が直感で分かったからだ。そして、この小屋を出なくてはいけないということも凧は黙って受け容れた。最初からこの小屋に長く留まれないことは分かっていた。シヤナンの言うとおり、ここを去る時期が来たのだ。

それから一時間後に二人は小屋を後にした。太陽はまだ東の空にある。凧は髪を結び上げ、屋根裏のトランクに入っていたドレスを着ていた。毛布に包まれたサクラは、ドレスの上からたすき掛けにした男物のシャツの中に収まっている。カイは小屋のクローゼットに入っていたツイードのジャケットとスラックスに革のブーツを履き、長い髪をまとめてハンチング帽の中に押し込んでいる。腰に拳銃を提げ、肩にはライフル、そして大きな荷物を持ち、ナバホ族のキャンプ地とは別の方角から山を下りて行く。途中凧が木の根に座り、ぐずり出したサクラに授乳する間も、カイは殺気立った目で辺りを油断なく見張っていた。

山の麓の町へ着くと宝石店へ立ち寄った。そこで小屋から持って来たブローチをカウンターを兼ねたショーケースに出した。

「こりゃあ本物のエメラルドだな・・・」

店主はルーペを外し、ショーケース越しに立つ凧を注意深く観察している。背筋を伸ばし、真っ直ぐに正面を見据えるその姿には気品が感じられる。それは武士の家に生まれた者の自然な所作。

「お幾らになりますの？」

それはロバートソン家のお茶会で身に付けた上流社会の婦人達の話し言葉。

乳飲み子を抱いたこのうら若き中国人女性は、きつと名家の出なのだろう。宝石と顧客の鑑定には揺るぎない自信を持つ店主はそう決め付けた。それから荷物を抱えて俯き、凜の背後で影のように付き従うカイに目を遣る。店主は哀れそうに目を伏せて首を振った。きつとこの女性は没落した名家の未亡人であり、一族で残ったのは幼い赤ん坊とこの若い下男だけ。これから生きていくために財産を処分しているのだ。

凜について勝手な想像を膨らませた店主は、ブローチの代金である金貨をショーケースの上に並べた。そして最初は断るつもりだった陶器のマリア像も買い取ることに関心、その分の銀貨も追加した。最近この町には東部からの移住者が急激に増え、その気取った御婦人方が明日にもこのブローチに目の色を変えて群がるだろうとの予想もあつたからだ。

凜は目の前に置かれた大金に戸惑った。あのブローチがこれほどまで値打ちのある物だとは思わなかった。しかし凜はきつく唇を引き締め、この動揺を店主に悟られぬよう静かに頷いた。

「幸運を」

店主が声を掛けると、店を出ようとした凜は足を止めて振り返った。金も必要だが、これからの自分達に一番必要なものはそれなのだと気付いた。

「ありがとう」

凜は微笑むと、カイの後から店を出た。

それから馬を手に入れるため、町の端にあるサルーンのポーチでロッキングチェアに揺られて新聞を読んでいる老人に声を掛けた。宝石店の店主から、この町のことはその老人に尋ねればいいと教えられたからだ。

「あんたら運がいいよ。三日前にここで銃撃戦があつてね。ま、他

所から来た無法者同士の喧嘩なんだが、死んだ奴が乗ってきていた馬がいるんだ」

老人は立ち上がると凜とカイを店の裏にある厩舎へ導いた。老人が指し示した二頭の馬は毛つやも良く元気そうだ。カイは老人に頷いた。

最初は鉄道を使つて遠くへ行く事も考えた。しかし駅の前を通つた時、数人の軍人がたむろして列車を待っているのが見えて考えを改めた。しかも走る列車の中で素性がばれようものなら逃げ場はない。

「どれ、鞍を付けてやろう」

老人は持つていた新聞をカイに渡し、厩舎の壁に掛かっている鞍へ歩み寄つて行つた。

凜とカイは薄暗い厩舎を出ると老人に渡された新聞を広げた。見開きには軍による『アパッチ掃討作戦』の経過が出ている。アパッチと交戦した軍に数名の死傷者が出たこと、『赤い悪魔』が罪の無い白人を数十人も殺している。この記事を見たアメリカ中の人間がきつと恐怖に慄いていることだろう。そして声高に叫ぶのだ。獐猛で無教養なインディアンは国家の敵だと、奴らを皆殺しにしろと。それでも凜とカイは分かっている。新聞には書かれていないが、この戦いで多くのインディアンの命が奪われていることを。直接的な殺戮だけでなく、飢えや寒さや暑さによつても。

こういうものがいつも真実を伝えるとは限らない。目を閉じて、耳を研ぎ澄ませば聞こえてくる。ガラガラヘビが立てる摩擦音にも似た欺瞞に満ちた囁き声が。

他の欄には凜が知っている町で起きた事件が載っていた。以前偵察に行った町だ。その教会でのミサが終わつた時、突然肩に弾薬帯を掛けてライフルを持った男が乱入してきたというのだ。その男は、逃げ惑う人々には目もくれずに司祭を捕まえると教会の扉を閉めた。町の人々が遠巻きに見守る中、教会からは火の手が上がった。焼け跡からは首を切断された司祭の遺体が見つかったが、男はどこ

かへ消えていた。

目撃者の話から犯人はかねてから指名手配中の『マッド・ドッグ・ダニー』と断定された。ここ十年近くなり方を潜めていたが、それ以前には数件の強盗及び殺人に関与している。州知事はこの男の懸賞金を引き上げると発表した。

「ダニエル・・・」

そこにはダニエルの似顔絵があった。しかし凜とカイが知っている陽気な笑顔ではなく、まさに狂犬のように目をぎらつかせた凶悪犯罪者の顔つきに描かれていた。

カイは新聞を閉じた。以前はダニエルを追おうとしたこともあったが、今はそうは思わない。ダニエルは己のすべき事をしているのだ。そして自分達にも命をかけて守らなければいけないものがある。たとえそれが、いつか見た波の向こうに広がる赤い砂に埋もれてしまふほどの、ちっぽけな命だとしても。

自分を見失わない事。それは自分のすべき事をはつきりと理解しているという事だ。凜にもそれが分かっていた。サクラが生まれた時から。そして、今朝ナバホ族のキャンプから戻ったカイを見て確信した。凜を傷付け悲しませるであろう全てのものを遠ざけるために固く閉ざされたその唇を。

鞍を付けた二頭の馬が厩舎から出され、カイが老人に金を払うと荷物を積んだ。老人は、サクラを抱いている凜が馬に跨がるのに手を貸した。それまで、地面に届きそうな丈のドレスに隠れていたモカシンが鎧に掛けられるのが見えた。カイは革靴を履いていたが、あの小屋には凜に合う靴は無かったためだ。

「インディアンか・・・」

呟いた老人と、それを耳にした凜との間に緊張が走った。自分が乗る馬の傍らで手綱を握っているカイは、黙ったまま視線をぶつけ合っている凜と老人に目を遣った。空いている方の手を腰に提げている拳銃へ掛ける。

老人を見据える凜の顔に怯えはなかった。ただゆつくりと、折り返しているドレスのウエストに挟んだナイフを赤い革の鞘から抜いた。鋭く光る刃を目にした老人は顔色を変えることもなく凜へ視線を戻した。

「君達は俺達白人に恨みがあるだろうが、俺は君達には何の恨みもない」

困惑に眉を寄せた凜に、老人は小さく首を傾げて町の出口を示した。「もう行った方がいい。じき保安官が見回りに来る時間だ」

凜はナイフを鞘に収め、カイに顔を向けると頷いた。カイは鞍を？んで馬の背に飛び乗り、凜に並ぶと町の出口へ向かった。

遠ざかる二頭の馬を見つめながら老人は大きく息をついた。母親の腕に抱かれて安らかに眠る赤ん坊、そのすぐ下から出てきたナイフの刃を思い出していた。

「何て世の中だ・・・」

老人は力なく首を振りながらサルーンへ戻った。

カイと凜はその町から北西に進み、川沿いに高地を上がって行った。どれくらいの標高まで来たのかはもう分らなかったが、気が付けば周りは木立に囲まれていた。空腹でサクラが泣き出すと、そこで馬を止めた。凜がサクラに授乳する間、カイはナバホ族のキャンプから持って来たバッファローの革と立木を使って急ごしらえのテイピーを建てた。

気が付けば夜の帳が下り、テイピーの中に敷いた毛布の上、サクラを真ん中にして凜とカイは疲れた身体を横たえた。外からはフクロウの鳴き声が聞こえてくる。

こんな静かな夜に思うのは決まって故郷のことだった。日本では、カイとサクラと三人で静かに暮らせるだろうか。凜は微笑を浮かべた。あそこの山も小川も桜も、カイはきつと気に入ってくれるだろう。

心の奥底では、それが叶うことのない夢だと分っている。どの方

角に向かって歩き出せばそこに辿り着くのかなど、とっくの昔に分らなくなっているのだから。

「ここが安全だって分ったら、ちゃんとしたティピーを建てよう」
甘い匂いのするサクラの頬に顔を寄せてカイが囁いた。カイもまた分かつているはずだった。この国に安心して住める場所などないということとは。

それでも凜は微笑を浮かべたまま頷いた。今だけは優しい夢に抱かれていたい。凜もサクラの頬に顔を寄せて眠りについた。いつか来るはずの運命の足音に耳を澄ましながら。

了

五十（後書き）

この長い話を読んで頂いた方には心から感謝致します。

本当にどうもありがとうございます。

また、感想をお寄せ頂けるととても嬉しいです。よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423s/>

波の向こうの赤い砂

2011年10月2日15時02分発行